遠ざかるイエスタデイ

青星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠ざかるイエスタデイ

【Ｎコード】
Ｎ０５０６Ｍ

【作者名】
青星

【あらすじ】
小説家としての才能に行き詰まりを感じていたエリックは、安らぎの場所を求めて図書館へ赴いた。そこでのかつての親友との思わぬ再会が、その後の彼の人生を大きく左右することになろうとは、エリック自身全く想像することも出来なかった……。

予兆　―1―

「母さん！　お母さん！　一体、こ、これは何なんですか！」

外出先から戻ってきたエリックはドアを開け、足を一歩踏み入れるなり、叫んでいた。

くたびれた、けれど味のある光沢さえ愛しい、ところどころに染みのある薔薇の模様のカーペットが、なんと目にも鮮やかな新品のオレンジ色の絨毯に変わっていたのだ。

しかも、毛足が恐ろしく長く、一歩進むたびにまるでネコかウサギを踏んづけているような気持ち悪さがストレートに足先から伝わってくる。

エリックは歩くのをやめ、片足を上げたまま、母親がやってくるのを苦渋の表情で待ち構えていた。

「まぁ、エリック。お帰りなさい、早かったのね。お友達にはちゃんと会えたの？」

ペルシャ猫のマダリンを襟巻きのように首に巻きつけた（ようにエリックには見えた）母親は、長いスカートの裾を引きずるように現れると、楚々として言った。

「そんなことより、何なんですか、この気持ち悪いものは。早く前のと取り替えてください」

エリックは今にもバランスを崩しそうになりながら、眉を三角にして訴えた。

「いやですよ。さっき、業者さんに来てもらって取り替えたばかりなのに」

エリックはとうとう我慢できず、足を下ろした。途端、ぞくぞくと背中の辺りを悪寒のようなものが這い上がってきた。

「さいあくだ……」

エリックはズルズルと足を引きずるように歩いた。わざと痛めつけるように。それがせめてもの意趣返しとでもいうかのように。

「本当にこんなものを……。また誰かに買わされたのですか？」

エリックは質素なつくりの家には場違いな色使いと素材の品物に、反感以外の何も持つことが出来なかった。

「買わされたなどと、失礼な。私の意志で買ったのです。あなたも言っていたでしょう？　そろそろ暖かい絨毯が欲しくなってきたと」

「あれは……」

似たような意味の言葉は確かに言った。隣人のパスカル氏が床暖房を始めたことに対する羨ましさから発した言葉だった。

「あなたが嫌だと言うのに、なにも自分の意見を押し通す母さんではありません。仕方がないから、元に戻してあげます。けれど、しばらくは我慢してもらいますよ。せっかく、マダリンが気に入っているんですから。それに業者さんにも悪いでしょう？」

「取りに来てもらうなら早いに越したことはありませんよ。だって、

猫の毛とか、汚れが付いたら、下取りにも取ってもらえなくなるんじゃありませんか」

「まぁ、下取りになんて誰が出すものですか。これはちゃんととっておいて、あなたが結婚してこの家を出て行ったときに改めて使うのです」

「えっ？　結婚したら、僕は出て行かなきゃいけないんですか？」

エリックは母親の言葉にショックを受けたように尋ね返した。

「当たり前です。エリック、あなたはまだなお母さんに面倒を見させるつもりですか」

「そうじゃなくて」

母親はまだまだ文句が言い足りないという顔だった。エリックはこんな些細なことで、これ以上気持ちを荒げたくなかった。

「わかりました。マダリンと母さんが気に入っているのなら僕が我慢しますよ。ええ、せいぜい、部屋にこもって仕事に精を出しますよ。そうしたら、うろうろしないですみますからね」

仕事……。

それがうまくいっていないから、こうやって毎日のようにふらふら出歩いているのだが……。

「それで、お友達とはちゃんと会えたの？」

他の事に気をとられていたエリックは我に返ったように答えた。

「ええ、まぁ。会えたには会えたんですがね」

やや気落ち気味のエリックの声に母親は心配そうな面持ちで言った。

「まぁ、とにかく手を洗っておいでなさい。ヒギンズ夫人がおいしいバターケーキを焼いて届けてくださったのよ。一緒にお茶にしましょう」

母親はモゾモゾと動き始めたマダリンをやさしく撫ぜながらキッチンへと向かった。

エリックは知らず知らず、長いため息をついていた。

仕事の行き詰まりを打開するために出かけたところ、かえって違う荷物を背負わされたような、なんともいいようのない疲労感があった。

そう。つい先ほどまでは……。

「奇抜な色だけど、暖かい色ではあるな」

エリックはしゃがみ込むとおもむろに絨毯の長い毛足に触れた。思った以上に上質で、まるでマダリンの毛並みそのもののような快い手触りだった。

実のところ、癒される心地がした。

「少し疲れた……」

エリックはごろんと絨毯の上に寝そべると、さっきまで気味悪さしか感じなかった毛の波に全身をゆだねた。

どのくらい時間がたった頃だろうか。

目を開けると母親が呆れる様に見下ろしていた。いかにもだらしない息子に辟易しているような表情だった。

「あなたは一日も早く結婚するべきね、エリック」

結婚……。エリックには遠い出来事のような気がした。

「その時にはもう、この絨毯を母さんより気に入っているような気がしますよ」

皮肉を言ったつもりだったが、母親も負けてはいなかった。

「絨毯の一つや二つ、喜んでプレゼントしますよ。だから、早くお相手を見つけなさい」

「……」

形勢が悪くなるとエリックはすぐに話を変えることにしていた。

「そういえば、ヒギンズ夫人の用はなんだったんです？」

お喋り好きで有名なヒギンズ夫人がバターケーキを口実に何かの目的があってやってきたことは容易に知ることができた。

「そうそう、すっかり忘れていたわ！　あなたによい縁談を持ってきてくださったのよ」

「母さん！」

エリックは大きな声を出して母親を咎めた。

「勝手なことをしないで下さい！　僕の伴侶は僕自身で探すといつも言っているでしょう？　それに、今はそれどころじゃないんですよ！」

仕事だ、仕事。

エリックの頭の中にあるのは、仕事のことしかない。

文壇にデビューして以来、大きな仕事といえばローカル新聞の連載小説、ただ一つだった。あとは、よくて小さなコミュニティ誌の旅行のエッセイ。

最近などは、その依頼さえもなく、校正のアルバイトをしているほどだった。

正直、『作家』と名乗る自信もなくなってきていた。

「わかっていますよ。だから、ちゃんとお断りしましたよ。もったいないお話だったけど。でも、母さんにも我慢の限界がありますからね。いい加減、ちゃんと落ち着いて頂戴！」

そうまで言われるとエリックにも返す言葉がなかった。

―2―

ヒギンズ夫人のバターケーキを前にエリックは気の効いた言葉を探していた。
母親はすっかりへそを曲げている。
こんな時、いつも機嫌をとるのはエリックの方だった。

「ミシェルが母さんに会いたがっていましたよ」

母親は一転して笑みを浮かべると、エリックに向き直った。

「今日、会ったお友達というのは、ミシェルさんだったの？」

ミシェルとは大学生の頃、アルバイト先で一緒だった。
大学は違ったが、お互い読書好きだというのを知り、語り合ううちに好きな作家のタイプまで似ているとわかって、さらに親しくなった。
彼は穏やかな外見を裏切らないとても気のいい男で、紅茶専門店でバイトしながらもほとんど紅茶について何も知らなかったエリックに何かと知識を授けてくれた。
紅茶の種類を全て把握し、上得意客の好みさえ熟知していた彼は実際、人の数倍も努力をしていた。一方、なんとかなるさという楽天的な考えのエリックはしょっちゅう窮地に陥っていた。
そんな対照的な二人だったが、交流はエリックがバイトを辞めてからも続いていた。

そう、あの日まで……。

「そう、お元気だったのね。お父様が亡くなられたと連絡があって、

そのままこっちに戻って来られなかったでしょう？　何かあったんじゃないかって心配していたけど、そう、元気だったのね……」

母親は涙ぐむ様子をした。

一時期、ある理由でミシェルがエリックの家で暮らしてしていたことがあった。

その時のことを母親は思い出していたらしい。

テーブルの上の濃い紅茶を見つめながら、エリックもしばらく黙っていた。そして、アールグレイのほのかな香りに誘われるように、口を付けた。

渋みが口の中に残る中、エリックは静かに口を開いた。

「結婚するそうですよ、彼は」

「それはよかったじゃないの！」

母親は顔を輝かせながら言った。

「ええ」

しかし、その答え方に満足できなかったのか、彼女は不服そうに息子を見た。

「まぁ、何をしょげているの？　親友が自分より先に幸福をつかむことがそんなに悔しいの？」

「そんなんじゃありませんよ！」

エリックは自分でも知らずに大声を出していた。

「じゃぁ、なんだって言うの」

母親はただ、エリックの素っ気無さをわがままと決め付け、たしなめようとした。
しかし、エリックは自分でも不可解なその気持ちを母親に伝えることは出来なかった。
得体の知れない不安のようなものと言えばいいだろうか。
エリックはあの場所にいた全ての人物に違和感を覚えずにいられなかった。
あれほど親しかったミシェルでさえ、どこか別人に思えたほど。
そう。学生の頃、二階席から見た芝居そっくりだった。
家庭崩壊をテーマにしたその舞台は、内容の深刻さとは裏腹に喜劇であった。
少しも笑うことは出来なかったけれど……。

「エリック？」

考え込んだエリックに母親が心配そうな顔を見せた。

「婚約者が想像していた人とまるで違っていたので、ちょっと驚いたんですよ」

エリックは素直な気持ちのまま言った。
そうだ。このもやもやとした気持ち悪さはそのせいなのだ。
エリックは自分に言い聞かせるように、頷いた。

―3―

エリックは彼と再会した先週の土曜日のことから話し始めた。

それはまったく偶然の出来事だった。

書きかけで長い間止まっている小説をなんとかしようと思ったエリックは、資料集めと称して図書館へ向かった。

本当ならネットで調べられないこともなかったのだが、部屋にこもりきりになることの息苦しさ　と四六時中監視されていると感じる母親の目から逃げ出すよい口実になった。

閲覧室に入ってしばらくすると、眠気に襲われてきた。

エリックは日が差した窓辺の席が居眠りの場所には最適に思えて、移動しようとした時、その姿をみつけたのだった。

「ミシェル……？」

顔を机に伏せた格好で眠っている男はふっと顔を上げるとぼんやりとした表情でエリックを見た。

かつての友はまだ夢の中をさまよっているようなうつろな視線を漂わせ、「夢を見ているのかな」と一言つぶやいた。

5年ぶりのミシェルは随分、様変わりしていた。溌剌としたあの頃の面影は消え失せ、顔色も悪く、少しやつれた感じがした。

「本当に……君なのか？」

エリックはまるで幽霊を見たような顔で言った。

「そういう君は本当にエリックなのかい？」

ゆるりと起き上がると彼はそばにあったメガネをかけた。
本気で彼だと確信があって声をかけたわけではなかった。
かつて、同じ場所に同じような格好でよく眠っていた彼をエリックは知っていた。安らぎをやっと見つけたかのような穏やかな寝顔で閉館間際まで眠り込んでいた彼を。
しかし、5年ぶりの彼はどことなく退廃的な空気を醸し出していた。覚醒しかけの頭を二、三度振って、ミシェルは歪んだネクタイをそっと直した。

「用事でこっちにやって来たんだ。時間潰しに来てみたらこの席が空いていた……」

苦笑まじりのその顔に見慣れないかすかな皺を見つけて、エリックは少し感傷的になった。

「こっちに来るなら、どうして連絡してくれなかったんだ。ずっと心配していたんだぞ」

「すまない……」

ミシェルが辛そうに目を伏せたので、エリックはそれ以上何も聞けなくなっていた。

「急なことだったんだ。でも、帰りに少しだけ君のところに寄るつもりだった。本当だよ」

エリックはそのまま彼の言葉を鵜呑みにする気にはなれなかったが、それを言ったところでどうしようもないと思い直した。
ゆっくりお茶でもと誘うエリックに、ミシェルは残念そうに首を横に振った。この場所での仮眠が思いのほか長引いたせいで、すぐに

も帰らなければならないと言う。
そのかわり、と彼は言った。

「僕の家に来てくれないか？姉が占いをしているんだが、結構よく当たると有名なんだ」

「お姉さんがいたなんて初めて聞いたよ」

エリックが驚いたようにたずねた。

「うん。言ってなかったからね」

泣きそうな顔だった。
何かを思い出したような辛い表情が時おり彼の顔に表れ、それは精神的に不安定だった最後の頃の彼を急に思い出させた。

ミシェルの父親は決していい父親とは言えなかった。
夫婦仲は決してよいとは言えず、喧嘩が絶えなかった両親は、ミシェルが大学に合格したと同時に離婚した。
妻が出て行き、父親はそれまでからも習慣となっていた酒にますます溺れるようになり、それゆえの失敗がもとで会社までも辞めていた。
ミシェルはそんな父を一人に出来ず一緒に暮らしていたが、酒のせいで体を壊した父を抱えて暮らすには彼はあまりに若すぎた。
アルバイトをいくつも掛け持ちしお金を作っても、すべて父親の借金と酒代に消えていった。
それでも彼は努力を怠らなかった。
いつか父親が目を覚ましてくれることだけを望んで、それを支えに頑張っていた。
借金の取立てが彼自身に及ぶようになり、ミシェルは自分のアパー

トにも帰れなくなっていた。父親をなんとか病院に入院させるとミシェルは公園のベンチや図書館で眠るようになった。

ある日そんなミシェルを見かねてエリックが言った。
うちに来ないかと。
大丈夫。うちには警察官より怖い母がいるから、取立てが来たって反対に逃げ出すさ、と。
精神的にも肉体的にも追い詰められていた彼は、エリックの再度に渡る強引な勧誘に負けたように頷いた。
ミシェルの境遇に心を痛めた母親は快く彼を迎え入れると、心配しないでいいと声をかけた。
辛い時は助け合うのが当たり前だと。
むしろ、おおざっぱなエリックと違い、細やかな心遣いの出来るミシェルは母親に気に入られ、エリックよりもずっと大事にされていた節があった。
だから、ミシェルが父親の危篤の連絡を受け、家を飛び出してからは心から心配していたのだった。

「あれから、いろいろあったんだ」

ミシェルはそれだけ言うと、かすかに微笑んだ。

「でも、今は幸せさ。もうすぐ結婚するし。そうだ、君にも会わせるよ。だから、是非、来て欲しい」

まるで懇願するような言い方にエリックは戸惑いながら、返事をした。

「わかったよ。君の都合のいい日を教えてくれ。僕はいつでもフリーだから」

―4―

自嘲気味に言った言葉に、ミシェルは何をしているのかとエリックに聞いた。
エリックが気まずげに売れない作家さと言うと、初めてミシェルは満面の笑顔を見せた。

「そうか、君は夢を実現したんだね！」

おめでとうと自分のことのように喜んでエリックの両手を握ると、ミシェルは長い間彼の手を放そうとしなかった。

「君の本は、ここに置いてある？」

館内を大きく見渡しながらミシェルが言った。

「どうかな。探したことないから……」

エリックは正直に言った。

「どうして？」

不思議そうにミシェルはたずねた。
エリックは決まり悪そうな顔をしながら、あいまいな笑みだけ浮かべた。
作家の登竜門と言われる賞をもらってから、正直、彼の本は出版されていない。その賞を貰った本がエリックの唯一の作品だった。
恥ずかしい話だけどとエリックは友に語った。
ミシェルは笑って、スランプは誰にでもあるよと言った。

「君の本を待ち続けている人がここにいることを忘れないでくれ」

彼の瞳は5年前と同じようにエリックを見ていた。

そして今日、彼の家に招待されたわけだが……。

それまで黙って話を聞いていた母親が口をはさんだ。

「ミシェルさんは今、何をしているの？」

昔は会計士になるのが夢だと言っていた。でも、実際彼がなったものは……。

「お姉さんのマネージメントをしているみたいですよ。相当名前の知れた占い師さんで、予約も3ヶ月先までいっぱいだとか」

「まぁ、そんなのであなたが急に伺ってお邪魔じゃなかったの？」

母親は少し心配そうに眉をしかめた。

「いや、それは大丈夫だったんですが、どうも今日はお姉さんの体調が悪く、どちらにしろ延期ということになりました」

窓辺に備え付けられていた一人掛け用のソファに背中まで預けた形で座っていたその人は、エリックに「ごめんなさいね」と柔らかな笑みを見せて謝った。

ミシェルとは対照的な黒髪をたっぷりと頭の後ろで結わえ、その美貌たるやエリックの今まで知る女性達とは比べるべきもないほどの麗しさだった。女優だと言われても決して驚かなかっただろう。

エリックは正直、声が出なかったほどだ。

ミシェルはせっかく来てもらったのにすまないと殊勝な顔つきで謝った。
話を聞くと、ここしばらく姉のパメラは体調を崩しがちだと言う。日々の過労がたたっているのだろうと本人は口にしたが、ミシェルはとても心配しているようだった。
本当に仲のよい姉弟に見えた。
だから、まるでパメラとは正反対の女性を紹介された時、エリックは正直理解に苦しんだ。

「母さん」

エリックはすっかり醒めた紅茶を見つめたまま言った。

「男は肉親にないものを持っている女性に惹かれるものなんでしょうかね」

母親は驚いたようにエリックに目を当てた。
しかし、エリックは真剣な顔で続けた。

「僕はどうしてミシェルがあの人を選んだのかわからないんです。パメラさんが婚約者だと言われた方がよほど信じられる」

それは彼の家を訪れて、帰るまで、ずっとエリックを悩ませた事実だった。

紫水晶の罪　―1―

そもそも、ミシェルの住んでいる町はそう遠くない場所にあった。
実際、こんなに近い距離にいたのかと拍子抜けするほどだった。
ミシェルの話では数年前に越してきたそうなのだが、それならそれで連絡が欲しかったとエリックは思った。
だから、正直に彼にそのことを告げた。
けれどミシェルは、自分が消えてどれだけエリック親子が心配していたか知っているにもかかわらず、そのことに深くふれようとはせず、ただ気弱な笑みで悪かったと言うに留まった。
他人行儀のようにされないだけマシかなとエリックは考えた。
5年もたっているのだ。人はよい方にもそうでないほうにもかわる時にはかわる。
ミシェルは少しやせて、前よりもさらにほっそりした印象になり、顔もどこかやつれた面差しにかわったと言えないこともないけれど、それでもあの優しさだけはかわらなかった。
誰にでも平等に、分け隔てなく愛することの出来る彼の精神に偽りがないことだけは確かだった。
そう考えれば、彼が彼女を選んだのもわからないではない。
彼女はエリックのタイプの女性だとはお世辞にも言えないが、それなりによいところがあるのかもしれない。

エリックはこれ以上母親といるとまた自ら墓穴を掘らないとも限らないと思い起こし、ケーキを半分残したままで自室に引き上げた。
母親はまだミシェルの近況を聞きたがっていたようだが、あえて気付かないふりをし続けた。

そして、数日たったころ、思いがけずミシェルから会いたいとまた

連絡があった。
あいにくと言うべきか、その電話を受けた母親はなかなかエリックに受話器を譲ろうとせず、その間、彼はいらいらしながら待っていた。
ようやく電話をかわってもらって、エリックは苦笑いで言った。

「相変わらずの人だろう？　僕だけ君に会ったものだから、恨んでいるんだ。一度、顔を見せに来てくれないと、君の電話は僕にはもう永遠に取り次いでもらえないかもしれないよ」

ミシェルは電話の向こうで静かに笑っていた。
しかし、用件を告げる頃になるとその声はやや重いものになっていた。

『少しやっかいなことが起こってしまったんだ。実は今、君の家の近くまで来ているんだが、出て来てくれないだろうか？』

エリックは驚いた。
近くまで来て、エリックの母親にも会いに来られないと言うことは、きっと内輪の話に違いない。しかも、緊急を要するような。

「わかったよ。例の図書館のそばの喫茶店へ行こう。あそこなら、人も少ないから」

喫茶店に着くと、ミシェルがすまなそうに眉を下げた。

「ちょっと込み入った話だったから……」

エリックの母親に内緒ごとをしているようで辛かったのだろう。

「いや、母さんには何も言わずに出てきたから大丈夫。それより、どうしたんだ？　顔が真っ青だよ」

ミシェルはテーブルの上で頭を抱えるようにすると困りきった声で言った。

「実は姉が占いで使う紫水晶の玉がなくなったみたいなんだ」

「占いで使うって、このくらいの大きなガラス玉みたいなもの？」

エリックは両手で球を抱えるように真似るとミシェルにたずねた。

「ああ。姉は占う内容やその人によって玉を変えるんだけど、その中でも一番大事にしていた玉なんだ」

「なくなったのは、いつ？」

「それが……」

ミシェルはとても言い辛そうにその先を告げた。それは数日前、エリックがミシェルの家を訪れた日だった。

「なんだって！」

エリックは思わず大きな声を出していた。

ミシェルの顔が一層辛そうな顔になるのを目にしたエリックは自分の気を落ち着かせようと息を吐いた。

「それは本当なのかい？」

「よくわからない。でも、姉さんがそう言っているんだ。僕も実は頭が混乱して、どうしたらいいのか……」

ミシェルは本当に困惑している様子だった。

「警察には知らせたのかい？」

「そんなことできないよ！」

ミシェルは首を横に振りながら彼にしては珍しく感情的な声で言った。

―2―

「姉さんはルイーズを疑っているんだ。彼女が盗ったに違いないって言い張っている」

なぜかその時エリックの脳裏に浮かんだのは彼女の真っ赤な爪だった。

「誰かが侵入した形跡はないのかい？」

「わからない。ただ、前の夜にあったのは確からしい。姉さんは毎晩、玉の手入れをした後、鍵を掛けて眠るんだ」

と、ミシェルは外部からの物盗りの犯行ではないことを暗に示唆した。

「相当、高価なものだったんだろうね？」

エリックは興味本位にたずねた。

「ああ。あの玉一つで家が一軒買える位の値段だよ」

エリックは思わず口笛を吹きそうになった。

「そんな大切なものがなくなったのなら、やっぱり警察に言うべきだよ」

しかし、ミシェルは頑として首を縦には振らなかった。

「そんなことをすれば君も疑われる。あの日のことだけじゃない、いろんなことを根掘り葉掘り聞かれるに決まっているんだ。そんなことに君を巻き込みたくない」

「でも、こうしている間にもその紫水晶は手の届かないところへ行ってしまうかもしれないんだよ」

僕のことなら気にしないでくれとエリックは言った。

「僕は僕が犯人じゃないって知ってるからね。なに、大丈夫だよ。後ろめたいことは何もないし、第一、僕はその水晶がどんなものか知らないし、見てもいないもの」

君のことを疑ったことは一度もないよとミシェルは儚げに笑いながら言った。

「ただ、ルイーズが……」

ああ、とエリックは改めて気付いたように頷いた。

「彼女はとても傷つくと思う」

エリックは、コホンと空咳をすると思い切ったように言った。

「ルイーズさんは、その、少し変わった人だね」

それを聞いたミシェルは一瞬、何を言われたかわからないような顔になった。

「ゴメン。気を悪くしないで聞いて欲しいんだ。この際だからはっ

きり言っておくけど、君が結婚すると聞いたとき、僕はもっと違う人を想像していた」

エリックはどこまで本当のことを言ったらいいのか、悩みながら付け足した。

「その、彼女が悪い人だっていうんじゃないんだよ。ただ、君には適していないんじゃないかって……。あっ、ゴメン、そうじゃなくて、つまり……」

あまり誰かのことを悪く言ったことなどないお気楽な性格のエリックは、人の婚約者をこうも貶している自分を少し恥じた。
しかし、ミシェルは怒った顔もせず、じっとエリックの言葉を待っていた。
だから、エリックも結局ためらわずに言うことにした。

「化粧が濃すぎると思うんだ。あと、あの爪。まるで血を塗りたくったかのような色だった。そして極めつけは、タバコさ。僕は女の人があれほどタバコを吸うのを見たことはないよ」

それはエリックが初めてルイーズを見てから、ずっと燻ぶっていた思いだった。
化粧はね、とミシェルがゆっくり口を開いた。

「彼女は自分の容姿に自信がないんだ」

それは彼女のことを労わるようなとても優しい声だった。

「姉さんに対する対抗意識の表れだと思う」

それにしても……とエリックは思い返した。

「綺麗じゃないとは言っていないよ。ただ、あそこまで塗りたくる必要があるのかなぁ。絶対、素顔の方がかわいいのに……」

ミシェルは同意も反論もしなかった。

「それから、爪だけど、あれは彼女の仕事だから許してやってほしい」

「仕事？」

「ネイルショップに勤めているんだ。爪の手入れだとか、付け爪の販売だとか……、本当は僕もよく知らないんだけど」

ミシェルの爪の方がよほど綺麗だとエリックは思った。

彼は昔から、綺麗な爪の色と形をしていた。桜色の、女性のような形のよい爪を女友達が羨んでいたのを今さらながら思い出す。

「じゃぁ、タバコは？　あれこそ君が一番嫌っていたものじゃないか」

―3―

「それは……」

ミシェルが言いよどんだ。

「姉さんがルイーズに言ったんだ」

「何を？」

エリックは恐々たずねた。

「嫌な匂いがするって……」

それは恐らく彼女へ対する嫌がらせ以外の何ものでもなかったのだろう。

けれど、若い女性にとってそれがどれだけ傷つく言葉かエリックにも思いやられた。

「でも、あんなに吸ったら体にもよくないよ」

「うん。それは僕も同じ意見なんだ。だから、ルイーズにも言ってるんだけれど……」

香水を振っても、化粧の香りをぷんぷんさせても、取れない匂いはあるだろう。いや、実際匂いはなくてもその言葉が悪意の楔となって彼女の心を日々さいなんでいるのかもしれない。

確かにあの部屋はルイーズのタバコの煙の匂い以外何もしなかった。

「僕がいけないんだ。急に彼女を連れてきたものだから。でも、一緒に暮らすなら少しでも早いほうがいいような気がして」

「ちょっと待ってくれ」

とエリックは姿勢を正した。

「一緒にって、3人で暮らすと言う意味かい？」

そうだとミシェルは頷いた。

「それは無理なんじゃないか、どう考えたって！」

エリックは一般論として言った。

「でも、それが結婚の条件だったんだ」

ミシェルはうつむき加減で言った。

エリックはますますわからなくなった。

一体、誰の条件なのか。

ルイーズなわけはない。そうすると……。

エリックはあの絵から出て来たように美しい人がこんな無理難題を押し付けたり、弟の婚約者を苛めたりするんだろうかと疑問を持った。

そんなエリックの迷いに答えるようにミシェルが言った。

「姉さんは自分がいつも一番じゃないと気がすまない人なんだ。それは僕に対しても同じでね」

「でも、だからって……」

エリックは初めて彼の家を訪れた時の奇妙な空気の理由にやっと思い当たった。
決してルイーズを見ようとしないばかりか、彼女の存在さえも無視したようなパメラの態度と、その彼女を氷のような冷たい視線でみつめるルイーズ……。
他人のエリックでさえ、身の置き所がないほどに感じたのだから、当事者のミシェルはどんなに辛い立場だろう。

「本当に一緒に暮らすつもりなのかい？」

うまくいくわけがないという思いを込めてエリックは言った。

「わからない」

ミシェルは自信なさそうに首を横に振った。

「初めはどうしてもそうしようと思った。でも、無理だって最近じゃ思うようになってきたよ。こんなことがずっと続くのなら……」

エリックはミシェルの言葉に腑に落ちないものを感じて、たずねた。

「もしかして、他にも何かあったのかい？」

ミシェルは自分の失言に気付いたように、少し困った顔をした。

「実は姉さんのものがなくなったのは、今回が初めてじゃないんだ」

「なんだって？」

「紫水晶ほど高価なものじゃないけど……。姉さんはそれも彼女の仕業だって言っている」

「でも、本当に彼女じゃないんだろう？」

「当たり前だよ！」

ミシェルは赤い顔で言った。

「彼女はそんなことをするような人じゃない！」

「でも、じゃあ誰が……」

エリックは途方に暮れたように頬杖をついた。

―4―

ミシェルはずっと眉根を寄せたまま、何か考え込んでいる様子だった。
目の前のコーヒーカップをそうやって長い間見つめていたかと思うと急に弾かれたようにハッと顔を上げた。

「何かわかったのかい？」

エリックは身を乗り出してたずねた。
自分の思考にはまり込んでいたミシェルは茫然自失の状態だった。

「まさか……そんな、あり得ない……」

彼は小さくつぶやくと、唇をきつく噛んだ。
エリックはデリケートな問題なだけに、強く聞くことをためらっていた。しかし、ミシェルの悲痛に歪む顔を見ると黙ってはいられなくなった。

「犯人がわかったんだね」

けれどミシェルは自ら導き出した結論を否定するように首を振った。
そして急に笑い出すとテーブルの上に音を立てて崩れ落ちた。

「ミシェル！」

エリックは席を立ち、テーブルを回り込むと、横手からミシェルを支えた。ミシェルの体が小刻みに震えていた。
エリックは体を支えながら、棒のように細くなってしまったミシェ

ルに心を痛めた。

「エリック、幸せになることはそんなにいけないことなのかな……」

それは、耳を近づけなければ聞き取れないほどのか細い声だった。

エリックは掛ける言葉が見つからなかった。そして、なぜか、聞いてはいけないことを聞いてしまったような居たたまれなさを覚えた。

このとき、もっとミシェルの悲しみを思いやっていたならば……。

このことをエリックはあとで嫌と言うほど悔やむことになるのであった。

事件　―1―

それから、一週間を過ぎた頃、エリックは思いがけない人から一本の電話を受けた。
美しい人はその声までも人を魅了するような音色だった。
エリックは緊張気味に言葉を選んだ。

「お加減はもういいのですか？」

『ええ。この間はせっかくいらして頂いたのに、占って差し上げることが出来なくてごめんなさい』

「いえ、僕のことはいいんです。それより、今回は大変でしたね……。ミシェルから伺いました」

エリックの言葉の後、ほんの小さな沈黙が生まれた。エリックが気にする前に、次の言葉がパメラの口から発せられたので彼はなんとも思わなかったが。

『実はそのことで、折り入って相談にのって頂きたいことがあるのです。どうか、ミシェルには内緒で』

エリックはすぐには答えなかった。そもそも、自分が相談などを受ける器ではないことは知っている。それに、そんな遠回りなことをしているよりも警察に頼んだ方が賢明だろう。
素直にそう思ったエリックはミシェルの姉にそう言った。

『私も本当はそうしたいと思っているの。でも、ミシェルが……』

あれからミシェルには会っていなかった。ずっと気にはなりつつ、どこまで口をはさんでよいかわからなかった。
特に、あのミシェルの取り乱しようは彼にかける言葉を失わせていた。

「ミシェルは元気にしていますか？　どうです？　３人で会いませんか？」

お互い腹を割って話すほうがよいとエリックはお人好しにも思った。そのためには他人の自分がいたほうがミシェルも姉も話しやすいのではないかと。
しかし、パメラは頷かなかった。

『ミシェルと彼女のことなの』

「本人の前では言えない様な事なんですか？」

思わず、エリックは咎めるような口調になっていた。なぜかわからないけれど、エリックは次第に不快な気分になっていた。
彼女の声が微妙に媚びるような色に変化しているのがその理由かもしれなかった。

「わかりました。どこへ行けばいいんです？」

途端につっけんどんとも言える口調でそう言うと、早々に時間と場所を決め、電話を切った。おそらく電話の向こうの彼女は受話器をもったまま、あっけにとられていたことだろう。
エリックにはそういう意固地な気質が昔からあった。
生真面目すぎるのかもしれない。自分の心に生まれた感情に逆らえないという性格。

だから、時に人を傷つけたり誤解を受けたり、過去にした。ただ問題は、本人がどれだけそのことに気付いているかだが……。

パメラがエリックを呼び出したのはロンドンの一等地に立つ豪奢なホテルの中にある静かなラウンジだった。
ラベンダー色の目にも鮮やかなロングドレスに身を包んだパメラが現れただけで、その場の雰囲気が一瞬にして華やかなものへとかわった。
しかし、当のエリックは難しい顔で彼女を迎えただけだった。

「お加減はもういいのですか」

電話でした会話をエリックはもう一度繰り返した。

「ありがとう。あなたはやさしい人なのね」

とびきりの微笑みで言われて、さすがにエリックも苦笑いのような顔になった。
パメラはどうもエリックの仕事に興味があるらしかった。作家になろうとした動機や、代表作、現在の活動状況について知りたがった。

「まるでリサーチされているみたいですね」

エリックが言った。
彼はなかなか本題に入ろうとしないパメラに焦れ始めていた。

「あら、占いにリサーチは必要よ。私は準備を怠ったことは一度もないの。完璧に仕事をしようと思えば、努力や苦労は惜しんではいけないわ」

パメラは形のよい顎をくいっと上げるようにして言った。白い喉が露になり、それはとても扇情的に視界には写った。
しかし、エリックはその挑発じみた会話に乗る気にはなれなかった。

「今日は占いをしに来たんじゃありません。そろそろ、本題に入って頂けませんかね」

パメラは一つため息をつくと、包みの中から野球のボールくらいはありそうな紫色の玉を取り出した。

「これは……」

エリックは吸い込まれそうなくらい透明に澄んだ玉を見つめた。

「なくなった紫水晶の玉です」

「出て来たんですか！」

「ええ」

「いったい、どこから！？」

パメラは紫水晶を再び厚いビロードの布で覆うと大切そうにバッグにしまった。

「いったい、どこにあったんです！」

エリックは勢い込んでたずねた。

「ルイーズの部屋で、ミシェルが見つけたわ」
ウソだ！　とエリックは叫んでいた。
「ありえない……」
エリックは信じられないようにつぶやいた。
しかし、パメラは少しも動じずにまっすぐエリックを見たまま言った。
「ありえないことではなかったわ。私にはわかっていたもの」
少しの揺らぎもない自信が彼女の瞳には溢れていた。
「占いが最初から教えてくれていたわ。彼女はミシェルには合わないと」
エリックはまだ半信半疑で頭の整理が追いつかなかった。
「あなたがミシェルの親友だと言うのなら、あの子に助言して欲しいんです」
「何を……？」
「彼女と別れることに決まっているわ」
エリックは心臓に楔を打ち込まれたような戦慄というものを味わっていた。それほど、彼女の言葉には強い意志と悪意が満ち満ちていた。

「それはミシェルが決めることです」

エリックはかろうじて自分を保っていることが出来た。のまれたらおしまいだと何かが告げていた。

「親友なのに？」

「親友だからです」

視線で人を殺せるものなら、とっくにエリックは死んでいただろう。それほど強い視線でパメラはエリックを見つめると、ふっと表情をいきなりやわらげた。

「あなたはきっと私の言葉を聞いてくださるわ。それがミシェルのためなんですもの」

そう言うと彼女は静かに立ち上がった。

エリックはまるでチェアに縫い付けられたかのように動けなかった。

「そうそう、他のなくなった物もついでに彼女の部屋から出て来たの。さすがにミシェルも呆れていたわ」

エリックはそう言って去ってゆく彼女を一度も振り返って見ようとはしなかった。

―2―

翌朝、エリックは完全な二日酔いの状態で目を覚ました。
しかも、目覚めたのはベッドの上ではなく、居間に敷かれた例の絨毯の上だった。

「っー！」

少し動くだけで頭がガンガンした。それでも、ようやく起き上がると這うようにして部屋へ戻ろうとした。
すると目の前に突如、二本の足が現れた。

「か、母さん……」

みっともなく掠れた声がエリックの口から漏れた。
ゆっくりと顔を上げると仁王立ちになった母親の厳しい表情がまともに目に入ってきた。

「エリック！」

このとき、彼ははっきりわかった。自分が美しい女性がとことん苦手なわけを。
パメラは確かに夢のように綺麗な女性だったが、母親はそれ以上にかつて美麗を誇った女優だった。
猫のマダリンが母親の足元に媚るように擦り寄った。エリックも思わず、そうしたい衝動を覚えた。

「まさか、何も覚えていないと言うのではないでしょうね」

エリックは固まったまま、言葉を必死で探していた。

「それが……、はっきりとは、いや、でも、まったくと言うわけではなくて……ですね……」

昨夜の自分がどれだけの失態を演じたのか、想像するだけで怖かった。

おそらく母親はその一部始終を見届けただけではなく、その後始末もしたのだろう。

エリックの情けない顔を見下ろしていた母親は、ほーっと息を吐くとエリックの肩に手を乗せた。

「悪い女に引っかかっていたと思って諦めなさい」

「は？」

エリックにはなんのことかさっぱりわからなかった。

「あんなに酔って取り乱したあなたを母さんは初めて見ました。そして、あんなに管を巻いて誰かのことを悪く言うあなたも」

「……」

「あなたにはあなたにふさわしい人がいるはずです。きっと、その人はどこかであなたを待ってくれているはずですよ」

エリックは呆然としたまま母親を見上げていた。

そして、母親はとどめのような聖母の微笑を見せるとエリックに告げた。

「わかりましたね」

「はい……」

母親がマダリンを抱き上げ居間を引き上げた後、エリックが再びその場に倒れこんだのは言うまでもなかった。

その頃、ミシェルは姉との決別を決意していた。

二度と悲劇を繰り返さないためにも、それはもう避けては通れない道だった。

ミシェルは目の前にある玉を息を止めて覗き込んだ。

答えは自ずと現れた……。

エリックが見込みのない恋に破れ傷心していると勘違いしている母親は、朝食のテーブルで、若い女性がどんなに心変わりしやすい生き物で、どんなに嫉妬深いかということをとうとうと語った。

「結婚するなら、多少顔の造作が悪くても、心根のいい人が一番！　今の人はファッションのように恋人をとりかえるみたいだけど、あれは感心しませんね」

エリックは真面目に聞く気にもならず、いい加減な相槌だけを打っていた。そのうち、あくびまで出そうになって、思わず口に手を当てた。

「大丈夫ですよ。僕は慎重に選びますから」

話に身が入ってないことに母親も気付いたのだろう。

「エリック」

と静かに呼ぶとマントルピースの上の写真立てを持ってくるように合図した。

エリックはしまったと思った。

母親がその写真をエリックに持ってこさせるときは決まって話が長くなる。

「お父さまに、あなたはちっとも似ていない」

母親は写真に写る一人の青年を見つめながら、首を振り、嘆くように言った。

それは唯一残るエリックの父親の写真だった。

母親はかつて、『世界の恋人』と言われたほどの大女優だった。そして、父親はまったく無名の貧乏役者だった。

二人の馴れ初めから別れに至るまで、エリックは子供の頃から聞かされ、今ではソラで言えるまでになっていた。

母親のおなかの中にいる間に父を事故で失ったエリックは、当然だがその人を知らない。

それでも、ことあるごとにそうやって父の写真の前で母の説教を受けるうちに、エリックは一目でいいから会いたかったと思うようになった。

少なくとも父がいたら、エリックは母親にこんなにも頭が上らなかったことはなかったに違いない……。

母親の話が父との出会いの場面に差し掛かった頃、エリックは思い出したように席を立った。

「そうだ！　忘れていた、今日はボンド社の締め切りでしたよ。今から、郵便局へ行ってきますね、お母さん」

―3―

母親から無事逃げおおせたエリックだったが、締切のことは真っ赤な嘘だった。
それでもああ言った手前、どこかに身を隠さなければと考えたエリックは、とりあえずあてもなく、来たばかりのバスに乗った。
そして、何気なく窓の外を眺めていた彼は、思いがけない光景に目を留めた。
それは、とあるアパートの前で男と言い争いをしているミシェルだった。
エリックはわが目を疑った。
あのおとなしいミシェルが誰かと喧嘩をしていることに、まず衝撃を受けた。

「ミシェル！」

エリックはすぐ近くのバス停で降りると、二人のところへ駆け寄ろうとした。
しかし、ミシェルより先に気がついた若い男が詰め寄る彼を突き飛ばすようにして駆けて行った。あたりにはその男が投げつけた紙幣が散らばっていた。

「待てっ！」

慌てて追いかけようとしたエリックを、ミシェルが止めた。

「エリック！　いいんだ、本当になんでもないから」

「なんでもないって……。　一体、何があったんだ？」

エリックは尋常ではない有様を見て、場合によっては警察に行くのも辞さないという強い態度で言った。

「脅されていたんじゃないだろうね。ミシェル、本当のことを言ってくれ。なにか、トラブルに巻き込まれているんじゃないのか？」

昨夜のパメラの様子といい、ミシェルが何かに追い込まれているのは明白だった。

「ゆうべ、君のお姉さんに会った。君に彼女との結婚を取りやめるように忠告しろって言われたよ。あの人はいったい何なんだ？　なんで、あんなにルイーズさんを目の敵みたいにするんだろう。紫水晶も彼女の部屋から君が見つけたって言ってたよ」

エリックはまくし立てるように言った。

ミシェルは青ざめた表情のまま項垂れていた。

「他の物もみんなルイーズさんの部屋から出て来たって……。本当なのかい？」

ミシェルは首を横に振りながら、とても疲れた労働者のような瞳を向けた。

「ルイーズはここしばらく戻っていない。僕が部屋へ入ったって言うのもありえないよ。鍵はルイーズしか持っていないんだ」

「でも、僕は見たよ。すごく立派な紫水晶の玉だった」

「それは無くなったやつじゃない。きっと、他ので代用したんだろ

う。君が実物を見ていないのをいいことにして」

それに、と弱々しい声で付け足した。

「紫水晶がなくなったというのも姉さんの狂言かもしれない」

「なんだって！」

エリックは信じられないと言うように声を荒げた。

「それだけじゃないんだ、姉さんはルイーズが姉さんに毒を盛っていると言い出して……」

「毒？」

「ああ、姉さんの体調がすぐれないのは彼女が来てからだって譲らないんだ。挙句の果てに、ルイーズが姉さんを殺そうとしてるだなんて……」

「嘘だろう？」

「嘘だったら、どんなにいいかと思ったよ。でも、姉さんは本気なんだ。本気でルイーズを……」

ミシェルはそういうと顔を両手で覆った。

「だから、僕はルイーズの部屋の鍵を換えて、彼女を家に帰したんだ」

少し異常ではないかとエリックは思った。気に入らないくらいで、

そこまでするだろうか？
あの綺麗な人が心の中でそんな暗いことを考えていたなんてとても信じられなかった。
けれど、エリックに対峙した時の彼女は弟のためを思ってというよりも、それ以上の嫉妬のようなものを感じさせられた。
だからこそ、空恐ろしいと思ったのだ。

「さっきの男は一体、誰なんだ？」

エリックは思い出したようにたずねた。

「彼女の弟だよ」

ミシェルは地面に落ちた紙幣を集めながら、言った。

「弟がなんで……」

バスの中から見ていた限り、二人は相当激しく言い争っているように見えた。

「ルイーズさんはここに住んでいるの？」

エリックは目の前の小さなアパートメントを見上げた。

「ああ。でも、会わせてもらえなかったよ」

ゆっくりとした動作で一枚々拾いながら、それでも心はどこか別の場所にあるかのようだった。
そして、すべてを拾い終わると、覚悟を決めたようにエリックに向かって言った。

「全部話すよ。僕と姉さんのことを。少し長くなるけど、時間があるかい？」

エリックは大きく頷いた。

ミシェルの告白は、エリックにとってかなり衝撃的だった。
それは、5年前にさかのぼる。

ミシェルが一時期、エリックの家で暮らしていた頃、一本の電報が届いた。
それは、ミシェルが一番気にかけていた父親に関するものだった。

「父親が危篤らしい……」

ミシェルの電報を持つ手が震えていたのをエリックは今でも忘れない。

「早く、行かなきゃ！」

エリックは魂が抜けたようになったミシェルの尻を叩くと、一刻も早く向かうように促した。

「大丈夫。君が行くまで、お父さんは待っていてくれるよ」

エリックは駅までミシェルを送ると、汽車に乗り込む彼を励ました。
うなだれた後姿がたまらなく寂しげで、エリックは思わず、彼の背中をぽんぽんと叩いてやった。

「何かあったら、遠慮なく呼んでくれ。すぐに駆けつけるから！」

動き出した汽車の窓から、ミシェルは一瞬、泣き笑いの顔を見せると、

「おばさんによろしく。それから、幸せだったと……」

そう告げて、二度と戻ることはなかった。

―4―

「まるで昨日のことのようだよ」

ミシェルは声を振り絞るかのように切り出した。

列車を乗り継いで父親の病院に辿り着いたミシェルは、結局、父親の最後には間に合わなかった。

父親の亡き骸の前で呆然と立ち尽くすミシェルの前に現れたのは、女神のように美しい女性だった。

「あなたがミシェル？」

その人は暗く饐えた病室には似つかわしくないほど澄んだ綺麗な声でそう言うと、自分はあなたの姉だと名乗った。

「姉さん……？」

いまだ夢を見ているのではないかと疑う彼に、彼女は簡単な事情を説明した。

それは、ミシェルの母親と彼女の父親が再婚したという初めて知る真実だった。

かわいそうな父親を見捨てていった母親を許せず、連絡を取ることさえ拒否していたミシェルには知りようもないことではあったが。

「たとえあなたがあの人の娘になったとしても、僕には何の関係もありません」

そうでなくても、最愛の父親を亡くした今、どんな雑音も聞きたく

なかった。
しかし、女はおとなしく引き下がってはくれなかった。

「あなたに関係がなくても、私にはあるわ」

綺麗な女性だと思った。しかし、とても冷たい人だとも思った。

「話はあとでちゃんと聞きます。だから、今は父さんと二人きりにしてください」

ミシェルの目にはもう何も入らなかった。
父親の痩せこけた頬をなでる指先だけがもう二度と叶うことのない夢の末期を教えてくれていた。

父親の葬儀を病院内で済ませたミシェルを待っていたのは、想像もしないような父親の多額の借金だった。それは自分の掛け持ちのバイト料などではとうてい払いきれないほどの額に降り積もっていた。
途方に暮れるミシェルの目の前に白い封筒が差し出された。

「これですべて片をつけておしまいなさい」

姉と名乗る女は当然のようにミシェルに言った。
封筒の中身は借金を返してもなお余るほどの高額の小切手だった。

「これは受け取れません。受け取る理由がない」

ミシェルがつき返そうとすると、女は言った。

「理由ならあるわ。あなたは私の弟ですもの」

もしも、彼女があの時違う言葉を喋っていたら、自分は決して受け取りはしなかっただろうと、ミシェルは言った。

「僕は思ったんだ。彼女の言うとおりにしようと。もう誰のために生きても同じだと……」

それから、ミシェルはすでに占い師として名を馳せていたパメラのマネージャーとして働くことになった。

ミシェルは一生懸命働いた。父親の借金を肩代わりしてくれた人のために。

それ以外の感慨も、それ以上の感情もなかった。

彼女は有能な占い師であると同時に、優秀な心理学者だった。彼女のほとんどの名声は緻密な情報収集とリサーチの賜物だった。

しかし、類稀なる美貌と富と地位を恣にしながらも、パメラは少しも幸せそうには見えなかった。

そしてミシェルは彼女の心の奥に決して溶けない氷の部屋があることに気付いていた。

「あの人は何も信じていなかった。自分の占いさえも。だから、データーというデーターを調べつくして、万全の状態で占っていたんだ」

エリックはホテルのラウンジで彼女と会ったときのことを思い出していた。

「それって、占いって言うのかなぁ」

エリックは言った。

―5―

ある程度のことがわかっていたら、誰にでも推測出来得ることなのではないだろうか。
それを彼女のカリスマ的な美貌で本物らしく装えば、真実味が加わってそれこそ催眠術のように信じてしまうのではないか。
ミシェルはその通りだろうねと言った。

「でも、今まで不思議と疑う人はなかったんだ。それがある意味、不幸の始まりだったのかもしれない……」

最初は復讐だったと彼女は言った。自分を変えてしまった運命に対する……。

「姉さんは他人の人生を翻弄し、操ることでバランスを保っていたのだろうと思う」

しかし、エリックは、運命に対する復讐と言いながらも、特定の誰かに対する深い憎しみを感じた。

「で、その復讐はどうなったんだ?」

まだ続いているんじゃないかなとミシェルは視線を揺らしながら答えた。

「僕は彼女の復讐に加担することで、自分の弱さを殺してきた」

エリックはキリキリと痛む心を放って置くことが出来なくなった。

「どうして、なぜ、君は僕を頼ってくれなかったんだ！　そんな誰かの妄執に利用されて、君自身を潰されて、黙っていたんだ！」

エリックに詰め寄るように言われて、ミシェルはとても悲しそうに友を見た。

「それは、彼女が憎んでいた人が僕と同じ人間だったからだよ。もし、その人間がいなかったら、あの人はきっと……」

「それは、誰なんだ？　まさか……」

「母だよ。僕を生んだ女だ」

その冷たい言葉にエリックは思わず顔を引き攣らせた。

「母は父を捨て、新しい恋に夢中になった。その人には妻も娘もいたのに……」

ミシェルの顔が苦痛に歪んでいった。

「その妻は心を病んで、娘を道連れに心中を図った」

「……」

「姉がその娘なんだよ」

ミシェルの懊悩が痛いほど胸を刺した。

「僕の体の中に母の血が流れていると思うと、僕はあの人に頭が上がらなかった」

誰かの悪意を身の内に受け続けることはよほど心が強くなければ無理だっただろう。
ミシェルは5年間、それに耐え続けた。いつかは終わると信じて。けれど……。
彼は続けた。

「姉さんのそばにいると心がなくなってしまう。自分が何者なのかわからなくなるんだ」

ミシェルは自分がここにいることを確かめるかのように、じっと手を見つめた。

「あの人から離れたい。そのためなら、僕はなんでもする」

傷ついた白鳥が、その折れた翼を精一杯広げて飛ぼうとしているような痛々しさを、エリックは感じた。
彼女との決別はそう簡単には運ばないだろう。
彼女のルイーズへの仕打ちや、親友を手の内に取り込もうとする態度から見ても、パメラのミシェルへの執着がうかがえる。

「逃げるんだ！」

エリックは言った。

「ルイーズさんと一緒に。それしかないよ」

僕に出来ることならなんでもする、とエリックはミシェルの目を見て言った。

「君が姉さんを少しでも引き止めてくれたら、ありがたい。その時は是非、頼んでいいかい？」

「もちろんだとも！」

エリックは心の底から頷いていた。

帰らざる日々　―1―

連絡はミシェルから来ることになっていた。なるべく早く準備を整え、ルイーズとどこか知らない土地で一からやり直すんだと彼は言った。
エリックは二人が逃亡する日を今か今かと待っていた。
パメラを呼び出し、自分の仕事のことでも結婚のことでもなんでもいいから占ってもらい、出来るだけ長く引き止めておく算段だった。しかし事態は思惑通りにはいかなかった。

ある日、待ちに待った電話が鳴った。
それは日付が変わろうとする遅い時間にだった。
めったに鳴らない深夜の電話にエリックは戸惑いつつも受話器を取った。
その声が聞こえてきた時、エリックはとても嫌な予感に襲われた。

「どうしたんです?」

パメラだった。
いつもの威厳に満ちた態度からは考えられないような心細い声で彼女は「助けて」と言った。

「ミシェルは、いないんですか?」

『どうして、あの子なのかしら……。どうして……?』

酔っているような、少し正気ではないような声の調子だった。

「初めから話してください。一体、何があったんですか?」

『ミシェルが……、あの子が……』

「えっ？」

尋ねようとすると突然電話が切れた。

「もしもし？　パメラさん？」

慌てて掛け直したものの、受話器がはずれているのか、ツーツーという不快な機械音が鳴るだけだった。
おそらく故意にはずしたのだろう。
エリックは途方に暮れた。
すっかり眠気は飛んでしまい、エリックは落ち着かない気持ちで部屋の中をぐるぐると動き回っていた。
そして、勇気を出してもう一度電話をかけた。さっきの機械音はなく、呼び出し音が3度ほど続いた頃、受話器がはずされた。

「もしもし？」

恐る恐る声を出すと、ミシェルの声が答えた。

『エリック？　こんな夜更けにどうしたんだい？』

眠気を含んだ友の声に違和感はみじんも感じられなかった。

「さっき、パメラさんから電話があって、急に切れたものだから、何かあったのかと思って……」

『姉さんが？』

「少し酔っている感じだったよ」

『最近、眠れないみたいで、見境なく誰彼に電話をしてるんだ。自分だけ、眠れないのが面白くないんだろう』

ため息混じりに、まさか君のところにまでかけるとは思わなかったよ、とミシェルは謝った。

「いや……。それより、パメラさん、具合が悪いの？」

ミシェルは少し言いよどみながら、話した。

『体の調子はそうでもないんだけど、少し情緒が不安定になっているらしい……。僕のせいでもあるんだ』

「まさか、パメラさんにばれてしまったのかい？」

ミシェルは否定しなかった。

『しばらく、あの話は延期にしようと思う。こうなったのも僕の責任だから』

「君の責任じゃないよ。そう思う必要はない」

『いや、そうなんだ。姉さんがとても心の弱い人だというのを忘れていた』

なんだって？、とエリックは尋ねた。

『あの人は今までにも自殺未遂を2度繰り返している……』

思いもかけない真実だった。

それでも、言わなければならない言葉があった。

「彼女には彼女の人生がある。君にも君の人生があるように」

『わかってる。わかっているんだ。でも、どうしていいかわからない』

君はやさしすぎるんだ、とエリックは喉まで出かかった言葉をおさえた。そのやさしさはどちらにとっても命取りになるやさしさだった。

しかし、それを告げることがミシェルを本当に助けることにはならないだろうとエリックは思った。

「お姉さんのことは僕が力になるよ。君のかわりはとても出来ないだろうけど、話し相手ぐらいにはなれる。ああいうタイプは本心を言えばものすごく苦手なんだけど、慣れてはいるからね」

『エリック……』

彼が電話の向こうで涙ぐんでさえいるように思えた。

「実際、嫌と言うほど母に似てるんだ。そう思わないかい？」

ミシェルは少し笑ってくれたようだった。

『また、電話をかけると思うんだ。もし、僕のいない時に彼女がかけてきたら、眠れるように少し話してやって欲しい。そして、ベッ

ドのそばの薬箱の一番上の引き出しに入っている睡眠薬を飲むように言ってくれないだろうか。薬が嫌いな人で絶対自分から飲もうとしないんだ』

「わかったよ」

ありがとう、とミシェルはほっとしたような声で言った。

「今はパメラさんは落ち着いているの？」

『うん。眠っている』

エリックはその時、ミシェルの幸福だけを強く望んでいた。

―2―

その夜、エリックは夢を見た。
大きな川の上を誰かが流れてゆく夢だった。
初めは泳いでいるのかと思った。しかし、そうではなかった。
長い髪の毛がゆらゆらと水面を揺れ、まるで眠ったままのように穏やかな顔だった。
橋の上から、エリックは名前を呼んだ。

「……！！」

エリックはそこで飛び起きた。
自分が誰の名前を呼んだのかさえ覚えていなかった。
ただ、人が亡くなる夢を見たのは初めてだった。しかも、その人はエリックの知る人に間違いなかった。

「眠れないの？」

朝の食卓で、母親はエリックの目の縁にできた黒い隈を見て言った。

「夢を見たんです。とても嫌な夢を……」

エリックは暗い顔で言った。

「エリック、何を悩んでいるか知らないけれど、無理をしてはいけませんよ」

「……はい」

歯切れの悪い息子の答えに母親は心配そうに続けた。

「人にはその人にあった度量というものがあるの。自分の力以外のものを請け負って潰れるのはあなたよ」

「ええ、わかっています……」

「いいえ、全然わかっていないわ。母さんはあなたが間違った道を選んでいるんじゃないかと言っているんです」

間違った道……。

エリックはテーブルの上のバケットを見つめていた。

自分はとんでもない考え違いをしているんじゃないかという思いが一瞬過ぎった。

それでも疑う余地はまったくなかった。

「無理はしません。でも、出来るか出来ないかわからないのに、黙って見ていることだけはしたくないんです」

その気持ちだけは本当だった。

たとえ、自分の選択が間違っていたとしても突き進むしかなかった。

その日の午後、パメラから謝罪の電話がかかってきた。

『ゆうべはごめんなさい。ミシェルにも怒られてしまったわ』

パメラは正直のところ、酔っていてあまり覚えていないのだと言い訳をした。

「ミシェルがとても心配していましたよ。お願いですから、ご自分の体をもっと大切にしてください」

エリックはのらりくらりとかわす彼女に苦言を呈した。

『そうね、自分ひとりの体じゃないんですものね』

パメラは意味深にそんな言葉を言うと、エリックを黙らせた。

「どういう……意味ですか？」

強張った声になった。彼女の返答いかんではもっと冷たい声になり得た。

『ミシェルには私が必要なんです』

「あなたに彼が必要なんでしょう？　もう、いい加減、彼を解放してください。彼はもうすぐ結婚するんですよ」

『出来るわけがないわ。絶対に。誓ってもいい』

エリックは少しでも刺激を与えないようにするつもりだったが、無駄だった。

「あなたがどうしても彼の邪魔をするというのなら、僕にも考えがあります」

それはただの脅し文句にすぎなかった。自分の主張を決して譲らない彼女への……。

『何かしら。出来るものならやってみるといいわ。ただし、私に何かあったとき、いくら親友でもミシェルはあなたを許さないでしょう』

パメラはそう言うと、音を立てて電話を切った。

とても重い気持ちで午後を過ごしたエリックは、夜中にまたパメラの電話に起こされ、神経がピークを迎えていた。

彼女はまた酒でも煽っているのか、とても酩酊した様子だった。

エリックは昼間のやり取りを思い出し、心の底から嫌悪した。

ミシェルに約束した手前、とりあえず、黙らせるしかないと思い至った。

「いいですか？　そばの薬箱の中に眠れる薬がありますから、それを飲んでおとなしく寝てください」

パメラは聞いているのかいないのかわからない様子だったが、これ以上付き合いきれないと思ったエリックは自分から電話を切った。

そして彼女の声を聞くことはもう二度となかった。

―3―

スコットランドヤードから接触があったのは、その翌々日のことだった。

このところ眠りの浅い日が続いていたエリックは仕事にもまったく熱が入らず、資料集めと称して図書館へ逃げ込む日々だった。

腫れ物に触るような母親の態度もエリックにはかなり重荷だった。

彼女はおそらく、エリックがまだ身の丈に合わない恋愛に苦悩していると信じているのだろう。

確かに、母親は父親と大恋愛の末、彼を身ごもったらしい。

けれど、エリックは生前の写真がたった一枚しかない父親と平和的な結婚の末生まれたとは信じられず、正直、自分の出生を疑っていた。

だからと言って、母親を問い詰めることも出来ず今日に至ってしまったのは、すべては真実を知ることを恐れてのことだった。

ミシェルとパメラのことは、自分の境遇に置き換えても、他人事とは思えなかった。

それゆえ、力になりたいと強く望んでいたのだけれど……。

「女心と言うものはどうも理解し難い……」

エリックはパメラのミシェルへの執着をどうしても理解することが出来なかった。

なんでも話し合いで解決をしようとするエリックの建設的な考えはパメラには受け入れられそうになく、新たな解決方法を模索している時だった。

静かな図書館内が急にざわつき始めたかと思うと、かっちりした服を着た数名の男たちを引き連れた女性が閲覧室に入ってきた。

そして、窓際にいたエリックの前まで来ると幾分低めの声で言った。

「エリック・サザーランドさんですね」

「え、ええ」

尋常ではない雰囲気にエリックは少しうろたえた。

「少しお話を伺いたいことがあるのですが、ご同行いただけますでしょうか？」

「あなた方は……？」

「ロンドン警視庁のエレノア・キャンベルと申します。一昨日発生した殺人事件のことであなたにニ、三、お聞きしなければならないことがあるのです」

「殺人事件……！」

エレノアと名乗った女性はエリックよりも若く見えたが階級は相当上らしかった。そして、エリックの動揺にも少しも動じず、慣れた様子で言った。

「おとなしく付いて来てくだされば悪いようには致しません。エリックさん、あなたは数分前から警察の管理下にいるのです」

「待って下さい。おとといのって、いったい誰が殺されたんです？」

エリックは場所柄をわきまえず、大声でたずねた。

「詳しいことは署でお話します」

女刑事はそれだけ言うと、エリックを促した。

しかし、エリックはそもそも黙ってついて行くような人間ではなかった。

閲覧室だけでなく、図書館中の人々の注目を集めながら、エリックはキャンベル刑事に対峙した。

「見えない鎖で拘束されているわけですか。なるほど。それはよくわかりましたよ。でも、僕もおとなしく言うことを聞くような素直な人間じゃないのでね」

キャンベル刑事は初めて、眉を寄せて人間らしい表情をした。

「ここでは人目があります。あなたのためにも言っているのです」

「僕は何もやっていないのだから憂うことは少しもありませんよ。それより、誤認逮捕の方が問題じゃないのですか？」

「逮捕するとは言っていません。お話を伺いたいと言っているのです」

「それにしては、人にものを頼む態度ではありませんね。権力で言うことを聞かせようというのがありありだ」

エリックはまったく負けてはいなかった。いや、負けられないと思った。

「いったい、誰が殺されたんです？　なぜ僕が警察に行かなければ

いけないんです？　それを知らされない限り、僕は出頭には応じませんよ」

「当然の権利ですね」

キャンベル刑事の後ろから、四十歳前後と思われる、これも刑事らしい男が現れて穏やかに言った。

「エレン、今日のところは君の負けだ。サザーランドさんのおっしゃることは最もだ。説明して差し上げなさい」

エレンと親しげに呼ばれた先の刑事は苦々しい表情を隠そうともせず、年上の刑事に食い下がった。

「でも！　このような観衆の目が多いところで話すようなことではありません。我々には守秘義務があるのです！」

「それとこれとは別だ、エレン。彼には知る権利がある。それにこうなることは、君がここに乗り込んできた段階で予測できたことだろう。任意での出頭を望むなら、このような場所を選ぶべきではなかったね」

張り詰めていた気が緩んだのか、エレンは顔一杯で悔しさを表していた。

「わかりました、警部。私の勇み足でした」

出足を挫かれた無念さを隠しながらも気丈な態度で彼女は言った。

「エリックさん、申し訳ありませんでした。亡くなられたのはパメ

ラ・オースチンさんです」

「パメラさんが……？！」

エリックは驚いてそれ以上言葉が出なかった。

しかし、彼女は淡々と続けた。

「そして、今朝、あなたが犯人だと告げる匿名の電話が我々のもとにあったのです」

―4―

エリックは愕然とした。
パメラが殺されたという事実だけでもショックなのに、その上自分が犯人にされようとしているだなんて、にわかには信じられなかった。

「密告の電話ってどういうことです？　どんな声だったんですか？　男ですか、女ですか？」

エリックはエレンに矢継ぎ早に質問を浴びせた。彼女は苦りきった顔をしながら、「それはあとで署で説明しますから」と答えるに留まった。
『青天の霹靂』という事象をエリックはまさに実体験している心持だった。頭がすぐには付いていかなくて、混乱の極みを迎えていた。
エリックは椅子に座ると、冷めたコーヒーを一気に飲んだ。
喉がカラカラで声も出にくい状態だった。

「どうして僕が……。わからない」

「誰でも最初は同じことを言います」

目の前のエレンが普通のことのように言った。
その時、エリックは本当に自分が容疑者として疑われていることを知った。

「僕は何もしていない」

「それもたいていの人が言う言葉です。でも、真実は一つしかあり

ません」

真実は一つ……。なら、何も怖いことはない。

エリックは決心した。

「わかりました。警察でもどこでも行きますよ。但し、あなた方の車でじゃない。自分の足でだ」

エレンは理解不能というような顔でエリックを見ると、

「同行者をつけます。もし、逃亡を図ろうとしても無駄ですから」

と、あたかもエリックを容疑者と決め付けた言い方をした。

（まったく、仕事の出来る女ほど融通の利かないやつはない）

その頃にはエリックも心でそんなことを思う余裕が出来ていた。

警察へ向かう道すがら、エリックの足はまるで雲の上を歩いているように危うかった。

何度も縺れそうになり、その度に人ごとのように自分を嗤った。

嗤わずにいられなかった。

パメラが死んだ。

なぜと思う心の裏で、数日前に見た夢がエリックの頭を何度も過ぎった。

何かが起こりそうな予感はあった。

しかも最近のパメラには精神の不安定さに加えて、奇行とまではいかないが、落ち着きのなさみたいなものが目立っていた。

だからと言って、彼女が被害者になるとわかっていたわけではないが……。

エリックは警察に辿り着く長い道のりを歩きながら、ふと空を見上げた。

（ミシェルはどうしているだろう……）

彼のことを思うと、とても胸が痛んだ。

こんな形で自由になることを彼は望んでいなかったに決まっている。

（責任感の強いミシェルのことだ。きっと心を痛めているに違いない）

憂い顔が張り付いてしまったようなミシェルの顔が浮かんで、エリックはやるせない気持ちになった。

（ミシェルのためにも絶対犯人を見つけてやる！）

エリックは大胆にもそんな野望を持って、警察に乗り込んで行った。

ミシェルの過ち　―1―

その部屋は取調室というよりも談話室に近い雰囲気があり、エリックは少し安堵した。閉鎖的な空間はそうでない人間をも閉塞的な気持ちにさせる。
そこはそういった意味で大変くつろげた。
大きめに取ってある窓が何より日が差し込んで居心地がよかった。

居心地がいいだって？

エリックはふと疑問に思った。
だいたい逃走の恐れのある容疑者を取り調べるにはあまりにそぐわない場所ではないか。
そうこうするうちに、よく使い込んだオークの素材のテーブルに若い巡査が何か飲み物を持ってきた。

「どういうことなんです？」

「は？」

新米らしき巡査はけげんそうに首を傾けた。

「僕は容疑者として連れて来られたんですよね」

「さぁ……。自分はただ紅茶を運ぶように命令されただけですから」

なんというぼんやりした警官だろう。
エリックはスコットランドヤードも地に落ちたという印象を受けた。

そういえば最近の殺人事件の検挙率もかなり低迷していると新聞に叩かれていたっけ。
だいたい、あの、仕事は出来るようだが四角四面からはみ出たこともなさそうな女刑事を見てもうなずけるとエリックは思った。
そして、その四角四面の当の彼女が軽いノックをして取調室に入ってきた。

「破格の待遇ですね。ここでは容疑者に紅茶も出すんですね。まるで喫茶室だ」

「ええ、ここは談話室です。面会者のね」

「どういうことです？　僕は容疑者なんじゃないんですか？　匿名の電話があったんでしょう？」

エリックが勢い込んで言うと、エレンは小さく笑った。

「匿名の電話があったからと言って、誰もかれも犯人だと思っているわけではありません。参考人としてお話を伺いたいと言っただけです」

「だけです、って……」

エリックはあのものものしい図書館での騒動はなんだったのかと言いたくなった。あれでは真の容疑者と疑われていると勘違いされても不思議ではないだろう。
現に今頃、知人はもとより母親にどう伝わっているか、考えただけでも恐ろしくなる。

結局、警察というものはそうなのだ。一般人の常識からは考えられ

ないようなことをしても全く罪に問われるどころか、謝りもしない。そうやって、数々の不名誉な判例をただ単に築き上げているだけの役所なのだ。

エリックは舌打ちをしたい心境だった。

ことに、エレンに対しては。

さっきのお茶汲みの若い巡査とそう変わらないと思える彼女に、誰かもっと道理のわかる教育係を付けるべきだと思った。

「取調べは君が行うの？」

敬語など使ってもやるものかと思った。

「ええ。なにかご不満でも」

いちいち、癇に障る受け答えをする女だなとエリックは苛立った。まるで本当の犯人と刑事が対峙しているかのような緊張した場面にそぐわぬおっとりとした声が、その時、戸口から聞こえた。

「もう始まっているのかな」

「何がです？」

その短い答えは全く同じ言葉で同時に発せられた。もちろん、エリックとエレンによって。

二人はとっさに顔を見合わせると、またはじかれたように同時にそっぽを向いた。

「エレン」と、後から入ってきた人物が咎めるように首を横に振って見せると彼女は渋い顔をして立ち上がって出て行こうとした。

「待ちなさい。彼の話を聞くのは君の仕事だ。放棄することは許されない」

彼は確か、図書館で彼女に意見をしていた警部だったとエリックは思った。

「でも、サザーランドさんは私では大いに不服だと思っていらっしゃるんですわ」

エリックも釣られてこくこくと頷いた。
警部はやれやれというように、大きく息をついた。

「サザーランドさん、彼女は見ても判るように大変若い。けれど、そんなことは比べ物にならないくらい優秀な刑事なんです。どうか、彼女の取調べに応じてやってはくれませんか」

なんだか、おかしい頼みごとだと思った。普通、容疑者にかける言葉ではない。
しかし、なぜかその警部の言葉には反感は抱かなかった。
そうだ。秩序なのだ。
彼女が初めからそういう態度だったら、エリックもおとなしくとはいかないまでも素直に話くらいは聞いてやっただろう。
それを初めから、まるで犯人と決め付けたような態度で慇懃無礼な応対をするから、腹が立ったのだ。
エリックは自分の論理の正しさを知り、少し落ち着きを取り戻しかけていた。

―2―

しかし、彼女はそうでなかったらしい。
納得がいかない顔で机のある一点をみつめたまま、唇を噛みしめていた。
警部は腕組みをして窓辺に立つと、それ以上は口出しをしようとはせず、時々こちらを振り返っては心配そうにエレンを見るに留めていた。

なんて過保護な上司なんだ。いや、これは何の茶番なんだ？
そもそも、自分は何のために連れてこられたんだ？

エリックの頭の中をぐるぐると本来の用件ではないところの疑問ばかりが巡り始めていた。

いったい、彼らの関係はなんなんだ？

ただの上司と部下にしては解せない部分が多すぎるような気がして、エリックはなんだか落ち着かなくなった。こんな時にへんな邪推する趣味はないが、一旦気になるとどうしても無視できない直情型の性質が彼にはあった。
エリックがそんな逡巡をしているのも知らず、エレンは苦虫を噛んだような顔のまま、ようやく対決する姿勢を見せた。

「では、お聞きします。まず、あなたと被害者であるパメラ・オースチンさんとの関係を教えてください」

いかにも紋切り型の言葉でエレンは口を切った。

「彼女は僕の友人の姉です」

「ただ、それだけですか？」

「それだけ……と言うと？」

「彼女と特別な間柄ではありませんでしたか？　たとえば恋人とか」

まさか！　とエリックは答えた。

「ありえませんよ。出会ったのだって、まだついこの間のことなんだ」

「時間の問題ではないと思いますが。確か、彼女はかなり美しい女性だったそうですね」

エレンは調書を元に言葉を続けた。

「このあたりではかなり有名な占い師だったとか……。彼女の顧客名簿には相当の数の地元の名士などの名前が連ねていますね」

「僕はお客になり損ねた男なんで、細かいことはわかりませんね」

地位のある人間に対しては大いにコンプレックスを抱いているエリックは、ふてぶてしそうな態度で言った。

「オースチンさんに占ってもらったことはないのですか？　プライベートでも？」

「ありませんよ。大体、僕が彼女に会ったのなんて片手にも満たな

いんですよ」

「それにしては、オースチンさんに対してあまり好印象を持っておられないように見受けられますが」

エレンは容赦がなかった。次々にエリックに考える時間も与えないスピードで質問を繰り出してくる。

（彼女は思ったよりやり手かもしれない……）

エリックはちらりと窓辺の警部に目をやった。彼がエリックに気付いて、ニヤリと笑った。エリックは心を覗かれたような気がして息を飲むと、姿勢を正して正面の敵を改めて見据えた。

「好きか嫌いかと聞かれれば、嫌いでしたね」

「それはなぜですか？」

彼女の目が一瞬、鋭さを帯びた。

「彼女は確かに綺麗な人でしたよ。見惚れるくらいにはね。でも、それだけです。彼女の性格はお世辞にもよいとは言えませんでした」

「オースチンさんの方はあなたに好意を抱いていたと思われますか？」

エリックはびっくりしたような顔で答えた。

「彼女が？　僕を？　まさか。ありえないですよ。彼女が執着していたのは……」

そこまで言いかけて、エリックはしまったという顔をした。けれど、エレンは見逃さなかった。

「オースチンさんには好きな人がいらっしゃったんですね。そして、その人をあなたは知っている」

エリックは首を振った。

「知りません。言ったでしょう？　僕は彼女とそれほど親しい間柄じゃなかったんです。本当です」

形勢が悪くなりつつあった。エリックが自ら墓穴を掘ったのが原因なのだが。

「隠し事は身のためにはなりませんよ、サザーランドさん」

「本当に彼女の交友関係については知らないんです」

エレンはため息を一つ付くと、調書のぶ厚い冊子をパタンと閉じた。

「あなたはご自分の立場というものをわかっていらっしゃらないようですね。あなたが本当のことを教えてくださらない限り、あなたの容疑も消えないということなんですよ」

エリックはすっかり忘れていたという顔をして、女刑事をさらに呆れさせた。

「でも、やっていないものをやっているとは言えません」

「そんなことを言っているんじゃありません！」

彼女は調書をダン！と机に叩きつけた。

エリックだけではなく、その部屋にいたすべての人がその音に慄いた。

「私たちが知りたいのは真実なんです。彼女がいい人であろうとなかろうと主観はこの際どうだっていい。誰が彼女の命を奪ったのか、それが重要なんです」

それはエリックにしても同じだった。

彼女が性格に問題があったからと言って、殺されてもいい理由にはならない。

「あなたがオースチンさんを殺害したと名指しで電話をしてきたのは男性の声でした。心当たりはありませんか？」

―3―

「ありません」

ほとんど即答だった。

「本当に？」

「ええ。知っていたら、とっくに喋っていますよ」

「共通のお友達などはいませんでしたか？」

「いません。そりゃ、ルーツをたどっていけばいないこともないのかもしれないけど、常識から考えてありえませんね」

警察に密告したという相手は、少なからずエリックに悪感情を持っている人間ということになる。

自分が相当誰かから恨まれていない限り、そういう行為に走る人間はいないだろうし、心当たりも何もない。

もっとも、自分の知らないところで恨まれているならば話は別だが。

「ミシェルさんはどうですか？」

「どうって、何がです？」

エリックは突拍子もないと思える問いにきょとんとした顔で反対にたずねた。

「あなたを恨んでいるようなことはありませんか？」

今度はエリックが机を叩く番だった。

「いい加減にして下さい！　僕に容疑がかかるのは仕方がないにしても、ミシェルを巻き込むのはお門違いでしょう！」

「一体、警察は何を考えているんだ！」　とエリックは鼻息も荒く、まくし立てた。

しかし、目の前の刑事は全く普通の声で告げた。

「巻き込まれているのは、どちらかと言えばあなたの方なんじゃないんですか、サザーランドさん」

エリックは言葉に詰まった。否定する要素がどこにもないことが癪だった。

「でも、彼は関係ないでしょう。だって、弟なんですよ。弟が姉を殺すわけがない」

「そうでしょうか？」

エレンはそう言うと、またぞろ調書の冊子を開いた。

「ミシェル・ゴードンさんはオースチンさんと血が繋がっていない姉弟でしたね」

エリックは黙っていた。

「そして、二人の仲はあまり上手くいっていなかった」

「そんなこと、どうしてわかるんです？」

エレンはなんでもないことのように言った。

「噂はどこからでも入ってくるものです。そして、時にそれは真実を指している」

「噂は噂でしかありえませんよ。僕があなただったら、自分の目で見たものしか信用しませんね」

その言葉にエレンはアルカイックな笑みを見せ、非常に意味ありげに尋ねた。

「では、ご自分の目で見られたことは信じられると？」

「え、ええ……それは当然……」

彼女はパタンと音を立てて調書を閉じると判決を述べるような朗々とした声で言った。

「ありがとうございました、サザーランドさん。今日のところはこの辺でお引取り頂いて結構です」

エリックはただ茫然とするのみだった。

「はっ、なんなんですか？　今日のところはって……？！　ちょっと、待ちたまえ」

思わず上からの目線で言ってしまったエリックに、冷え冷えとした

視線を向けてエレンは言った。

「こちらも忙しいのです。あなたの方にばかり時間を割くわけにはいきません」

「そんな理屈、おかしいんじゃないですか。第一、僕は知りたいことを何も教えてもらっていない」

エリックの抗議の言葉に彼女は全く意外そうな顔をして言った。

「それはこちらのセリフです。あなたこそ、本当のことを何一つ語ろうとしないじゃありませんか。正直言って、失望しました。もう少し、骨がある方なのかと思っていました」

エレンは図書館でのやりとりを持ち出し、エリックをうろたえさせた。

エレンは立ち上がったまま、しばらくエリックの表情を伺っていたが、やがて諦めたように出口に向かって歩き出した。

「僕は釈放されるんですか」

エリックが強気を取り戻して言った。

「また、お話を伺うことになると思いますが、それまでは自由にしていただいていて結構です」

（勝手な！）

エリックは心の中で舌打ちした。

「誰かと口裏を合わせる相談をするかもしれませんよ」

エレンはドアに手を掛けた状態で振り向くと、不適な笑みをもらした。

「誰か、と言いますと？」

エリックはさすがにミシェルの名前を持ち出すことは出来なかった。しかし、エレンはためらうことなくその名を口にした。

「ゴードンさんなら、無理ですよ。彼は先ほど出頭されましたので」

「……！」

「オースチンさん殺害容疑で、現在こちらで身柄を確保しています」

彼女はまるで最後通牒を告げるように言い置くと、ドアを勢いよく開けて出て行った。

―4―

悪夢のようだった。
エリックはどこからどこまでが本当にあったことなのか、わからなくなりかけていた。

エレンと書記係の巡査が去ってから、どのくらいそこにとどまっていただろう。
気が付くと、窓の外は夕闇に包まれていた。

「たばこを、くれませんか」

エリックは、窓辺を背に寄りかかるように佇んでいる男に向かって言った。
警部は黙ってケースごとエリックに差し出すと、自分も一本引き抜いて火を付けた。

「ゴホッ、ゴホッ」

喫煙の習慣のないエリックは、慣れないたばこの味にむせるように激しく咳をした。

「こんな時、あなたのようにスマートにたばこが吸えたら、きっと気分も違っていたんでしょうね」

皮肉というよりも羨ましさのにじんだ声でエリックは言った。

「そうでもないですよ。こんなのは惰性みたいなもんです」

警部は紫の煙を吐きながら、けだるそうに答えた。

「ずっと、たばこを吸う人間は不良だと思っていたんですよ。子供の頃から……。そんなので、大人になった今もこの味が辞められないという人の気持ちがわからない」

自嘲を含んだ少し寂しげな声がエリックの口から漏れた。
警部はもう一度だけ紫煙をくゆらすと、灰皿の中で火を消した。
エリックはただぼんやりと煙の行方を追っていたが、やがてつぶやくように言った。

「ミシェルじゃありません。ミシェルが殺人なんて恐ろしいことをするわけがない。ましてやパメラさんを……」

エリックはとても疲れた表情で警部を見た。
警部はその視線を避けるように立ち上がると、また窓際に寄った。
そして、エリックに背中を向けたまま尋ねた。

「サザーランドさん、本当に密告電話に心当たりはないのですか？」

エリックで結構ですよと前置きして、エリックは逆に警部に尋ねた。

「警察はそれもミシェルの仕業だと？」

警部は向き直ると困惑しきった声で言った。

「我々もわからんのですよ。密告した本人が自首してくると言うのも考えにくいですしね。かといって、密告してきた人間は必ず存在するわけだし……」

「どういった内容のものだったんですか？」

「なに、簡単なものですよ。でも、それを今あなたに教えるとエレンに叱られてしまいますから言えませんけどね」

「彼女はいったい何者なんです？」

思わずほとばしった本音に、警部は小さく笑みをこぼした。

「やり手ですよ。うちの一番のホープです」

「ええ、それはなんとなくわかりましたけれど……」

知りたいことはそういうことじゃないんだとエリックは言いたかった。

けれど、警部は自慢げに、まるで惚気るように彼女がいかに優秀な刑事であるかエリックに語りだした。

彼女が関わったものの中には警視総監賞にも匹敵するような大事件もあった。

いい加減、聞き飽きてきた頃に思い出したように警部が言った。

「そういえば、ゴードンさんには婚約者の方がいらっしゃったのでしたね」

「ええ」

「その方と、面識は？」

「一度会っただけですが……何か？」

警部は少し考え事をするように部屋の中を歩いていたが、急に向きを変えるとドアを開けて出て行った。
そして、しばらくして戻ってくると荒い息でエリックに言った。

「エリックさん、その人の名前はなんと言いましたか？」

「は？　ミシェルの婚約者ですか？　ラストネームはわかりませんが、ルイーズさんだったと……」

「彼女の職業は？」

「えっと、ちょっと待って下さい。確か、爪の仕事、そうネイルショップに勤めているとかミシェルが言ってたような気が……」

遠い記憶を探り当てるように顔をしかめ気味に話すエリックに、警部は真剣な目をして言った。

「いいですか、エリックさん、落ち着いて聞いてください。ルイーズさんがいなくなりました」

「なんですって？！」

エリックは椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がった。

「何かに巻き込まれたんですか？」

「わかりません。今、エレンたちが捜索している所です」

そう言いながらも落ち着かない様子で警部は部屋中を行ったり来たりしていた。

「彼女も狙われてるってことなんですか?」

見えない犯人。不明な動機。これが連続殺人に発展しかねないと誰が言えようか。

しかし、警部は違うことを考えているらしかった。

「ゴードンさんとお姉さんの間がうまくいっていなかったのは、彼女が原因だったのではありませんか?」

「それは、まぁ、そうですけど……」

簡単に一言で片付けられる問題ではなかっただけに、エリックも言いよどんだ。

その時、ふとエリックの頭を過ぎるものがあった。

それは掠める程度の些細なことだったのだろうが、いつまでも気になった。

管内が急に慌しさを呈したようにざわつき始めた。

警部も再び出て行ったまま、戻る気配もなかったので、エリックはそのまま警察を後にした。

家路を辿る足取りは、来る時よりも一層重く感じられた。まるで鉛を引きずっているように前に進まなかった。

町並みが昨日と全く同じ景色にも関わらず、まるで知らないどこかの町のようでさえあった。

日常と背中合わせに存在する、非日常の風景がダブって見えた。

何か大きな落し物をしたのに取りに戻っていけない、それほどに過去は遠くに感じられた。

エリックは息苦しさに思わず空を見上げた。

幾千もの星が瞬く夜空に、その瞬間、儚げに青い光が一筋流れて落

ちた。
それは誰かの涙のようにエリックには届いた。

―5―

家に辿り着くと、母親がドアを開けたところで立って待っていた。その顔には明らかに泣いたと見られる涙の跡が残っていた。

「母さん……」

母親は黙ってエリックを抱きしめると、幼子にするように背中を叩いた。

「よかった、無事で」

母親の搾り出すような声にエリックは胸が詰まって、何も言えなくなった。

図書館での逮捕劇（実際には違ったが）は小さな町を瞬く間に駆け巡り、母親の耳に届いたのもそう時間が経過しないうちのことだったらしい。

「母さんは信じていましたよ。あなたがそんな大それたことをする子じゃないってことは」

褒められてるのか、けなされてるのか、よくわからない言い方だったけれど、母親の心情を表しているなとエリックは苦笑しながら思った。

食事の間、母親はいかに近所の人たちにお世話になったかということをエリックに話して聞かせた。

「いいですか？　明日、朝一番にみなさんにお礼を言ってくるんで

すよ。お隣のパスカルさんはいざとなったら、あなたの弁護を買って出るっておっしゃってくれたのよ。それにヒギンズ夫人はご主人が新聞社に勤めていらっしゃる関係で、今回の不当逮捕を大々的に記事にすると約束してくださいましたよ」

「母さん！」

エリックは、改めてことの重大さに目眩を感じ始めていた。
どうやら、話は回りまわってかなり大げさに脚色されてしまっているらしい。
実際は任意での事情聴取ではあったが、噂では大勢の警官に取り囲まれて拉致同然で連れて行かれたということになっているようだった。
エリックは癪ではあったが、自国の警察の名誉のためにも本当のことを語ってみせた。
そのためにも、パメラの事件は語らないわけにいはいかなかった。
母親は身近な人間に起きた恐ろしい出来事にとても心を痛めた様子だった。

「なんてお気の毒なのかしら。お姉さんが亡くなられたのに、それを悲しむ間もなく、犯人として疑われるだなんて」

「でも、警察の話ではミシェルが自ら出頭したように言っていましたよ」

「それはミシェルさんが誰かをかばっているからですよ。そうに決まっています。あの人が人の命を奪うなんてこと、出来るはずがないじゃないですか！」

母親はとても悔しそうに、綺麗な眉を寄せた。

「それで、お姉さんはなぜ殺されたの？」

それは犯人に聞かなければわからないだろうとエリックは言った。

「じゃぁ、どうやって殺されていたの？」

「さぁ……」

エリックは首を横に傾けて言った。

「エリック」

母親は急に冷ややかな声でエリックの名前を呼ぶと、見るものを即、凍らせるような瞳でエリックを見つめた。

「あなたは警察へまで行って、いったい、何をしてきたんです」

「何をって、僕は自分の無実を証明に……」

「それだけ？　犯人に繋がる何かを聞いては来なかったの？」

探偵じゃないんですからとのんきに話すエリックに、母親は思わず額を押えた。

「あー、どうして、あなたはこうも身勝手なんでしょう。親友が姉殺しで拘束されているというのに、自分の保身ばかりにしか頭が回らないなんて……。どこで育て方を間違えたのかしら」

思わず笑いかけていた顔が引き攣った。

案の定、母親は自分からマントルピースの上の写真立てを取って来ると、その写真の中で微笑んでいる青年（エリックの父親）に向かって語りかけた。

「サム、許して頂戴。私の責任だわ。エリックをあなたのような優しい人に育てると誓ったのに。本当に、どうしてこんな鈍感な人間になってしまったのかしら……」

あまりといえばあまりの言われように、エリックは激しいショックを受けていた。

父親の記憶どころか、抱いてもらった覚えさえない人間の写真をおまえの父だと言われ続け、ことあるごとに自分と比較され、けなされてきた鬱憤が今にも爆発しそうなほどに高まっていた。

それでも。

「わかりましたよ。ミシェルの無実は僕が証明します。ただし、あなたとその人のためじゃない。僕自身のために」

エリックはそう言うと、唖然とした母親をよそに自室に向かった。

確かに母親に言われるまでもなく、エリックはミシェルの無実を晴らす気ではいた。しかし、あまりにも一日のうちにいろいろなことがありすぎて、頭の中が混乱を極めていた。

エリックは机の前に座ると両手で顔を覆った。

パメラの死はそれなりの衝撃をエリックにもたらした。エリックは記憶を辿るように目を閉じた。

「一昨日といえば……」

エリックははたと顔を上げた。パメラが電話を最後にかけてきた日

に違いなかった。
あの日は二度、パメラと電話で話していた。
一度目は前日の深夜の電話を詫びる内容だった。しかし、それに続けられた会話は双方にとっては決して友好的なものではなく、エリックはかなり気分を害して電話を切っていた。
そして、その夜の二回目の電話はさらに不快を煽る内容で、エリックはほとほと彼女の相手をするのが嫌になっていた。
早々に電話を切って、彼女のことは忘却のかなたへ追いやって眠りに付いたわけだったが、警察の話が正しければ彼女はその後、何者かに殺されたことになる。

「凶器はなんだったんだろう……？」

彼女の死因は？
ミシェルが誰かをかばっているとしたら、ルイーズとしか思えない。
しかも彼女は現在行方不明だという。
エリックはそこまで考えて、頭を掻き毟った。
仮にルイーズが犯人だとして、じゃぁ、警察に密告電話をしてきた人間は誰なのか。
共犯者がいるということなのか？
ルイーズは今、どこにいるのか？

考えれば考えるほど、謎は深まるばかりだった。

―6―

翌日、エリックは近所を回り、心配をかけた詫びを告げて歩いた。平穏で退屈すぎる町に突然降って湧いた異例の逮捕劇に町の人々は興味津々で、行く家、行く家でエリックは歓待され、あらゆることを聞きたがられた。

そして一番長く捕まったのが、噂好きで有名なヒギンズ夫人だった。

「びっくりしましたよ。まさか、こんな平和な町に恐ろしい殺人者が住んでいたなんてね。しかも、それが私のよく知ってる人間なんだから、本当に驚きましたよ」

彼女の言い方は、まるでエリックが本当の犯人だといまだに信じているような響きがあり、大いに憂鬱にさせた。

「おばさん、僕は初めから犯人じゃなかったんです。間違えたのは警察の方で……」

「そうそう！　不当逮捕ですってね。うちの旦那に言っておきましたよ。今度新聞に、大きくその不祥事を載せてもらうようにね。明日の朝刊に載ってるんじゃないかしら」

ヒギンズ夫人は鼻を高くして言った。

その件はゆうべのうちに直接、夫のヒギンズ氏に連絡を取り、なかったことにしてもらっている。

しかし、それを告げようものなら、またどんな言葉が返ってくるかもしれないと思い直し、故意に黙っていることにした。

「メリッサの落ち込みようってなかったわ。サム・ネビルがいなく

なった時より、ひどかったわね」

「それって、僕の父親のことですか？」

エリックは思いがけない名前を聞いて、すぐに飛びついた。

「ええ。あんたのお父さんよ。すごく優しい人だったわね。メリッサはね、女優を辞めて、彼とここで暮らし始めたのよ。当時は町中がひっくり返るような騒ぎだったわ。あのメリッサ・シェリルが結婚して、しかもこの町に住むって言うんですから！」

「結婚したんですか！」

「当たり前でしょう？　じゃなきゃ、あなたが生まれていませんよ」

その言葉にはやはり真実味が薄かった。ヒギンズ夫人はお喋り人だが敬虔なクリスチャンだ。当然、結婚していたと信じていただけかもしれないという疑いが残った。

「サム・ネビルはなぜいなくなったんですか？」

「さぁ。それは永遠の謎だわね。突然だったもの。メリッサもあのままいなくなるなんて思ってもみなかったと思いますよ」

「よくいなくなるってことがあったんですか？」

「まぁね、旅好きの人だったからね。でもね、ここだけの話、彼は殺されたんじゃないかと思うのよ」

エリックはあまりの衝撃的な発言に、体をのけぞらせた。

「殺されたって……、サムが、ですか？」

「ええ。メリッサには気の毒でとても言えないけれど、彼はそういう意味で敵が多い人でしたからね。第一、メリッサが女優を辞めたのはサムのためだったんですから……」

「でも、それだけで、どうして……」

「あなたは女優だった頃のあの人を知らないから、そう言えるのよ。そりゃ、当時の彼女は輝いているなんてものじゃなかったわ！」

ヒギンズ夫人は当時を思い出して、うっとりするような顔をして言った。

「天使でしたよ。ええ。本物の天使よりも天使らしかったわ。その世界中の誰もが愛する彼女をサムは独り占めしたのよ。どれだけ、彼が恨まれたかわかる？」

「さぁ……」

正直、エリックには想像もできなかった。
彼にとって母親はただ畏怖の存在だった。

「でも、父は事故で亡くなったって……」

「誰だってそういうことにしておきたいと思うものよ。ましてや、遺体がないんですから」

ヒギンズ夫人は気の毒そうに言った。

「それじゃあ、生きているかもしれないじゃないですか！」

希望を見出して、エリックは声を張り上げた。

「でも、何十年も音沙汰がないなんて考えられませんよ。自発的に失踪したとしても、身重のメリッサを残して行けるわけはないですからね。サムがどれだけ、あんたが生まれるのを楽しみにしていたことか！」

ヒギンズ夫人は当時を思い出すように、懐かしそうな目で言った。

「メリッサはずっと待っていたわ。何かの事情で帰れなくなったに違いないって。でも、あんたが生まれて、だんだん大きくなってゆくのを間近に見ながら、覚悟を決めたんでしょうね。自分一人であんたを立派に育ててゆく決心をしたんだわ」

ヒギンズ夫人はしんみりそういうと、前掛けのように長く垂れたエプロンで目頭をぬぐった。

「その大事な息子が殺人犯と間違われるなんて！　本当に、あんたはなんて親不孝者なんだろう」

エリックはかなり居心地の悪い思いをしていた。父の話を聞いたばっかりに、とんだとばっちりを受けてしまった。

いったい、どこから話がかわっていったんだっけ？

エリックはつい数分前までの会話に戻そうと記憶の窓を叩いた。叩いている最中に、ヒギンズ夫人の話はまた別の方向へと飛んだ。

「それにしても、殺された占い師って人はすごい美人だったそうじ

やないの？」

「そうですね。確かに人形のように綺麗な人でしたよ」

エリックは思い出すことを最優先にしながら、上の空で言った。

「まぁ、毎日、メリッサみたいな母親と暮らしているあんたには、どうってことがなかったのかもしれないけど……。崇拝者はかなりいたそうだわね」

彼女のグダグダ話を片方の耳だけに入れながら、同時進行で前の話題に戻る難しさをエリックは痛感していた。

「今回の殺人もあれかしらね、サムのときのような妬みが原因かしら。ああ、それだったら、殺されるのはあんただったはずよね」

エリックはとうとう思考を止めた。

ヒギンズ夫人はもしかして、自分よりもずっと小説家に向いているんじゃないかと思った。

けれど、これ以上、彼女を調子付かせたくなかったエリックは静かに黙っていた。

―7―

くれぐれも身辺には気をつけなさいよ、とヒギンズ夫人は別れ際に言った。

「事件は終わったとは限らないんだから」と。

そういえば、ミシェルが自首をしたことはまだ新聞には載っていなかった。しかし、遅かれ早かれ、新聞屋が嗅ぎ付けるのは必至だ。ヒギンズ夫人はまた情報収集に忙しくなるだろう。また、あれやこれや想像の域を出ないことを町中にふれて回るかもしれないと思うと頭が痛くなった。

「さすが新聞屋の女房、って感じだな、あの人は」

まさに彼女は放送局のような役割をしていた。

ミシェルが犯人だとは到底信じていないエリックも、どこまで庇いきれるか自信がなかった。

「まるでスケープゴートだ……」

かといって、人の口に戸は立てられない。沈静化するには、やはり真犯人を見つけるしかないのか。

エリックはヒギンズ夫人が最後に言った言葉が気になってならなかった。

「事件が終わったとは限らない」

それはどういうことなのだろうか。第二の殺人が起きるとでもいうのだろうか？
そして、次の標的はもしかすると自分かもしれない……。

「まさか……」

しかし、笑みは突然、崩れた。

「いったい、何が起こっているんだ……」

自分の身に降りかかっている火の粉の存在をこのとき初めてエリックは真剣に考えた。
そして、取調べの時に言ったエレンの言葉もはっきりと思い出した。

『巻き込まれているのはあなたのほうなんじゃないですか、サザーランドさん』

エリックは無意識に唇を噛んだ。これは自分一人では立ち向かえない相手かもしれない。
そう気付いた時、足が自然にどこかへ歩き出していた。

見えざる悪魔　―1―

警察署の前まで来ると、エリックは自然と腕時計を覗き込んだ。
そういえばヒギンズ夫人のところでお茶を飲んだきりで、朝から何も食べていないのを彼は思い出した。
時計は十二時をはるかに過ぎていた。
大事な目的は後回しにして、エリックはまず腹ごしらえをすることにした。
うろうろしていると、ある集団が近くの喫茶店に入っていくのが見えた。
その中には数人の見覚えのある顔があった。

「キャンベル刑事と取り巻きか……」

エリックは少し考えたあげく、自分も同じ店に入ってみることにした。
さいわい、彼らは何かの話に夢中になっているらしく、他の人間に目を向けているものは一人もいなかった。
エリックは何気ない風を装いながらカウンターに座ると、ちょうど斜め後ろのテーブルに陣取った彼らの会話に神経を集中させた。

「一体、彼女はどこへ消えてしまったんでしょうね」

取り巻きの一人がエレンにたずねた。彼女はその質問にただ短く、わからないと答えた。
どうやら相当、煮詰まっているらしい様子が声に伺えた。
おそらく、『彼女』とはルイーズのことだろう。昨日、警部が慌てふためいて出て行ったのもそれが理由だった。

「しかし、おかしいですね。ネイルショップで、実際、彼女が働いていた形跡はなかったわけですから」

エリックは持っていた新聞を危うく、落とすところだった。

「ゴードン氏にも確認しましたが、彼女は彼自身にも例のネイルショップで働いていると言っていたそうです。彼は婚約者がいなくなったと聞いた途端、机に突っ伏していましたよ。よほどショックだったんでしょうね」

エリックの新聞を持つ手が震えた。「そんな馬鹿な！」と今すぐにでも振り向きたい心境だった。

しかし、エリックはその気持ちをグッと抑えて、話の続きに聞き入った。

「その女が犯人なんでしょうか？」

「いや、それはわからないよ。彼女はたまたま嘘をついていただけで、この殺人とは無関係かもしれないし」

「でも、それなら、なぜ、恋人にまで嘘をつく必要があったんです？」

「そりゃ、言えない事情があったのかもしれないし……。憶測でものは言えないよ」

誰かがそういった後、しばらく短い沈黙が落ちた。

「主任はどうお考えですか？　ミシェル・ゴードン氏がやはり犯人だと思われますか？」

エリックもそれが一番知りたかったが、残念にも彼女の声は聞こえてこなかった。

「そう言えば、ゴードン氏の友人のあの男はどうなったんだ?」

「あの男って?」

「ほら、密告電話で名指しをされた男だよ。確か……エリックとか言った……」

エリックはまさかそこで自分の名前が出てくるなんて思いもしなかったので、心臓が止まりそうになった。

「ああ、とりあえず、様子見で釈放になった……。彼こそ一番怪しい気がするね。なんでもガイシャの愛人だったんだろう?」

「やはり痴情の縺れか……」

エリックの耳にはありえないような空想話ばかり届いて、正直頭が痛かった。

「だけど、ミシェル氏は断固として自分が犯人だとしか言わないんだろう?」

「いくら親友でも、自分の姉を殺したヤツを庇うとは思えないんだよな」

「じゃ、やっぱり婚約者を庇って?」

「ルイーズが犯人だと思い込んだミシェル氏は彼女の身代わりになろうとした。だけど、その彼女は逃亡しただけじゃなく、自分に嘘までついていた……」

―2―

「何のために？」

「それがわかったら苦労しないよ」

「でも、彼らは出会って、そう間がなかったんだろう？　近所の人も二人が連れ立って歩いている姿を見たことがないって言ってるし」

「隠しておきたいほど美人だったのかな」

「いや、それならもっと周辺から事情が聞けてもいいはずだ」

中の一人が困惑したような声を出した。

「そうなのよね……」

今までだんまりを決め込んでいたエレンがようやく言葉を発した。

「不思議なのよ。彼女の行方を追えば追うほど、彼女の姿が見えなくなる。彼女は仕事どころか、住居さえも嘘をついていた」

「はい。昨日、ゴードン氏に聞いた住所を訪ねてみましたが、住んでいたのは別の人間でした。その人物には会えませんでしたが、隣の人の話によると普通の若い男性で、今のところ、彼女とは無関係だと思われます」

「じゃ、彼女は一体、どこに住んでいたんでしょうか？」

「一時期はゴードン氏のところで3人で暮らしていたみたいですが、ガイシャとうまくゆかず、彼女は帰されたそうです」

「ゴードン氏周辺の聞き込みでも、それは聞こえてきていました。ルイーズさんとパメラさんは相当仲が悪かったようです。諍いの物音がしょちゅう絶えなかったそうです。近所の奥さんが話してくれましたよ。いつだったか、窓ガラスが割れる大きな音がしたってね……」

「じゃ、パメラさんに恨みを持っていたとしても不思議じゃないわけですね?」

「でも、殺すほどのことかしら。お互い気に入らないのなら、離れて暮らせばいいだけのことでしょう? 現に彼女は家を出ている。もっと言えば、駆け落ちでも出来たわけでしょう? 彼らはそれをやらなかった。なぜ?」

「そうか、遺産だ!」

誰かがそう叫んだ。

「彼女は相当の資産を持っているという噂です。実際、仕事の占いの方も順調で顧客も相当数あったようです」

「遺産か。彼女は遺言を残していたのかなぁ」

「あの若さで遺言を残す人はめったにいないだろう」

「ということは、彼女の死後、その遺産はすべてゴードン氏のものになる」

「確かに。でも、だとしたら、おかしくはない？　彼は自分で出頭してきたのよ。姉を殺したのは自分だと」

一同は皆、黙り込んだ。

「それに解せないのは彼女の死因よ。なぜ、彼女は……」

エレンは言いかけて不自然に言葉を途切れさせた。

「さぁ、そろそろ戻りましょう。最初から洗い直しよ。とりあえず、一刻も早くルイーズさんの身柄を確保すること。いいわね」

エレンの言葉を合図に彼らは立ち上がった。総勢5，6名といったところだろうか。

きっと彼らは彼女のために選ばれた、精鋭中の精鋭たちに違いない。

エリックは一人取り残される形となった。いつのまにか空腹もどこかに消えていた。

いつ注文したかも忘れたコーヒーとサンドイッチがそっくりそのままカウンターの上に鎮座ましましていた。

冷たくなったコーヒーを一口すするとエリックは深いため息をついた。

警察は未だにエリックを疑っているらしい。しかも愛人扱いだ。これは決定的なのだろう。

そして、なかなか消えそうもなかった。

「愛人も何も、2、3度会っただけだって言うのに……」

世間の噂なんてそんなものだ。誰かが面白半分に言い出したことが、

回りまわって、いつの間にか真実となって巷を駆け巡る。

「でも、ルイーズさんはなぜミシェルにまで嘘をついていたんだろう」

その時何かが頭を掠めた。それはとても大事なことだったような気がして、思わず追い求めようとしたその時だった。

トンと親しげに肩を叩かれて、エリックははじかれたように振り向いた。

「警部！　なぜ、ここに？」

「それはこちらのセリフです、と言いたいところですが、あっ、ここいいですか？　さっきからずっと外にいて体が冷え切ってしまって……。スミマセン！　あつーい、コーヒー！」

警部はそう言うと、エリックの隣の椅子に腰を下ろした。

「さっきからずっとって、張り込みですか？」

「ええ、実はそうなんです。わかりませんでしたか？」

「は？」

エリックはぽかんと口を開けて、ようやく気付いた。

「まさか、僕を？」

警部はニコニコと笑顔で頷いた。

「全然気が付きませんでしたよ。いつからですか？　まさか、朝からずっと？」

「ご近所づきあいも大変ですなぁ。あんな噂、放っておいてもよかったのに」

「そうはいきません。っていうか、うちの母が許してくれません」

―3―

「そういえば、あなたのお母さんは有名な女優さんだったとか？」

警部は注がれたばかりの熱いコーヒーをすすりながら、少し興味のある顔で言った。

「何から何までご存知なんですね。なんなら、会ってみますか？きっと、幻滅されると思いますよ」

エリックはおどけた調子で言った。子供の頃から、こういうことには慣れていたから。

そして、彼らは現在の彼女に会った後もエリックが期待したようには幻滅したりはしないこともわかっていた。

「みんながあこがれる女性も、あなたにとっては怖いだけの母親ってわけですか」

どうやら、この警部はエリックが母親に頭が上がらないことまで聞き及んでいるらしい。

その情報源が誰だかは頭に浮かぶ、あの人しかなかった。

「ええ、何しろ、僕は母が女優だった頃を知らないので『世界の恋人』だとか、『天使以上に天使だった』とか言われても、ピンとこないというか、なんというか……」

「ちょっと、待ちたまえ！」

エリックがヒギンズ夫人の言葉を揶揄して伝えようとしている、そ

の最中に、警部が慌てたように言葉を挟んだ。
その顔には驚き以上の期待感が見て取れた。

「あなたのお母さんって、まさか、メ、メ、メ……」

エリックは動転して言えない警部に代わって、その名前を告げてやった。

「メリッサ・シェリルですよ。旧姓ですがね」

警部は驚愕の表情を浮かべたまま、しばらく茫然自失の状態でエリックを見つめていた。

「信じられない……」

「そりゃそうでしょうよ。僕は彼女に全然似てなんかいませんから」

「いや、そうじゃなく」

警部は心底がっかりしたように俯くと、彼女にこんな大きな子供がいたことがショックだったんだと告げた。
こういう時、エリックは常に自分の存在が決して望まれたわけではなく、邪魔にしか思われなかったのではないかという思いに囚われる。
だから、決まって皮肉なことしか言えなかった。

「過去の栄光ですよ。今はただのおばさんです」

「おばさん！　君、それは彼女に対して失礼というものだよ！」

警部は憤慨したように言った。
しかし、エリックも譲らなかった。
「現実に目を背けないで彼女という人を見て御覧なさい。絶対、警部だって、僕が言ったことが正しいと思いますよ」
警部とエリックの意見は、どこまでも平行線を辿った。どちらも頑固さでは負けなかった。
「言っておきますが、母は警察とか、権力とかって言う、大きな組織に縛られた人間が一番嫌いなんです」
エリックは言った。
「今回、僕が不当に逮捕されたことを非常に怒っていました。警察が未だに僕を犯人と疑っていると知ったら、それこそあの人は警察の人間を許さないでしょうね」
警部はあきらかに顔色を変えた。
「き、きみは私を脅す気かい？」
「脅すなんて……。僕はただあの人の性格上から、そう言ったまでです」
意地が悪いのはわかっていた。しかし、この際、人のよい警部を利用するよい口実になった。
「母に会いたいですか？」

これは警部にとって殺し文句になった。
警部は逡巡したのち、目の前にチラつかせられたニンジンには勝てないというように頭を下げた。

「では、行きましょう」と腰を上げたエリックに警部は「ちょっと待った」と手をかけた。理由を聞くと心の準備が必要だとかなんとか、なんとも女々しい言い訳を述べ始めた。

「幻滅するのが怖いんでしょう？」

エリックがわざと揶揄すると、警部はとんでもないと眉を寄せた。

「絶対、幻滅などしないと誓うよ。ただ、未だに信じられないんだよ。その、きみのお母さんがあの、メリッサ・シェリルだなんて……」

はぁー、と大きく、エリックはため息をついた。

「どうでもいいですが、そんなことを母の前で決して言わない方がいいですよ。あの人はもう完全に過去のことなんか忘れている。自分はただのおばさんだと思っているんです。安っぽい夢なんて持たないほうがあなたのためだ」

警部は怖い顔でエリックを睨んでいたが、エリックは知らん振りをした。

「現実を一番受け入れているのはあの人なんです。あの人にとって、大切なものは一つしかない。それはずっとかわらないみたいですけどね……」

知らず知らず、自嘲めいたセリフがエリックの口からこぼれていた。

―4―

結局、警部はついて来た。途中で花屋へ寄って大きな花束を買ったのも、エリックは見ないふりをしていた。
そして、家の前にやってきた時、彼は緊張した面持ちのその男に向かって言った。

「こうしましょう」

警部が訝しげな顔でエリックを見た。

「あなたは僕の新しい編集者になってもらいます」

それは提案というよりも命令のようなものだった。

「言ったでしょう？　母は権力を笠に着た人間が大嫌いなんです」

「それは聞いたけれど……」

エリックはニコッと頷くと、「じゃあ、この花束もへんですから」と豪華としか言いようのない花束を取り上げた。

「ちょ、ちょっと、それは……」

仕事をしているときはもっと二枚目なのに、これではまるで鼻の下を伸ばした、ただの中年のオヤジとかわりないとエリックは情けなくなった。

「そんなに母が好きなんですか？」

ストレートに聞かれて、あろうことか警部は顔を赤くした。なんだか、警部の夢を壊すのが本当に気の毒に思えたほどだ。

「いいですか、あなたは僕の編集者なんですよ。間違っても警察の人間だなんてことをバラさないで下さいね」

警部はまだ納得のいかない顔をしていたが、エリックがしぶしぶ花束を返すと少年のように嬉しそうな顔になった。

「それから、この借りはあとできっちり返して頂きますからね」

「え？」

警部が問いただそうとする前にすでにエリックは玄関のベルを鳴らしていた。

「エリック、今までどこに行っていたの！」

ベルの音を聞きつけて、母親がドアの向こうから勢いで現れた。

「ヒギンズ夫人があなたはもうずっと前に帰ったって……。あら、お客様なの？」

母親はエリックの隣の紳士に目をやると、首を傾げた。

「ああ、この人は新しい編集者の人ですよ。名前はえっと、あれ、なんだっけ……」

エリックは、そう言えばまだ彼の名前を知らなかったことに気付い

た。

「えっと、名前は……」

「ハ、ハワード・キャンベルです」

直立不動の状態のまま、警部が真っ赤な顔で答えた。

「キャンベルだって?!」

エリックの驚きようといったら、なかった。

「じゃあ、あなたはエレン刑事の……」

しかし、そう言ったエリックの声は警部の耳にはまったく届いてはいなかった。彼は、目の前に立つ母親の姿をまるで天使かマリア像でも崇めるかのように崇拝の眼差しで見つめていた。
母親はそんな警部を同じように見返していた。(彼女は極度に目が悪かった)

「まあ、こんなところではなんですから、お入り下さいな」

エリックが毎日見慣れた笑顔も、警部には慈愛に満ちた天使の微笑みに見えるらしい。警部は光に導かれるように母親のあとを夢遊病者のようについて行った。
エリックが少し遅れて家に入ると、警部はちゃっかりテーブルの前に座り、スコーンと紅茶を振舞われていた。

「お、おいしい! こんなおいしいスコーンを食べたのは生まれて初めてです!」

どこにでもあるスコーンじゃないかとエリックは思った。

「まぁ、ハワードさん。ジャムを付けて召し上がってくださいな」

母親は自分のスコーンを褒められてまんざらではなさそうだった。

「クリームチーズと木苺のジャムですわ。紅茶とよく合いますの」

警部は母親に勧められるままに、咀嚼するのも忘れたようにいくつもスコーンを口の中に放り込んでいた。

「け、いや、ハワードさん。お話があるんですが……」

エリックは本題に入るタイミングをずっと伺っていた。しかし……。

「ハワードさん。エリックは本当にものになるんでしょうか?」

唐突な母親の問いかけに、警部は食べかけのスコーンをのどに詰まらせ、咳き込んだ。

―5―

「ハワードさん！　さぁ、早く打ち合わせをしてしまいましょう！」

慌てたのはエリックも同じだった。

彼女は手加減というものを知らない。ましてや、エリックの将来を憂いている母とすれば、なんとしてもそこが知りたいところだろう。

今の警部は借りてきたネコも同然で、まったく頼りがなかった。

警部の身分がばれたところで別にどうでもよかったが、下手な細工をしたことで母の怒りがエリックに向かうだろうことは間違いなかった。

エリックは警部の腕を？むと、椅子から無理やり立たせ、自室へと引きずるように部屋を出た。

そして、思い出したように再びドアを開けると、

「そのテーブルの下に置いてある花束、僕がもらったんだけど母さんにあげるよ」

と、そう言って、またバタンとドアを閉めた。

母親はおもちゃを急に取り上げられた子供のように不満げな顔を一瞬したが、ふーっと一息ため息をついて、またすぐに元の彼女に戻った。

強引に女神から引き離された形で連れて来られた警部はとても面白くなさそうな顔で、口に頬張っていた最後のスコーンを飲み込んだ。

「君は少し強引なところがあるね。それに、自分勝手だし」

エリックはフンと鼻を鳴らした。

「何を言っているんですか。警部こそ、優柔不断の見本みたいじゃないですか」

「私のどこが優柔不断なんだい？　花束だって、せっかく私が直接お渡ししようと思っていたのに……」

警部は機嫌悪そうに口を歪めた。

「いいじゃないですか。結果的に母親に渡ったんですから。あの人は極度な近眼なんで、どうせ警部が持っていたのが花束だなんて気付いてもいなかったと思いますよ」

「まさか！？」

「いや、本当です。あの人は何度間違えてうちのネコを踏んづけようとしたかわからないんですから。しかも絨毯と間違えてですよ？　あんなに可愛がっているのに……」

エリックはお手上げのポーズをして見せた。

「信じられない……」

「理想の崩壊なんてそんなものですよ。驚くほどあっけない……」

しかし、その声にはさっきほどの軽口は含まれていなかった。むしろ、何かを懐古するかのような寂しさが滲んでいた。

「警部、ミシェルに会わせてもらえませんか？」

満を持してエリックが言った。

しかし、警部は難しい顔で首を横に振るだけだった。

「どうして！」

詰め寄るエリックに、警部は言った。

「彼は確かに自首してきましたが、それ以来ずっと黙秘を貫いているんですよ。まったく、一筋縄ではいかないタイプの人間です」

「あなたとはまた違った、ね」と間に言葉を挟んだ。

「ミシェル氏が誰を庇っているのかはわかりません。行方がわからないルイーズ嬢か、それとも親友のあなたなのか」

「ミシェルは僕が本当にパメラさんを殺したと思っているんですか？」

「さぁ、そういったことも何もおっしゃらないので。あるいは……」

警部は言葉を切ると、深く考えるように眉を寄せた。

「本当に彼が犯人だということもありえますし……」

「ミシェルは犯人なんかじゃない！」

エリックは声を荒げて反論した。警部はとっさに口に指を当て、エリックの大声をたしなめた。

「でも、本当に彼じゃないんです」

「どうしてそんなことがわかるんです？」

「それは……」

エリックにもわかっていた。ただ、信じているからという理由だけで彼を無実には出来ないことを。

警部は「失礼」と言うと、上着からタバコのケースを取り出した。

「ヘビースモーカーなもので。時々、禁断症状に襲われるんですよ」

警部が苦笑いをしながら、タバコに火を付けた。

「あ、灰皿が要りますね。ちょっと待ってください」

エリックは灰皿の代わりになるようなものを探し始めて、はたと動きを止めた。

「そういえば」

「えっ？」

「ルイーズさんも相当、タバコを吸っていました」

「若い女性がタバコを吸うのは珍しくないですが、あまり感心しませんね」

「ええ、僕もタバコを吸う女性は苦手です。ただ……」

「ただ？」

「彼女がタバコを吸う理由は単に嗜好からだけじゃなく、他にあったみたいで」

「ほほう、その理由とは？」

エリックは少しここで言いよどんだ。

「パメラさんなんです」

―6―

警部の目がだんだん真剣みを帯びてきた。

「亡くなったパメラさんとルイーズ嬢は諍いが絶えなかったとか」

「ええ。僕も直接現場を見たわけではないんですが、かなり険悪な状態だったのは確かですね。少なくとも、パメラさんのルイーズさんへの敵意は異常を覚えるほどでした」

「憎しみに置き換えられるほどの？」

「ええ」

エリックは水晶盗難事件のことや、自分が感じたことなどを簡単に警部に話した。

警部は腕組みをしながら聞いていたが、途中から手帳を取り出し、さかんに何かを書き込んでいた。

そして、言った。

「もし、その話が事実だとすると、ルイーズ嬢は相当キツかったでしょうな。間に入ったミシェルさんも……」

エリックは頷きながら言った。

「ミシェルは本当に参っていました」

警部も深く頷いた。

「お聞きしたいのですが、あなたから見てパメラさんは何の意味もなくそういうことをするタイプの女性に見えましたか？　つまり、気に入らないという理由だけで相手を罠に陥れるような……」

エリックはすぐには返事をすることが出来なかった。

警部は辛抱強くエリックの言葉を待っていた。

「僕は最初、パメラさんがそんな人だとは信じられませんでした。さっきのタバコの件もそうですが、とにかく彼女はルイーズさんを故意に悪く思いたがっているように感じました」

警部は黙って続きを促した。

「パメラさんはルイーズさんの存在自体を憎んでいたと思います」

「とてもデリケートな問題ですね」

そうなのだ。それは、エリックも思っていたことだった。これ以上デリケートな問題はないくらいと……。

「ミシェルによると、パメラさんはすべてにおいてルイーズさんに難癖をつけているようでした」

「ルイーズさんはそれくらいひどい女性だったと？」

「ひどいというか……。ミシェルにはそぐわないように思いました。本当のところ、初めてミシェルにルイーズさんを紹介された時、僕は想像と現実のギャップに驚いたほどでしたから」

警部はしばらく、なにやら考え込んでいるようだった。

「ルイーズさんのことですが、出会われたのは一度だけでしたか？」

「ええ。後にも先にも初めてミシェルの家へ行った時に会ったきりです」

ふむ、と警部はさらに難しい顔になった。

「ルイーズさんはまだ行方不明のままなんですか？」

警部は難しそうな顔のまま頷いた。

エリックはさっき、エレンたち刑事が話していたことについて、思い切ってたずねてみた。

「警部、ルイーズさんがミシェルを騙していたというのは本当ですか？　ネイルショップに勤めていたことも、住んでいた場所さえすべて嘘だったなんて……」

警部は「どうしてそれを？」と驚いたようにたずねた。

エリックはエレンたちが喫茶店で話していたのを聞いてしまったことを正直に告げた。

警部は苦々しそうに唇を歪めると、あからさまに舌打ちをした。

「捜査内容を公の場でぺらぺらと喋るなど言語道断だ！　部下がいかんのです。チヤホヤしすぎるものだから……。エレンにはもっとリードするような大人の男がついていてやらないと……！」

エリックは、ぶつぶつと、しまいにはヒートアップしかねない警部の状態に呆れるように咳払いをすると話を本題に戻した。

「ミシェルは心から彼女を愛しているようでした。パメラさんの冷たい仕打ちから、一生懸命彼女をかばっていたんです。なのに……」

「わからないのですが……」

けれど、警部はエリックが熱を込めて訴えれば訴えるほど、不可解さを隠し切れないと言った表情をした。

「あなたのお話を聞いていると、ミシェルさんはとても真面目で、誠実な人だという印象を受ける。実際、取調べに立ち会った時も、とても犯罪を犯すような悪い人間には見えませんでした」

「そうなんです、警部！」

エリックはその通りだと強く頷いた。

―7―

「かといって、簡単に騙されるような人間でもないと思うんですよ。どちらかと言えば、慎重に物事を見抜くタイプなのではないですか？」

エリックは正直、警部の洞察力の鋭さに尊敬の念を抱いたほどだった。

「そういう彼がですよ。なぜ、ルイーズさんのようなタイプの違う人と婚約をしたんでしょう？」

私はルイーズという女性が誠実な人間だとは思えないのです、と警部は首を傾げた。しかし、エリックもそれには答えることが出来なかった。

「僕も最初は警部と同じようなことを考えました。ミシェルの相手はもっと清楚で可憐な人のほうが似合っているって」

現に大学時代、彼が好きだった女性は物静かでおとなしいタイプの女性だったとエリックは記憶している。ただ、バイトに明け暮れて、誰かと付き合う時間も余裕もなかったけれど……。

「僕もどうしても納得がいかず、ミシェル本人に自分の考えを打ち明けました」

ミシェルが気分を害するかもしれないと承知でとエリックは言った。

「警部もルイーズさん本人に会ってみればわかりますよ。釈然とし

ないんです。彼女はまさにミシェルが敬遠するタイプの女性だったのですから」

似合っていない派手なメイクも、毒々しいまでに赤く塗られた長い爪も、きつ過ぎるタバコの匂いも。

それでも、それがパメラへの彼女なりの抵抗手段だったのだとミシェルに聞けば、頷かずにはいられなかった。

「だけど、あのタバコの匂いだけは我慢できませんでしたね」

警部は二本目のタバコに火をつけようとした手を一瞬止め、気まずそうにまた、シガレットケースに戻した。

「彼女は僕が見ている間だけでもずっと吸っていました。おかげで頭の先から爪の先まで、タバコの匂いが取れませんでしたよ」

「彼女はヘビースモーカーだったんでしょうかね?」

「さぁ……。でもおいしそうには全く見えませんでしたね」

エリックは珍しく苦笑した。

そして、これは言うべきかどうしようか、しばらく逡巡した末に表情を厳しくして言った。

「パメラさんがルイーズさんに嫌な匂いがすると言ったそうです」

「どんな匂いがしたんでしょうね?」

エリックは首を横に振ってわからないと言った。

「ミシェルが言うには、彼女は仕事柄、化粧品やマニキュアを扱うから、その匂いを嫌ったパメラさんが嫌味を言ったんではないかと……」

「だから、タバコを四六時中吸っていたと？　自分の健康を害するかもしれないのに？」

エリックも怪訝な表情になった。警部はもっと納得のいかない顔で手帳を睨んでいた。

「わからないな」

警部は頭に手をやって、目を閉じた。

「エリックさん」

そして、とても真面目な顔で警部は言った。

「彼女はネイルショップでは働いてなどいなかったのです」

「ええ……」

「それがどういう意味かおわかりですね」

エリックはそう言われても、とっさに答えることなど出来なかった。

「で、でも、ミシェルもルイーズさんに騙されてたわけでしょう？」

しかし、警部は肯定するどころか、首を横に振った。

「婚約者が、まして一緒に暮らしていた女性が、何の香りを身に纏っているかということくらい男にはわかるものです。たとえ、どんな朴念仁であろうと、それが化粧の匂いか、ガソリンの匂いか、わからないはずがない」

「どういうことです？」

警部はエリックの問いには答えずに、ちょっと失礼と言って部屋を出た。

エリックは足の震えを止めることが出来なかった。

どのくらいの時間が経っていただろう。

青褪めたエリックの耳に、警部の声が再び聞こえてきた。

「大丈夫ですか？」

いつの間にか、部屋に戻っていた警部が立ち尽くして動けないエリックを椅子に座らせた。

「エリックさん、ルイーズさんの所在がわかりました」

「えっ？　本当ですか？！」

戦慄なのか、驚愕なのか、わからない激しい感情がエリックを襲った。

「たった今、確認が取れたそうです」

安堵したいのに心臓はどんどん早鐘を打ってゆく。

「それで、彼女は今どこに……？」

―8―

「スコットランドヤードの遺体安置所です」

「遺体……安置所」

エリックの思考が崩壊しかけていた。

「彼女は……ルイーズさんは亡くなっていたんですか？」

「ええ……。最初は身元不明の遺体として処理されていましたが、彼が所持していたものの中に非常に興味深いものがありましてね」

「身元不明って、どういうことです？」

エリックは背筋を這い上がってくる悪寒を止めることが出来なかった。

「今朝、イーストボーンのビーチーヘッドに死体が打ちあがったんです。死後一日から二日くらいの若い男性の遺体です。まだ検視の結果が出ていないのでなんとも言えませんが、我々は事件と自殺の両面で捜査を始めようとしていたところでした」

「ちょっと、待って下さい。警部、それとルイーズさんとどういう関係があるんですか。ビーチーヘッドの遺体は男性だったんですよね？」

「ええ、そうです。顔は、あの高さから落ちたわけですから、判別するのはかなり困難かと思いますが、確かに男です」

「じゃあ、どうして……？」

「エリックさん、彼がそのルイーズ本人だったからです」

エリックは尋常ではない笑い方をした。

「警部、下手な冗談はやめてください！　現に僕は彼女に会っているんですよ。彼女は確かに女性だった」

「誓えますか？　あなたは彼女と何か喋りましたか？　あなたは、ルイーズが女性だと言う先入観からしか見ていない。しかし、心のどこかで常に嫌悪していましたね。それは彼が本当の女性ではなかったからなんでしょう？」

見ないようにしていたわけではない。ただ、偏見と言う言葉はくそくらえだった。

人はどのように生きることも許される。

まして、それがミシェルの選んだ人ならば多少のことには目をつぶれる筈だった。

「あなたはどうしてもミシェルさんに会ってそれを確かめたかった。思い違いだといいとあなたは思っていましたね？　密告電話が男と聞いて、あなたはもしや彼ではないかと思いませんでしたか？　だから、そんなにもミシェルさんに会いたがった」

エリックは何も反論できなかった。そして、うなだれるままにつぶやくような声で言った。

「僕はミシェルが幸せならそれでよかったんです。たとえ、彼女に

違和感を覚えても……」

「そして、あなたは彼らの幸福の邪魔をしようとしたパメラさんにむしろ悪意を覚えた」

「警部の言うとおりです。でも、僕はあの人を殺していない！」

「ええ、あなたじゃありません」

「ミシェルでもありません！」

しかし、それには警部は同意しなかった。

「ルイーズさんは殺されたんですか？」

「わかりません」

それは検視の結果を見て見ないとなんとも、と警部は言った。
イーストボーンのビーチーヘッドと言えば、白い石灰質の断崖絶壁が連なる、言わば自殺の名所でもあった。

「警部は、ルイーズさんが男だと言うことを知っていたんですか？」

「まさか！」

警部はとんでもないと首を横に振った。

「パメラさんが死亡した時に一緒に無くなっていたものがありましてね。紫水晶です。時価数億はくだらないという……」

「数億……！？」

気の遠くなるような金額だった。しかし、エリックはすぐに気を取り直して言った。

「でも、それは見つかったって……」

警部は言った。

「あなたのお話を伺うまでは確証が持てなかった。なぜ、イーストボーンの遺体があんな物を持っているのかつじつまがあわなかったんですよ」

エリックはますますわからないという顔をした。

「先ほど、あなたは紫水晶が盗難にあったとおっしゃいましたね」

「ええ。でも、それは出て来たと……」

「それは本当でしたか？」

パメラがルイーズの部屋で見つけたと言って見せてくれた。

でも、ミシェルは否定していたっけ。

盗難にあったのもパメラの狂言だったんじゃないかと疑っていたのをエリックは今さらのように思い出した。

「遺体の男性のズボンの裾に小袋が縫い付けてありましてね。その中には鍵が入っていました」

「カギ……？」

警部は頷いた。

「英国銀行の貸し金庫の鍵です」

エリックはもう何も信じられなかった。

「その中に紫水晶があったわけですか？　でも、それは誰かの違う水晶かもしれないでしょう？　だって、ミシェルは言ったんですよ。家が一軒買えるほどの金額だと」

警部は同情の眼差しでエリックを見た。

「パメラさんは財産管理をマネージャーのミシェルさんに一任していました。だから、彼がその水晶の価値を知らないわけはないんです」

「じゃあ、ミシェルは僕に嘘を言ったと言うんですか？　一体何のために？」

「それはあなたに負担をかけさせたくなかったからでしょう。あるいは、真実を告げるとまずいことがあったか。警察の介入を彼はかたくなに拒んでいたとおっしゃっていましたね」

「ちょっと、待って下さい。もっと、僕にわかるように話してくれませんか？　そもそも、どうして、イーストボーンの死体がルイーズさんなのかまだ聞かせてもらっていませんよ」

「それはですね、唯一、彼女の正体を知る人物に確認をとったからなんですよ」

エリックは大きく目を見開いた。

「ミシェルさんが彼女だと証言しました」

―9―

エリックはこれほどの衝撃を一度に受けたことはなかった。
自分が信じていたもの、そのすべてが崩壊していく音をただ聞いていた。
警部が心配そうにエリックを見守っていたその時、ドアを叩いて、母親が外から声をかけた。

「ハワードさん、エレノアさんという方からお電話ですけれど……」

「す、すみません！」

警部は母親の声を聞くと飛び上がるように部屋を出て行った。
エリックは椅子にもたれたまま天井を見ていた。
開けっ放しのドアの向こうから、警部の大きな声が聞こえてきたが、エリックにはもうどうでもよかった。
やがて、電話を終えた警部が戻ってきた。

「エリックさん、ミシェルさんがパメラさん殺しを認めたそうです」

エリックは警部の声が聞こえないかのように天井を見上げたままだった。

「ミシェルさんがあなたに会いたがっているそうです。一緒に来ていただけますか？」

エリックは静かに頷いた。
警部はその頬に光る涙を見た時、心の底から彼に同情した。

「さっき、エレンを呼びました。彼女がお連れするでしょう」

そう言うと、警部はエリックの肩をニ、三度しっかりと叩いた。

警部が去って、しばらくするとエレンの車が家の前に止まる音がした。。

エリックは母親にすぐ戻ると一言だけ告げると家を出た。

誰かに支えられなければ歩けるような状況じゃなかったが、気力だけで歩いた。

エレンは珍しく取り巻きを連れていなかった。

車が走り出し、エレンは時々、エリックの表情を伺うように視線を寄こした。危ないというほどではなかったが、エリックをイライラさせるには十分の行為だった。

「余所見運転はやめてくれないかな。僕も君のクルマであの世へ行くのだけはまっぴらだからね」

エレンは盛大な息を吐くと言った。

「私もあなたと心中なんてまっぴらだわ」

しばらく、気まずい沈黙が車の中を覆った。それでも、エリックにはその空気さえ修復する気も起こらなかった。

何に対するかわからないぶつけようのない怒りのようなものが、心の中を暗く渦巻いていた。

「親友が殺人犯になった気分はどう?」

エレンはそんなエリックにわざとのように意地の悪い言葉を投げか

けた。
普段のエリックならカッとなり、罵詈雑言を並べ立てただろうが、今日の彼は違っていた。
「君には一生味わえない気分だろうね」
しかし、エレンも動じなかった。
「私は同情なんてしないわ。全部自分が蒔いた種ですもの」
それは最初、ミシェルのことを言っているのかと思った。
「あなたは人の命を救えたかもしれないのに、それをしなかった。あなたが真実を語っていればルイーズさんは死ななくてよかったかも知れない」
その言葉はエリックをひどく傷つけた。
「どういうことです？」
エレンはまだわからないのと言いたげな瞳で前を強く見据えると言った。
「あなたはルイーズさんが男だと知っていながら黙っていた。もし、あなたがそのことについて一言でも触れていたら、彼を保護することは可能だった！」
彼女の口調に呼応するように車はぐんぐん、スピードを増していった。

「隠していた訳じゃない！　ただ、確証がなかったんだ……。一度会ったきりだったし……」

ハッ、と彼女は馬鹿にするように嗤った。

「確証がなかったですって？　あなたは彼の親友だったのでしょう？　なぜ、面と向かって尋ねなかったんです？君の恋人は男なのかと！」

「君！」

エリックの顔に血が上った。

「僕は君みたいにデリカシーのない人間じゃないんだ！」

「デリカシー、ね……。ま、確かに私はよく欠けているって言われるわ。でもね、何が大切で何がどうでもいいかって分別くらいはついているつもりよ。あなたは実際、逃げただけだったのよ、真実を受け入れることから」

―10―

エリックは唇を噛みしめた。そして、搾り出すように言った。

「君に何がわかるんだ！」

「わからないわ。ただ、人の命を軽んじるような人間は大嫌いなの」

「いつ、僕が軽んじたんだ！」

「あなたはそのつもりがなくても、結果的にそうなった。それで十分じゃなくて！」

エリックはここで初めてエレンが激しく怒っていることを知った。それと同時に彼女がとてつもなく正しいことを言っていることに気付いた。

「もし、僕があの時本当のことを話していたら、ルイーズ、いや彼を救えたかもしれないんだね」

悲しいけれど、それは真実だった。そして、もうエリックには懺悔することしか出来なかった。

「ごめん……。僕が間違っていた。許して欲しい……」

エレンは少し驚いたように視線を寄こした。

「私にではなく、ルイーズさんに謝ってください」

彼女の低い声が牧師の言葉のようにエリックには届いた。
それから警察に着くまで、二人は一言も話さなかった。しかし、その沈黙は最初のように決して冷たいものではなかった。

警察に到着すると、エレンはどこかに去り、かわりに警部が現れた。そして、労わるような表情でエリックを談話室へといざなった。

「こういうことは通常行われないものなんですが、特別ということで……。そのかわり、お二人だけと言うわけにもいきませんので私が同席します」

そのことはミシェルも了承していると告げながら、警部はゆっくりドアを開けた。
エリックは緊張した面持ちで、すでにテーブルに着いている親友を見た。
彼は驚くほど白く、紙のように細くなっていた。

「エリック」

顔を上げてエリックを見とめた彼は、儚げな面立ちを少し綻ばせた。言葉がすぐには出てこなかった。代わりに涙が流れた。
こんなところをエレンに見られたらまた何を言われるかわからないと思うと、ようやくそれは止まった。

「ミシェル、僕はまだ信じられないよ。君がパメラさんを殺したなんて……」

ミシェルは悲しげな笑みを口元に浮かべると言った。

「ずっと殺したいと思っていたよ……」

ミシェルの視線はエリックを通り越して、過去を見ているようだった。

「ずっと、とは、いつからですか？」

警部が静かな声で尋ねた。

「もう、記憶にないくらい前からと言った方がいいでしょうか」

ミシェルはとても疲れたように首を垂れた。

「黙秘を貫いて来られた貴方がお姉さん殺しを自供されたのは、やはりルイーズさんのことがあったからですか？」

「彼女は関係ありません」

ミシェルはきっぱりと言った。

「姉を殺したのは僕です。僕一人の犯行です」

「ルイーズさんは全く関係がないとおっしゃるんですね」

「ええ」

警部は大きく息を吐いた。

「じゃあ、なぜ、彼女は殺されたんでしょうね？」

「殺された？　自殺じゃなかったんですか？」

エリックがミシェルよりも先に尋ねた。

―11―

ミシェルは無言で驚愕の色を浮かべていた。

「鑑識の結果が出ましてね。彼の体内からコカインの反応が出ました」

ミシェルの顔がたちまち蒼白になった。

「コカ……イン」

「相当の量が検出されたんですよ。それこそ死に至るほどのね」

「なぜ、ルイーズさんが……」

エリックは口を挟んだ。しかし、警部はかまわずに続けた。

「ミシェルさん。ルイーズ、いえ、シドニー・ラッセンはコカインの常習者でしたか？」

警部が裁判官のような強い視線をミシェルに向けた。

「いえ」

ミシェルは首を振りながら言った。

「本当に？」

「はい」

エリックは警部の質問が詰問調に変わってゆくのを感じ、わけのわからない不安に襲われた。

「では、パメラさんがコカインを常用していたことはご存知でしたね」

ミシェルは唇を噛みしめ、視線を逸らした。

「ミシェル！　本当なのかい！」

ミシェルはエリックに視線を合わせようとはしなかった。エリックはたまらなくなって、椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がるとミシェルに詰め寄った。

「ミシェル！　何とか言ってくれないか！」

ミシェルは困惑と苦渋の顔で俯いていた。

「エリックさん、落ち着いて。あなたがそう興奮しては、ミシェルさんも話せないでしょう？」

警部がとりなすように二人の肩に手を置いた。

エリックはやりきれなさを隠しきれない表情のまま椅子に座った。

「ミシェルさん。実は、エリックさんを名指しで犯人だと言う密告電話がありましてね。彼には今も容疑者として尾行が付けられているんですよ」

「えっ？　なんですって？」

「ご存知ありませんでしたか？」

ミシェルはとんでもないと首を横に振った。

「誰がそんなことを……」

「我々は最初、貴方なのではないかと疑っていたんですがね」

「僕が？　どうして？」

警部はおやという顔をしてみせると「それはおかしいですね」とあからさまに非難した。

「貴方は一度はエリックさんに罪をかぶせようとした。けれど良心の呵責に耐え切れず、自首をした。我々はそう見ているんですがね」

「違う！」

ミシェルは立ち上がって、抗議した。

「密告電話などしていません！」

「では、どうして、すぐに自首をしなかったんですか？　二日もたってから、まるで計算でもしたように貴方は警察にやってきた。それも初めからの計画だったんですか？」

「……」

ミシェルの眉間の皺が深くなった。

「シドニー・ラッセンの逃げる時間稼ぎが必要だったわけですね。そして、彼はうまく逃げおおせたはずだった」

ミシェルは降参したように、言った。

「ええ。彼は今頃、国外に逃亡しているはずでした」

「貴方を置いて？」

「最初から、そういう約束でしたから」

エリックはまったく二人の会話についていけず、イライラを隠せなくなっていた。

―12―

「ちょっと待って下さい。僕にもわかるように説明してもらえませんか。そもそもシドニー・ラッセンって誰なんです？　ルイーズさんがその人だって言うんですか？」

警部は混乱しかかっているエリックに気の毒そうな視線を送った。

「ルイーズと言う女性は初めから存在しなかったのです。ミシェルさんが彼と共謀して作り上げた、幻の女性だったんですよ」

エリックの目が信じられないと言うように警部とミシェルの間を彷徨った。

「なぜ？　でも、君は彼女と結婚するって……。そんな……。嘘だろう、ミシェル？」

エリックはすがるような目でミシェルを見た。しかし、ミシェルの口から出て来たのは、否定の言葉ではなく謝罪の言葉だった。

「エリック、すまない。僕は君を騙していたんだ」

「いつから？　まさか、図書館で眠りこけてる君を見たのも偶然じゃなかったって言うのかい？」

ミシェルはゆるゆると首を横に振りながら、か細い声で言った。

「あの日、僕は失意のどん底に居たんだ。ある人を失ってね。その人は僕にとって唯一、光のような、救いのような人だった。命より

も大切な人だったよ」

ミシェルはまるでその人の幻を追うように遠い目をしていた。

「アリシア・ヘイワーズさん、ですね」

警部はいつ調べたのか、まるで手品の謎を解くようにその名前を告げた。

「ええ、そうです。警部さんは何もかもご存知なんですね」

「いや、知らないこともありますよ。特に、人の心は計りかねますね」

「人の心……ですか」

ミシェルはしばらくその言葉の意味を噛みしめているかのように口を噤んだ。そして、掠れた声で言った。

「人の心なんて、長いこと、ないものと思っていました……」

その声はまるで他人の声のようだとエリックは思った。目の前にいる友が、突然、見知らぬ人間のように彼には映った。

「エリックさん？　大丈夫ですか？」

警部がエリックを気遣うように言った。その目はこれから、もっと残酷な真実が待っていることを物語っていた。

「あなたには聞く権利があると思ったのですが、酷だったかもしれ

ませんね」

警部は今からでも退出してはどうかと聞いてきた。
しかし、エリックは大きく首を横に振った。
ミシェルは少し辛そうに、一瞬顔を歪めた。それでも、エリックは出て行こうとはしなかった。

ミシェルの声が震えるように真実を話し始めたのは、それから少し後のことだった。

ループ　―1―

「いつか終わると思っていました。この苦しみの輪廻から、いつかは抜け出せると……」

それほど、パメラの支配は重いものだったとミシェルは目を閉じた。

「僕も姉も肉親には恵まれなかった。家族の愛情を人一倍求めていたと言う点では同じでした」

パメラは父を、ミシェルは母を心の全てで憎んでいた。それは言葉に出来ないくらい苦しい日々だった。
その苦しい日々から開放されるためには、お互いに新しい家族が必要だった。
今度こそ、心穏やかに暮らせる温かい家庭が……。

「姉は僕が知っている限り、二度結婚をしました。でも、どちらも長くは続かず、不幸な結果に終わりました」

「不幸な結果とは？」

警部が興味深そうに口を挟んだ。

「初めの相手は交通事故でした。そして、その次の相手は病気で亡くなったんです」

「交通事故と病死ですか……」

警部は少し考えあぐね、そして手帳に文字を書き込んだ。

「パメラさんという人は恋多き女性だったのですか？」

ミシェルはその質問にそっけないとさえ思えるような言葉で返した。

「さぁ。僕は彼女の恋愛関係に興味はなかったので、よくわかりません。ただ、いろんな人間が出入りしていたのは事実です。その、すべての男たちと関わりを持っていたとは思えませんが、親しい素振りは見せていたかもしれません」

「二人の結婚相手に関してはどうです？　貴方のよく知る人物達ですか？」

「いいえ。ただ、彼らは彼女にとっては特別な人たちだったと思います」

「簡単に言えば、パトロンのような？」

「そう、ですね。お金も、そう、他の人たちよりは持っていました」

警部は質問を続けた。

「貴方はお姉さんを軽蔑しましたか？　お金のための結婚とわかって……」

「いえ。彼女が幸せならばそれでいいと思っていましたから」

「そして、貴方もご自分の幸せを考えられると」

「ええ」

ミシェルは短い言葉で頷いた。

「アリシアさんに出会われたのはいつ頃ですか？」

「姉が二度目の結婚をしたあとです」

ミシェルは遠い幻に話しかけるように言った。

「アリシアは近くのレストランで働いていました。青い目の、とても優しい女性でした」

「彼女とは結婚の約束を？」

「僕はそのつもりでした。彼女となら、暖かい家庭が築けると信じていたので。でも、彼女は……」

「迷っていた？」

ミシェルは少し寂しそうに頷いた。

「彼女は孤児でした。でも、それを感じさせないくらいとても明るかった。時々、僕も彼女の育った孤児院に行きましたが、彼女はみんなから本当の姉のように慕われて、幸せそうだった」

アリシアは心根の優しい、慈愛に満ちた女性だったのだろう。エリックはミシェルが彼女に惹かれていくのがわかる気がした。

「僕は彼女を結婚相手として、姉に紹介しました。きっと祝福してくれると思っていました」

「でも、そうではなかったと？」

「ええ。姉はアリシアを受け付けようともしませんでした。そればかりか、お金目当てだとか、他にも酷い言葉を彼女に向かって投げつけました」

エリックにはその情景が目に浮かぶようだった。

「自分のことを言われたならまだ我慢も出来ます。でも、彼女自身を傷つけられて、僕はどうしても耐えられませんでした。それで、何度も言い争いになって……。それでも姉の態度は変わることはありませんでした。それどころか、興信所を使ってアリシアの生い立ちや素行まで調べていることがわかって……」

ミシェルは過去を思い出すのも辛そうな顔で言った。

「僕は彼女を守り切ることで必死だった。だから、アリシアの気持ちに気付いてやれなかった」

「アリシアさんはどうされたんですか？」

「辛かったんだと思います。ずっと。僕が姉と諍いをし続けていることを悲しんでいました。自分のせいで姉弟の仲が壊れるのが、彼女にはたまらなかったんだと思います」

ミシェルはそこで目を閉じた。

「ある日、突然、姿を消しました。行方がわからなくなったんです。彼女が勤めていたレストランへも行ってみましたがすでに辞めたあ

とで……。」

「孤児院へは行ってみましたか？」

「ええ。彼女の唯一のホームでしたから」

「でも、そこにもいらっしゃらなかったんですね？」

ミシェルは言った。

「いませんでした。僕はそこで彼女が立ち寄りそうなところがないか尋ねました。彼女を見つけることで必死だったんです」

わかります、と警部は頷いた。

「彼女と親しいシスターが、アリシアが幼い頃から弟同然に可愛がっていた少年がいることを教えてくれました。もしかすると、彼女は彼を訪ねているかもしれないと」

「その少年というのが、シドニー・ラッセンだったのですね？」

ミシェルは黙って頷いた。

「彼は少年ではなく、既に青年でした。僕は彼が働いてるというガソリンスタンドを訪ね、アリシアの行方を知らないか、知っていたら、お願いだから教えてくれないかと頼みました。けれど、彼も寝耳に水の様子で彼女にはもう数年会っていないことを告げられました」

「アリシアさんは自発的にいなくなったんですか？」

「僕も最初はそう思っていました。でも、あまりにも不自然なことが多いことに気がつくようになって……。僕は思い切って、姉に尋ねて見たんです」

「そうしたら？」

「姉は当然のように知らないと言いました」

「でも、あなたは納得されなかったんですね？」

警部はミシェルの心がわかるかのように言った。

「へんだったんです、姉の様子が。アリシアがいなくなってから、ずっと」

「どんな風にへんだったんです？」

「機嫌がよくなったというか、とてもやさしくなりました」

―2―

「それはアリシアさんがいらしゃらなくなって、落ち込んでいる貴方を慰めようと思ってではなかったのですか？」

ミシェルは首を横に振りながら、怒った様に言った。

「違います。姉はそんな優しい人じゃありませんでした。彼女は笑っていました。アリシアのことなんてすぐに忘れるわと。女はいくらでもいるんだからと」

エリックは思わず顔をしかめた。でも、それはいかにも彼女の言いそうな言葉ではあった。

「アリシアさんの失踪を警察には届けなかったのですか？」

警部が聞いた。

「届けましたよ！　でも、本人の自発的な家出だろうと相手にもされませんでした」

それには、警部も苦い顔になった。

「僕はシドニーと一緒に、アリシアの行方を探しました。でも、彼女は本当に手がかり一つ残さず、忽然と消えてしまったんです」

「彼女の住んでいたアパートはどうなっていましたか？」

「そのままでした。ただ、整頓はされていました」

「引っ越した様子はなかったのですね」

「ありませんでした。家具も衣類もそのままでしたから」

「どちらかというと、ちょっと旅行に行く時のような？」

「そうですね。でも、スーツケースはクローゼットの奥に仕舞いこんでありました」

「冷蔵庫の中はどうでしたか？」

「ふつうです。卵と牛乳と、あと野菜類が入っていました」

警部はうーんと唸った。

「長期に出かけるはずなら、生類はまず処分するでしょう……」

そして首をひねりながら言った。

「辞表みたいなものは出ていたんですよね？」

「辞表かどうかはわかりませんが、辞めると言う連絡は届いていたそうです。あんまり急だったので、オーナーも困惑されていたようでした」

警部は念のためにその店の名前を聞き、手帳に書きとめた。

「僕は最初から姉のことを疑っていました。彼女の性格から言って、そうすることが全く不自然には思えなかったので」

重い意味を含んだ言葉にエリックは緊張感を覚えた。

「お姉さんがアリシアさんの失踪に関与していると思われたわけですね？」

「漠然とした疑惑が段々、本当に思えてきて、目の前が真っ暗になりました」

ミシェルは片手で顔を覆った。

「でも、確証はなかった？」

ミシェルは頷きながら答えた。

「でも、僕らはそれを見つける必要がありました。そして……」

「見つけたんですね？」

ミシェルの首がガクッと落ちた。

「姉はアリシアがいなくなってから、気が緩んでいたのか、自分の部屋の鍵を掛けないで出て行くことがよくありました。僕はシドニーに見張りを頼んで、彼女の部屋をさがしました。そして、それは、あっけないほど簡単に見つかりました」

「何が出て来たんです？」

警部は身を乗り出して尋ねた。

「指輪です。彼女に渡した婚約指輪が姉の宝石箱の中から出て来たんです」

うっ、という言葉にならないような声がエリックの口から思わず漏れた。

「その指輪はいま、どこに？」

「僕の部屋に。探してもらえればわかると思います」

手配しましょう、と警部は言うと席を立った。

彼はドアを出たところで部下にニ、三、指図するとまたすぐに戻ってきた。

「それがアリシアさんの指輪だと証明できますか？」

「ええ。指輪の内側に彼女と僕のイニシャルが刻んでありますから、確かです」

「あなたはそれを発見し、どうしましたか？」

「怒りました。いや、そんな生易しい感情じゃなかったな」

ミシェルは苦笑いをするように言った。

「あれほど、人に対して憎しみを募らせたことはありませんでした。心の底から、姉への嫌悪と憎悪が膨れ上がってくるのを止めることはできませんでした」

当時を思い出したのか、ミシェルの顔がだんだん怒りに染まってゆくのがわかった。

「僕は姉にアリシアの指輪を突きつけて、彼女の行方を問い詰めました。それでも、姉は全く知らないと言い張った」

「そこで、業を煮やしたあなたはシドニーさんを新しい恋人に見立てて、パメラさんの動向を探ろうとしたというわけですね」

「ムリがあるのはわかっていました。でも、もし姉がアリシアのことで何か隠しているのだとしたら、こうするより方法はありませんでした」

「でも、よくパメラさんを騙せましたね?」

「姉は極度の近眼だったので、わりと簡単でした。それに、姉は女嫌いでしたから、ルイーズに扮した彼にいたずらに近づかないのもわかっていましたし」

「シドニーさんは男子にしては小柄で痩せ型だったので、それもうまく功を奏せたというわけですね?」

「ええ」

「おかげで、エリックさんもすっかり騙せたわけだ」

エリックは苦笑した。言い返す言葉がなかった。

女装だと聞かされてもまだ半信半疑だったほど、彼の演技には騙された。

「しかし、よく、パメラさんが貴方が新しい恋人と付き合うことに疑問を抱きませんでしたね？」

ミシェルはためらわずに答えた。

「姉は僕が自分から離れたがっていることを知っていましたから」

―3―

警部はそこで一旦、質問を中断した。

「少し、喉が乾きませんか？」

彼はそう言って、戸口に控えていた巡査を呼んだ。そして二言、三言、小声で話すと「ちょっと失礼します」と言って出て行った。

ミシェルと二人、取り残されて、エリックは正直戸惑っていた。混乱していたと言ったほうがいいだろう。

「エリック」

そんな彼の心を読み当てたかのように、ミシェルが声を掛けた。

「君には大変申し訳ないことをしたと思っているよ」

言いたいことがヤマほどあるはずなのに、なぜかエリックの頭の中は真っ白だった。言葉も無く、ただ黙ったままのエリックに、たまらなくなったようにミシェルが言った。

「エリック、なにか言ってくれないか！　僕をなじるようなどんな言葉でもいいから」

ミシェルの瞳は痛々しいまでに彼に許しを請うていた。しかし、その瞳をまともに見ることがエリックには出来なかった。

彼は他人にも正直なかわりに、自分に対しても同じくらい正直だった。

だから、いくら親友であっても一度心にわだかまりを覚えると、そ

の疑いを消すことは容易ではなかった。
何もかもが遅く、もう遠い出来事のように彼は思えた。

「君は本当に僕が知っている君なんだろうか……」

どんな言葉でもいいと言ったミシェルの瞳が途端に悲しい色を帯びた。
気まずい空気が談話室を覆い尽くそうとする中、その靴音はドアの向こうから聞こえてきた。
まるで、過去からの使者のようにカツカツと断罪の音を響かせて。

軽いノックの後、ドアが開いた。
巡査が敬礼をした相手はエリックの知るところのもう一人の刑事だった。
エレンは警部に頼まれたと言って、コーヒーを運んでくると、しばらく席をはずす旨の伝言も預かってきていた。
そして、そのまま窓辺に立つと闇の中に浮かぶ二人の姿を窓越しにじっとながめていた。

彼女による取調べが始まるものだと見守っていたエリックは拍子抜けをした気分になった。
ミシェルはと言うと放心状態に近い様子で定まらない視線をどこかに向けていた。
いつのまにか本降りの雨が降り出していた。
窓を打ち付ける雨の音に、エリックはあの日の悪夢を思い返していた。
大きな川の上を眠ったように流れてゆく若い女性の姿を……。果たしてそれは本当にパメラだったのだろうか。
エリックの意識が過去に引き戻されそうになったとき、エレンがやっと口を開いた。

「エリックさん、あなたの友情も結局はムダに終わったわけですね」

「どういうことですか？」

エリックは反射的に尋ねていた。

「言葉のとおりです。あなたが信じていた人は大嘘つきだったということです」

ミシェルの眉がピクリと動いた。その些細な反応を目の端に捉えたエレンは彼に相槌を求めた。

「そうですね、ミシェルさん」

警部の友好的な取調べに対して、彼女の質問は初めから辛辣だった。

「否定はしません。でも、本当に彼を巻き込む気はなかったんです」

「そうでしょうか？　あなたは最初からエリックさんをアリバイに利用するつもりだったのではないですか？」

ミシェルは一瞬、不意を付かれた様に黙り込んだ。

本当にエレンは容赦がない感じだった。

それでもミシェルがエリックと違ったのは、そういう彼女の言葉に激しく動じないことだった。

彼はもとより女性たちの（とりわけ年上の）関心を集めがちな容姿をしていた。

今は髪も短く整えられているけれど、学生時代の頃は少し長めの髪がほどよいウェーブを作り、額にかけて優雅に流れていた。

優しげな面立ちと相俟って、どこか貴公子然とした趣があり、かといって取り澄ましたところなど微塵もなかった。むしろ自己犠牲を強いがちな彼の性格に、女性たちばかりでなく、エリックも不安を感じなくもなかった。

エレンはしかし、そういう彼の内面も外見も全く関係ないというように彼に対した。

それは初めてエリックに向かってきた時と少しも変わらぬ一貫とした彼女の態度だった。

いかなる理由があろうと決して人殺しだけは認めない。

彼女のそんな揺るぎないポリシーはいっそ、小気味いいほどだった。

―4―

「あなたはいったい、いくつの嘘を重ねてきたのでしょうね」

しかし、そんな真摯過ぎる彼女のセリフは、聖人君子そのものの毒をはらんでいる気がして、エリックは時に反感を覚えてしまうのだった。

「その中に僕のも含まれていると考えた方がいいのかな？」

だから、エリックのその揶揄はミシェルを庇うためと言うよりも、彼女を懲らしめたいと言う思いから、つい口を出てしまった軽口と言えた。

しかし、エレンは違った。冗談を解す気は全くないらしく、強い視線だけで彼の口を封じた。

それほど、この時の彼女の瞳は潔く、美しかった。

「ミシェルさん、あなたがしたことは全てあなたの我侭でしかありません。自分にすべて都合のいいように正当化しているだけです」

ミシェルは意外にもエレンの瞳を見返すように静かな口調で言った。

「あなたは強い人なんですね」

エレンも同じで、ミシェルの言葉に動じなかった。否定するどころか、「あなたが弱すぎるんです」と言って見せた。

「弱くない人間なんているでしょうか？」

「さぁ、いないでしょうね。でも、その人たちがみんな殺人を犯す訳ではありません。あなたは全てを自分に都合よく摩り替えようとしている」

ミシェルが笑った。それは今まで、エリックが見たことのない種類の笑みだった。

そして、なぜかエリックをとても落ち着かない気持ちにさせた。

それから、しばらく居たたまれないほどの沈黙が続いた。

先に声を発したのは、エレンだった。

「そうそう、シドニーさんが持っていた鍵はやはり英国銀行の貸金庫のものでした」

エリックは固唾を飲んで、その続きを待った。

「ミシェルさん、あなたは中に何が入っているかご存知ですか？」

「ええ。僕が入れて、彼に鍵を渡しましたから」

「では、それは報酬だったわけですか？　それにしては高額すぎませんか？」

「僕にはどうでもいいものでしたから、別になんとも思いませんでした」

「シドニーさんから、要求されたんですか？」

「いえ、逃亡するのに、大金よりはいいかと」

エレンは大きなため息をついた。何かを迷っている様子がエリック

にも伺えた。
戦っている、といった方がいいだろうか。
そこへ、ノックの音と共にエレンの取り巻きの一人が顔を出した。
警部が戻らないこととといい、なんとも不穏な雰囲気にエリックはまだ事件が解決していないことを悟った。
エリック自身、困惑と疲労の二重苦で、思考が少し前からオーバーヒート気味だった。

「エリックさん、おうちまでお送りします。警部は今日はもう戻られないそうなので」

詳しいことは語らず、エレンがエリックを促した。

「ミシェルは？」

エリックも、言ったそばから失言だとわかった。エレンはそれに対して、淡々とした調子で告げた。

「ミシェルさんがここを出られることはありません」

エリックは改めて現実を突きつけられたように凍りついた。
もうしばらく、ミシェルへの取調べは行われるらしい。エリックは部外者となり、部屋から去らねばならなかった。
椅子から立ち上がる瞬間、ふいに立ちくらみに襲われ、たたらを踏んだ。
その様子を見ていたエレンが何気なく言った。

「まるで、あなたが殺人者みたいですね」

エリックは蒼白になり、ミシェルはただ哀しげな瞳で微笑んでいた。

まさに、そこには見えない垣根があった。殺人者とそうでない者との……。

そして、その垣根はいつでも容易に飛び越せられるほど低いものなのだ。

エリックの視界が薄い膜を張ったようにぼんやりとしか見えなくなった。

そして、もう、向こうの世界に足を踏み入れたミシェルの姿がとてつもなく遠く感じた。

帰りの車を運転することになったのは、警部の伝言を伝えに来た若い刑事だった。おそらく、エレンの信頼に足るだけの男なのだろう。

エリックは漠然と、彼女が尊敬するに値する男とはどんな人間なのだろうと考えた。

エリックの脳裏に浮かぶ人間は、ただ一人の男しかなかった。

「こういうことは本当に異例なんです」

運転している刑事はディックと名乗った。

「普通、民間人を被疑者の取り調べに立ち合わせるなんて有り得ないんです」

「だろうね……」

エリックでさえ、自分があの場所に今までいた理由がわからなかった。単なる厚意ではないとは思っていたが……。

「エレノア刑事と警部は本当の親子なの?」

思い切って、エリックは尋ねてみた。

「親子なんかじゃありませんよ。そんなことを言ったら、シカトですよ」

ディックはそう言って、エリックの懸念を一笑に付した。

「でも、苗字が……」

「それは……」

と何かを言いかけて、ディックは慌てて口を閉じた。

「いけない、いけない。プライバシーに関する問題には主任、煩いんです。自分にも厳しい代わりに他人にも相当厳しい人ですから。本当に女にしておくにはもったいない人ですよ」

エリックが最後の言葉に敏感に反応したことを速やかに察知した刑事は、直ちにこう言い直した。

「警察関係って言うのは、古い体質で守られていますから、色々と上から叩かれるんです。どんなに才能や実力があっても、刑事が若い女性と言うだけで手柄は全部上が吸い取ってしまう」

「でも、警視総監長賞をもらったほどのエリートなんだろう?」

「あんなのは、客寄せパンダみたいなもんです。主任の実績はこんなもんじゃない。聞いたら、あなたも驚きますよ」

ディックは自分の手柄を話すように誇らしげに言った。

「主任には特殊の能力が備わってるんです。まるで、刑事になるために生まれてきたみたいな……」

ディックは心から悔しそうに続けた。

「なのに、上はちっともそれを認めようとしない！」

―5―

「特殊な能力って、なんなんだい？」

エリックは興味を持って尋ねていた。

ここだけの話ですがと前置きしてディックは言った。

「キャンベル刑事には容疑者を見ただけでシロかクロかがわかるんです」

「でも、それって、刑事の勘みたいなものなんだろう？」

エリックは別に特別なことには思えないと言った。

「確かにそう言われてしまうとそうなんですが……。でも、主任の場合は本当に特別で」

「特別とは？」

ディックは少し逡巡している表情を見せたが、思い切ったように言った。

「死んだ人間の顔が見えるんだそうです。その犯人に殺された被害者の……」

「どういうことなんだい？」

「詳しいことはわかりませんが、なんでも幼い頃の体験がもとになっているとか……」

エリックは、その特別な体験の内容を知りたいと思った。しかし、本人のいない前でこれ以上彼女の過去を暴き立ててどうなるのかという思いもあった。
ディック刑事もそれを悟ったのだろう。その話はそれ以上進展することはなかった。
ディックという刑事は口は軽いが警察の人間とは思えないほど気さくな男だった。
今は少しでもミシェルのことから離れていたいエリックにはありがたい人間と言えた。

（ミシェル……）

過去を遡る旅は容易ではない。彼を信じたいと思う心が踏みにじられた後ではさらに過酷なものとなるだろう。
エリックはミシェルが告白した今でさえ、まだどこかで彼を信じている自分を消すことが出来なかった。

（ミシェル……。君が僕をこの殺人の共犯に選んだのには、何か理由があったんじゃないのかい？）

エリックの心の中の呟きはミシェルの心に届くことなく、ゆるやかに闇の縁に落ちた。

殺人者　―1―

翌日からエリックにはまたもとの日常が戻ってきた。
結局、警部からは何の連絡も無く、家まで送り届けてくれたディック刑事も詳細を告げられていないのか、「あとのことは追って連絡があるでしょう」と言ったに留まった。
とても奇妙なことに、新聞もマスコミもあの事件はなかったように、なりを潜めた。
もちろん、ミシェル自供のニュースも報じられていなかった。
ためしに、ロンドンまで行って新聞という新聞を買い集めたが、やはりどこも約束をしたかのようにパメラの事件についてはほんの少しも触れていなかった。

「もう、忘れなさいと言うことなんですよ」

母親は前にもまして自室に引き篭もるようになった息子を気遣いながらも、残酷と思えるような言葉を言った。

「よくもそんな人ごとみたいなことが言えますね。人が死んでいるんですよ。しかも、それは僕が知っている人で、犯人は親友ときている。いったい、どうしたら忘れられるって言うんです！」

いつもならこんなに激しく母親に言い返したりしないエリックも、この時ばかりは母親の無神経とも言える言葉への傷つきを隠せなかった。

「だからと言ってあなたに何が出来るんです？　もう終わったことなんでしょう？」

「だからって、彼を見捨てろって言うんですか？　あなたはいつもそうだ。僕に不相応なことには首を突っ込むなと言う。でも、それで僕が本当に幸せだと思うんですか？」

母親は黙っていた。母親の葛藤もわからなくはない。

母親とて、ミシェルのことには心を痛めているはずなのだ。

だからこそ、警察から遅く帰ってきたエリックに彼女は何も聞かなかった。

いや、聞けなかったのだろう。

「母さんは言いましたよね。僕に身勝手な人間になるなと。親友が姉殺しで容疑をかけられているのに自分の保身にしか、頭が回らないのかと僕を叱りましたね」

「それは、あの人が誰かを庇っていると思ったからです。でも、彼が本当にお姉さんを殺めたとしたら、話は別です。残酷なようだけど、正直、もうあなたには関わって欲しくないの」

「どうして！　母さんだって、ミシェルがどれだけ苦労をしてきたか知っているじゃありませんか！　たった一度の過ちで、彼の心根まで疑ってしまうんですか？」

「たった一度？」

母親は眉をひそめた。

「人の命に、一度も二度もありません」

母親は静かに怒っていた。

「あなたは感情的になりすぎています。事実にもっと目を開くべきです」

「それが出来ないから、苦しんでいるんじゃないですか！」

悲鳴に近い声でエリックは叫んだ。

体を丸め、全身で苦悩を訴えるエリックに母親はもう言葉を掛けなかった。

エリックは剥き出しの心を荒野に放置されたような、果てしない孤独感を感じた。

人間は所詮一人なのだと新たに心に刻んだ。

エリックは思い出していた。

そういえば、子供の頃も、こうやって体を丸めて泣きながら眠ったことがあった。

母親は父のいない子に十分な愛情を与えてはくれたが、魂の孤独までは埋めてはくれなかった。

大人になったら、そんな孤独は消え失せてしまうのではないかと思っていたのに、まさか、今の今まで無くならずにいるとは思わなかった。

そんなことを考えながらいつのまにか眠ってしまっていたエリックは、遠くで鳴り続ける耳障りな音の羅列にぼんやりと目を覚ました。

母親は用事をして聞こえないのか、しつこく呼び鈴は鳴り続けている。

ようやくそれが治まっても、しばらくは耳鳴りのように耳に残った。

そんな彼に、母親のメリッサが部屋の外から声をかけた。

「エリック、あなたにお客様ですよ」

エリックは警部がやってきたのかと思った。しかし、そうではなかった。
母親は、覚醒しきらない頭のままふらふらと部屋から出て来た彼に、一枚の名刺を差し出した。

「ライアン・マクレガー。自動車会社の社長が僕に何の用なんです？」

「さぁ。とりあえず応接間にお通ししたから自分でお聞きなさい」

「応接間に通したんですか！」

エリックは非難するような声で言った。

「仕方ないでしょう？　お困りの様子だったのですから」

メリッサには困った人を見捨てて置けないというやっかいな性質があった。そのおかげで、絨毯や、家具やといらないものをどれだけ買わされたことか……。

「今度は車を買えと言うんじゃないでしょうね？　だいたい、僕は運転免許を持っていませんよ」

エリックは不機嫌そうに言った。それでも、家の中に入れたのなら、出さなければなるまい。
その対処は自分がするよりなさそうだった。
願わくば、しつこい輩でないことを願いつつ、エリックは訪問者の待つ応接室のドアを開けた。
応接間に入るなり、ライアンという人物が今にもに？みかかるような勢いで言った。

「パメラはどこです！　一体、何があったんですか！」

ライアン氏は年のころ三十代半ばと思われる、背が高く、がっしりした体格の男だった。

初対面のエリックに詰め寄る姿は尋常ではない、焦燥感さえ伺えた。

「落ち着いてください。あなたは一体、誰なんですか？」

押し売りだとばかり思っていたエリックは突然の訪問者にただ、ただ驚くばかりだった。

―2―

男はパメラの婚約者だと名乗った。けれど、にわかに信じられるものではなかった。

「パメラさんって、パメラ・オースチンさんのことでしょうか？」

ライアン・マクレガーなる人物はもどかしそうに、そうだと頷いた。それはある意味、押し売りよりもやっかいな話だった。とりあえず、エリックはいきり立っている男を宥めなくてはならなかった。

「パメラ・オースチンさんのことをお知りになりたければ、警察でもお聞きになって下さい。僕からお話しするようなことは何もありませんので」

男はうんざりするように言った。

「僕はその警察であなたのことを聞いてきたんですよ」

「なんですって？」

エリックは怪訝そうな顔になった。

「カナダからの長期の出張から帰ってみれば、パメラとは連絡が付かないどころか、彼女の家の門の前には強面の警官が立ち塞がっていて入れないときている。聞けば数日前にそこで殺人事件があったというじゃありませんか。誰が殺されたのか、聞いても教えてもらえず、警察へ行ったら、あなたの名前を出されたと言うわけです」

「どうして僕の名前を……？」

警察関係者で思い当たる人物と言えば、二人しかいなかった。どうして彼ら（のうちのどちらかだと思うが）が自分の名前を持ち出したのか、エリックにとっては大いに謎だったが、ライアン氏にとってははどうでもいいことのようで、それよりも真相を聞くまではいつまでも立ち去りそうにない雰囲気だった。

「いったい、誰が殺されたんです！　まさか、パメラだなんて言うんじゃないでしょうね」

エリックは深いため息をつくと言った。

「お気の毒ですが、亡くなったのはパメラさんです。遺体は司法解剖されて、その後どうなったのか僕も知りません。おそらく、まだスコットランドヤードの方にあるのかもしれません」

「パメラが……死んだ……？」

ガクッと膝を折ったライアン氏は、次の瞬間には、まるで犯人を見るかのような憎々しげな目でエリックを睨むと言った。

「誰が彼女を殺したんです？　犯人は捕まっているんでしょう？」

エリックは黙っていた。答える気になどなれなかった。

しかし「はいそうですか」と引き下がるライアン氏でもなかった。

「どうして黙っているんです？　僕には知る権利がある！」

「あなたが本当に彼女の婚約者だとしたら、です。僕には、でもまだ、それが本当だとは信じられないんですよ」

「なんだって？」

ライアン氏は意表をつかれた顔をした。

「実は僕も彼女と婚約していたと言ったらどうします？」

「冗談はよしたまえ！」

「冗談なんかではありませんよ。僕の噂を警察でも聞きませんでしたか？　有名らしいんですがね。一部では愛人とか言われてますよ」

ライアン氏は寝耳に水と言うように首を横に振った。

「彼女は何と言っても噂が絶えない人でしたからね。自称、婚約者と言う人も結構、いたりするんです。あなたもその口だったんじゃないですか？」

一体、誰の口を借りて喋っているんだろうとエリックは自分で喋りながら思っていた。自分の意思じゃないようなことは確かだった。

「ちょっと待ってくれ。君こそ、彼女の婚約者だと言う証拠はあるんだろうな」

ライアン氏は一歩も引かぬ態度で言った。

「証拠？　彼女に聞けば一発ですが、そういうわけにもいかないん

ですよね。あいにく、指輪の交換もしていないので形ではお示しできませんが……」

そこで、エリックは一旦言葉を切った。

「彼女は一人ではなかったということです」

「ど、どういうことだ……」

ライアン氏は急に怖気づいたような声を出した。

「わかりませんか？　彼女のおなかの中には新しい命が宿っていたんです。そう、僕の子供がね！」

ライアン氏は「ウソだ」と一言呟くと、真っ青な顔で逃げるように家を出て行った。遠ざかる足音を聞きながら、エリックが深く息を吐き出したときだった。

ガチャンとコーヒーカップの割れる音がはでに響き、同時に嗚咽のような声が聞こえた。

「なんという事を……」

振り向くと母親が両手で口を押さえて、トレイもカップも落としたままであぜんと立ち尽くしていた。

「エリック、あなたって人は……！」

「ちょ、ちょっと、待ってください。違いますよ！今のは、彼にお引取りを願うためのお芝居なんです。嘘なんですよ、母さん！」

蒼ざめた馬のように言葉を無くし立ち尽くす母にエリックは必死で弁解した。けれど彼女はとても落ち込んだ様子でエリックと目も合わせようとしなかった。

エリックはその時点での説得を諦めざるを得ず、自分の言動を深く後悔したのだった。

―3―

「どうしてそんなバカなことを言ったりなんかしたんです！」

あれからメリッサは口もきいてくれず、鬼の面を貼り付けたような無表情な顔をして、一緒にいても気まずいといったらなかった。居心地が悪いだけではなく、それは針の筵にも相当して、エリックは神経髄弱寸前だった。

その日、警部が訪ねてくれなかったら、エリックは自室で窒息死していたかもしれない。

「自分でもわからないんですよ。ただ、ライアン氏を見ているとなんとも腹が立ってきてしまって……」

「どうして？　初対面の人だったんでしょう？」

「そうなんですが……。パメラさんの婚約者って聞いた途端、ついカッとなってしまったんです」

警部は不思議そうにたずねた。

「確かあなたは、パメラさんをあまりよく思ってらっしゃらなかったんじゃないですか？」

「そうです。でも、ですよ。もし、彼がもっとしっかりパメラさんの心を捕まえて、カナダへでもどこへでも連れて行ってくれていたら、ミシェルはお姉さんを殺す必要もなかったってことじゃないですか？」

「それはどうでしょうね。どうも、パメラさんとミシェルさんの間には相当深い確執があったようですし、そう簡単に思い留まれるようなことではなかったかもですよ」

警部の言うことは正しかった。

「それに、僕はあなたのお母さんが怒る気持ちは最もだと思いますよ。なんでまた、彼女のおなかに自分の子供がいたなんて馬鹿げたうそを思い付いたんです？」

「思い付いたわけじゃないんです、警部」

「どういうことです？」

警部は興味深げにエリックを見た。

「激高して喋っているうちに思い出したんです。生前、あの人は『眠れない』と言っては深夜、電話をかけてきたことがあったんです。そういう時の彼女は決まって、どこか情緒不安定な様子で、たぶん、お酒の力も手伝ってか、支離滅裂なことを喋っていました」

エリックは当時の電話をはっきり思い出そうとするように、眉間に皺を寄せた。

「あれは今思うと亡くなる前の晩でした。僕も彼女の毎晩のそういった電話には辟易しきっていて、適当に頷いていたんです」

エリックは一言一句、彼女の言葉を思い出そうと試みた。

「いつも以上に不安定な状態だったと思います。言っていることも

あちこち飛んでいて、僕もいい加減に聞いてしまっていたからちゃんと思い出せないんですが……確か……」

エリックはそこまで言って、否定するように首を強く振った。

「いや、そうじゃない。もっと、前です。僕にミシェルにルイーズさんと別れるように説得してくれと言われたときでした。いや、違う……！」

エリックの頭の中で、パメラの言葉だけが一つ一つ独立して浮かび上がってきて、エリックは軽い混乱をきたしていた。

警部はそんなエリックを辛抱強く待っていた。秘密のワードが隠されているかもしれないと思うと、内心、血がたぎる想いだった。

それでも、なかなか話の順序にこだわって肝心の言葉がどこかへ行ってしまわないか、気が気ではなかった。

人間とはある瞬間にパッと思い出すこともあれば、その逆に一瞬に忘れることも出来る生き物だということも嫌と言うほど知っていた。

エリックが正確に思い出そうと眉間のしわをより深くするたびに、警部も忍耐の限界に近づいていた。

そしてとうとう、彼は待ちきれなくなったように言った。

「それで、一体、彼女はなんと言ったんです？」

エリックは我に返ったように目を見開くと、悩みながら口を開いた。

「どうしてあの子なのかしら、って言ったんです。自分だけの体じゃないから、とも」

エリックはそれが同じ会話の中で発せられた言葉であったのか、それとも違ったのかも定かではないと言った。

また、その言葉の意味も深く考えなかったので、どんなシチュエーションの会話をしていたかということもおぼろげにしか覚えていないと。
確かにその二つの言葉だけでは不十分に思えた。

「どうしてあの子なのかしら……」

警部は口の中で噛みしめるように呟いた。
おそらく、『自分だけの体じゃない』というのはそのままの意味だろう。
実際、パメラは妊娠していた。
これは極秘事項であったため、警察関係者の中でもごく、限られた者しか知らないことになっていた。
誰の子供だったかということは未だになぞのままだが……。
それよりも気になるのは……。

「あの子というのは誰のことを意味するんでしょうね」

警部がエリックに質問を投げかけた。

「僕はルイーズさんのことだと思っていたんですが、違っていたんでしょうか？」

―4―

ここだけの話なんですが、と警部は前置きをすると驚くようなことを言った。

「パメラさんはルイーズさんの正体を知っていた可能性があるんですよ」

「なんですって?」

これはエリックの範疇外だった。でもそうなると、何もかもが頭から違ってくることになる。

「そんな……。有り得ないでしょう?」

エリックはわからないと言うように首を横に振った。

「彼女はそんなことおくびにも出していませんでしたよ。シドニーさんの変装は僕だって騙されたくらいなんです。ましてや、視力が悪かったパメラさんはよけいに難しかったんじゃないですか?」

しかし、警部は主義を変えなかった。それはあたかも断定の響きを持ってさえ聞こえた。

「シドニーさんがパメラさんを知っていたかどうかはわかりません。だけど、二人は以前どこかで会っていたんじゃないかと思うんです。お互い、まだそうとは知らずに……」

「そして、偶然にもそれにパメラさんが気が付いた?」

警部は首肯した。

「でも、どうして？」

エリックはいぶかしげに尋ねた。

「パメラさんはリサーチに基づいて占いをされていたんですよね」

「ええ。僕も根掘り葉掘り、きかれました。彼女は徹底的に調べ上げるタイプの人でしたね」

「そんな人が弟の婚約者を調べないなんてことがあるでしょうか？」

「確かに」とエリックは頷いた後、腹立たしそうに言った。

「じゃぁ、僕は彼女にも騙されていたと言うんですか？」

警部は言った。

「騙されていたのはあなただけではありませんよ。おそらく、シドニーさんはもちろん、ミシェルさんも知らなかったことだと思います」

「どうして？」

警部は少し考えてから言った。

「それはパメラさん自身、隠していたかったからでしょう」

「どういうことなんですか？」

警部は詳しいことは捜査段階にあるのでまだ話すことは出来ないと言った。

「じゃあ、やっぱり、パメラさんが言った『あの子』というのはシドニーさんのことだったんでしょうか？」

しかし、まだ警部は納得していない顔だった。

「エリックさん、その前後の彼女の言葉を思い出してもらえませんか？　彼女は他にも奇妙なことを言っていませんでしたか？　その時はなんとも思わなかったけれど、後から思うと腑に落ちないこととか……」

エリックは弱々しく頭を振った。思い出そうとすればするほど、膜がかかったようにおぼろげになった。

しかし、警部はあきらめなかった。

「どんな些細なことでも結構です。思い出したら連絡を下さい」

エリックはわかったと頷くと、反対に警部に尋ねた。

「で、今日は何の御用でいらしたんです？　まさか、母のご機嫌伺いというわけではないでしょうね」

あいにく、母は用事で出かけて居ませんが、とエリックは笑った。

警部も苦笑いで答えた。

「ああ、それはですね。ライアン・マクレガーという男が尋ねてく

るかもしれないということをお伝えしたかったんですよ」

「警部！」

と、エリックは忌々しそうな口調で言った。

「やっぱり、あなただったんですね！」

ライアン氏が言った、警察でエリックのことを告げたという人物はやはり警部だったのだ。十中八九、エレンではないだろうとは思っていたが……。

エリックは母との気まずい現実を思い出し、なぜもっと早く、彼が尋ねてくる前に教えてくれなかったのかと警部を責めた。

警部は申し訳なさそうな顔で、そんなに早くライアン氏が訪れるとは思わなかったのだと言った。しかし、その受け答えには確信犯的な匂いがぷんぷんしていた。

「警部、騙されませんよ。あなた、わざと僕に教えませんでしたね？」

警部は苦笑いを繰り返しただけだった。ふてぶてしいと言うか、一筋縄ではいかないというか、改めて敵にはまわしたくない男だとエリックは思った。

―5―

「でも、面白いものが見られたでしょう？」

「面白いもの？」

エリックが今度こそ恐ろしい声を出したので、警部は慌てて訂正した。

「ああ、違いますよ。そうじゃなくて、彼ですよ。ライアン・マクレガーのことです」

「彼がどうしたんです？」

エリックの声はまだ低いままだった。

「ライアン氏はあなたの存在に動揺していませんでしたか？」

「ええ、まぁ、それは確かに」

警部はその答えに満足するかのようにほくそ笑んだ。

「これから、もっと面白いものが見られますよ。きっとね」

その時、まるで時間を計ったように扉を開けてエレンが現れた。

「今、2ブロック先を曲がったところよ。お隣のヒギンズ夫人に捕まって、世間話につき合わされているわ」

エレンは警部に向かってそう言うと、今度はエリックを見て言った。

「あなたの家に警報機を付けさせてもらいました。お母様にはどうぞご内聞に」

「き、君、いつの間に！」

「詳しい話はまた後で。お母様がお戻りになる前に退散しなくては！」

エレンは舌を噛みそうなくらい早口でそう言うと、警部を促した。

警部は先ほどまでとは打って変わった真剣な表情になると、

「エリックさん、これから先、正直何があるか我々にもわかりません。ただ、あなた方はスコットランドヤードが全力を賭けてお守りします。でももし、我々の力の及ばない時のために、警報機を付けさせてもらいました。相当の大音量なので、抑止力になってくれると思います」

「どういうことなのか、教えてもらえませんか？」

大海原に頼りなくぽつんと投げ出された子犬のような心細さでエリックは訴えた。

「時間がないんです。あなたのお母様にはせめて平穏で居て頂きたいのです」

「警部！　メリッサさんがヒギンズ夫人と別れて、こっちへ向かっています！」

「あなたはどうか、何もなかったように普段のままでいて下さい。でないと怪しまれますから」

警部はあくまでも母親の身と心の平穏を案じている様子だった。

「警部！」

エレンが玄関の扉を全開にして、叫んだ。

「スイッチは三箇所です。あなたの寝室と応接間と、ここ、玄関です」

「母は？　母の部屋にはないのですか？」

警部は扉の向こうに半分、身を滑らせながらしっかりとした口調で言った。

「メリッサさんはあなたが守るんです！　いいですね！」

二人の乗った車が猛スピードで去り、数分も経たない内に母親が帰ってきた。

その夜、エリックは一睡もすることが出来なかった。

警報機というのは最新式の物らしく配線コードはどこにも見当たらなかった。

ただ、彼らが去った後、応接間の暖炉の上の置き時計と玄関の絵の位置が若干、変わっているのがわかる程度だった。

深夜、エリックはそれらに細工された警報機のスイッチを見つけ出し、警部が言ったことは現実だったのだと改めて戦慄を覚えた。自

室のそれは本棚の上の見慣れぬ馬の置物に仕込まれていた。これだけは、エリックの気付かぬうちに警部が持ち込んで置いたものと思われた。

けれど、それ以外はエリックたちが話している間にエレンが仕掛けたのだろう。相当の熟練と息のあった連携プレーが揃わないとこれだけの短時間に出来るものではなかった。

もしかすると、二人はメリッサの不在を知っていたのかも知れない。そういえば、今朝、彼女は電話で誰かに呼び出されて慌てて出て行った。

その相手ももしかすると彼らの協力者であった可能性がある。

メリッサは帰宅後、夫の日記や写真を懐かしそうに眺めていた。母親が誰かのために慌てて飛び出すとしたら、彼（夫）のこと以外考えられなかった。

そう思うとエリックは少し泣きたい気持ちになった。それは嫉妬のような感情に極めて似ていた。

父に対するものなのか、母に対するものなのか自分でもわからないが、より孤独感が増すことは確かだった。

『お母さんはあなたが守るんです！』

相手も見えない。

理由もわからない。

ただ、底知れない恐怖だけがエリックをさらに混沌の闇に突き落とした。

―6―

車が走り出してからすぐに、警部はエレンの車でやってきたことを思い出し、苦い顔になった。
おそらく、彼女の車に乗ったことがある人なら誰でもこう思うだろう。

『彼女は好きだけど、まだ死にたはくない』と。

彼女は市街地だろうが、山の中だろうが、またカーブの多い海岸線だろうが、まったく同じ走り方をする。警部のように昔から彼女を知っている人間には、それがなんとも生き急いでいるかのように思えて、同時に切なくもなった。

「エリックさんにはすべてを教えてあげた方がよかったんじゃないですか？　あれでは混乱するばかりでは？」

珍しく、エレンがエリックに同情的な意見を言った。

「何を？　僕たちには確証がないんだ。いたずらに恐怖心を煽ってもしょうがないだろう？」

「もう、十分怖がっていると思いますが……」

「確かに、それは否定しないよ。これほどやっかいな事件になるとは思ってもいなかったからね。彼を必要以上に巻き込んでしまっていることへの罪悪感とは常に戦っているよ」

エレンはまっすぐ前を向いたままスピードを緩めることなく頷いた。

「でも、よく、メリッサさんが出かけるのがわかりましたね。一応、彼女に知られないようにやってみる自信はありましたけど」

「ああ、あれは……」

そう言うと、警部は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「卑怯な手を使ったんだ。最低の手を」

一瞬だけ、エレンは隣の警部の顔を盗み見た。エレンがあまり見たことのない警部の苦悩の顔だった。

「後悔しているの？」

「後悔なんてものじゃないね。我ながら、吐き気がする」

エレンは言った。

「嫌だわ。私の愛車を汚さないで下さいね。そんなことをしたら、後悔どころじゃ済まなくなるわよ」

それはあえて作ったと思われるほどの軽口だった。警部はそれでも少し救われた気になったのか、エレンの横顔に微笑みかけた。

「ライアン・マクレガーは案外、早く現れたんですね」

エレンが話題を変えるように言った。

「おそらく、警察から戻ってすぐに駆けつけたんだろう。エリック

さんがうまく彼を怒らせてくれたおかげで、事態の決着は早まるかもしれない」

「そうかしら……」

エレンは片手で自分のもう一方の腕をさすりながら言った。

「何か気になることがあるのかい？」

警部はカーブの度に目を瞑りながら、それでも心配そうに尋ねた。

エレンは考えていた。今回の事件を混乱させている原因が自分にあるのはわかっていた。

そのために彼は警察上部に何度も掛け合って、無理難題にも付き合ってくれている。

でも、もし、それが間違いだったとしたら……。

「エレン……？」

黙り込んでしまった彼女に彼は優しい言葉を投げかけた。

「僕は信じているよ。誰がなんと言おうと君の目は曇っちゃいない」

けれど、今はその信頼さえも重く、エレンの薄い肩にのしかかるばかりだった。

―7―

エレンの両親は、彼女が幼い頃、強盗によって命を奪われていた。
夏の避暑に訪れていた湖水の小さな町でその悲劇は起こった。
犯人はまだ高校を出たばかりの二人の若者だった。彼らはジャンキーで、クスリ代欲しさに空き巣を働いていたのだ。

その日、彼らはクスリでハイになった勢いでエレンの両親の別荘に押し入った。
彼らは奇声を上げ、鉢合わせしたエレンの父親に金を出せとナイフで脅した。
警察官だった父親はそれを拒むと、気丈にもたった一人で挑みかかっていった。
二階にいた母親は、夫の銃が机の引き出しにしまわれたままなのを思い出し、それを手にすると、エレンを洋服ダンスに隠し、「決して出てきてはいけませんよ」と言い置いて部屋を出て行った。
何も知らないエレンは暗くて狭いところにいるのが寂しくなり、母の後を追うように部屋を出た。
そして、階段の柵の間から、その惨劇を目にしたのだった。
若者の一人が銃を持っていた。おそらく、母親から奪い取ったのだろう。
さっきまで、やさしく笑いかけてくれていた父と母が、まるで人形のように赤い血を流して横たわっていた。
若者達は階段の上にいるエレンに奇跡的に気付かなかった。
銃を持っていない方の男は急に我に返ったように、あたりの血だまりを見て震えだした。

『マシュー、なんてことを……』

『オレだって、殺す気はなかったんだ！　銃が勝手に……』

彼はそう言うと、銃を放り投げた。

『逃げるぞ！　捕まったら、俺たちは死刑だ！』

『あ、ああ、レイモンド、待ってくれよ……』

マシューと呼ばれた男は今自分が撃ったことも忘れたように、床に横たわる遺体を恐れるように何か叫びながら飛び出していった。

『エ……レン……』

父が最後の力を振り絞るかのように、エレンを呼んだ。エレンは子犬のように父親のもとへ走り寄ると、パパ、パパと泣いた。

『エレン……。パパとママを許しておくれ。もう、おまえを守ってあげることが出来なくなってしまった。でも、ずっと……愛してるよ。それを忘れないで……』

父親はエレンの頬を愛しげに撫でながら、息尽きた。エレンは涙を拭き、母親のもとへ走った。

今にも起きて、抱きしめてくれるような気がして、何度も何度もゆすってみた。

でも、母親はもうエレンを見ることも、やさしく話しかけることもなかった。

犯人は結局、捕まらなかった。

近所を荒らす空き巣が逮捕されたが、エレンの両親を殺した犯人とは断定されなかった。というのも、残されていた銃から検出された

指紋が一致しなかったせいだった。
そして、唯一の目撃者だったエレンが犯人を特定できなかったから。
エレンは発見された時、父と母に抱かれるように眠っていた。
そう、彼女は決して起きることはなかった。

まるで眠り姫のように、エレンは眠り続けた。
医者は幼い子供にはあり得る事だと言った。愛するものの死を受け入れるには、それだけ、エレンはまだ幼すぎた。

『この子は目を覚ますんでしょうか？　まさか、このまま彼らのところへ行ってしまうのでは……』

母親の兄は、妹と彼女の家族をとても愛していた。幼いエレンは目に入れても痛くないほどに……。

『エレンを助けてください！　せめてこの子だけでも命を永らえてやりたいのです！』

ありとあらゆる効果的な処置が彼女に施された。それでも、エレンは目を覚ますことがなかった。

一年が過ぎ、このまま、彼女の両親がいる天に召されるのではないかと思われた。
小さいエレンがそれを望んでいるのなら、どうすることも出来ないと誰もが諦めかけた時、奇跡は起こった。
エレンが目覚めたのだ。赤ん坊のように大きな声を上げて、泣きながら……。
それから、しばらくエレンは長い睡眠と短い覚醒を繰り返した。
エレンは無意識の中で生きることを激しく拒絶していたのだろうと精神科医は言った。それでも、どうしても戻らなくてはいけないこ

とがあってこの世に戻ってきたのだと……。
そして、彼女は母親の兄、キャンベル氏の養女になった。
エレンは正直、それ以前のことをよく覚えてはいなかった。ただ、両親が殺された時の情景だけは目を閉じると現れた。
そのせいで、今度は反対に眠れなくなったものだった。

『エレン、大丈夫だよ。僕が怖いものからきっと守ってあげるからね』

そうやって、エレンを一番甘やかし、ナイト役を買って出たのが、キャンベル夫婦の一人息子、つまりハワードだったというわけだ。
『怖いもの』はいつのまにか、昼間にも時々、現れるようになった。初めはそれが何なのかわからなかった。ただ、生きてはいないことだけがわかった。

その後、義兄と同じ刑事になったエレンは不思議な力で何件もの迷宮入りとされる事件を解決することになる。
だが、いつも上手くいく訳ではなかった。

―8―

理屈では説明できないだけにやっかいだった。
今でも目を閉じると殺された両親の顔が交互に浮かぶ。
この世に未練を残した苦悶の表情を浮かべたその顔には犯人に対する憎しみの念までもが表れていた。
自分でもよく気が狂わないものだと思う。ましてや、他人の念さえも見えるようになってしまったのだから……。

「エレン？」

信号が青に変わっているのも気付かずにいた彼女に警部が不思議そうに声をかけた。

「やっぱり、ミシェル・ゴードン氏のことが気になるのかい？」

エレンはアクセルをゆっくり踏みながら、ただ唇を噛みしめた。

「彼は確かにまだ嘘をついているね。親友になら本当のことを言うかと思ったんだが……」

最大の嘘はパメラを殺したと自供したことだった。エレンには彼が犯人でないという確信があった。
少なくとも、パメラ殺しに関しては彼は限りなくシロだった。

「上層部はパメラさんの遺体からコカインが出て来たものだから色めきたっているね」

それはそうだろう。彼女の得意先は政治家、経済界と多岐に渡って

いたので、その人脈を辿っていけば、とんでもない大物を釣り上げることも不可能ではなかった。

「やっぱり、彼女は組織と関係があったんでしょうか？」

「それはライアンを絞り上げてみないとわからないよ。彼がただのディーラーか、それとも真の黒幕か……」

警部はライアン・マクレガーに会ったときの印象を思い出していた。彼の演技は見事だった。さすが、いわくつきの人物だけはあった。事実、彼には数々の疑惑の影が付きまとう。

エレンには出来れば会わせたくなかった。彼女がどれだけの死人の顔を見るのか想像することさえ苦痛だった。

おそらく、その中には……。

警部は頭を数度、横に振った。そして気分を変えるように言った。

「でも、まさか、エリックくんがパメラさんの懐妊を知っていたとは驚きだったね」

エレンの形のよい眉がピクリと動いた。

「彼はとても困っていたよ。メリッサさんが口をきいてくれないと」

「当たり前です！　あんなこと……。冗談でも言っていいことと悪いことがあるわ」

警部はなぜエレンが怒っているのかわからなかった。ただ、また一層スピードが増したような気がして、警部は慌てて同調した。

「たしかに、あれはやりすぎだったね」

そして自分はショックを受けているメリッサに追い討ちをかけるような酷い事をしてしまったのだ……。

「お兄さんはエリックさんのお母さんが好きなの？」

ストレートに聞かれて、警部は大いに戸惑った。

「す、好きというか……そ、そう、尊敬しているんだよ、兄さんは」

「尊敬……ね。そういうことにしておいてあげるわ」

エレンは少し機嫌を直したように言った。

しかし、彼は思った。

メリッサをどうやって家から連れ出したかエレンが知れば、彼女はおそらく自分を軽蔑するだろう。

行方不明の夫の名を騙ってメリッサを呼び出しただなんてことは、やはり口が裂けても言えそうになかった。

「秘密を持つことは辛いことだな」

思わず洩れた独り言はしっかりエレンに拾われていた。しかし、彼女は聞こえないふりで前だけを見て運転していた。

秘密と嘘は似ている。暴かれることを極端に厭うという意味において……。

「ライアンはまた現れると思いますか？」

エレンは上司に向かって言った。

「エリックくんの家には二十四時間見張りを立ててはいるが、正直、どうかな」

「いっそ、任意で捕まえたらどうです？　そうでなくても、埃はいっぱい出てくるでしょう」

「そうしたいのはヤマヤマなんだけどね……」

警部はため息をついた。

「でも、何かが起こってからというのでは遅いんです！」

エレンの言うことはもっともだった。

「私が会います。そして、彼の罪をすべて暴いてやるわ」

警部はやんわりとそれを拒否した。

「エレン、君はミシェル氏を頼むよ。ライアンはもう少し泳がしてみよう。まだ確証もつかめない段階で迂闊に動くことは出来ない」

エレンは何か言いたげな表情をしていたが、結局は警部の言葉に従うべく頷いた。

心の闇　―1―

警察の予想に反して、ライアン・マクレガーはその後、エリックの前に現れなかった。
そのかわり、彼は全く思いもよらない行動に出ていた。
彼はまず、遺体安置所に赴くとパメラの身内だと告げ、彼女の遺体を受け取ると、すぐさま派手な葬儀を行った。それは彼が彼女の婚約者だったことを内外に向けて大きくアピールする格好のチャンスとなった。

エリックはその記事を読み、複雑な思いにかられた。それを扱ったのはゴシップ記事で有名なある三流紙だった。
それでも、十分、世間への影響は察せられた。
そして、この結果はライアン氏が完璧にエリックの存在を無視したことを表していた。

実際のところ、エリックには痛くも痒くもなかった。
ただ、言い知れぬ薄気味悪さのようなものはあった。正直、エリックはとても疲れていた。
いつ起きるとも知れない何かに恐れて生きるという日々は相当の緊張を彼に強いた。
だから、いけすかない男でも、彼が本当のパメラの婚約者だとしたら、もうどうでもいいという気持ちが強くなっていた。

その新聞には悲劇の婚約者として、彼のコメントや写真が数多く掲載されていた。まるで役者のように整った顔の美丈夫が悲嘆に暮れる写真は絵になった。
誰もが同情の一票を投じたくなるような陰影に溢れていた。
生前のパメラと並んで写るその姿は合成写真ではないかと思うほど

よく出来ていた。
まるで記念撮影のような……。

そういえば、彼女が殺された後、顧客名簿の一部が紛失しているという。
ミシェルが彼女を殺したのだとしたら、それは全く意味のないことのように思えた。
それに、億を越える値打ちの紫水晶も一緒に消えている。
ロンドン銀行の貸金庫にそれがあったのか、なかったのか、エリックはまだ聞かされていない。
警察の人間でもない彼に教える義務は初めからなかったとも言えるが。

とにかく、考えれば考えるほど謎は深まるばかりだった。
大体、凶器はなんだったのか？　彼女の死因は？
それが知られたくないゆえに報道が規制されているという話もある（例の三流ゴシップ記事に書かれていたことを鵜呑みにすればだが……）。

その時、エリックの脳裏にふと浮かんだのは、ミシェルが誰かと言い争いをしていた事実だった。
あのすぐ後、ミシェルから衝撃的な過去を知らされ、その出来事はすっかり記憶の隅に追いやられていたのだった。

あの時、エリックが尋ねるとミシェルは若い男のことを「ルイーズの弟だ」とだけ言った。
そもそも、ルイーズという人物さえ架空の存在だったのだから、弟なんてことは有り得ない。

では、あの男は一体誰だったのか……。

エリックは気になりだすといてもたってもいられなくなり、気が付くとバスに飛び乗っていた。しばらくすると車窓から見覚えのあるアパートが見えてきて、エリックは慌ててバスを降りた。
それは、何の変哲もない普通のアパートだった。
確かにここにルイーズが住んでいて、ミシェルは会えなかったと言ったのだ。弟らしき男によって会わせてもらえなかったと……。

エリックがアパートを見上げていると、驚いたような声で肩を叩く人物がいた。

「エリックさんじゃないですか?」

ディック刑事だった。

「このアパートに誰かお知り合いでも?」

さりげなさを装いながらも彼は刑事の目をして尋ねた。しかし、エリックもそういう目にはもう慣れたものだった。

「刑事さんは張り込みですか?」

ディック刑事は、「まぁ、そんなところです」と人懐こい笑みを浮かべながら言った。
エリックはどうやって説明しようか迷いながら、あの日の腑に落ちない出来事について語った。

「それで、あなたがバスの中からミシェルさんと男の諍いを見て飛び降りて駆け寄った時、その男は慌てて逃げるようにいなくなったんですね?」

ディック刑事は確かめるように言った。

「ええ。その時、かなりの金額のお金が二人の間には散らばっていました」

「揉めていたっていうのは明らかですね。でも、彼らは何を揉めていたんだろう?」

ディック刑事の懸念は走り去った男のことよりも、諍いの理由に絞られているように思えた。

「ミシェルは男のことをルイーズさんの弟だと言っていました。でも、そもそもルイーズさん自体いなかったわけだから、それは嘘になりますよね。だったら、あの男は誰だったんだろう?」

エリックは思い切ってディックに疑問をぶつけてみた。

「ああ、それなら、おそらくシドニー本人ですよ。実は彼はこのアパートに住んでいたんです。我々がルイーズさんの消息を尋ねてここに辿り着いた時、ちょうど彼はいなかったんですが、近所の人が証言してくれました。女性は一度も見たことがないと……」

―2―

エリックは驚くと同時に相当のショックを受けていた。
一つ、一つ、謎が解けてゆくたびに現れる真実に胸がえぐられそうになった。
まさにそれはミシェルとの距離が遠くなる瞬間でもあった。

「シドニーさんは本当に他殺だったんですか？」

エリックは胸の苦しみをおして尋ねた。
ディックはエリックに限っては、警部から聞かれたことは答えてもよいという指示を受けていた。
それでも、警察の内部の中にはそのことを面白く思わない連中もいる。確かにエリックは一度は犯人と疑われた身ではあった。
ディックは思い切ったように言った。

「彼は検査の結果、多量のコカインを服用していました。おそらく、朦朧としたところを誰かに崖から突き落とされたか、何かしたのでしょう。争ったような靴跡も残っていましたから」

「一体、誰が……」

「シドニーはどうもコカインの密売をしていたようです。と言っても、一番末端の小者ですが」

「売人？　でも、ミシェルはシドニーさんとコカインの関係は本当に知らなかったと……」

「ええ。でも、警察は鵜呑みにはしていません。彼は親友のあなた

にも平気で嘘をつくような人物ですから」

その言葉は確かにエリックの耳に痛かった。エリックの心の目はまさに曇りガラスよりも曇っていた。

「パメラさんの死因もコカインだったんでしょうか？」

エリックは深く考えまいとするように核心をついた。

「彼女は……」

と、一旦言いかけて、ディック刑事はため息をついた。どこまで話してよいのか、彼自身迷いがあるからだった。

ディックは短い間瞠目すると、心を決めたように言った。

「彼女も常習していたと思われます。彼女の死後、誰かが意図的にその痕跡を消した形跡がありますが、警察を欺くことは出来ません。彼女のベッドサイドの引き出しから、微量の粉が発見されました」

「ベッドサイドの引き出し……」

エリックの手が急速に熱を失っていった。

ディックの声がまるでラジオから聞こえてくるかのように大きくなったり、小さくなったりを繰り返していた。

なぜか、こんな時にだけ、ミシェルの言葉がはっきり思い出される。

彼女が殺される前の夜……。彼はこう言った。

『また、電話をかけると思うんだ。もし、僕のいない時に彼女がかけてきたら、眠れるように少し話してやって欲しい。そして、ベッ

ドのそばの薬箱の一番上の引き出しに入っている睡眠薬を飲むように言ってくれないだろうか。薬が嫌いな人で絶対自分から飲もうとしないんだ』

エリックはたちまち混乱に陥った。

「エリックさん？　大丈夫ですか！」

エリックの動揺が尋常でないことに気付いたディックは「家まで送ります」と声をかけた。

ディックはエリックの体調を気遣ってか、車中では一言も声を発しなかった。

エリックは心の中に広がり始めた恐ろしい想像に何度も押し潰されそうになりながら、かろうじて正気を保っていた。

しかし、ディックの車が家に付く頃、その精神の砦も崩壊をきたした。

「ディックさん、警部を、警部を呼んでくださいませんか」

「警部ですか？　わかりました」

ディックは車を運転しながら、警察無線を操作した。彼が話している相手はどうやら、エレンのようだった。

「スミマセン、主任。エリックさんが警部に何か話したいことがあるそうなんです」

『警部は今、イーストボーンへ行っているわ。いいわ、代わりに私が行きましょう。それともこちらに来てもらったほうがいいのかしら？』

悲しい現実に直視する勇気をエリックは強く持たなければいけなかった。

たとえ、それが永遠の決別につながるとしても……。

エリックはディックに警察へ向かって欲しいと小さく告げた。

―3―

何もわからなくなって、心を閉ざせたらどんなにいいだろうとエリックは思った。
悲しいことも煩わしいことも、すべて無に帰せたら……。
子供の頃のエリックが今にも現れそうになる。
孤独と言う独房の中でたった一人で、消えそうな勇気を守り続けていた。
母の愛を勝ち得ることが出来ず、見えないその人に怒り続けていた。
ずっと頑張り続けた幼い子供……。
彼はいつのまにか大人と言う仮面を得、同時に自分に嘘をつく術を覚えた。それは格好のカモフラージュという盾になりエリックを守ってくれたけれど……。

「ミシェル……」

これが裏切りとすればこれほど残酷なものはないだろう。そしてそのダメージに見合うほどのスキルはまだ生まれてもいなかった。
こういう試練に遭う度にエリックは自分の弱さや脆さを思い知る。
エリックはそれでも自分を生きることを辞めるわけにはいかなかった。

ディックの車が警察署の中に入り、ゆっくり停止した。

（まだ、裏切りと決まったわけではない……）

エリックは最後の力で瞳に光を宿した。

「大丈夫ですか？」

ディックが心配そうに声をかける。
エリックは苦い唾液を飲み込んで、無言で頷いた。
シートベルトを外し、車を降りようとしたとき、ディックが希望を含んだ声で言った。

「あなたの心配はきっと主任が晴らしてくれますよ。僕の言葉と彼女を信じてください」

エリックは彼の言葉を覚えていようと思った。絶望に直面するためにはほんの少しでも希望と名のつくものが必要だった。

談話室に入った時、エレンは背中を向けて窓を見ていた。

「主任、エリックさんをお連れしました」

ディックが声をかけるとエレンは静かに振り向いた。
綺麗な細い金の糸の様な髪が肩にこぼれた。日の光の中で、金の粉が踊ったように見えた。
よく見ると、彼女の瞳の色が左右で微妙に違うのがわかる。

「瞳が……」

エリックは思わず問いかけるでもなく、呟いていた。
吸い込まれるような深い海の青にも似た左の瞳の色は決して光に透けることはなかった。

「義眼だったのか……」

それは独り言に近い呟きだった。むしろ、今まで気付かなかったこ

とが不思議にさえ思えた。
けれど、明らかにその色は人工の青であって、本来の美しい碧さではなかった。

「あなたの本当の目はどこに行ってしまったんですか?」

エリックは夢遊病者のように尋ねた。
エレンは視線を落とすと、静かに口を開いた。

「あなたは本当の恐怖を知っていて?」

「恐怖?」

彼女は頷くと、「孤独ではなく」と重く告げた。
エリックにとって孤独こそが恐怖の根源であった。エレンはそれよりもまだ暗い深淵があると言う。
エリックは言葉を無くしたようにただ首だけ横に振った。

「幼い私は自分で死ぬことも出来なかった。ただ、恐ろしさに声をあげ、泣き続けるより術をもたなかった……」

彼女の口から語られる彼女自身の過去は壮絶なものだった。
人の悲しみを比べることなど出来ないにしても、それはエリックの孤独を凌駕するに十分なほどの恐怖と言えた。
生みの親を殺されて、長い間スリープ状態にいた彼女は目覚めてからも悪夢に悩まされ続けていた。

実に、彼女の恐怖とはその頃のことを言った。
目覚めた彼女の目には意思に関わらずあまたの死霊が映った。
彼らのほとんどは原形を留めることなく腐り果て、くぼんだ眼窩の

みギラギラと生きとし生けるものを睨みつけていた。
彼らはエレンが『見える人間』だと知るや否や、彼女に憎しみの全てをぶつけるかのように彼女に取り付くようになった。
そして、彼女は原因不明の病をいくつも抱え、何度も生死の間をさ迷った。
彼女の精神状態は身体のそれよりも先に限界を迎えた。
そして、それを見守り続けた家族の心も……。

―4―

ある日、彼女はベッドの上で思った。この眼さえ、見えないようになったら……と。

そして、気がつくと、そばにあった果物ナイフの刃先を自分の眼に突き刺そうとしていた。

何も知らずに病室に入ってきた兄は驚いた。

「エレン！　馬鹿なことはやめるんだっ！」

「離して、兄さん！　私はこの眼が憎いの！　この眼さえ見えなくなったら、もうあんなに恐ろしい思いをすることもない！」

「だめだ！　エレン！　そんなことをしたら、一生、暗闇の中で暮らさなきゃいけないことになる！」

それでも、エレンは聞かなかった。兄を振り払おうとする力は、おそらく彼女自身だけのものではなかっただろう。

彼女に取り付いた死霊が彼女の眼を奪おうとしているのは明白だった。

もみ合うちに兄はエレンが何かに激しく抵抗していることに気付いた。

よく見るとさっきまで彼女の眼を狙っていたナイフの先は、いつのまにか彼自身に向かっていた。

おそらく、彼が少しでも力を緩めようものなら、容赦なくその切っ先は彼自身の心臓を突き刺すだろう。

エレンはそれを知り、非力な力で己の中にある邪悪なものと戦っていたのだ。

（兄さん、お願い……）

エレンの眼が心の底から訴えていた。
エレンに人殺しをさせてはいけない。
彼女の心の闇は今度こそ本当に彼女を飲み込んでしまうだろう。
兄はエレンの眼を見つめた。エレンの悲しげな瞳の中に、彼は悪魔が踊るのを見た。
そのとき、彼の心は決まった。
彼は渾身の力でエレンの手からナイフをもぎ取るとその瞳の中の悪魔に向かってナイフを突き立てた。

気絶しそうになる告白にエリックは息をすることも忘れていた。
息苦しさに深く息を吸い込むと言った。

「お兄さんを恨んではいないんですか？」

「恨む？　とんでもないわ。兄は私を救ってくれたのよ。私が出来ないことを代わりにしてくれただけ……」

兄ほど勇気のある人はいないわと彼女は続けた。

むしろ彼女は悔いていた。
兄にとんでもなく重いかせを背負わせてしまったことを。
取り返しのつかない過ちを兄に犯させてしまったこと……を。
兄が自分の義眼を見るたびに本当は居たたまれない気持ちになった。
新しい眼はエレンに平安をもたらした。
そのことをどんなに感謝しているか、けれど兄は、今も素直に受け入れきることは出来ないでいるのだ。
残った右の眼はエレンに従順だった。エレンはそれに己の一部になることを許した。

「お兄さんは？」

湧き上がる素朴な疑問に彼女は笑みをもって答えた。

「あなたのよく知っている人よ。ほら、すぐ後ろにいるわ」

エリックが勢い込んで振り向くとそこには相当苦い顔をした警部が立っていた。

「警部、まさか、あなたが……？」

「誰が父親ですって？　エリックさん、あなたは私がいくつだと思っているんですか？」

ディック刑事がその後ろで決まり悪そうに頭を掻いていた。失言を詫びるような表情だった。

「その、でもあなたは母の若い頃を知っていたし……」

エリックもしどろもどろな口調になった。

「兄さんは映画オタクだったのよ、子供の頃から」

そう告げたのはエレンだった。

「でも……」

腑に落ちないというエリックに、警部は天を仰いだ。

「実際、いくつなんですか？」

エリックの失礼な問いに「言いたくない！」と警部は即答した。その口ぶりにエレンが笑い、ディック刑事も苦笑いになった。

エレンにとっても、警部にとっても、先ほどまで語られていた重い真実はすでに過去のものなのだとエリックは気付いた。忘却のかなたに打ち捨てられて、必要な時だけ呼び起こす記憶のようなもの。

けれど、それでいて、なかったことに出来るほど生やさしいことではないのだろう。

エリックは自分の苦しみがあまりにも稚拙で脆弱なことを心から恥じた。

結局、警部はすぐに席をはずし、エレンも呼び出しの電話で出て行った。

帰りの車は、またディック刑事が買って出てくれた。

「あなたは知っていたんですか？」

エリックはシートにもたれながら尋ねた。

「主任のカコですか？　そうですね。生い立ちについては今日初めて聞きましたよ」

それにしては動揺がまったく見られないのが気になった。それを不思議そうに尋ねると、ディックはあっけらかんと言った。

「カコはカコでしょう？　確かに驚きはしましたがそれを知ったか

らと言って、私は何も変わりませんね。むしろ、尊敬の念を深めたって感じでしょうか？」

ディックの口調は軽かった。

「こういう仕事をしていると、もうたいていのことじゃ驚かなくなりますよ。上の人間はどうか知りませんが、現場に出ているものは人に言えない体験をいくつもしていますからね」

感覚がマヒしているのかな、と薄ら寒い笑みをもらした。
望むと望まざるに関わらず、災難はやってくる。運命という逃れがたい大きな力によって……。
ディック刑事はまっすぐ前を向いたままそんなことを言った。
誰にでもやって来るものではないけれど、やってこないとも限らない。
いくつもの『死』に向き合っていると、ふとそんなことを考えることがあると彼は言った。
弱い心ではとうてい勤まりそうにない仕事だなとエリックは思った。

「ところで、ご自分の用件はよかったのですか？」

不意に尋ねられて、エリックは俯いた。そして、くいっと顔を上げると「ええ、もういいんです」と明るい声を出した。

「あなたの言葉を信じてよかったな。僕も恐怖と戦う勇気が湧いてきましたよ」

（孤独という名の……）

「えっ？」と不思議そうな顔を一瞬エリックの上に走らせると、デ

ィックはまたもとの顔に戻った。
何事もなかったような沈黙が降ってきた。あんな重すぎる過去を聞いた後なのに、心地よかった。
エレンが他人よりも強いわけがわかった。鋼鉄のような心にならなければいられなかったわけも。
彼女は結局、運命を味方につけたのだろう。
そして、それは戦いに勝った者だけに与えられる一生の褒美なのだ。

哀しみのレクイエム　―1―

翌日、警部から電話があった。
取り次いだ母親は仕事の依頼と信じて疑わず、機嫌のよい声でエリックを呼んだ。
母親から代わった途端、偽編集者を演じていた警部は一転して重い口調で言った。

『昨日、何かありましたか？』

母親が部屋を出て行くのを見届けるとエリックはええと頷いた。

『やはりそうでしたか……』

警部は受話器の向こうで唸るように言った。

『エレンは滅多なことでは言いませんからね……』

それは小さな呟きのような声だった。義妹が第三者に自分の過去を話すのを初めて聞いたことを驚き、困惑しながらも受け止めようとしているのがしみじみと伝わってきた。
そして、警部は迷わず単刀直入に聞いた。

『エリックさん、ミシェルさんのことで何か思い出されたんですね』

いつもながら鋭い洞察力にエリックは彼が本物の刑事だということを改めて思った。
エリックは深く息を吸い込んだ。
迷い込んだ過去の迷路はますます複雑に込み入り、エリックは自分

の居場所さえもはや？めなくなっていた。
それでも少しでも出口に近づくためには苦しい道も突き進んで行かねばならないのだった。

「警部、パメラさんの死因はもしかして、コカインの多量摂取による服毒死ではないのですか？」

警部からすぐに答えはなかった。エリックは勢いだけで続けた。

「少し思い出したんです。あの夜、僕が彼女に何を言ったのか」

酒に酔って管を巻いているとばかりに話にも乗ってやらなかった。
それまでの同じ行為に辟易しきっていたから。
彼女が悪者だと決め付け、疎んじていたせいで……。
今思い出しても、辛そうな声だった。肉体的にというよりも精神的に限界が近いような声だった。

『どうしてあなたはミシェルの幸福の邪魔をするんですか？　彼のお姉さんなのでしょう？』

『姉だからよ、わからないの？』

彼女の声がリアルに耳に甦ってきた。
今まで何度も叩き続けた扉ではなく、別の扉が急に目の前に現れ、すっと開いたかのようだった。
一度も現れなかった記憶が、まるで沈黙を破るかのように混沌の澱みの上を静かに流れ始めた。

『あなたの言っている事は支離滅裂だ。こんな夜中に電話をかけてくるだけでも非常識だと思わないんですか？』

『あなたこそ、ミシェルの親友だって言うならあの子と早く別れさせて頂戴！』

根拠のない中傷を聞き続けることには限界があった。エリックはうんざりして受話器を少し遠ざけた。

一、ニ分、そうしていただろうか。

彼女は勝手に喋り続けていたが、その内容まではわからなかった。ただ、彼女は必死だった。もう数秒も我慢できないというギリギリの精神状態だというのはわかった。

どんなに有名で才能に長けた占い師でもどうにも出来ないことがあるのだろうとそのときは思っていた。

一方で、その執着に一種の狂気を覚えながら。

『どうして、どうして、あの子なのかしら……』

途中から、彼女はひとりの世界に入り込んでいるように思えた。

『どうして、あの子は私の邪魔をするのかしら』

『邪魔をしているのはあなたの方でしょう？』

腹立ち紛れにエリックが告げた。そのとき、彼女は確かに何かを言いかけて止めた。
喋り疲れたのだろうと勝手に解釈したエリックはここぞとばかりに、その台詞を言った。

『いいですか？　そばの薬箱の中に眠れる薬がありますから、それを飲んでおとなしく寝てください』

ミシェルから教えられた言葉だった。
彼女の受話器から音が無くなり、エリックは彼女が諦めたのだと思った。その無音に押される様にエリックは自分の受話器を置いた。
今を逃したら眠れなくなるというその一心だった。

―2―

エリックの回想を聞きながら、警部にはエリックの懊悩がすべて理解出来たらしかった。

『あなたはただの睡眠薬だと信じていたわけですね』

「ええ。疑いもしませんでした。昨日、ディック刑事に粉のことを聞くまでは……」

エリックは片手で顔を覆った。今考えても、それは恐ろしい真実だった。

パメラの死に自分が大きく関わっているかもしれないと思うと体が自然と震えた。

『わからないな……』

しかし、警部が考えているのは別のことだった。

『あなたはなぜ、昨日あの場所へ行ったんですか?』

エリックは戸惑いながらも、ディック刑事に話したと同じ理由を彼に告げた。

『ミシェルさんもシドニー氏も、あなたに見られてとても驚いたでしょうね』

「どうでしょう。でも、彼はとても慌てていましたね。ミシェルを突き飛ばすようにして、逃げて行きましたから」

『そのとき、かなりの紙幣がミシェルさんの手に残っていたんですね』

「残っていたというか、散らばっていました」

『正直のところ、そのことにあなたは何か疑問を持ちませんでしたか？』

警部は質問の手を緩めなかった。

「疑問は……持ちました」

『じゃあ、なぜ尋ねなかったんですか？』

エリックは興奮したように言った。

「尋ねましたよ！　でも、ミシェルが口を閉ざしたんです。あの頃、彼はパメラさんとルイーズさんの間で相当苦しんでいました。だから、またそのことで彼女の弟さんとも揉めているのかと思ったんです」

『その男とルイーズさんが似ていたので、あなたも彼の言葉を信じられたんですね』

「顔ははっきり見たわけではないんです。でも、ミシェルが嘘を言うなんて思いもしませんでしたから」

受話器の向こうで、警部が大きく息を吐くのがわかった。

『ミシェルさんはどうやら、シドニー氏に強請られていたようです。彼の銀行口座に多額のお金が残っていました。一方、ミシェルさんの銀行口座からは同額のお金が消えています』

エリックは耳を疑った。

「ちょっと待ってください。なぜ、ミシェルが強請られるんですか？　彼はアリシアさんの行方をミシェルと追っていたんでしょう？」

『彼の遺品の中に鍵があったことは覚えていらっしゃいますか？』

「ええ……。英国銀行の鍵だとか？　紫水晶が見つかったんですか！」

『残念ながら紫水晶はありませんでした。もっとも、すでに換金された可能性も考えられますがね』

「そんな……」

『実は、貸金庫の中から興味深いものが出て来ましてね』

エリックは固唾を呑んでその先の言葉を待った。

『シドニー氏がミシェルさんを強請っていた証拠と思われるものが数点、保管されていたのです』

「それは本当なんですか！」

エリックの声が大きくなった。

『ええ』

警部は短く答えた。

未だにルイーズとシドニーが点で重ならないエリックは、その事実を知りよけいにわからなくなった。

自分が見たもの、信じたものすべてを否定されることは、幻や夢と摩り替えられるよりもかなり辛い行為だった。

「それで、その証拠というのはなんだったんです」

簡単には答えてもらえないだろうことは承知していたが、とても聞かずにはいられなかった。

『新聞の切抜きです』

と警部は言った。

『最初、シドニー氏の遺体が発見された時、彼は身元のわかるようなものを一切身につけていませんでした。しかし、彼はとんでもないところに大事な物を隠していた』

「ズボンの裾に小袋を縫い付け、英国銀行の鍵を隠していた……」

『そうです。その中のものが彼をこの事件と結びつけたのです。彼がシドニー氏であることを証明しました』

エリックは不可解な顔で受話器を強く耳に押し付けた。

「その写真の記事は一体なんの記事だったのですか?」

『ある交通事故の記事です』

交通事故……。エリックにはさっぱり理解することが出来なかった。警部はエリックが尋ねるのを見越したように、話を変えた。

『実はその隠し金庫の鍵はミシェルさんが中身と一緒にシドニー氏に渡したものでした』

エリックは思い出した。ミシェルがエレンに聞かれてそう答えていたのを。

『そう考えると、どうもつじつまがあわなくなるんですよ。ミシェルさんが自分に不利になる証拠をわざわざ、脅している相手に渡すことは普通では考えられませんからね』

「あとからシドニー氏が入れたとは考えられませんか？」

『確かに、彼は後から入れたのでしょう』

エリックは焦れた。

「じゃあ、何が不可解だって言うんです？」

『紫水晶です』

「えっ？　でも、それは換金されたかもしれないって、警部が……？」

『そうも考えられると言いました。でも、実際、シドニー氏はお金に困っていなかった。あえて、紫水晶を手放す必要はどこにも無か

ったんです』

「警部！　はっきり言って下さい。　僕には全く理解出来ない……」

つまり、と警部は言った。

『誰かが、合鍵を作ったか何かして、隠し金庫から紫水晶を盗んだのです。そして、記事だけはわざと置いて行った』

エリックは声も出なかった。

『おそらく、ズボンの裾に小袋を作り、彼が隠したように小細工をしたのもその犯人でしょう』

「でも、どうやって？」

『シドニー氏を殺害したあとなら、誰でも簡単に出来ることです』

嫌な沈黙が流れた。犯人の意図も、警部の意図さえもわからなかった。

『エリックさん、実はとても言いにくいことなのですが、あなたが昨日、シドニー氏のアパートへ行かれたことでまた警察内部で揉めましてね』

沈黙を破った警部の言葉は衝撃などというものではなかった。

『彼のアパートを知っているあなたを捜査線上から外せないと言い出した警察関係者がいるのですよ』

エリックは何も言う事が出来なかった。反論する言葉が浮かばないと言うのが正直なところだった。

『それで、まもなく、ディック刑事とエレンが到着すると思います。彼らと一緒に、こちらへご同行頂けませんでしょうか』

「それは、僕が彼を殺したと思われているということですか？」

警部は笑っていった。

『あなたが犯人じゃないことくらい、我々は知っています。こちらの諸事情に応じてやるまでです。なに、心配要りません。あなたは我々が守ります』

力強い言葉ではあった。しかし、不安が消え去ることはなかった。

『お母様には、急に取材旅行に出かけることになったとでも言っておきなさい。大丈夫。あなたの嫌疑はすぐに晴れますから』

警部の言葉はやはり、何の慰めにも聞こえなかった。

パメラの死に関してなら、わかる。しかし、シドニーの事件にまで自分が疑われる理由がわからなかった。

「警察は見境無く、誰でも逮捕できるんですね」

エリックには珍しく冷たい声だった。

『逮捕ではありません。あくまでも任意で来て頂くのです』

パメラ殺しで疑われた時の嫌な記憶がエリックの脳裏にまた甦ってきた。

警部は真摯に彼を説得し続けた。

『エリックさん、パメラさんが殺された事件とシドニー氏の事件は全くの無関係ではないでしょう。しかし……』

警部の声が厳しさを増した。

『二人を殺した犯人は同一人物ではないのかもしれない。つまり、一人の人間とは限らないのです』

エリックの頭の中がすーっと冷たくなっていくのがわかった。

彼は冷たく硬直した手を見つめた。震えは目に見えるほど、はっきりと大きくなっていった。

警部からの長い電話を切ったあと、しばらくして二人の刑事が玄関のベルを鳴らした。
エリックは母親に、急に取材旅行に出かけなければならなくなったと警部からの助言をそっくりそのまま告げると、おとなしく彼らの車に乗った。

「馬鹿な話ですよ」

と車に乗り込んだ途端、ディック刑事が言った。

「一体、上は何を考えているのか……」

上というのは、警部よりもさらに上の階級の人間達を指すのだろう。

「いつも、そいつらに振り回されるのは我々ですよ。あっ、エリックさんの無実は我々が命を懸けても証明しますからね」

彼の明るさは今のエリックには救いだった。
ディック刑事は車内でとにかく冗舌だった。自然と重くなる空気を一番気にかけているのは彼ではないかと思った。
エレンは後部座席で腕を組んだまま目を閉じていた。
もちろん、エリックは車に乗り込んでから、まだ一度も彼女の声を聞いていない。

「警察内部に、この事件を早く片付けてしまいたい奴らがいるんですよ」

ディック刑事は軽い口調から一変して、忌々しそうに言った。

「ディック刑事！」

エレンが咎めるような固い声を出した。

「だって、そうじゃありませんか。お門違いもいいところでしょう？　エリックさんをシドニー殺しで引っ張るなんて……」

少しその口調を変えてディックは続けた。

「昨日、エリックさんにあの現場で会ったことを報告書に書いたのは俺です。俺が余計なことをしなければ……」

「あなたの責任じゃないわ。どちらにしても、彼らは無実の人間を早急に逮捕したでしょう」

「どういうことなんですか？」

信じがたいエレンの言葉にエリックの顔色が変わった。

「バックに大物がいるかもしれないんですよ。この事件に関しては、署内でさえ極秘事項が多すぎて、上層部がピリピリしているのが嫌でも伝わってきますからね」

しかし、どんな事情があるにせよ、そんなことは許されることではない。

「でも、心配いりませんよ。あなたには警部と彼女がついている。最強の味方をつけたと大船に乗ったつもりでいてください」

「さぁ、それはどうかしら」

ディックの言葉にエレンが思わぬ異議を唱えた。

「えっ？」

二人は同時に振り向いた。

「絶対というものはこの世にはないわ。少しのミスが大きな命取りになる」

それはディック刑事にとって、気を引き締めるには十分な言葉だった。

そして、エリックには……。

「だけど、それは相手にとっても言えることだと言うことを忘れないで」

エレンが何を言おうとしていたのか、その時点ではまだわからなかった。

しかし、数時間後、エリックはその深い意味を知ることになる。

―4―

警察署に到着したエリックを待っていたのは、苛烈な現実だった。
まず、連れて行かれたのはパメラの時のような応接室ではなく、明らかに取調べを行う、暗く狭い部屋だった。
しかも、その場でエレンとディックは他の刑事たちに連れ出され、残されたのは見知らぬ刑事とエリックただ一人だった。

「あなたが、エリック・サザーランドさんですね」

鷹の目のような鋭い目をした男だった。彼は自分の名前をグレッグ・シーモアと名乗った。
警部とはまた違ったオーラをその男は纏っていた。
おそらく普通の人間なら、彼と同じ部屋にいるだけで、萎縮して、自分を見失ってしまうだろう。
しかし、エリックは違った。彼が怖いものは人間ではなかった。

「ハワード警部はどこです？　彼になら全てを話しますが、あなたに話すことは何もありませんよ」

「それはどういうことですか？」

顔に似合わぬ、穏やかな声で彼は尋ねた。

「僕の知り合いにはこの世界では最も有能な弁護士とマスコミに通じる新聞社の人間がいます。もし僕に根拠の無い疑いをかけようものなら、彼らがまず黙っていないでしょう」

「我々を脅そうというのですか？」

「脅しているのはそちらでしょう。僕は公明正大、神に誓って、シドニーさんの事件とは関係ありません」

「それは、パメラさんの事件には少なからず関係があるということなのでしょうか？」

誘導尋問に近い質問で追い詰められたエリックは臍を噛んだ。

「あなたはあまりにも知りすぎていらっしゃる。それだけでも嫌疑を受ける正当な理由にはならないでしょうか」

刑事は涼しい顔で続けた。

「警察は確証も無いのに無実の人を罪に陥れたりはしませんよ。ただし」

黒光りするエナメルの靴が空を切りながら、もう一つの足に組まれた。

「疑わしい人間はとことん調べ上げる、それが我々の仕事なのでね」

それから、二人の根競べが続いた。エリックは決して信用のならない人間に語るつもりはなかった。

そもそも、警察というものが信じられなかった。権力を嵩に着た人間の集まりだとしか思えなかった。

今でこそ、信用に足りる人間もいることがわかったが……。

「エレノア刑事とハワード警部を高く買っているのですね」

違う視点から攻略を試みようとしたのか、グレッグ刑事は話題を変えた。

「少なくともあなた方よりは」

けれど、エリックの答えはそっけないものだった。

エリックが想像以上に口が堅いことに、グレッグ刑事は正直、イライラし始めていた。

そして、彼は一つの賭けに出た。

「彼女の眼の事はご存知ですか？」

それは唐突な質問だった。

エリックはひたと目の前の刑事を見つめた。

「ええ。エレン刑事から直接伺いましたので」

グレッグ刑事は意外そうに目を細めると「その理由も？」と尋ねた。

「もちろんです。でも、それがこの件とどう関係があるんです？」

グレッグ刑事は意味深な笑みを洩らすとエリックに言った。

「彼女は占い師殺人事件の犯人はミシェル・ゴードンではないと言い張っていましてね。どうやら、彼女の眼に今回は亡者は見えないらしい」

「亡者？」

「そのこともう、お聞きになっているのでしょう？　我々は彼女の眼を『悪魔の眼』と呼んでいるのですよ」

蔑む様な言い方にエリックは大いにムカついた。しかし、エリックは彼女のために耐えた。

「でも、その『悪魔の眼』のおかげであなたたちは恩恵を被っているのでしょう？　悔しかったら自分達で犯人を検挙すればどうです？」

エリックは容赦なく続けた。

「無実の人間をいたぶっている暇があったら、さっさと動いたらどうです？」

これには冷静沈着を保っていたグレッグも頭に来たのだろう。ダン！と一際大きな音を立てて、組んでいた足を解いた。

「我々を甘く見ていると酷い目に遭いますよ」

「それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味です」

もう、グレッグの顔は笑っていなかった。

「あなた方が知りたいのは真実ではないのですか？　犯人を捕まえたいのでしょう？」

当たり前だ！とグレッグ刑事は眉を逆立てた。

「だったら、何故彼女の言葉を聞かないのです？　排除したりするんです？　それこそ、馬鹿げている！」

グレッグは忌々しそうに頭を掻き毟ると、突然立ち上がり、取調室のドアを開けた。

「オイッ！　エレノア刑事とハワード警部を呼べ！　今すぐにだっ！」

ドアの向こうに待機していた警官が慌てて返事をし、廊下を駆けて行く音が聞こえた。

「今回だけはあなたの意見に従いますよ。但し、あなたの嫌疑が晴れたわけではありません。ミシェル氏も同様です」

そう言うとグレッグ刑事はドアの外へ消えた。

尋常ではない緊張感から開放されても、エリックはしばらく動けなかった。

ただ、正義だけが彼の源だった。

―5―

「どんな魔法を使ったんです？」

部屋に入ってくるなり、警部が開口一番に尋ねた。

グレッグ刑事が、今まで取調べた人間で落ちない者はいないと言われたほどのやり手と聞いて、エリックは少しだけ頬を緩めた。実際、まだ震えは完全には治まっていない状態だった。

「彼は異常にエレンに対して競争意識を持っていましてね。それで、かなり我々はやりにくい状況に陥ってしまうわけです」

警部は疲れたような表情を見せた。

「エレンさんの眼のことも知っているんですね」

二人とも、そこまでグレッグ刑事が喋ったこと自体、信じられないような様子だった。

「グレッグは私と眼も合わせたことがないわ。気持ち悪がっているのか、怖がっているのかどちらかだろうと思っていたけど、本当は羨ましかったのかもね」

彼女は機嫌よさそうに笑った。

「警察内でグループで反目し合っているということなんですか？そんなのでよく、犯人を逮捕出来ますね」

エリックは呆れたように言った。

「面目もない。しかし、今回はそれだけでは、どうも終わらない様相なのです」

警部は椅子に座るとおもむろにポケットからあるものを取り出した。

「これは……」

「ミシェルさんがアリシアさんに贈ったといわれる婚約指輪です」

「パメラさんから、ミシェルが取り返したという？」

「そうです」

「これが何か？」

エリックは顔をしかめて警部を見た。

「実はこの指輪が署内の保管庫から一時、紛失していたのです。それが、昨日、突然出て来たんですよ」

「どういうことですか？」

エレンが警部の代わりに答えた。

「誰かが指輪を持ち出し、また元に戻したのよ」

「なんのために？」

「おそらく、摩り替えるためにでしょう。実際、よく似ていますが

本物ではありません」

エリックはわけがわからなくなった。

しかし、警部が告げる不可解な事象はそれだけに留まらなかった。

「わからないのは、なぜ、本物そっくりではなく、あきらかに偽物とわかるような物に替えたのかということなのです」

その指輪は型も石も本物と同じで、指輪の中のイニシャル等も同じなのだが、ただ一つ、明らかに偽物とはっきりわかる違いがあった。傷一つない、まっさらの新品だったのだ。

「これでは誰かが摩り替えたことはあまりにも明白ですし、意図が全くわかりません。我々、警察を愚弄しているのか、捜査を混乱させるために誰かが画策したのか……。少なくとも、署内の中にそれを行った人間がいるということだけは確かなのです」

「だから、シャーク、いえ、グレッグ刑事たちもピリピリせざるを得ないというわけなのよ」

シャークか……。言いえて妙だなとエリックは思った。

警部は、エリックがこの署内の親しい誰かに頼んで指輪を盗み出させ、ミシェルの不利にならないよう、何か細工をしたのだろうと疑われていた事実を告げた。

事実、エレンは、ディック刑事共々、別の部屋で隔離され、その共犯として取調べに似た尋問を受けていたことをバラした。

「信じられない……」

エリックは大きく首を横に振った。

「警部は一体、何をしていたんですか！」

エリックの怒りの矛先は、当然、警部に向かった。

「まぁまぁ、全員疑惑は晴れたわけだし……。今頃、彼らは地団太を踏んでいるはずです」

警部はあっけらかんと言った。

「僕の嫌疑も晴れたんですか？　グレッグ刑事はまだ継続中だと言いましたけど……」

「それですが」

と、警部は慎重な顔をエリックに向けた。

「パメラさんが電話をかけてきた夜、あなたは睡眠薬を飲むよう、彼女に言ったのですね？」

「はい。眠れる薬がベッドのそばの薬箱の中にあると聞いていたので……」

「それはミシェルさんが仰ったのですね？」

エリックは少しためらいながら頷いた。

「パメラさんが薬が嫌いで、自分からは決して飲まないから……と」

警部は眉を寄せたまま、言った。

「エリックさん。実はここにあの日の通話記録があります。最後に彼女がかけたのは確かにあなたでした」

警部が一枚の紙をテーブルに広げた。

「通話時間を見てください」

エリックは警部に促されるまま、その紙を凝視した。

「3時間って？　ありえない……！」

確かにパメラは自分の言いたいことばかりを長い間喋っていた。しかし、それでも一時間くらいでしかなかっただろう。

「僕が電話を切った後も彼女は受話器を握っていたというんですか？」

「そこなんですよ。あなたは薬を飲むよう彼女に告げた後、彼女がおとなしくなったといいましたね？」

「ええ。音がなくなったと言うか、急に静かになりました。だから、僕は受話器を置いたんです。とても眠かったので」

警部は大切なことを告げるようにエリックをまっすぐ見つめた。

「おそらく、その時刻、彼女は誰かの手で殺されたのでしょう」

エリックは息が止まりそうになった。

「じゃあ、僕が彼女を……」

しかし、警部はゆっくりと首を振った。

「彼女は大量のコカインを摂取していました。しかし、口からではありません。ここからです」

と、警部は自分の腕を指し示した。

「注射？　まさか、彼女が自分で？」

「それならば、注射器が残っているはずです。しかし、容器も針さえもどこにもありませんでした」

「一体、誰が……？」

本当にわからないのは、ここからだと警部は言った。

「彼女の直接の死因はしかし、それではありませんでした。彼女はそのあと誰かに首を絞められて殺害されたのです」

『二重の殺人』という言葉がエリックの脳裏を過ぎった。

「では、犯人は二人いると？」

警部は目を閉じるとかすかに首を横に振った。

「それはまだわかりません。彼女に注射を打った人間が、用心のためにもう一度戻ってきて、彼女の首を絞めたのか、それとも、注射

を打った人物と絞殺した人物は別なのか……」

「どちらにせよ、首を絞めた人物が受話器を戻したことは確かだと思うわ」

それまで黙って聞いていたエレンが口を挟んだ。エリックはその時、なぜか、グレッグ刑事がふと洩らした言葉を思い出した。

『彼女は占い師殺人事件の犯人はミシェル・ゴードンではないと言い張っていましてね。どうやら、彼女の眼に今回は亡者は見えないらしい』

「エレンさん、あなたは最初から、僕だけじゃなく、ミシェルも犯人ではないとわかっていたんじゃないんですか？」

しかし、彼女は少し苦そうに唇をゆがめると、「そんなことはないわ」と言い切った。

「でも……」

エリックが彼女の眼がそれを証明しているのではないかと尋ねようとしたときだった。

「警部！」

慌しく叫んで、ディック刑事が取調室に飛び込んで来た。

「どうしたっ！」

警部の顔は真剣だった。

「ライアン・マクレガーが行方を晦ましました！　今、必死に行方を追っているところです！」

エレンの顔がみるみる真っ赤になっていった。

「グレッグ刑事達は何をしていたのっ！　あれだけ、彼には見張りを付けて置くように言っていたのに！」

エレンが風のように部屋を出て行き、ディックも急いで後に続いた。

―6―

警部はしばらく目を閉じていた。
その姿からは声を掛けずらい雰囲気が満ちており、エリックもしばらく沈黙を守らざるを得なかった。
警部はゆっくりと目を開けると静かに言った。

「ライアン氏は最初我々がマークしていたのです。しかし、突然、上からの命令でグレッグの班に代わる事になったんですよ」

それがどういうことを意味するのかエリックにはよくわからなかった。

「彼は限りなくクロに近い男でした。事実、彼には様々な疑惑がありましてね」

警部は続けた。

「パメラさんの事件があまり公にならなかったのは、警察に彼の父親の圧力がかかったからです」

エリックはいぶかしげな顔をした。

「ライアン氏はさる要人の子息なのですよ。しかも、唯一の嫡子ときている」

警部はテーブルの上で固く手を組むと何かを睨むように一点を見つめながら、言った。

「実は彼は前にも人を殺していましてね」

「本当ですか？」

エリックはやっと言葉を発した。

「ええ。十代の頃のことです。しかし、彼は幸運にも刑を免れた」

警部の目に昏い感情が映った。しかし、次の瞬間には彼は元の彼に戻り、申し訳なさそうに言った。

「あなたはパメラさんとの通話記録を調べた段階でシロだということはわかっていました。ただ、ミシェル氏との交友関係の深さから、完全に外すことは出来なかったのです」

「警部はパメラさんを殺した犯人とシドニーを殺した犯人は別人かもしれないと仰いましたね？」

「ええ」

「じゃあ、警察はミシェルとライアンの二人が怪しいと考えていると言うことなんですか？」

警部は答えに窮しているようだった。

「そう一概には言えないのですよ、エリックさん」

警部は立ち上がると言った。

「この事件には不可解なことが多すぎるのです。そもそも、何故、

パメラさんが殺されなければならなかったのか、我々はもう一度原点に返って調べ直さなければならないでしょう」

「送りましょう」

と言う警部の申し出をエリックは丁寧に断った。そうでなくても、今は行方不明のライアンの捜索に猫の手も借りたいほど忙しいはずだった。

「警部」

エリックは警察署を出る時、思い出したように尋ねた。

「パメラさんが言ってた『あの子』というのは誰のことかわかりましたか?」

警部は一瞬、眉を寄せ、「ああ」と言った。

「さぁ、エリックさんはわかったのですか?」

エリックは自分に質問を投げ返されて、戸惑いながらも、思ったことを答えた。

「思い返してみたんですが、僕はやっぱりルイーズ、いえ、シドニーのことじゃないかと思うんです」

「どうしてそう思うのです?」

警部は興味深そうに尋ねた。

「なんとなく、としか言えないんですが……。ただ、パメラさんが僕に再三言っていたのを思い出したんです。『親友ならあの子と早く別れさせて頂戴』と……」

警部はしばらく考え込んでいたが、急に何かを思いついたように、別れの挨拶もそこそこに署の中へ戻って行った。

そして、バス停に向かうエリックの前に一つの影が立ち塞がった。

「グレッグ刑事……」

目の前に立ち塞がるかのように現れた刑事に、エリックは知らず知らず、後ずさっていた。

「どうしてここに？」

グレッグ刑事はエリックの心中を読んだように笑みを持って答えた。

「ああ、ライアン氏ですか？　彼なら、部下達が鋭意捜索中ですよ」

そんなことより、と彼は言った。

「もうお帰りですか？　それなら私がお送りしましょう」

「結構です」

エリックはグレッグ刑事の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで即答した。

「何故？」

「なぜ？　それはこちらのセリフです。第一、あなたに送って頂く理由がありません」

エリックは彼の威圧感に負けまいとして、精一杯胸を張った。

「理由ならあります。私はあなたにとても敬意を表しているのです。あなたは私が落とせなかった二人目の人間ですからね」

一人目の人間については、なんとなく想像できるような気がした。

「本当に結構です」

エリックはそう言って、彼の横を通り抜けようとした。

「警戒しているのですか？　まさか、私があなたを拉致するとでも？」

「まさか！」

とエリックは大きく振り向いた。そして、彼のところへ戻ってくると言った。

「僕は得体の知れない人間の車には乗りたくないだけです」

「エレノア刑事の車には乗っていたのに？」

「彼女は得体が知れなくありません！」

エリックはムカムカする腹立ちを抑えるのにやっとだった。

そんなことより、どうして、彼がそんなことまで知っているのか、考えると奇妙に思えた。

「実は警部たちが知らない事実をあなたに教えてさしあげようかと思いましてね」

彼の背後には黒のジャガーがまるで獲物を狙っているかのごとく待機していた。乗ってはいけないと警告するもう一人の自分の声が聞こえていた。

しかし、彼の握っている証拠を知りたいと言う欲望には勝てなかった。

「わかりました。ただし、あなたを信用するわけではないですからね」

「そんなに私は信用がありませんか？　彼らよりも？」

馬鹿かとエリックは思った。たった今日一日で知り合った彼と警部たちが同じラインに乗れるはずもなかった。

しかも、グレッグの容疑者リストから、未だに自分は消されてはいないのだ。

「本当のお坊ちゃんでここまで上り詰めて来たんだろうな。彼の周りの人間がどれだけ無能かわかる気がする」

エリックは小さな声で呟いた。

「何か、言いましたか？」

「いいえ、何も」

エリックは辛らつな言葉を胸にしまい、彼のジャガーに乗った。

―7―

「警部たちが知らない事実って、何なのです？」

エリックは車が走り出すまでに尋ねていた。

「まぁ、まぁ、お宅に着くまでに、ゆっくり教えてさしあげますよ」

グレッグ刑事は今にも鼻歌でも歌い出しそうに見えた。

実際、取調室で対したときの彼とはまるで別人のようだった。しかし、どちらが本物の彼かと言われると、エリックは取調室の眼光鋭い彼のほうが本物ではないかというのが偽らざる感想だった。

それほど、今の彼に「シャーク」と言う称号は似ても似つかず、エリックはある意味、落ち着かなかった。

「あなたはまさか、僕とドライブをしたかったわけではないんでしょう？　だったら、早く用件を言って下さい！」

エリックの焦りに気付かないように、グレッグは「そうか、それもいいですね」ととぼけたことを言った。

「ドライブか……。何年ぶりだろう。僕は友人がいなくてね。こうして誰かと喋りながら運転するのは初めてなんですよ」

嘘だろう？　とエリックは思った。友人がいないというのは、妙に納得がいったが……。

「エレノア刑事の運転はものすごく乱暴だと聞きました。あなたもそう思いましたか？」

事件とは全く関係のない話ばかりする彼に、エリックは本気で焦れ始めていた。

「グレッグ刑事、あなたは僕をからかっているんですか。最初から話す気がなかったのなら、もう僕は降りますよ」

そう言うと、グレッグ刑事は初めてムッとしたような表情になった。

「わかりましたよ」

さっきまでの機嫌よさはどこへ行ったのかと思うほどの不満そうな声を出すと、彼は背広の内ポケットから、一枚の紙をエリックの前に差し出した。

「なんですか、これは？」

エリックは怪訝な顔をして、その一枚の白い紙を見つめた。それは、出生許可証の写しだった。

「偽造でも、他人のでもありませんよ」

正真正銘、自分のだと彼は言った。それは一見、普通の出生記録に思えた。

エリックは困惑を深めながら尋ねた。

「これが、何か問題でもあるのですか？」

「父親の氏名を御覧なさい」

グレッグはまっすぐ前を見て、運転しながら言った。
父親の欄には『ダグラス・マクレガー』と書かれていた。どこかで聞いたことのある名前である。
エリックは次の瞬間、大きな声を出していた。

「あっ、まさか、マクレガー法務長官！」

「驚くのはそこですか……」

グレッグ警部は意外にもがっかりしたように眉を下げた。

「違うんですか？」

「いえ。間違ってはいませんよ」

その声はどことなく投げやりに聞こえた。

「でも、本当に驚いて欲しいのはそこじゃありません」

父親が法務長官というだけでも驚きなのに、これ以上まだ何があるのかとエリックは思った。そして、その考えは唐突にエリックの脳裏に割り込んできた。

「そんな、まさか」

「そのまさかなんですよ」

軽い口調とは裏腹に、その声は決して明るいものではなかった。

「ライアン・マクレガーは私の兄です」

確かにライアンの父は国の要人だと警部から聞いたばかりだった。でも、確か、唯一の嫡子だと言わなかっただろうか。エリックの疑問は、けれど、口から出て行くことはなかった。そのかわり、もっと重要なことを彼は問いただした。

「じゃあ、やっぱり、あなたがライアンを逃がしたんですか！」

「まさか！」

グレッグは、それこそ馬鹿馬鹿しいと言うように鼻で笑った。

「私もそこまで愚かではありませんよ」

と彼は言った。そのあと、短い沈黙が車内を包み込んだ。

「結局、あなたは何が言いたかったんですか？」

エリックは重い空気を蹴破るように言った。

「何って？　それだけですよ。それだけ。驚いたでしょう？」

確かにエリックは驚いた。しかし、今日の今日まで驚くことがあまりに多すぎて、自分でもどれに一番驚いたかもわからなくなっていた。

エリックが考え込んでいると、グレッグ刑事がいかにも感心したような声で言った。

「あなたは本当に変わっている。今まで私の知っている人間にはいなかったタイプの人だ」

他人に面と向かって変わっているなどと言われたことのないエリックは憤慨したように言った。

「それはあなたの世界が今までそれだけ狭かっただけなんでしょう！」

しかし、その言葉を大いに気に入ったらしいグレッグ刑事は反対に目を輝かせた。

「そうか！　そういうことだったのか。いや、あなたの言うことは一理ありますよ」

何が嬉しかったのか、グレッグは突然、エリックに事件に対する自分の仮説を話し始めた。

「ちょっと、待って下さい。僕はパメラさん殺しの容疑者の一人になっているんじゃないんですか？」

「ああ、それなら、今、解除します」

彼はそう言うと、どこかへ電話をかけた。どうやら、自分の部下にエリックをマークから外すように指示しているらしかった。

彼は電話を切ると満足したように微笑んだ。なんとも、複雑な笑顔だった。

それは、およそ、シャークと呼ばれる人間らしからぬ、あまりに爽やかな笑顔だった。

「いったい、なんなんだ」

エリックはぼそっと呟いた。

「何か言いましたか？」

「いえ、何も」

『彼は相当に地獄耳らしい』と言うことも、エリックは心の手帳に新しく付け加えた。

―8―

翌日の午後、警部は朗報を持って、エリック宅を訪れた。しかし、扉を開けたエリックの顔はどことなく憂鬱気だった。

「お母様はお留守ですか？」

「ええ」

メリッサに用事なら、近くの教会へ慈善事業の一環のバザーの手伝いに行っているので、そちらへどうぞ、とつれない声音でエリックは言った。

「いや、お留守ならいいんです。実はあなたにいいお知らせをしようと思ってやってきたのですが……。今日はやけに機嫌が悪いんですね」

警部はとりあえず、家の中に入ると、テーブルの上に飾られた、真っ赤な薔薇の花に目を留めた。

「見事な薔薇ですね。あなたのファンから？」

まさか、とエリックは皮肉な笑みを洩らすと、意外な名前を告げた。

「なんですって？」

警部は自分の耳を疑うかのように、もう一度尋ねた。

「だ、か、ら。グレッグ刑事から、母へのプレゼントだそうですよ。

今朝、花屋がそう言って持って来たんです」

「なぜ、彼が？」

警部はキツネにつままれたような顔をして、エリックに詳細を求めた。エリックは何度もため息をつきながら、前日の理解しがたい出来事について話した。

警部の驚きようといったら、半端ではなかった。

「グレッグが話したのですか？　ライアン・マクレガーの弟だと？　本当に、自分からそう言ったのですか？」

警部はグレッグ刑事の出生については、スコットランドヤードでも極秘中の極秘扱いだとエリックに語って聞かせた。

しかし、エリックは「そんなことは知りませんよ」とそっけなく言うと、寝不足気味の頭を掻いた。

「こんなことなら、昨日は警部に送ってもらうんでしたよ。あれは『シャーク』じゃなくて『スネーク』ですね。まぁ、言うことを聞かないったら、ありませんでしたよ」

そう言って、エリックはグレッグが家の中まで入ってきたことを告げた。

「あなたやエレンがうちに入って、どうして自分がダメなのか、相当、こだわりましてね。いや、あれは拗ねてるといった方がいいかな。もう、母親に会わせろの一点張りですよ」

それまで、あっけにとられて聞いていた警部は、思わず口を出していた。

「母親って、もしかするとメリッサさんのことですか？」

もしかしてもしなくても、あの人以外にはいませんよ、とエリックは不足そうに言った。

「どうして？」

「どうして？　ハッ、彼もまたうちの母のファンだったってだけですよ」

エリックの吐き捨てるような言い方にも気にせず、警部は続けた。

「グレッグ刑事が！　ありえない。彼はまだ、２７歳ですよ」

「警部だって同じようなものじゃありませんか？　彼も相当の映画マニアらしいですよ、って、ちょっと待ってください！　グレッグ刑事が２７歳って、本当ですか？」

「え、ええ」

エリックの勢いにひるんだように警部が頷いた。エリックは少し、考え込んでいるようだった。

「じゃあ、ライアン氏はいくつなんですか？」

「彼は確か、３６くらいだと思います」

「とすると、１０歳も離れている兄弟なんですね……」

しかし、警部が気になるのはそのことではなかった。

「それで、彼はどう言ってお母様に自分のことを紹介したんですか？　まさか、本当の刑事だなんて言わなかったでしょうね？」

エリックは「ああ、それなら」と言った。

「彼は最初、警部たちが編集者の人間と語ったと言うと、自分は編集長を名乗ると言って聞かなかったんですが、それでは母に疑われるのは目に見えていますからね」

「編集長……。彼が考えそうなことです」

警部はそう言うと少し笑顔になった。

「で、なんと名乗ったのです」

エリックはあからさまなため息をつくと、ものすごく嫌そうな顔をした。

「作家仲間だと」

「は？」

「ですから、僕の友人だと言ったんですよ！」

「信じられない……」

警部はゆるく首を左右に振った。

「僕のほうこそ、信じられませんよ。僕はあんな強引で、我侭で、図々しい人間を見たことがない！」

あなたの妹さんも相当だと思いましたがね、とエリックは皮肉を言うのを忘れなかった。警部はそれほど、エリックが混乱しているのだろうと思った。自分でさえも、グレッグ刑事の行動や言動は理解しがたかった。

しかし、全くわからないでもないというのも警部の正直な感想だった。

「あなたには、災難だったとしか言いようがないですね」

「全くですよ」

エリックは、昨夜はあれやこれや考えて寝付けず、結局寝不足気味になり、気分も最悪状態だとぶつぶつ文句を言った。

「それで、納得しましたよ。昨日、あなたが帰られたあと、しばらくして、急にあなたの容疑が消えたとされる旨の文書が各班に届きましてね。早速、あなたにもご報告しなければと思って、こうしてお邪魔したわけなんですが。そうですか、彼だったんですね」

エリックは車の中での彼の行動を思い出していた。

「それで、彼の仮説というのはどんなものだったんですか？」

警部はグレッグが語ったこの事件の仮説というものに大いに興味を持った。

「彼は取り調べに関してはどうか知りませんが、推理に関しては最

低のレベルですね」

それは、かなり辛らつな批評だった。

「それは、どういう意味ですか？」

「もう、話にもなりませんよ」

エリックはそう言うと忌々しそうに続けた。

「彼はパメラさんもシドニーも殺したのはミシェルだって言い張るんですよ。現状証拠からして、それしかありえないって」

確かにその説は署内の大半の意見だった。

「でも、おかしいじゃないですか？　パメラさんには他にも恨んでいた人がいるかもしれないし、シドニーだって、強請りまがいのことを他にもしていて彼を殺したいと思っている人物は別にいたかもしれないでしょう？」

「それはそうですが……。でも、ミシェルさんは自分で出頭して来たのですよ」

「でも、自供はしていないんでしょう？　だったら、誰かを庇うだけだったかもしれないじゃないですか」

その誰かと言うのはエリックであり、シドニーだった。

「ライアン氏はどうなんですか？　彼はかなり疑わしい人物なのでしょう？　そんな胡散臭い人物の身内がこの事件に関わること自体、

間違っていませんか？」

そのことについては警部も多くを語れなかった。

「あなたの指摘は最もだと思いますよ。しかし、ライアン氏に関しては、グレッグ刑事も今回は自重をしているはずで……」

しかし、エリックが警部の失言を見逃すはずがなかった。

「待って下さい。自重って、何ですか？　今回はって、前にもそんなことがあったんですか？　というか、こういうことはよくあることなんですか？」

警部は黙ってしまった。

「警部！」

エリックのいつになく厳しい声に警部は渋々、口を開いた。

―9―

「ライアン氏はどちらかというと、そこいらのチンピラというよりは知能犯的なことをしでかす男でしてね。結婚詐欺、商品先物取引詐欺等、あらゆる詐欺に手を染めています」

「職業は一体、何なのですか？　僕には車のディーラーをしているみたいなことを言っていましたが……」

「あぁ、肩書きは腐るほどあるでしょうね。実際、嘘がほとんどですが」

「典型的なペテン師なんですね」

「ペテン師って言葉ももったいないようなヤツですよ。彼は人も場合によっては平気で殺せるような人間です」

警部がライアン氏に対して相当、悪感情を抱いていることだけは確かだった。

「で、グレッグ刑事がそれに加担していたってことなんですか？」

警部は苦笑いになると言った。

「そこまではないと信じていますが、怪しい部分はたくさんあります。たとえば、ライアン氏を起訴に出来る証拠物品が無くなったり、張り込み中に逃げられたり、彼を追跡しようとした警官が自動車事故にあったり……」

「でも、それだけでは彼を疑うことは出来ないんじゃないですか？」

「確かに。でも、今回のようにライアン氏が関わる事件になるといつも途中でグレッグ刑事の班が出張ってくるのです。我々は一応、これでも公僕ですから、上の命令には従うより仕方ありません」

「そして、いつのまにか、ライアン氏の罪はうやむやになる……？」

警部は深く頷いた。

「でも、それが事実だとしたら大変なことじゃないですか！」

エリックは言った。

「糾弾は出来ないんですか？」

「無駄です。それに、証拠がありません。本当にグレッグが関わっているかどうかは実際、我々にもわからないのです。ただ、限りなく怪しいとしか……」

エリックも率直なところ、彼がそういうことを出来る人物だとは思えなかった。確かに、性格はかなりの難ありには違いないが、とても、曲がったことをする人間には見えなかった。

（それでも、人は見かけだけでは判断できないし……）

それは今回、エリックが一番身を持って経験したことである。

エリックは急に無口になった。そして、本人に直接聞けなかったことを思い切って、警部に尋ねた。

「警部はライアン氏がこの国のさる要人の唯一の嫡子だと言いましたね。グレッグ刑事とライアン氏の父親は同じだとすると……」

警部はとても複雑そうな表情を見せると「あなたは記憶力が良すぎるのが欠点かも知れませんね」とわけのわからないことを言った。

「そうです。グレッグ刑事は彼の父親が別の女性との間に産ませた非嫡子です」

その女性はグレッグ刑事が父親に引き取られてすぐに、亡くなっています、と彼は続けた。

「引き取られたって？」

警部は自分の重荷を下ろすように、エリックに語り始めた。

「グレッグは7歳の頃まで、母親と二人暮らしでした。それまで、父親は彼らに援助を申し出たことも無かったし、母親もグレッグと二人で生きることに不満はないようでした。むしろ、彼らはとても幸福に暮らしていたんではないかと思われます」

警部は「ちょっといいですか？」と言い、タバコに火を付けた。警部はせわしなく煙を吐き出すと、安寧を求めるように外を見た。窓の外は部屋の温度と外気の温度の差のせいで、曇って何も見えなかった。

それでも、警部は何かを見続けていた。

「その父親と言うのは法務長官のダグラス・マクレガー氏なんですね？」

警部は、それもグレッグが話したのかという目になった。

「お金と人脈だけで上り詰めた男です」

警部はまるで軽蔑するように言った。

「ダグラス氏はグレッグを引き取りましたが、愛情は全く注がなかったと聞いています。義理の母親と兄であるライアン氏も彼のことはまるきり無視をしていたようです」

エリックは不思議に思って尋ねた。

「ではなぜ、グレッグ刑事を引き取ったのですか？」

「推測ですが、その頃からライアン氏の素行はかなり悪く、ダグラス氏もスキャンダルに巻き込まれることを恐れていたのではないでしょうかね」

「ということは、グレッグ刑事は次期後継者候補だったというわけですか？」

「実際はそうだったのでしょうが、それに関してはライアン氏の母親が強固に反対したため叶わなくなり、結局、彼はお荷物扱いをされていたようです」

「なんという勝手な！」

エリックは憤った。

「よくあることです」

「しかし！」

警部は最後に大きくタバコの煙を吐くと、携帯用の灰皿に吸殻を押し込んだ。

「でも、何故、そんな兄のために、彼は職権乱用どころじゃない、一つ間違えば犯罪行為になってしまう様な馬鹿なことをするんです？」

「本人としては本意ではないのでしょう」

「えっ？」

「マインドコントロール。つまり洗脳ですよ」

警部は想像だにしない恐ろしい言葉を述べた。

「父親の言葉に逆らえないように彼の心は支配されてしまっているんです」

エリックは息だけ飲み込んだ。そんなことがありえるなんて、信じられなかった。

「彼にとって、父親は絶対なのです。どういう経緯があってそういうことになったかわかりませんが……。彼の父親がグレッグに対してこうしろと命じるとどんなことでも彼はやらなければならないのです」

エリックは眉間に皺を寄せながら尋ねた。

「どんなことでも?」

「ええ」

「じゃあ、ライアンを逃がすことも可能なわけですか」

「そうですね。自分が手を下さなくても、部下を使えばいいことですし」

警部はいともあっけなく言った。

「事実、彼の周りにはイエスマンしかいません。彼が意図して置いているのでしょう」

友達がいないと言ったグレッグを少しでも信じようと思った自分が情けなかった。

「洗脳って、そんなに簡単に出来るものなのですか?」

さぁ、と警部は言った。

「他人による洗脳はどうか知りませんが、肉親によるそれはかなり根の深いものだと思いますね」

「洗脳以前に、親は子供を支配する生き物ですし」とまた、警部は冷酷な言葉を告げた。

「洗脳から抜け出すことは出来ないんですか?」

「出来ないこともないと思いますが、並大抵のことじゃないでしょうね」

警部はエリックの目を見て言った。

「父親以上に強い何かを与えられることが出来たら、彼は救われる日もくるのではないでしょうかね」

エリックはそれについては何も言うことが出来なかった。

そろそろ、母親が帰ってくる頃だとエリックが時計を見ると、警部は椅子から腰を上げた。

「あの薔薇の花を見ていると嫌でも当てられている気がしますね。私もあれよりも立派な花束を持って出直してきますよ」

カサブランカなどはお好きですかね？　と警部は笑って尋ねた。

「花はどんな花でもたぶん、好きですよ。ただ、うちのマダリンが花粉アレルギーになってしまったので出来ればご遠慮したいんですがね」

警部はとても残念そうな顔をすると「じゃ、他のものでも考えますか」と言って出て行こうとした。

「警部」

エリックはドアに手をかけたままの相手に向かって言った。

「あなたはどうして、そこまで彼のことについて詳しく知っている

のですか？」

警部は一瞬、考えてから言った。

「調べたからですよ。では」

その後姿は、まるで知らない人間の背中のようにエリックには思えた。

―10―

母親が帰ってきたとき、彼女は一人ではなかった。

「教会のバザーで偶然、お会いしたのよ」

そう言って、振り返った先にいたのは思いもかけない人物だった。

「エレン刑事！」と思わず言いそうになり、エリックは慌てて口を押さえた。

「エレノアさんのお父さまは牧師さんなんですって。エリック、あなたも作家なんて不安定なお仕事は辞めて、もっと人様のためになるような職業に付いたらどうなの？」

母親のキツイ言葉にエリックはどう反論しようか悩んだ。実際、今のエリックはそう言われて返す言葉がなかった。

「私は作家も立派な職業だと思います」

しかし、助け舟は思わぬところから現れた。そして、その声の主はきっぱりとこう続けた。

「言葉が誰かを助けると言う意味では、牧師の職業とかわりありませんわ。私の父も昔は作家にあこがれていたそうです」

まあ、そうなの、と母親は驚いていた。

「牧師はそれなりの大学に行き、試験に受かればなれますが、作家

はなろうとしてなれるものじゃありませんもの」

「そういうものなのかしら」

「ええ、そういうものです」

エレンは編集者の顔で言った。

「そうそう、この間、エリックの作家仲間だと言う人が遊びに見えたんですよ」

メリッサはアフタヌーンティの準備をしながら言った。

「それは誰ですの？」

エレンが興味深そうな声で尋ねた。

「えっと、名前はなんておっしゃっていたかしらね、エリック？とても背が高くて、品のよいお顔をなさっていたけれど。ああ、そうそう、確かグレッグさんだったわ」

エレンが驚いたようにエリックに目を移した。エリックはかなり嫌そうな顔で頷いた。

「グレッグ・シーモアさんですね。あの方はホラー専門の方ですから、私もよく知らないのですよ」

「まあ、ホラーを書かれるの。あんな端整なお顔をされてて……。人って見かけではわからないものですね」

エレンの口から出任せの言葉に母親は何の疑惑も持たずにいるらしかった。しかし、エリックは先ほどからのエレンの痛いほどの視線に耐えかね、注がれたばかりのお茶を口にし、危うく火傷をしそうになった。

そうこうしているうちに、お隣のヒギンズ夫人が町内会の用事でやって来て母親を連れ出したため、エリックはグレッグの件について、嫌でもエレンに話さなければならなくなってしまった。

「相当、彼に気に入られたものですね」

エレンのその言葉には同情と憐憫のようなものがなぜか感じられた。

「気に入られたと言うか、ただ単に利用したかっただけなんでしょう？」

エリックは冷めた調子で言った。

「そうかしら」

しかし、エレンはあくまで肯定的だった。

「彼の生い立ちは知っていて？」

さっきまで警部がいたことを話すとエレンは確かめるように聞いた。

「ええ。本人から聞きましたよ」

グレッグから？　とエレンもまた警部と同じ、驚いたような反応を示した。エリックは彼から、車の中で出生証明書を見せられたことまで話すと、エレンはさらに驚愕の視線を寄越した。

「あなたは本当に彼にとっては魔法使いみたいな人なのね」

どういう意味です？　とエリックは反対に尋ねた。

「そんな大事なものを見せるくらいですもの。相当信頼していないと出来るものではないわ」

エリックは眉間に皺を寄せたまま、迷惑そうな顔で言った。

「信頼も何も、昨日会ったばかりですよ。しかも、最悪なシチュエーションで」

「そんなことは問題じゃないのよ」

とエレンは言った。

「彼がその証明書をずっと肌身離さず持っている理由がわかる？　彼はいつでもそれと一緒に心中する覚悟があるからよ」

エレンの言う言葉の意味が正直、エリックにはわからなかった。

「でも、彼は警察を裏切っているかもしれないんでしょう？　現にライアン氏は逃走中だとか……」

エレンはため息と共に目を伏せた。

「本当にかわいそうな人……」

その声は心からの言葉に聞こえた。

「その出生証明書がある限り、彼は父親の呪縛からは逃れられない」

「じゃあ、そんなもの持っていなければいいじゃないですか。捨てるなり、なんなりして、放っておけば」

しかし、エレンは薄い笑みを洩らしただけだった。もやもやとした嫌な気持ちが沸き起こってきて、エリックは思わず言った。

「なんで、誰も彼も彼を庇うんです？　これは彼一人の問題じゃないでしょう？　殺人事件なんですよ。無実の人間が刑を受けなければいけないかもしれないんですよ！」

エリックの意見ももっともだった。それでも、エレンは言った。

「彼を一日中見張るわけにはいかないの。彼自身、進んでやりたいわけじゃないから、よほど注意を払うでしょう」

「だったら、彼を外せばいいだけの問題じゃないですか」

エリックがイライラしたように言った。

「それが出来たら誰も苦労はしないわ。私たちが出来ることは彼よりも早く情報を掴み、証拠を挙げるだけ」

「本当にライアン氏が犯人なんですか？」

「わからないわ。でも、彼が関わっていることだけは事実ね。これほど、上が真剣に邪魔をしてくることを思えば、何かあるんだわ」

エレンの人工の瞳が暗く光った。

「あなたはライアン氏には会ったことがあるんですか？」

エリックは思い出したように尋ねた。エレンは首を横に振ると残念そうに言った。

「彼に関わる事件は死人が多すぎると言って、兄が就かせてくれなかったの。今回、思いがけず、関わることになって、正直、警部は後悔しているみたいね」

確かに、ライアン氏が相当の悪党だとしたら、エレンは彼に数え切れないほどの死人の魂をみることになるだろう。

「ミシェルはどうだったんです？　パメラさんも、シドニー氏も見えなかったんでしょう？」

エレンはしばらく黙っていた。エリックは彼女の言葉を辛抱強く待った。

そして、彼女はやっと口を開いた。

「彼女たちの姿は見えなかった。でも、別の死人の顔が見えたわ」

―11―

エレンの顔には苦悩の色がにじんでいた。
パメラとシドニー殺害に関してはシロでも、ミシェルが犯罪者の影をまとっているのは明らかな事実だった。彼女の『悪魔の眼』を信じるならば……。
エリックは驚きよりも困惑からしばらく声も出なかった。
想像だにしなかった現実を突きつけられた時、人はこんなにも心が凍りつくものなのかとエリックは頭の芯で考えていた。取り乱すことさえも忘れ、時間の流れだけに敏感になっていた。
サラサラと落ちてゆくのは砂ではない。白く乾いた骨の欠片……。

「大丈夫？」

エレンは蒼白になったエリックを思いやるように声をかけた。エリックは、今一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなりかけていた。見慣れた自分の家の家具や装飾品さえ、別の世界から突然現れたかのような余所余所しい錯覚を覚えていた。

「ええ、大丈夫です。大丈夫」

彼は首をゆっくり振ると、額に手を置いた。正直、支えなしでは頭を持ち上げていることさえ無理だった。

「あなたがそこまで、ミシェルさんのことを信じているとは思わなかったわ」

聞くに堪えない同情。今、彼が欲しいのはそんな言葉じゃなかった。しかし、エレンにエリックと同じ気持ちになれということは土台、

無理な話だった。

（わかっている。それはよく、わかっているけれど……）

傷つくのは自分だけの論理から。けれど、だからと言って、なかったことには決して出来るはずはないのだった。

エリックは額に置いた手を眼の上にずらすと、俯いたまま彼女に尋ねた。

「それは、男ですか、女性なんですか？」

それを知ったところで何も変わりはしないだろう。それでもエリックには聞かずにいられなかった。

「それを聞いてどうするの？」とエレンは不安そうに尋ねた。

「わからない」と彼は首を横に振った。

「君の眼はきっと、真実を映しているよ。そう思うことはミシェルを裏切ることになるんだろうか」

エリックは切れ切れの声を出すと、我慢出来なくなったように嗚咽を洩らした。

「言えることは」とエレンが言った。

「その人はとても後悔しているわ。そして、彼のことを案じている」

エリックはそれ以上、尋ねることはできなかった。エレンがどれだけ強い忍耐と精神力の持ち主かわかった気がした。

「ミシェルはその人を殺した罪に問われるのだろうか」

「わからないわ。でも、おそらく、その殺人は今回の事件とは全く無関係ではないでしょう」

黙り込むエリックに彼女は、辛いだろうがと言い、こう付け加えた。

「罪に問われることがなくても、彼がやったことは消えないわ。そして、亡くした人の命は永遠に帰ってこない」

彼女自身、犯罪で両親を失っているだけに、この言葉はエリックにも重みを持って受け止められた。

沈黙が二人の上に降りかかり、時計の針だけが時間を紡いでいた、そのとき。

「まぁ、まぁ、まるでお通夜じゃないの」

そう言って、思わぬ人物が現れた。隣のヒギンズ夫人だった。

彼女はドアベルも鳴らさず、自分の家同然に入ってくると、エリックたちを見て苦い顔になった。

「せっかく二人きりにしてあげたっていうのに、お行儀よく、向かい合わせに座って、まぁ。これじゃ、メリッサがやきもきするのももっともだね」

エリックは突然の闖入者にさっきまでの思考を遮られ、不満気味に言葉を発した。

「おばさん！　入ってくるときはドアベルぐらい鳴らしてくださいよ。びっくりするじゃありませんか」

「おや、私が悪いのかい？」

そして、ヒギンズ夫人はエリックの機嫌の悪さを、もしや彼女との別れ話だったせいかもしれないと勝手に想像した。

「そりゃ、まずいところに入ってきてしまったわね。お嬢さん、この子は口は多少悪いところもありますけど、心根はとてもいい子なんですよ。長い目でみてやってくれませんかね」

エレンは鳩が豆鉄砲でも食らったような顔になった。一方、エリックは真っ赤になると、「おばさん！」と立ち上がって、彼女をドアの外へ連れ出そうとした。

「もう、一体、何を勘違いしているんですか。彼女の前でへんなことを言うのはやめてくださいよ」

「おや、じゃあ、やっぱり、あんたの片思いだったのかい？」

「違いますよ！　僕らは真面目に仕事の話をしていたんです！」

「あんなに怖い顔をしてかい？　私にはそういう風には見えなかったけどね。案外、他人の勘は当たるもんだよ」

「おばさん！」

そう言いつつ、エリックには彼女の言葉がやけに気にかかっていた。それは簡単には見過ごせないほど、エリックに大事なことを思い出

させようとしていた。
その思い付きが消えないうちに彼女を排除してしまおうとして、ふとエリックは思いついたことを口にした。

「母さんは、一緒じゃなかったんですか?」

「あぁ、メリッサはなんでも知り合いって人から声をかけられて、その人に付いて行ったみたいだよ」

「知り合いって、どんな人です! 男性ですか、女性ですか?」

いつの間にやってきたのか、エレンが夫人に掴みかかるかのような勢いで言った。

「お、男の人でしたよ。ちょっと、映画俳優みたいな、いい男だったわね。私はメリッサの昔の知り合いか何かかと思ってたんだけどね」

それにしては年が若いような気がしたけど、と彼女は付け足した。
エレンの顔が蒼白になった。
エレンは慌てて、エリックの寝室や、部屋中の家具を調べ始めて、エリックは初めて尋常じゃない事態に陥っていることに気付いた。

「警報機の装置が切られているわ。あなたがやったの?」

「まさか!」とエリックは答えていた。実際、そんなのはあることも忘れていた。

「じゃあ、誰かが意図的にやったとしか思えないわ。最近、誰かをこの部屋の中に入れましたか?」

エレンに尋ねられて、エリックはいいえと言いかけて、はっと気付いた。

「グレッグ刑事！　でも、そんなことはありえない……」

エレンは急いで警察に電話をかけると、自分も慌てて家を出て行こうとした。

「いったい、どうなっているんですか！」

「悠長に話している時間はないわ！　早く、乗って！」

そう言って、エレンはエリックを引っ張って外へ連れ出すと自分の車に押し込んだ。そして、唖然とするヒギンズ夫人に、もしメリッサが帰ってきたらすぐに連絡が欲しいと名刺を渡した。

それにはエレンの本当の身分が示されていた。

「まぁ、あなた刑事さんだったの……」

車が去った後、夫人が新たな想像を膨らませたことは言うまでもない。

―12―

エリックは猛スピードでゆき過ぎる景色に慄きながら、また別の戦慄に襲われていた。

「母が誰かに誘拐されたって言うんですか？」

エリックはシートベルトを握り締めながら言った。

「わからないけど、嫌な予感がするの」

エレンはまっすぐ前を向いたまま、アクセルを踏み込んだ。エリックは自分を安心させる材料を幾つも思い浮かべた。

「あの人は無防備に誰にでもついていくような人じゃないんです。本当に昔の知り合いだったかもしれない」

エレンはしばらく無言で運転していたが、思い切ったように告げた。

「あなたのお父さまは行方不明になっているんでしたね」

彼女の思いがけない言葉にエリックはすぐには返事をすることが出来なかった。

「行方不明っていうか、きっともう生きてはいないと思います」

「メリッサさんもそう信じているのかしら」

エリックは、はっと何かに気付いたように唇を噛みしめた。おそら

く、彼女は諦めてはいなかったのだろう。ずっと、彼女の心を占め続けた人間がもしも生きているとわかったら……。

『何をおいても駆けつける』

彼女はそういう人だった。

エリックは目を閉じた。

『父さん』

彼は初めて心の中で父の名を呼んだ。祈りに似た気持ちだった。

警察署に車を横付けすると、エレンとエリックはそのまま署内に駆け込んだ。

「エリックさん！」

警部が今までに見たことのないほどの渋面でエリックを迎えた。

「母さんは大丈夫なんでしょうか！」

エリックは声を振り絞るように尋ねた。

「今、ディックたちにメリッサさんの行方を探させています。彼らの狙いがなんなのかそれさえわかれば……」

警部は悔しそうに机を叩いた。

「彼らって？　警部、犯人を知っているんですか？」

警部はしまったという顔をした。

「警部！」

答えない警部にイライラしたようにエリックが叫んだ。

「ライアンよ。そして、誘い出したのはおそらくグレッグ刑事……」

横からエレンが答えた。

「グレッグ刑事が……？　そんな……」

青い顔で項垂れるエリックに彼女はダメ押しの一言を告げた。

「彼は傀儡なのよ。心を奪われたまま、生きている。あなたが信じるに値しない人間なの」

グレッグに対して同情的な意見を語っていた彼女とは思えない苛烈な言葉に、エリックはとても腑に落ちないものを感じた。なんでも自分の目で確かめないと納得することが出来ない性質だということは自分でもわかっている。

時にそれがエレンにとっては、まどろっこしく思えるであろうことも。

それでも彼女の正義とエリックの信じる正義では何かが違うのだ。

彼女の正義を一方的に押し付けられて、エリックはエレンに対して強い反感を抱いた。

「でも、彼が母に危害を加えるとはとても思えないんです。あんなに母の映画について熱心に語っていたのに……。会えて光栄だったと翌日には綺麗な薔薇の花まで届けてくれたんですよ？」

そんなことくらい役者でなくても容易く演じられるわ、とエレンは冷たくいなした。エリックは自分の心まで否定されたように悲しかった。

「君だって、言ったじゃないか。かわいそうな人だと。君は事実だけを見ようとするけど、人の心にはそれ以上に計り知れないものがある！」

それを聞いた彼女の瞳が、怒りに燃えたように赤くなった。

「事実に目を瞑ってばかりいる人がよく言うわ。そんなお人よしだから、親友にも裏切られるのよ！」

「エレン！」

警部がエレンを強く諫める声が署内に響き渡った。一瞬、彼女は泣きそうな表情になった。

そして、そのことを気取られまいとするかのように、すぐに唇を引き結ぶと背筋を伸ばして足早に駆けて行った。

「彼女の失礼を許してください」

背中から掛けられた警部の謝罪の言葉をエリックは真摯な気持ちで受け止めようとした。しかし、他人に謝られても塞がらない傷もある。

許せることと許せないことの境があるとしたら、彼女が言ったことは十分、許せない範疇に属した。

「あなたに謝ってもらっても少しも嬉しくありませんよ、警部」

エリックの声は冷めていた。そして、ほんの少し拗ねたように聞こえないでもなかった。
警部はそのほんの微少の希望を見逃さなかった。
彼がエレンを完全に見放したわけではないというわずかな願いに警部は一縷の望みを託した。

「エレンは、あの子は自分の心を覗かれることを極端に嫌がるのです」

エリックには警部の言葉の意味するところがわからなかった。

「誰だってそうですよ。たとえ彼女が特別だったとしても、だからと言って何を言っても許されるとは思いませんね」

エリックはさらに警部に食い下がった。

「あの人は穏やかに話してたかと思うと突然、冬の女王のように冷たくなる。あなたには決して剥かない牙や爪を僕や他の人間には容赦なく繰り出すんです」

「でもその牙こそが彼女の弱さの証だとしたら?」

エリックは黙った。

「死霊なんて、本当は彼女にとって怖いものでもなんでもない。彼女は5歳にして一番恐ろしいものの正体を知ってしまったんです」

「正体?」

エリックは難しい顔で尋ねた。警部はまるでそれが空中に存在するかのように視線を巡らせた。

「心です」

「心？」

エリックの眉間の皺がさらに寄った。警部はどうすれば言いたいことが彼に届くかわからなかった。

言葉を紡げば紡ぐほど、真実の核心から離れていくようで焦っていた。それでも、言葉を尽くすよりないのだった。

「彼女はどんな心も醜いという認識しか持っていない。優しさや信頼もその醜い一括りでしか見られないんです」

―13―

心がなければどんなに楽かとエリックだって思ってきた。傷つくのも、人を信じられなくなるのも、すべて自分の心の弱さのせいだった。

だからと言って、自分の心からも他人の心からも逃げ続けることが出来るなんて考えられなかった。

「それゆえに、グレッグのことも自分のことのようにわかるんだと思います。だからと言って、エレンは決して同情はしませんが」

エリックは頷いた。そして改めて尋ねた。

「じゃあ、グレッグ刑事の洗脳を解ける人間というのは彼女なんですか？」

警部は首を横に振った。

「エレンに彼は許せない。もし彼女が彼を本気で許そうと思ったら、彼を銃で撃つしかないでしょう。そして、グレッグもおとなしく撃たれはしない」

「そんな……」

異常な場面が頭に浮かび、エリックは悲鳴をあげそうになった。

「エレンとグレッグはある意味、同類なんです。自分の意思で生きてはいないと言う点で」

「警部？」

エリックは不安そうに彼を見た。

「行きましょう。こんなところでじっとしていても始まらない」

彼がそう言ってエリックを促そうとした時、デスクの電話が大きく鳴り響いた。

「何！　メリッサさんが見つかった？　無事に保護されたんだな？　えっ、なんだって？　グレッグ刑事が？　わかった、すぐ行く！」

警部は電話を切るとバーバリーのコートに急いで袖を通しながら言った。

「エリックさん、お母さまが見つかりました」

「本当ですか！」

エリックは安堵の声を洩らした。しかし、すぐに心配そうな顔になると警部に詰め寄った。

「それで、母は無事なんでしょうか？」

警部は「詳しいことは中で話します」と言うと、急いでエリックを車に乗せた。チラリと見上げた彼の目はしかし、苦渋の表情がすっきりとは消えていなかった。

エリックは不安な気持ちでシートに座った。

「見つけたのはディック刑事です。正確には駆けつけたということですが」

車が走り出したと同時に警部が電話の内容を語り始めた。

「詳しいことは私もまだわからないのですが、どうも住民から通報があったそうです。近くの廃屋から銃声らしき音が聞こえたと……」

「銃声……」

エリックは今にも気絶しそうになった。

「たまたまその付近を捜索していたディックたちが駆けつけるのと一台の黒い車が走り去るのは同時だったそうです」

エリックの脳裏に一瞬、グレッグ刑事のジャガーが思い浮かんだ。

「それで、母は？」

「メリッサさんは無事です。が、精神的なショックが激しいと言うことで今病院に向かわれています」

どうやら、警部も現場ではなくその病院へと走らせているらしかった。

「ただ……」

警部は眉を寄せたまま、難しい顔付きで言った。

「グレッグ刑事が撃たれたそうです」

数分前に浮かんだ恐ろしい想像が再び脳裏を横切り、エリックは慌てて振り払った。

「一体、誰がグレッグ刑事を……」

「わかりません」

警部はエレン並みに、否、それ以上にアクセルを踏み込むとさらにスピードを上げた。エレンが撃ったのではないことは時間的余裕がないことからして明らかだった。

「グレッグ刑事は今日、非番だったんです。だから、我々は彼を疑ったんですが、間違いだったのかもしれない」

警部の横顔がいつになく真剣みを帯びていた。よく考えると、妙だった。

ディックたちが駆けつけたのは、銃声があった後だ。おそらく、グレッグ刑事が撃たれたのはその時だろう。

とすると、グレッグは警察関係者ではなく、犯人もしくは仲間に撃たれたことになる。

警部ははっと何かに気付くと、突然車線を変えた。その道は間違いなく、エリックの家へと続いていた。

「警部？」

エリックが不安げに彼を見た。警部は悔しそうに唇を噛んだまま、言葉を発しようとしなかった。

玄関前に車を止めると、警部は「合図するまで車を降りてはいけない」とエリックに言い置いた。
そして、拳銃を手に一人車を出て行くと、一呼吸置いて玄関のドアベルを鳴らした。
中からはなんの応答もなかった。
エリックはあることを思い出し、蒼ざめた。
行き違いでメリッサが帰ってきたときのために、ヒギンズ夫人が居残ってくれているはずだった。
警部がドアを開けたのと、エリックが車を飛び出したのはほとんど同時だった。
「警部、中にヒギンズさんが！」
警部が拳銃を構えた向こうに、誰かの足が見えた。その人はまるで死んだように横を向いて倒れていた。
「ヒギンズさん！」
エリックは家の中に駆け込むと、ヒギンズ夫人を抱き起こした。
「おばさん！　ヒギンズさん！」
頬を叩くと、うーんという呻き声が聞こえた。
警部は家中を探し、中に誰もいないことを確かめると、エリックたちのそばに戻ってきた。そして、他に外傷がないかすばやく確かめると言った。
「どうやら、気絶しているだけらしい。念のために救急車を呼びま

しょう」

警部は救急車の手配をすると同時に本署への応援も頼んだ。

何が起こったのかは、部屋を見れば一目瞭然だった。まるで、家ごとひっくり返したようにタンスやクローゼット、机の中の物まで引き出され、足の踏む場もないほど荒らされていた。

「どうして……？」

「おそらく賊はこのためにあなたのお母さまを連れ出したのでしょう」

ヒギンズ夫人が残っていたことは犯人も誤算だったみたいですね、と警部は言った。

「でも、一体なぜ？」

エリックは頭を抱えた。

「エリックさん、何か無くなった物はありませんか？」

そう言われても、この有様では無くなった物を把握することさえ不可能に近かった。

エリックが茫然と立ち尽くしていると、警部が呼んだ救急車が到着した。

ヒギンズ夫人が運ばれ、しばらくするとディック刑事が青い顔で飛び込んできた。

「警部！　グレッグ刑事が……！」

ディックの話によれば、グレッグ刑事を撃った弾は急所ははずれていたが、出血の量があまりにも多すぎて緊急に輸血をしなければ命も危ないと言うのだ。

「輸血はどうしたんだ！　病院ならすぐに手配出来るだろう！」

「それが、彼の血液型はＲｈマイナスのＢ型で同じ型の血液が今現在、不足しているそうなんです」

どうやら、その前の手術でたまたま同型の血液が必要になり、そのほとんどを使ってしまったらしかった。

「法務長官に電話しろ！　確か彼もＲｈのマイナスだったはずだ。自分の息子が死ぬかもしれないんだ。それでも、グダグダ言うようだったら俺が首に縄をかけてでも連れて来てやると言え！」

「責任はすべて俺が持つ！」　と言い放つと警部は車に飛び乗った。エリックも置いていかれまいと必死で後に続いた。

―14―

現在・過去・未来。
自分のためのものであるはずの人生が、生まれながらにして誰かのためだけにある人がいる。
エリックはグレッグの人生がこのまま終わることがたまらなくやりきれなかった。あの傲岸不遜の刑事に、自分の人生というものを生きさせてやりたかった。

『ライアン・マクレガーは私の兄です』

たった一度、取調べを受けただけのエリックに彼はそう言った。
おそらく、誰でもよかったのだろう。エリックでなくとも。ただ、彼は彼の重荷をどこかに降ろしたかっただけなのだろう。
その機会を彼はずっと、ずっと待っていたのではないかと思った。
たまたま、エリックが他人に迎合する人間でなく、生真面目で、融通が利かない人間だったから、彼は気に入って話してしまったのかもしれない。
ただ一人の友人を馬鹿みたいに信じる彼が奇特に思えたのかもしれない。

（死ぬな、グレッグ刑事……）

エリックは思わず組んだ両手に力を込めた。

病院に着くと、まだ輸血用の血液が足りていないのか院内は騒然と

していた。

「長官には連絡が取れたのか？」

「それが、オスロで開かれている国際会議に出席されているらしく、今すぐこちらへ帰国するのは無理だそうで……」

「そんな建前はどうでもいい。帰ってくる気があるのかないのか、どっちなんだ！」

ふだんめったに声を荒げない警部だからこそ、今の状態がどれだけ緊迫しているかわかる。

「くそっ！」

らしくない乱暴な言葉を吐くと警部はいらいらしたように時計を見た。

「もういい！　ディック、エレンがどこにいるか知らないか？」

さっきからコンタクトを取り続けているが、電源を切っているのか捕まらないのだと警部は言った。

「そういえば、主任の血液型もＲｈマイナスのＢ型でしたね！」

ディックは勢い込んでそう言うと「絶対、連れて来ます！」と一目散に駆けて行った。

そうこうするうちに手術室からスタッフが「Ｒｈマイナスの血液型の方はいませんか！」とまろぶように走り出て来た。

東洋人に比べるとＲｈマイナスの型の人口の比率は希少ではなかった。しかし、Ｒｈプラスの人間にＲｈマイナスの血液は輸血できても、Ｒｈマイナスの人間にプラスの型の血液は輸血できないように、何かと制限があるのは事実だった。

（エレン刑事、間に合ってくれ！）

エリックはいらいらしたように病院のエントランスを見つめた。病院のスタッフの呼びかけに幾人かの看護士や医者、見舞い客たちが名乗りを上げた。

その様子を目にしながら警部が吐き出すように言った。

「死ぬか生きるかっていう大事な時に血さえ分けてくれない親なんか、本当の親であるものか！　他人の方がよほど彼のためになっている」

グレッグがもし生きて戻ってきたら、エリックは必ず教えてやろうと思った。君の体の中にはたくさんの人の血が君を生かすために今も巡っているのだと。

血液は順調に集まっているように見えた。しかし、すべてがすべて適合するわけではなかった。

「Ｒｈマイナスの型の人はもういませんか？　血液がまだ足りません！」

苦しげなため息があちこちで漏れた、そのときだった。

「来たっ！」

入り口の自動ドアさえももどかしそうに駆け込んできたエレンに警部は事情を素早く説明した。

「いくら足りないんです？」

「あと約６００ｍｌです」

「わかったわ。私の血をそっくり移してでも彼は助けます」

そう言うとエレンは病院スタッフのあとに急いでついて行った。

追憶　―1―

手術中のランプが再び点り、警部とエリックはもたれるように長椅子に座り込んだ。

「助かるでしょうか」

「一縷の望みに今は賭けるしかないですね」

警部は再び、敬語で話し始めた。

「こんな時にとも思うのですが、エリックさん、思い出していただけませんか」

「えっ？」

警部の頭の中は、エリックと違って、常に一つのことだけで埋まっているわけではないのだろう。警部は留守中の空き巣をただの物取りの犯行だとは思っていなかった。

実際、あの惨状を目にしたエリックの衝撃は相当なものだった。

「何かミシェルさんから預かってる物などはありませんでしたか？」

エリックは目を閉じると一生懸命思い出すことに集中した。しかし、どう考えても彼から何かを託されたり、もらったりした記憶はなかった。

「パメラさんはどうです？」

エリックは首を振り続けるよりなかった。

「犯人は僕がミシェルから何かを預かっていると思っているのでしょうか？」

「そう言う事も考えられますね……」

警部は勢いよく立ち上がると近くに待機していた警官に何かを告げた。そして、エリックに向き直ると、言った。

「私は一度署に戻ります。もし、何か思い出したらいつでもいいので電話を下さい」

警部は一瞬、気遣わしげに手術中のランプを見つめると、振り切るように出口へ向かった。

警部の靴音が遠ざかるのをぼんやり聞きながら、エリックはふいに母親の状態が気になった。

病院内をあてもなくさまよっていると、ちょうどディック刑事がスタッフの一人と話しているのに出くわした。

「ディック刑事！」

エリックが声をかけると、ディックはスタッフとの話を打ち切って早足で歩いてきた。

「お母さまは今、注射で眠っておられるそうです」

「怪我はなかったんでしょうか？」

エリックは今ほど自分の無力さを悔やんだことはなかった。

「大丈夫です。クロロホルムを嗅がされていたようですが、そんなに大量ではなかったようです」

エリックは心の底から安堵の息を吐くとすぐそばの壁に手をついた。

「住民からの通報で踏み込んだ時は、グレッグ刑事とメリッサさんしかいませんでした。刑事はお母さまを守るような姿で倒れていました」

「自分がもう少し早く到着していたら！」と、ディックは悔しそうに唇を噛んだ。撃たれてから時間が経ちすぎたことを悔いているのだろう。

「グレッグ刑事が母を守ってくれたということですか？」

「詳しくはメリッサさんとグレッグ刑事、両方に聞いてみないとわからないのですが、敵でなかったことだけは確かだと思います」

ディックは強く断言するとその理由を述べた。

「なぜなら、二人とも縄で縛られていたからなんです。刑事は銃も所持していませんでした」

ただ、どうして彼がそこに居合わしたのかが謎なんです、とディックは不思議そうに首をかしげた。

どういう理由であれ、命を賭して彼が母親を守った事実だけはかわらないとエリックは思った。

ヒギンズ夫人も大事を取って別室で検査を受けていると聞き、とり

あえずエリックは帰ることにした。
エリック専用の送迎担当に自ら志願でもしたかのように、ディックは車を回してきますとはりきって言うと、一足先に病院を離れた。
グレッグ刑事のことは気になったが、エリックにも難題が待っていた。

『この荒らしようはおそらくプロの仕業でしょう』

現場で警部が言った言葉がエリックにはずっと気にかかっていた。

『ここまで酷く散らかしたところを見ると、目当てのものを探しての行為というよりは、何を盗まれたかわからなくする狙いがあったとも考えられます』

確かに毎日暮らしていたエリックさえ、何がなくなっているか判断することはきわめて難しいと感じられた。

ディックの車に乗り込み、エリックは単純な疑問を彼にぶつけてみた。

「家はあのままなんでしょうか？」

「一応、現場検証を終え、そのままの状態にしてあります。指紋はやはり出なかったみたいですね」

ディックは同僚もしくは上司に話すように告げた。

「警部はプロの仕業じゃないかと……」

ディックもそれに同調した。

「ええ、自分もそう思います」

わざと無茶苦茶に散らかしたのがいかにもクサイのだ、と彼は言った。

「犯人は何を捜していたんだろう……」

エリックは外を見ながら、呟くように言った。帰って見なければわからないが、金目のものが盗られたとはどうしても考えられなかった。

事実、盗られて困るような大金や貴金属の類は何もない。

それに、一般庶民の家に押し入るにはあまりに計画的な犯行と言えた。

そう考えていくと、やはりミシェルがらみというか、パメラ、あるいはシドニーの事件に関係があるとしか思えなかった。

「ミシェルさんに本当に何も預かっていないんですか?」

刑事らしい彼の質問にエリックはやはり首を振るしかなかった。

「じゃあ、犯人はあなたがきっと預かっているものと思って押し入ったのかもしれませんね」

「まさか、紫水晶?」

エリックは真剣な顔で言った。

「ありえますね。でも、自分の勘から言うと、違うような気もします」

「じゃあ、顧客名簿……？」

思い当たるものといえばそれくらいしかなかった。

「見たことあるんですか？」

ディックが驚いたように尋ねた。

「いや、ありません。でも、パメラさんが亡くなったときに一緒に紛失しているんですよね？」

「ミシェル氏の証言によれば……ですが」

ディックは微妙に言葉を濁した。そして、しばらく悩んだ挙句にこう言った。

「実はここだけの話なんですが、顧客リストはもっと前に無くなっていた可能性があるんです」

―2―

「なんですって？」

エリックは信じがたい表情になった。ミシェルの嘘をこれ以上聞きたくないと思っていても、真実の神が邪魔をする。

「もし、それが本当だとして、何故ミシェルはそんな嘘をつく必要があるんです？」

エリックに出来ることは、もうその真実に目を逸らさず、受け止めることだけだった。

「わかりません。でも、ミシェル氏にとっても顧客リストが存在すると困ることがあると考えると頷けないこともない。この事件に乗じて一緒に無くなったと言っても、たぶん誰も疑わないでしょうから」

「顧客リストって、ただの名簿なんでしょう？」

エリックは尋ねた。

「さぁ。でも、ある人にとってはとても重い意味を持つものなのかもしれませんね」

顧客リストとはパメラが今までに占った人間の記録台帳のようなものだと考えられる。彼女は生前、占いに臨む前には必ず綿密なリサーチを欠かさないと語っていた。

案外、その辺に、この一連の事件のヒントは隠されているのかもし

れない。

「警部はミシェル氏が故意に名簿を隠したか処分したと見ているようです。ミシェル氏はあくまでもなくなったと言い張っていますが」

「ミシェルは自供を始めたんですか？」

「殺してもいない殺人の」　と、エリックは言いかけてやめた。エレンの魔法の眼が正しければ、ミシェルが誰かを殺めていることは間違いない。それがパメラやシドニーでないというだけで……。

「あれを自供というのか……。ミシェル氏はパメラさんを殺したのは自分だという一点張りで、犯人だけが知りうる殺害方法や凶器の行方など、かんじんなところではいつもだんまりを決め込むのです」

「取調べは誰が行っているんですか？」

「主に警部です。主任や自分の時もありますが……。ああ、グレッグ刑事も一、二度あったみたいでしたね」

もっとも、彼は自供の確証を詰めることにしか力を入れていなかったようですが、とディックは言った。

それを聞きながら、ディック自身もエレンの眼を信じているのだなとエリックは思った。ミシェルがパメラを殺していないという前提で捜査を続けているのだと。

結局、今回の空き巣とパメラ事件の関連性について、明らかにするには時間がかかる見通しだとディックは言った。ライアン氏の行方も掴めていない限り、関与を疑うことも難しいと言うのが上の大方の意見らしい。

リアルタイムに入ってくる捜査内容にエリックは聞き入るしかなかった。

しかし、グレッグが撃たれたという事実はある意味、この件に関して言えば、ライアン氏は限りなくシロに近いと判断される材料となるのだろう。

兄が弟を撃つとはエリック自身、絶対思いたくなかった。たとえ、人を雇ってやった行為であっても。

後片付けの手伝いを買って出てくれたディック刑事と共に家に戻ったエリックは、台風の後さながらの我が家の惨状に改めて言葉を無くした。

「これはとても一日では片付きそうもありませんね」

割れた花瓶の破片を拾いながら、ディックはため息をついた。

「どうも目当てのものが見つからなくて、腹いせにひっくり返して回ったって線が濃厚みたいだな」

独り言を言いながら、それでも、さっさと片付けてゆく。

「これって、一人の仕業なんでしょうか?」

足の踏み場も無いとはこのことだなと思いながらエリックは聞いた。

「うーん。そうですね。一人で出来ないこともないですが、それはヒギンズさんの回復を待って聞いてみるしかないでしょう。唯一、犯人を見ているかもしれませんからね」

エリックは突然、大事なことを思い出した。

「そうだ！　マダリン！」

あまりに動転していたとはいえ、もうひとりの家族を忘れるなんて！　エリックは姿を見せないオレンジ色のペルシャ猫の名前を声の限りに呼んだ。

「マダリン！　どこにいるんだ！　もう大丈夫だから、出ておいで！」

母親が息子以上に可愛がっている猫だ。家が荒らされただけでなく、愛猫までいなくなったと知ったら、母はどんなに嘆くだろう。なんとしても、無事なマダリンを捜さなければとエリックは必死だった。

「まさか、犯人に殺されたんじゃ？」

何度呼びかけても気配さえ感じられず、エリックは途方に暮れた。警官たちの出入りも激しかったと想像出来るだけに、パニックになって外へ飛び出したとも考えられる。

「マダリン！」

ディック刑事がそんなエリックを見て言った。

「大丈夫ですよ。猫はそんな時は安全なところに隠れてじっとしているんです」

猫が隠れそうなところは……と、ディックは言いながら母親の寝室のベッドの下を見た。そして、笑顔でエリックを呼んだ。

「いましたよ。ベッドの奥のほうで目が二つ光ってますよ。あの子じゃないですか」

エリックは絨毯の上を腹ばいになって覗き込んだ。

「マダリン！　よかった、生きていたんだね」

オレンジ色の猫はまだ恐怖が抜けきらないかのように、エリックの声を聞いても出てこようとはしなかった。

「大丈夫。おなかがすいたら自分から出てきますよ」

それまでこちらを片付けましょう、とディックは言うと、精力的に片付け始めた。

エリックは気が抜けたのと、何から手を付けたらいいのかわからないのとで、なかなか作業が進まなかった。

ディックの手際のよさに感心しながら、一方でエリックは自分の無能さを呪った。

「君は何でも出来るんだね。それにいなくなったネコの居場所も知っているし」

エリックは倒れた本棚の中身を1冊、1冊、確かめながら元に戻す作業をしながら言った。

「こういうのは慣れているんですよ。鑑識の手伝いもしたことありますし」

得意なんです、と彼は笑った。

「猫は子供の頃に飼っていたので、なんとなくそうじゃないかな、と。実家に帰ると今も3匹の猫がいますよ」

「君の故郷って、どこなんだい？」

ディックは少しためらうような素振りを見せて言った。

「ホークス・ヘッドです。小さな町ですよ」

「ああ、ウィンダミア湖の近くの？」

「ええ……」

―3―

あまり故郷のことに触れたくなさそうなディックの様子に、エリックはそれ以上深く尋ねるのをやめた。
それよりも、今は目の前の雑然とした物の山に取り組むのが先決だった。
片付けに集中するうちに、エリックは次第に声を出す元気もなくなってきた。
不思議だった。整然とあるべきところに収まらなくなったものたちは、本来の価値を失い、あたかもゴミ同然に思えたからだ。
実のところ、エリックがそれだけ冷静な目をもてなくなりかけているというのが本当のところだろう。
きっとディックがいなければ、あと数分もしないうちに、大方のものはダストボックスへと消えていたかもしれない。

そう言えばと、エリックは思い出した。
ミシェルがしばらく家にいた頃、彼は整理整頓の達人で母をひどく感心させていた。
エリックはそういうことに到っては、まったく才能がなかった。そう言うと聞こえはいいが、実際、彼の机の上はいつもメモやレポート等であふれていたし、本や雑誌等が無秩序に本棚に並んでいても、なんとも思わなかった。
母親は真剣にエリックとミシェルと取り違えたがっていたみたいだったな、と今振り返っても苦笑するしかない。

「これ、ここでいいですか?」

ディックの声に我に返ると、エリックは遠い記憶を振り切るように作業の手を進めた。

やっと、歩けるほどのスペースを確保し、大きな家具類を元に戻すと、ディックは夜食の買出しに出かけて行った。
事実、エリックはいつから物を食べていないかも思い出せなかった。今日一日にあったことはそれだけ日常から程遠い次元の出来事だったといえる。
ディックの話では、ニ、三日は誰かが交代でエリックのうちに泊まって警護をしてくれるらしいが、そういうことすべてが夢の中の出来事のような気がする。

（危険はまだ回避されていないということなんだろうか？）

押し入った犯人の意図がはっきりしない限り、強いては、犯人が捕まらない限り、永遠にエリックにとっての平穏は戻ってこないということなのか。考えると暗い思考にしか陥りそうになかった。

「ニャオン」

「マダリン！」

やっと現れたオレンジ色の毛並みを抱きしめると、エリックは目を閉じた。とりあえず、母親が帰ってくるまでにはなんとか元通りにしておこう。
それこそが今のエリックの優先順位の最上位に位置することだと強く自分に言い聞かせた。

翌朝、エリックは警部の来訪で目が覚めた。
結局、昨夜はあらかたの物を元に戻すのに深夜をゆうに越えた。
仕事熱心なディックは寝ないでも平気だと言い、エリックに先に休むように告げたが、そう言われて『じゃあ、お先に』と言うエリッ

クではなかった。
いい加減なところはあるものの、へんなところで負けず嫌いの性格が出た。
ディックにしてみれば、エリックが寝ていようが、起きていようが、たいして変わらなかったとは思うのだが……。
そんなわけで警部を前にして、寝不足のエリックは寝入りばなを起こされた子供のように不機嫌さを隠しきれなかった。

「綺麗に片付きましたね」

警部はドアを開けたエリックに、まさかここまで片付いているとは思わなかったと感嘆めいた声を上げた。

「あなたの優秀な部下さんのおかげですよ。彼がいなかったら、僕は今でも物の洪水の中で溺れていましたよ」

「ああ、ディックですか。彼ならここまでやるでしょうね。エレンの部下の中ではピカイチですから」

エリックは一瞬、変な顔をした。エレンの部下なら警部の部下も同然だという意識があったが、案外、警察の中はもっと複雑なのかもしれない。

「それで探し物は見つかりましたか？」

警部はエリックの答えを今か今かと待っていた。しかしエリックは「それどころじゃありませんでしたよ」とうんざりするような視線を向けた。
片付けるだけでどれだけのエネルギーを消耗したか、その憔悴しき

った顔を見ればわかる。
それでも、真実に近づくためには先を急がねばならなかった。

「正直、わからないんです」

エリックが苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「母ならわかるかも知れないけれど……」

自分より長くいて、一番家の中を把握しているのは誰でもない、その人だった。

「そうそう、お母さまに会ってきましたよ」

警部が穏やかな表情で言った。警部に先を越されたことを少し拗ねないエリックでもなかったが、事情聴取の一環でと聞かされ子供じみた悋気を抑えた。

「母はもう、落ち着いていましたか？」

警部は頷くと、「あなたのことをとても心配しておられましたよ」と言った。

「僕……のことを？」

なぜ？　と尋ねるエリックに、警部は母親がなぜあの場所に連れて行かれることになったのか、聞いたことをそのまま告げた。

「メリッサさんは、昔のファンを装って近づいてきた見知らぬ外国人に、あなたを誘拐した、一緒に来なければあなたの命は保障でき

ないと言われたそうです」

「そんな、まさか……」

エリックは乾いた笑い声で言った。

「だって、僕は母たちが出かける時、エレン刑事と家にいたんですよ。母もそれを承知していたはずなのに……」

「親とはそういうものなのですよ。おかしいとわかっていながら、もしやと悪いほうに考える。あなたを思えばこそです」

エリックは泣き笑いのような表情で小さく、信じられないと呟いた。彼は母が自分のために危険な目にあっているとは想像もしていなかった。

てっきり、父親のことで呼び出されたに違いないと決め付けていたのだった。

―4―

エリックはハッと思い出したように尋ねた。

「しかし、警部、よく母に会うことが出来ましたね。　まさか、自分の身分を忘れていたわけじゃないでしょうね」

警部は、エリックの編集者ということになっていた。本人が望んで演じていたわけではないが、メリッサを最初の段階から騙していたことには違いない。
そして、そう仕組んだのは誰でもない、エリックだった。

「それが……」

警部のなんとも歯切れの悪い声に、エリックはその瞬間、すべてを悟った。身の内に湧いた僥倖の時などあっという間のことで、気分は一気に急降下を辿り始めた。

メリッサのことがずっと心配であった警部は今朝一番に病室を訪れ、見舞ったのだと言う。そして、彼女の無事な様子に安心したあまりに、職業的な道義心からつい、犯人についてあれこれ質問し、母に疑念を抱かせてしまったらしい。

「それで、母はなんと言っていましたか？」

エリックは恐る恐る尋ねた。警部は情けない顔になると呟きよりもさらに小さな声で言った。

『警察の方だったんですね。エリックも知っていましたの？』

エリックは「ああ」と額に手を乗せると天を仰いだ。そして、思わず恨みがましい目で警部を見つめた。
しかし、警部は警部で敬愛するメリッサに不信の目を向けられ、ショックのあまり、それ以上何も聞けなくなってしまったと嘆いた。
そして今もメリッサの冷たい視線を思い出すと泣きたい気持ちになると女々しいことまで言ってのけた。

「実は、そんなわけで、空き巣に入られたことはまだお母さまには伝えていないのです。それでですね、エリックさん、あなたからお母さまに言っては下さいませんか？」

「なんですって！」

エリックは大きな声を上げた。自分のために危ない目にあった母親にこれ以上のショックを与えることは出来なかった。
いや、それ以上に今は母親の顔を見ることすら恐ろしいエリックだった。
それでも、今日の警部はやけに及び腰で「それが出来ないなら、なくなったものを自力で見つけるしかありませんね」とすべてをエリックに丸投げする姿勢を見せた。

「メリッサさんは様子を見て、もうニ、三日入院することになっていますから、その間になんとか頑張ってください」

エリックは無理だと訴えた。
家具など、大き目の物は元の位置に配置はしてあるが、中身は適当に突っ込んだままだし、エリックと違って整頓好きな母親にこの家の異常がわからないはずがない。

「必ず、あるはずなんです。あなたが巻き込まれなければならない理由が。それがわからない限り我々は動けない」

警部が母親の心配をしていると同時にエリックの心配もしているのだと暗に知れた。

「わかりました。捜してみせますよ！」

捜せばいいんでしょう！　とエリックは吐き捨てるような口調で言った。

「リミットは二日です。それまで、ディックをお貸ししますよ。せいぜいこき使ってやってください」

警部はそう言うと晴れ晴れとした顔で出て行った。残されたエリックは重いため息をつくよりなかった。

警部と入れ違いにスコットランドヤードに呼び戻されていたディック刑事がエレンと共に再び姿を見せたのは、午後を少し過ぎてからのことだった。

エリックは正直、先日のエレンの言動に対して、わだかまりがずべて解けていたわけではなかった。

彼女の性格を生い立ちと共に徐々に把握し始めたとは言え、完全に理解する程にはまだまだ大人になりきれていない彼だった。

しかも、相互理解に繋げるために自分だけが歩み寄るのはどう考えてもフェアじゃないと考えるタイプの彼は、かんじんな部分で素直になることを拒んでもいた。

家の窓からエレンが車を降りてくるのを目にした彼は、そういう複

雑な気持ちから、深呼吸をするようにふーっと大きく息を吐いた。しかし、呼び鈴が鳴って、エリックがドアを開けたとき、そこにいたのはディック刑事ただ一人だった。

「あれ、エレン刑事の車じゃなかったの？」

エリックはほっとしたような、それでいて拍子抜けしたような声で言った。

「ああ、主任ならお隣のヒギンズさんのところですよ。昨夜お家に戻られたのですが、足を捻挫されていたこともあって、聞き取りはご自宅で行うことになったのです」

でも、聞き取りが済んだらこちらに寄ることになっていますから、どうぞご心配なく、とディックは笑みを交えて言った。

「し、心配なんて！　別に彼女に来てもらわなくてもよかったというか、会いたいと思っていたわけじゃないからね。むしろ僕は、今は顔も見たくないって言うか、いや、えっと……」

うろたえる様子があまりにもおかしくて、ディックはさらに笑みを深くした。

「はいはい、そういうことにしておきましょう。じゃあ、早速、昨夜の続きをしてしまいましょうか」

彼はそう言うと、勝手知ったる他人の家とばかりに、片付けの続きに取り掛かった。彼のおかげでゴミにしか見えなかった物たちが秩序を取り戻し、本来の存在を表し始めた。

しかし、問題は、ディックがもともとのエリックの家の間取りや配

置を一度も目にしたことがないことだった。
あくまでも『元通り』を目指すエリックの期待に叶うには、やはり限界があった。

「見取り図か写真があればよかったんですけどね」

ふいに思いついたようにディックが呟いた。
エリックは返事もせず、ただその場に佇んでいた。奇妙なことに数分たっても、その状況はかわらなかった。

「エリックさん？　どうしました？」

異変に気付いて、ディックが首を傾げながらエリックのもとへ歩いてきた。
エリックはただ一点を見つめていた。ディックはゆっくりと彼の視線の先を辿っていった。
そこには暖炉があった。
昨夜、その周りも片付けて、使えるようにしたのはディックだった。けれど、よく見るとエリックが見ている物はそれではなかった。

「エリックさん？」

ディックはもう一度彼に問いかけた。エリックの目は信じられない物を見た時のように見開いていた。

そう。彼は見ていた。
そこに存在しない物の姿を一生懸命、目で追っていた。

―5―

エリックがようやく発した言葉は「なぜ？」という短い疑問形だった。

彼は磁力に引付けられるように暖炉に近づくと、あたりをきょろきょろ見回し、せっかくディックが片付けたその付近も何かを探すかのように引っ掻き回し始めた。

「エリックさん？」

エリックはディックの再度の呼びかけも聞こえていないような様子で、今度はゴミ袋の中を捜し始め、どこにも探し物がないとわかると、ふらふらとまた別の部屋へ行き、整頓された後を散らかして回った。

「どうしたんですか！　何を捜しているんです？」

ディックはそんなエリックのあとをついて回りながら、ただ彼の言葉を待ち続けるしかなかった。

そして、何のきっかけで彼がそういう行為をし始めたのか必死に思い出そうとした。しかし、ディックには思い当たる節がまったく見当たらなかった。

「写真……」

「えっ？　なんの写真ですって？」

エリックは視線をさまよわせながらうろたえ気味に言った。

「この暖炉にあった写真立てがないんです。どこにいってしまったんだろう……」

「写真立て……？」

まさかなくなった物がそんなものだと思わなかったディックの驚きはことのほか大きかった。

エリック自身、どうしても信じることが出来ない様子だった。

一心不乱に探し回るエリックをただ見守るしかないディックは、今すぐ警部に連絡をしたものか、悩んでいた。

空き巣の犯人の目的が本当にその写真立てにあったのかどうかさえ、まだわからないのだ。

そのとき、玄関の呼び鈴が鳴り、ディックは飛びつく勢いでドアを開けた。

「エレン刑事！」

ほっとしたようなディックの顔にエレンは嫌な予感を覚えた。

「何があったの？　彼はどこ？」

「それが……」

ディックは部屋の中央に座り込むエリックを目で教えた。

エレンはそれだけですべてを理解すると、その場でスコットランドヤードに電話をかけた。

「警部。盗まれた物がわかりました。たぶん、ヒギンズ夫人の証言と一致すると思います。ただ、彼の様子が少し心配なので、すぐ来

てくれませんか？」

電話を終えたエレンはエリックに近づくと手を差し出した。
エリックがゆっくり顔を上げて彼女を見た時、彼女はただ笑っただけだった。その笑みはどこか悲しげで、優しかった。
エリックは彼女の手を握るとその手に引き上げられるように立ち上がった。

「警部がもうすぐ到着します。それまで大丈夫ですか？」

エリックは静かに頷いた。
ディック刑事はそれを見て安心したように、エリックが散らかした部屋の中をまた、一つ一つ片付け始めた。

警部が到着した時、エリックはもう平静さを取り戻していた。

「無くなったのは、お父様の写真の入った写真立てだと仰るんですね」

「ええ」

それが何を意味するのか、エリックには全くわからなかった。
わからないということが、これだけ恐怖を増殖するものだとはエリックも思わなかった。

「写真立てはどういうものでしたか？」

「ごく普通の物です。木枠に薄いガラスをはめ込んだ……。特に装飾もなかったと思います」

「ダイヤとか宝石が特に使用されていたわけではないということですね」

ええ、と短くエリックが答えた。

警部の質問はそれからも淡々と続いた。

エレンとディックも少し離れた位置で二人のやり取りを静かに見守っていた。

「写真は確かにお父さまのものだったんですね」

そう聞かれて、エリックは即答することが出来なかった。短いインターバルの末、彼は言った。

「母の夫のものだということはそうなんでしょう。ただ、僕には全く似ていないそうですが……」

「それはそうでしょう。あなたはお母さん似ですから」

警部はそう言うと、手帳をパタンと閉じた。エリックの瞳に暗い影がまとわりついて離れないのを警部は気の毒そうに見やった。

「この事件は一応これで終わりでしょう」

その言葉にエリックだけでなく二人の刑事も耳を疑った。

「でも……！」

エリックの頭の中は、言いたいことがあまりにも錯綜しすぎて混乱

をきたしていた。その隙を縫うように、警部が重ねて言った。

「この事件はどうやらパメラさんとシドニーさんの事件とはまったく無関係のようです。では、また、何か思い出したら、連絡を下さい」

あまりにも素っ気無い警部の言葉にエレンたちは色めきたった。

しかし、警部の態度は少しも変わらず、何か言いたげな二人の刑事を無理やり外に押し出し、自分もドアに手をかけた。

そして、「ああ」と思い出すように振り返ると、もう一度エリックの前に立った。

「そうそう、あなたに大切な物をお渡しするのを忘れていました」

警部は上着の内ポケットの中から茶色い封筒を取り出すと、エリックの両手にしっかり握らせた。

「これは私たちが見えなくなってから開けるように。いいですね」

幾分か抑えた声でそう言うと警部はエリックの肩を叩いた。

「お母さまが会いたがっていらっしゃいましたよ。それから、これはおまけですが、グレッグ刑事がお見舞いにはあなたの本を持ってきて欲しいと」

エリックはまだキツネにつままれた様な顔で警部と茶封筒を見比べていた。

警部が家を出て、車に乗り込もうとした時、エリックがまるで転げるように玄関から出てくるのが見えた。

「警部！」

エリックの呼び声に答えることなく、彼はそのまま車を発進させた。

―6―

「どういうことなの？」

「警部、ちゃんと説明してください！」

エレンとディックは警部が逃げないように、彼の車に乗り込んで待っていた。警部は降参したように、しばらく走らせてから車を路肩に寄せた。

「エリックさんに渡した物は何だったんです？　ごまかしてもダメよ。彼が慌てて出て来たとき、何か手に持っていたわ。まさか、無くなった写真だって言うんじゃないでしょうね？」

警部はエレンの鋭い洞察力に感心しながらも、困ったように頷いた。

「よくわかったね。その、まさかだよ」

「どうして、警部が？」

ディックはまるで手品を見ているかのような展開にただ、ただ驚きの声を上げるばかりだった。

話せば長い話だった。が、それをどこまで話せばいいか警部は図りかねていた。

しかし、彼らが中途半端な説明では納得しないのも真理だった。

警部は、最初から、この事件はパメラやシドニーの事件とは関係がないだろうと思っていたことを二人に告げた。

その理由はグレッグ刑事が撃たれたと聞いたからだった。
ライアンにはグレッグを撃てないだろうと思ったからではないと警部はきっぱり言った。いざとなると弟だろうが恋人だろうが、簡単に命を奪えるヤツだった。

では、なぜ、そう思ったか。
グレッグがあまりにも簡単に撃たれたからだった。

「どういうことなの？」

エレンはまどろっこしそうにその先の説明を求めた。

「ディック、君が現場に駆けつけたとき、黒い車がものすごい勢いで逃走したと報告したな」

「はい」

ディックは首を大きく縦に振った。

「ナンバーは見なかったのか？」

「それが、かなり遠めでしたので……。ただ、外車だということはわかりました」

警部がうんと頷いた。

「おそらく、彼らは相当慌てていたんだろうな。その後、接触事故を起こしていた」

「なんですって？！」

エレンとディックは同時に声を上げていた。

「もちろん、その車はそのまま逃げていったが、被害者が車のナンバーを覚えていてね」

「それで、その被害者の人は無事だったんですか？」

ディックが心配そうに尋ねた。

「自転車は潰れたが幸いかすり傷程度ですんだらしい」

「それはよかった。で、そのナンバーというのは？」

ここで警部はかなり言いよどむ気配を見せた。

「ある国の大使館名義の車だったそうだ」

エレンが思わず息を飲んだ。

「被害者はまだ子供だったから、その番号の意味はわからなかったらしい。ただ、きつく口止めだけはしてある。その車のナンバーのことも一部の者しか知らない」

車内になんとも緊張した空気が走った。

「グレッグ刑事が言っていました。犯人は外国人だと。理由を聞いたら、ある国の言葉を話していたからだと言いました。彼はその言葉をたまたま知っていたようです」

ディックが思い出したように言うのを警部は黙って聞いていた。
グレッグ刑事が外国語に堪能だというのは、警察の人間なら誰でも知っている周知の事実だった。
外国語だけではない。彼はあらゆる武道に精通していた。軍隊に一時期所属していたこともあったとか、なかったとか。
それらはすべて、父親の歪んだ英才教育の賜物といわざるを得なかった。
けれど、犯人には知りえるはずもなかったのだろう。
おそらく彼らの母国語でのやり取りのすべてをグレッグは知ることが出来たのだと推測された。

もっとも、彼はそれに関してすべてを話すことはないだろうが……。

「警部？」

エレンが怪訝な顔で兄を見つめていた。

「とりあえず、例の事件とは無関係だというのは確かだ。あとは、ＣＩＡが引き継ぐだろう」

「……！」

二人の若い刑事は声に出さないまでも、悔しさをにじませた。
エレンは我慢できないと言うように言った。

「じゃあ、エリックさんやお母さまもＣＩＡの取調べを受けるんですか？」

「そう言うことになるかもしれない」

「兄さん！」

エレンは彼らの、時に非人道的なやり方に常々大いなる不満を持っていた。

「まぁまぁ、落ち着きなさい。確かにＣＩＡが動くことは必至だろうが、証拠がない限り、彼らも深入りは出来ないんだよ」

「どういうことですか？」

「つまり、無くなった物も犯人もいないのに捜査は出来ないということさ」

ディックはわけがわからないと言う様に頭を掻いた。

警部はオフレコだと前置きすると、誘拐事件のあったその夜、実はもう一つの事件が起きていたことを打ち明けた。

あの日、グレッグ刑事の容態が気になりつつも一度署に戻った警部は、深夜、サザークの埠頭で３人の外国人が何者かに射殺されたという一報を受け取った。

駆けつけると、彼らは背後からそれぞれ心臓を一発で仕留められていた。

弾痕から、それらは至近距離からではなく、ライフル銃のようなもので遠くから狙って撃たれたものだと判明した。

プロの殺し屋の仕業であると見込んだ警部は、鑑識が来る前に、こっそり、彼らの持ち物を探った。そして、ある物を一人の男のコートのポケットの中から見つけたのだった。

「それが、エリックさんのお父さまの写真だったんですね」

実際、死体が持っていたものはそれだけではなかった。

「でも、どうしてそれが盗まれたものだとわかったの？」

エレンの疑問に警部は視線を落としながら答えた。

「まるで生き写しだったからね。彼は紛れもなく、父親似だったよ」

やけに感慨のこもった声だった。

「でも、警部はエリックさんはメリッサさんにそっくりだと……」

ディックがエリックと警部のやり取りを思い出しながら言った。

「本人がそう思い込みたがっていたからだよ。彼が父親だという人間を拒否しているのが手に取るようにわかったからね」

それはエリックさえ気がついていない無意識の行為だったのだろう。

「じゃあ、警部はその写真を見つけた時点でエリックさんのうちで何が盗まれたかわかってたってことなんですね？」

確証があったわけではなかった。事実、あの事件と完全に切り離して考えることも危険だった。

―7―

それでも……。

長年の刑事としての勘が一つの道を導き出したといっても過言ではなかった。

エレンが納得のいかない表情を取り繕いもせずに尋ねた。

「エリックさんのお父さまは売れない俳優だったんですよね？」

あくまでも、ヒギンズ夫人の受け売りだと前置きした上での発言だった。

「表向きはそう言うことになっているが定かではないよ。不思議なことに彼の映ったフィルムは映画会社に一つも残っていない」

「調べたんですか？」

あまりの手際の良さにディック刑事が驚きの声を上げた。

「ずっと前にね」

さすが映画オタクを名乗るだけあって、こういう調査は怠りなかった。

「それだけじゃない」

警部はメリッサがある日突然、映画界から姿を消した謎について述べた。

「彼女の引退には当時、さまざまな憶測が飛び交ったそうだ。さる王国の王子から求婚されてそれを断ったためだとか、失踪説や重病説、果ては自殺説まであったみたいだね」

「でも、事実は違った？」

エレンが答えを促すように警部を見た。警部はその目をそらすことなく力強く頷くと、「エリックさんを身ごもっていたからだろう」とはっきり言った。

彼女は密かにサム・ネビル、つまりエリックの父と愛を育み、真実、彼と生まれてくる子供との平穏な日々を望んだのだろう。

しかし、現実は映画の中の世界のようにハッピーエンドとはいかなかった。

エリックが生まれるという頃、夫のネビル氏が旅行中に突然、行方不明になってしまったのだった。

「ヒギンズ夫人の話を鵜呑みにするわけではありませんが、ネビル氏はなんらかの意図をもって攫われたか、監禁されたのではないかと見るのが当然でしょうね」

「それでも、もう、２６年ほど前のことなんですよね」

ディックの言葉にエレンは一層、眉を寄せた。

なぜ、今なのか？　それは誰もが思う謎だった。

「ところで、ヒギンズ夫人は空き巣の犯人について、何か言っていたかい？」

「それが……」

エレンは戸惑いの表情を浮かべながら続けた。

「彼女は犯人が入ってきたのを知らなかったそうなんです」

「鍵は掛けていなかったってことですか？」

信じられないというようにディックが聞いた。

「彼女はその必要を思いつかなかったのだろう。自分の家だったら、また違ったと思うが……」

警部があくまで推測として答えた。

「物音に気付いて居間へ行って見たら、見知らぬ男がそこらを物色していたそうです」

「犯人を見たんですね？」

しかし、エレンは残念そうに首を横に振った。

「それが、あまりの衝撃で犯人の顔は覚えていないと……。ただ」

「ただ？」

「犯人が手にしていた物は、とても意外だったので覚えていたそうです」

「それが、サム・ネビル氏の写真だったのだね？」

エレンは静かに頷いた。

「身の危険を感じて、大きな声で叫ぼうとしたところを手で塞がれ、そのまま気を失ったそうです」

「殺されなくてよかったですね」

「ええ、彼女もそう言っていたわ。九死に一生を得るとはこのことだって」

倒れた時に足を捻ったくらいですんだというのは幸運だったというしかない。

「でも、エリックさんは、お父さまは交通事故で亡くなったと教えられていたそうですね」

「メリッサさんはネビル氏の失踪に関して、何かを知っていると見たほうがいいと思う」

「じゃ、今回の彼女の誘拐とネビル氏の写真の盗難はそのへんの事情があると？」

エレンは、警部がすべてを話しているようにはまだ思えなかった。どこかで線を引いているような、核心に触れることを恐れているように彼女には聞こえた。

「警部、例の逃げた車はどこの大使館の車だったんです？」

果たして、ディックの問いかけに警部は一瞬躊躇する気配を見せ、

諦めたように告げた。

「R国だよ」

「R国?!」

二人の刑事が息を飲んだ。

「じゃ、犯人を殺害した殺し屋と言うのは?」

「それもおそらくR国の人間だろう」

仲間割れか、それとも別の意図を持って行われたのかはわからないが、と警部は断った。

「R国の大使館はなんと言っているんですか?」

「その車は事件の前日に何者かによって盗まれたと言っているよ」

いわゆる常套手段というやつだとエレンは思った。

「CIAが動き出したことや大使館も巻き込んだことで、しばらくは彼らも行動に移すということは控えるだろう」

「彼らって、まだ殺された3人以外に仲間がいるということですか?」

「わからない。しかし、可能性はゼロではないということだ。彼らの目的がわからない限り、動きようがない」

「と言うことは、エリックさん親子がまた狙われることもあるってことですか」

「そういうことになるだろうね」

「警部！」

とエレンが叫んだ。

「そんな悠長なことをよく言ってられますね！」

彼女の手は怒りで震えていた。

「しかし、我々にはどうしようもないことなんだ！」

だからと言って、手をこまねいているつもりはないがね、と警部は言った。

エレンはそれを聞き、安心したように深く頷いた。

警部はふいにディックを見やると言った。

「ディック刑事、私が職権を濫用したことを上に報告しても構わないよ。君の自由だ」

しかし、ディックはためらうことなく、首を横に振った。

「自分は何も聞いていませんし、この場所にもおりませんでした」

事実、この後、警部が審問委員会に出席することはなかった。

―8―

同じ頃、エリックは警部に渡された茶封筒の中身を食い入るように見つめていた。
少しくせっ気のある栗色の髪を肩まで伸ばし、はしばみ色の優しげな瞳で穏やかに笑っている一人の青年。
エリックはその写真を見ながら、初めて自分が彼の年齢をすでに追い越していたことに気付いた。
ことあるごとに母親から言われ続けてきた。

『あなたはお父さまには全く似ていない』と。

それ故、エリックにとって彼はどこまでも遠い人でしかなかった。
なのに……。

「父さん……」

今まで抑圧してきた想いが一気に溢れたかのように、エリックはこみあげる涙を止めることが出来なかった。

その時、呼び鈴を鳴らし、ヒギンズ夫人が松葉杖をつきながら現れた。
エリックは泣き顔を見られないように涙を慌てて拭うと、足はもう大丈夫なのかと心配そうに尋ねた。

「やぶの医者ほど大袈裟な処置をするんですよ。少し転んで捻った

だけなのに、大そうに包帯なんか巻いて……。歩きにくいったらありゃしない」

決して、少し転んだだけではないのだが、ヒギンズ夫人は気丈にもそう言ってのけた。

「それでも他に怪我がなくてよかった」

エリックは心から安堵の表情を浮かべると彼女のために椅子を引いてやった。

警部と一緒に駆けつけ、彼女がリビングの真ん中で倒れているのを見つけたとき、エリックは本当に心臓が止まるかと思ったのだった。なのに、ヒギンズ夫人は犯人の銃を、どうせおもちゃだとしか思わなかったと言い、さらにエリックの肝を冷やした。

「ああ言うのは怖がって見せるとかえって余計に付け上がるのよ」

「この間は不覚にも気を失ってしまったけれど、今度は気丈に戦ってみせる」と、そんな恐ろしい言葉まで聞かされて、エリックは勇ましいと思うより、本気でその身を案じた。

「やめてくださいよ、戦うだなんて。相手がどんな得物を持っているか知れないんですよ。それにおばさんみたいなか弱い女性が勝てる相手じゃありません！」

『か弱い』という単語にとりわけ力を込めて彼は言った。たいがいの女性は『か弱い』と言う言葉にとても弱い。なぜかそう信じているエリックは、そう言えば彼女も思いとどまってくれるような気がしたのだ。

しかし、ヒギンズ夫人に関しては全くの逆効果だとわかった。

「ふん。どうせ、あんたは私を年寄り扱いしたいんでしょうけどね。私だって、まだまだ若い人には負けませんよ」

そんな言い方をされたら、エリックも苦笑いするよりなかった。幼い頃より母親と彼女にだけは、どうしても頭の上がらない彼だった。他の人間には結構辛らつな言葉を平気で浴びせたりもするのだが……。

彼女の視線がふいにエリックの手元に流れた。

「サム・ネビル……」

ヒギンズ夫人はそう名前を呟くと全く同じ写真を一枚、エプロンのポケットから取り出した。

「おばさん！　どうしてその写真を……」

「持っているかですって？　そりゃ私が写した写真だからよ」

ヒギンズ夫人は懐かしそうにその写真の青年を見つめると言った。

「サムは写真を撮られることをものすごく嫌っていてね。じゃ、なぜ俳優なんかになったのかって言うんだけど……」

まるで、いつかいなくなるのがわかっていたみたいな人だったよ、と彼女は言った。

旅をする時はいつも身の回りの整理をしてから出かけていたと言う。

「メリッサは何も言わなかったけれど、とても寂しい思いをしてい

たと思うよ。彼が旅立った後はいつも真っ赤に目を腫らしていたからね」

しんみりとした声でヒギンズ夫人は続けた。

「私はどうにも我慢出来なくなってね。結婚したばかりの妻をそんな悲しい目に遭わせる彼を許せないと思ったよ。だから、こっそり撮ってやったのさ。窓の外からね」

ああ、だから彼の視線はカメラに合っていなかったのかとエリックは思った。

「写真なんて必要ないって強がっていたメリッサだったけど、これをあげるとすごく喜んでくれてね」

あんなに嬉しそうな彼女を見たことはなかったというほどだったよ、とヒギンズ夫人は思い出したように優しい表情をして言った。

「一人であんたを育てる覚悟をしてから、その写真が唯一のお守りみたいな物だったんだと思うよ」

生きているのか、死んでいるのかさえわからない人間のことなんて、いい加減に忘れなさいって言ったんだけどね、とヒギンズ夫人はその写真を指ではじいて見せた。

「メリッサは今でも待っているんだと思うよ、あのろくでなしを」

自分の父親のことを『ロクデナシ』と言われてかなり複雑なエリックではあった。しかし、そう言われて仕方ない男だとも思った。自分なら、大切な人を放って旅に出たりなんてしない。どんなに好

きなもののためでも、大切な人と子供を同じ天秤に掛けることなんて出来ない。
エリックはそれだけは神に誓えると思った。

「だからね、あんたは今まで以上にメリッサを大事にしないといけないよ。いつまでもフラフラしていないで、定職について、かわいいお嫁さんでも見つけるんだね」

それこそが一番の親孝行と言うものだよと彼女は強く言った。

「それだけはいくらおばさんの言うことでも聞けませんよ。僕の人生は僕が決めます」

けれど、エリックが頑として跳ね除けると、

「口だけは達者になってしまって……。あんたにはあの女刑事さんみたいな気の強い娘さんの方がお似合いなのかもしれないね」

そう言って、エリックの背中をドンと叩いた。
からかわれているとも知らず、むきになって反論しようとするエリックに笑みを見せながらも、ヒギンズ夫人はどこか上の空という表情だった。

―9―

そして、ふいに真剣な顔をして言った。

「エリック、その写真がどうやって戻ってきたのかは知らないけれど、このことはメリッサには言わない方がいいね」

「えっ？」

エリックはヒギンズ夫人の言っている意味がすぐには理解できず、怪訝そうな様子で尋ねた。

「泥棒が入ったということですか？　それは無理です。部屋の様子を見ればあの人には何が起こったかすぐにわかりますよ」

「それでも！」

と彼女は言った。

「部屋の模様替えをしたくなったとか、なんとか、適当な嘘を言ってもごまかすんだよ」

「写真はどうするんです？　写真立てもなくなってしまっているんですよ。探しても、全く同じ物があるかどうか……」

「前のは落として割ったとでも言えばいいじゃないか。メリッサもきっと納得するから」

あまりにも不自然なヒギンズ夫人の提案にエリックはさらに首を傾

げた。第一、母にそんな小細工が通用するとも思わなかった。そうでなくても、警部たちの職業詐称の一件がバレたばかりでこれ以上嘘を重ねたくないエリックだった。

しかし、ヒギンズ夫人も譲らなかった。そして、躊躇いながら、彼女は彼の思いもよらないことを言った。

「実は、あんたには黙っているように頼まれていたんだけどね……」

難しい顔で切り出した彼女の言葉にエリックは突然、顔色を失った。

「事件後の検査で、偶然わかったことがあったんだよ。メリッサの心臓はかなり弱っているみたいだよ」

エリックは一体、誰の話をしているのかと思った。

「医者の見立てだと、かなり前から本人も気付いていたはずだと言うんだけど……。あんたは知らなかったようだね」

エリックの声も出ない様子を見て、ヒギンズ夫人はやっぱりと言う顔をした。

そして、「メリッサは大丈夫だって言うけど、私はそうは思えなくてね」、と暗い表情で続けた。

「心労は一番よくないって思うんだよ。部屋を荒らされただけじゃなく、サムの写真が狙われたと知ったら、どれだけショックを受けるか。私はそれが心配なんだよ」

なぜ父の写真が狙われたのか、なぜ、母が誘拐されたのか、エリッ

クには全くの謎でしかなかった。
しかし、何かしらの理由があったのだろう。
警部がこっそり、盗まれたはずの写真を返してくれたことも公に出来ない事情があったゆえだと頷ける。それに、任務を反古にしてもメリッサに盗難のことを告げずにいたことも、そのことと関係があったからに違いない。

「わかりましたよ、おばさん。母には何もなかったことにしておきます」

ちゃんとやれる自信はまったくないけれど……。
夫人は心の重荷を下ろしたようにほっと息をつくと、ゆっくり立ち上がった。
エリックはヒギンズ夫人に手を貸しながら、ずっと母親のことを考えていた。
そして、それを察したようにヒギンズ夫人はエリックの肩を叩いた。

「いろいろあんたに厳しいことを言うけれど、あの子は本当におまえさんのことを愛しているんだよ」

エリックの笑みは長くは続かず、たちまち崩れた。

『悲しみに負けてはいけない』

それは幼い頃、ことあるごとに母が言い聞かせた言葉だった。
ヒギンズ夫人の言うように、メリッサはエリックを決して甘やかさなかった。

エリックにとっては母はメリッサしか知らないが、それでもＴＶで見るファミリードラマの母親像やクラスメートの母親とはどこか違う空気を感じていた。
それは彼女が有名な女優だったからだけの理由ではない。
どう言えばいいのだろう。
自分が愛されていることは確かなのに、お互いの心に辿り着く距離が長いのだ。
父がいないその分、求める愛情が大きすぎたのか、なぜか母親の与える愛情にいつも満足しきれない自分がいた。
こういうことは大人になればどうでもよくなるものだと思っていたのに、母の愛をいつまでも渇望する自分が消えてなくならないことに苦しむ場面は一度や二度ではなかった。
一緒に暮らしているのに果てしなく遠いと思える人だった。

それでも、やっとあきらめられるようになってきていたのだ。
なのに……。

胸が苦しかった。
自分はいつも母に要求を突きつけるばかりで、あの人のためになることは何一つしていない。まだ、何も……。

「自分の夢のために母を何年生き長らえさせるつもりだったのだろう。永遠なんて時計はどこにもないのに」

見えない時計の針の音が耳鳴りのようにエリックを追い立てる。まるで、最後のカウントダウンが今始まったというかのように。

メリッサが死ぬなら自分が死んだ方がましだと思うくらいには、エリックも母親を愛していた。
それでもなぜか、母親の望む道だけはどうしても歩けない。

自分の思い描いた人生を歩むことがそんなにいけないことなのか。
型にはまった生き方をすればそれで幸福はつかめるのか。
これまで何度も自問自答してきた言葉をエリックは改めて自分の心に問いかけてみた。

「わからない。そんなの、わからないよ……」

エリックの首は大きく横に振られる。
思い通りにならない性格は、旅の果てに行方不明となった父の血筋かもしれない。
そしてメリッサを幸せに出来ないことも、ある種の悲しい遺伝なのかもしれない。
反発しか覚えなかった心が、少しだけ父に近づいたような気がした。
だが、決して嬉しい邂逅ではなかった。

さまよえる、もう一つの魂　―1―

次の日、エリックは母を見舞うべく病院へ向かった。
足取りはとてつもなく重く、まるで両足に鉛を仕込んでいるかのようだった。

「どんな顔をして会えばいいんだろう」

それこそが目下のエリックの最大の悩みだった。彼のぎこちない演技など、メリッサと言う人は簡単に見破ってしまうに決まっている。

「いっそ、本当のことを言ってしまった方が……」

しかし、ヒギンズ夫人が不自由な松葉杖をつきながらも口止めにやってきたことを思うと、母親の病状は決して明るくないものと察せられた。
一緒に暮らしていながら、母のそうした病気の兆候に全く気がつかなかった自分がそれより何よりも許せない思いだった。
最近では仕事よりもミシェルの事件にかかりきりで、母にすれば大いにやきもきしていたに違いない。
本がたった一度出版されたからと言って母は少しも安堵してはいなかった。その後、鳴かず飛ばずの状況が続いてる様をずっと憂いていたはずだ。
エリックとて、明日、明後日になんとか出来るものならやっていただろう。
とどのつまり、自分の不甲斐無さが蒔いた種としか言いようがない。

「ふーっ。考えれば考えるほど暗くなる」

エリックは病院の廊下を歩きながら、疲れきった表情で俯いた。
本当にいろいろなことがありすぎて神経が擦り切れそうだった。
そんな自分を支えているのは結局なんなのだろうとエリックが思考の海に沈みかけた時、その人間は声を掛けた。

「どうしました？　誰かお亡くなりにでもなったんですか？」

振り向いた瞬間、エリックはまるで幽霊にでも会ったかのように震撼した。

「あ、あなたは……」

その人物は不敵なというのがぴったりな表情で意地悪く笑った。

「覚えていてもらったなんて光栄だな。それで、今度は誰が亡くなったんです？」

まるで死神のような男だとエリックは、はっきりとした認識を抱いた。

「ライアン・マクレガーさん、あなたこそ、どうしてここに？」

警察が彼を追っていることは知っていた。そしてなかなか捕まえられないでいることも。
彼は碧の瞳をいたずらっぽく揺らめかせながら適当なことでも言うような軽口で言った。

「弟が入院していましてね。その見舞いを兼ねて」

エリックの体中の血が一瞬カッと熱く燃えたようだった。弟とはグ

レッグ以外になかった。
グレッグは意識は取り戻したものの、まだ絶対安静の状態が続いているはずだった。
彼に対する事情聴取もまだだと聞いている。
実際、彼が入院していることを何故、ライアン氏が知っているのか、エリックにはそれが謎に思えた。
鬼がうじゃうじゃいるはずの病院にあえて危険を冒してまで見舞いに来る人間には、どうしても思えなかったのだ。

「警察があなたを捜してるそうですね。本当はあなたがパメラさんを殺したんじゃないかと」

エリックは挑むような目をして言った。
ライアン氏は何を言っているのかと言うように首を竦めた。

「警察と相性が悪いのは確かですよ。だからって、彼女を殺したなんてまるきりの言いがかりってものですよ。第一、証拠がない」

「証拠がなくても、動機があるんじゃないですか？」

「一体、どんな？」

ライアン氏はすぐさま切り返した。

「それは……」

エリックがすぐに答えられないと知るや、彼は余裕の笑みさえ見せながら言った。

「最愛の女性を殺せる人間がいるとしたらお目にかかりたいもので

すね。ああ、そう言えば、あなたも彼女の幻の婚約者だったんですよね」

今ではどちらが本当の婚約者だったのか確かめようもありませんがね、と彼は言った。

「ただ」

と彼は続けた。

「お互いにはわかるはずだ。誰が嘘を言っているかってことが」

その目は、エリックを凍りつかせるのに十分なほど剣呑なものだった。

おそらく、普通の人間なら、視線をたちまち外していただろう。しかし、エリックは違った。

ライアン氏の眼はもう一人の人間を思い起こさせた。

「あなたはやっぱり、彼のお兄さんなんですね。心根は全く比べ物にもならないけれど」

ライアン氏の顔色がわずかに変わった。

その時、廊下を歩いてくるディック刑事を遠くに見つけたエリックは、思わず手を振ろうとして自分の腹部に何か固い物が押し付けられるのに気がついた。

ライアン氏の顔は元の余裕のある顔に戻っていた。

「こういうことはしたくないんですがね」

怖いという気持ちよりも場所を考えずに拳銃を突きつける神経がわからなかった。しかし、いざとなると何をするかわからない男だとは容易に知れた。

「私が離れるまで、おとなしくしているんですよ」

「やっぱり、あなたが犯人だったんですか」

「とんでもない。警察が嫌いなだけです。嫌いなものから逃げる。これ、鉄則でしょう?」

「グレッグ刑事の見舞いには行かないんですか?」

エリックは瞳に力を込めて言った。

「ああ、やっぱりあなたは知っていたんですか。行ったところで彼は喜ばないでしょうからね。それに、さすがにあの警備をくぐる勇気はなかったんですよ」

でも、収穫はあったな……と、彼は小さい声で呟いた。

ディックの足音が聞こえるほどに近づいてきた。

今ここで、彼の腕を掴んだらどうなるだろうとエリックは一瞬思った。

ディックはおそらく、彼を逃がさないだろう。しかし……。

エリックの決心を時は待ってはくれなかった。

ディックがエリックを見つけたと同時に、ライアン氏の体はもうそこにはなかった。

「お知り合いですか?」

―2―

慌て気味に駆けて来たディックの視線がライアン氏が去ったと思われる方向へと流れた。エリックの固まり具合から何かを俊敏に察したのだろう。
彼はすぐに核心を突いた問いかけをしてきた。

「あいつ……ですか」

ディックはただ単に怪しいと思っただけだったのかもしれない。『あいつ』と言う言葉の意味を深く考えている時間も惜しいエリックは叫ぶように言った。

「追って下さい！　彼は銃を持っています！」

その時初めてディックには本当のことがわかったのだろう。

「ライアン・マクレガーがここに？　なんてことだ！」

彼は無線を取り出そうとして、自分が持っていないことに慌てて気が付いた。
しかし、その後の彼の対応は素早かった。付近の警官に何かを告げるとライアン氏が去った方向を見定めて早口で言った。

「すみません、エリックさん！　主任と警部に連絡をお願いします！」

そして、そう言い置くと、短距離選手も真っ青というくらいの速さでライアン氏の後を追いかけた。その後を数人の警官が続き、病院

内を緊張がにわかに走った。

エリックはロビーの公衆電話に飛びつくとスコットランドヤードではなく警部に直接繋がるナンバーを押していた。

呼び出し音がいつもにまして待ち遠しかった。

警部はエリックの声の調子から緊急事態を察すると落ち着いて話すようにと低い声で言った。

「ライアン・マクレガーが病院にいたんです！　今、ディック刑事が彼の後を追っています。でも、ライアンは拳銃を持っていて……」

エリックはここで大変なことに気がついた。ディックは無線さえ持っていなかった。ということは拳銃も携帯していないと考えられる。

「警部、ディック刑事はもしや今日非番だったのでは？」

警部は電話の向こうで、そうだと告げた。

ディックは丸腰で今、ライアンを追ってるのだと思うとエリックは居ても立ってもいられなくなった。

エリックは、銃を突きつけながら平然と冷酷な笑みを刻んでいたライアン氏を思い出していた。

「急いでください、警部！　彼が撃たれる前に！」

警部はとりあえず電話を切ると言い、エリックにそこで待っているように付け足すと自ら回線を切った。

エリックはしばらく受話器を握ったまま、茫然と立ち尽くしていた。
あきらかに警察の失態と言えた。
ライアン氏は帽子を目深にかぶり、顔を隠していた。それでもだ。
警察が彼を見逃すとはどうしても考えられなかった。

「どういうことなんだろう……」

エリックは理解に苦しみながら、その答えを必死に考えていた。
そのからくりは、それから数時間後に自ずと知れる結果となった。
檻の中のライオンのように病院の廊下を行ったり来たりしていたエリックは、エントランスを息せき切って駆け込んできた警部と危うくぶつかりそうになり、驚きの声をあげた。

「警部！」

しかし、警部は視線だけエリックに走らせると、あえて立ち止まることなく、そのまま早足で歩き続けた。

「どこへ行くんです！　ディック刑事は？　ライアンは捕まったんですか？」

矢継ぎばやのエリックの質問に警部は一点を見つめたまま、ただ一言「逃げられました」とだけ告げた。

「じゃ、ディック刑事は無事だったんですね？」

「ええ」

しかし、その受け答えはいつもの警部とは思えないほど、そっけないものだった。いや、そっけないというよりも頭にきているという感じだった。
普段の穏やかさを知っているだけに、こんな警部は珍しかったし、不安を覚えた。
警部がこんなふうに不機嫌さを隠そうともしなかったことが、エリックの知る限り一度だけあった。
それは、グレッグ刑事が撃たれたときだった。

「信じられない！」

リノリウムの床を大股で歩きながら、警部は突然吐き捨てるように言った。

「何が信じられないんです？」

そう言って、思わず見上げた先には怒れる獅子の如く目を吊り上げている彼の顔があった。さすがのエリックもそれ以上尋ねることが出来ないくらいの怒りのオーラだった。
警部はある病室の前にやって来ると、その前に張り付いている二人の制服の警官に声を掛けた。

「ご苦労様。何か変わったことはなかったかい？」

警部はあくまで普通の声でそう尋ねた。
すると一人の警官が気を付けをしたままの姿勢で言った。

「はい。何も変わったことはありませんでした」

「見舞い客はやって来なかっただろうね？」

「はい。グレッグ刑事のお兄様と仰る方がお見えになった以外は誰も……」

ダーン！！

警部は彼の言葉が言い終わるか終わらないかのうちに、すぐ側の壁を思い切り拳で叩いた。

「これだ！　わかるでしょう、エリックさん！　警察はここまで腐りきっているんだ。あんな男一人のために！」

肩で大きく息を吐くようにしながら警部は続けた。しかし、それは今までの穏やかな質問口調とは似ても似つかぬ厳しい声だった。

「君たちのリーダーは誰だ！　所属部署を言いたまえ！」

彼らは真っ青な顔で恐る恐る口にした。

「マーク・ウエイト警部補です！」

「所属部署は！」

「け、警ら課です……」

警部はもう一度力の限り壁に拳をぶつけた。

そして、しばらく息を整えるのに時間を費やすと彼らにすまなかったと小さく告げた。

―3―

「それともう一つ尋ねたいことがあるんだが。ウエイト警部補は言わなかったかい？　グレッグ刑事の身内であろうと誰一人通してはならないと。それから、もし現れたら逐一連絡をしろと」

二人の警官は困惑したように顔を見合わせると言った。

「いいえ、何も……。指示という指示を与えられず、連れてこられましたので。ただ、怪しい人間は入れないようにとだけ……」

「では、この写真も君たちの間には出回っていないんだね？」

そう言って、警部はおもむろに一枚の写真を取り出すと彼らに見せた。

彼らは一同に首を振り、そして言った。

「いえ、見せられてはいません。ただ……」

「ただ？」

「この顔の人物なら知っています」

警部は場違いなほど大きな声を出して笑った。

「そりゃそうだろうね。さっき、君たちが言った、グレッグ刑事の兄と言うのがこの男だったんだから！」

二人は、警部の決して笑っていないその目に震え上がるように体を

硬直させた。

「悪かった、続けてくれ。それから、ウエイト警部補から連絡があったらすぐに私のところに来るように伝えて欲しい。ハワード・キャンベルが至急、捜していたと！」

警部の傍らで固唾を飲んで見守っていたエリックは、警部が病室には入らずにまた歩き出したことを不思議に思いながら、慌ててついて行った。

「警部、グレッグ刑事のところには寄らないんですか？」

警部の瞳に先ほどまでの怒りはなかった。かわりに、なんとも言いようのない苦渋の表情が彫の深い彼の横顔に表れていた。

「警部！」

エリックの不安はまだ解消されてはいなかった。それどころか、ますます膨らんでいく気配だった。

警部は階段を上り、別の病棟へと向かった。

そこは、いわゆるＶＩＰ階級のための特別室のある棟だった。

警部は入り口で警察手帳とＩＤカードを見せると、エリックを伴ってその病棟へ足を踏み込んだ。

「あなたのお母さまもこちらにいらっしゃいます」

「えっ？」

ようやく声を発した警部は、歩きながらそう言った。

「ここはめったな者は入って来れません。セキュリティは万全なので」

警部の話によると、王族や政治家など、特定の人間にしか利用できない病室らしかった。
どれだけお金がかかっているか、想像することさえ恐ろしいくらい一般の病棟とは中身まで違っていた。
まるで、どこかの宮殿を思わせる真っ赤な絨毯と煌びやかなシャンデリアに迎えられ、二人は奥へと進んでいった。

靴音もしないような暖色の絨毯の上を警部とエリックは無言のまま歩き続けた。
内部は高級ホテルのようでも、明らかにそれと違うのはあまりに静かすぎることだった。
病室らしい扉をいくつも通り過ぎるうちにエリックの足は次第に遅れがちになっていった。

「どうしました？」

警部が立ち止まって背後を振り向いた。
エリックは視線を落としながら、「別に」と呟いた。
そんな憔悴しきった顔をしながら、別にもないものだと警部は痛々しい思いでエリックを見やった。

時々、彼はあまりに脆く思えるときがあった。
どちらかと言えば論客で、エレンやあの難し屋のグレッグ刑事とも平気で渡り合うかと思えば、自分の身近な人間のことになるとたちまち心の弱さを露呈する。
とくに母親と親友に関しては彼の理性は正常に働かないことが多か

った。
誰もが持ちうる心の闇を一見、健全そうに見える彼も例外なく持っているということなのだろう。
そう。警部とて決して例外ではなかったが……。

「警部」

エリックはどこかうつろな表情のまま声を発した。

「母は死ぬんでしょうか」

それはあまりに唐突な問いかけだった。

「どうしたんです、急に」

ライアンの銃の脅しにも決して屈しなかった人間とは思えないような、心細さを纏いきった彼は明らかに、今、身内の死に怯えていた。
警部は一瞬言葉を無くしかけたが、気力を振り絞るようにエリックの肩を掴んだ。

「人間はいつか死にます。それに当てはまらない人間はいません」

そんなことはわかっていると言うようにエリックは首を振った。それでも、警部は彼の肩に置いた手を外そうとはしなかった。

「まあ、聞きなさい。だからと言って、あなたのお母さまが今すぐ亡くなるなんてことはないんですよ」

警部もメリッサの検査の結果に関しては耳に入れていた。
しかし、聞くところによれば、今すぐどうこうというものではなく、

今まで通り静かに養生すれば何十年も生きられるという話だった。
エリックの怯えようは、しかし、この限りではなかった。
おそらく誰かからの又聞きで不安だけ増長していったのだろう。
思い当たる人物はただ一人しかいなかった。

（あの隣の夫人は親切なんだかどうなのかわからないな……）

しかし、メリッサの夫をよく知る人物だけあって、警察もないがしろに出来る相手ではなかった。現に彼女はサム・ネビルの写真を自ら撮り、ネガさえ持っていた。

「とりあえず、お母さまに会っておいでなさい。不安なんて吹き飛びますよ。きっと今頃、退屈でエレン相手にあなたの悪口を言っているかもしれませんよ」

「エレン刑事が母と？」

―4―

警部はグレッグ刑事とメリッサを昨夜、一般病棟からこちらの病室に極秘で移し替えたことを打ち明けた。
これは内部事情による物で理由は詳しくは明かせないがと前置きして。

実際、手を打っておいて正解だった。
ライアンが現れるかどうかは大きな賭けのようなものだった。しかし、グレッグが撃たれたことは父親の耳には届いていることは確かで、遅かれ早かれ、何がしかの接触をとってくることは十分に有り得ることだった。
だが、本当にライアン自身が現れるとは警部も思っていたわけではなかった。

「母も彼に狙われているんですか？」

新たな不安の要素を突きつけられ、エリックはますます怯えた顔をした。

「いや、あの事件とライアンは全く関係がありません。あくまでも警備上の問題ですよ」

今は何を言ってもエリックの耳に届くのはマイナスの事象しかないと思った警部は詳しく教えることを辞めた。

「どちらにしてもお母さまはもうすぐ退院の許可が下りると聞いています。さあ、早く元気な顔を見ておいでなさい」

「警部は来ないんですか？」

「親子水入らずのところを邪魔する趣味はありませんからね。ああ、エレンに会ったらすぐにグレッグの病室に来るように伝えてくれませんか？」

警部はそう言うとメリッサの病室のカードキーをエリックの手にしっかりと握らせた。

それでも、なかなか思い切れないのか、エリックはしばらくそのカードキーを見つめていた。

警部の去ってゆく背中が視界の隅に映っても、エリックはまだためらいを捨てられなかった。

エリックは自分が今来た道をふと振り返った。

長く続く赤い廊下はさながら、一筋の川のように思えた。

いつか見たあの夢のことがふいに思い起こされた。

冷たい水の上をあの人の亡骸が長い黒髪を揺らめかせながら静かに流れてゆくその夢は、今でもエリックの脳裏に時々現れた。

目を閉じると、一層彼女の姿は鮮やかに甦った。

悲しみを帯びた細い眉。

透き通った白い肌。

けぶるような長く美しい睫毛。

通った鼻筋に綺麗な口元。

そして、憂いを含んだ泣きぼくろ……。

エリックの眉根が、そのとき訝しげに寄った。

「なぜなんだろう……」

夢で見た彼女の顔は日に日に鮮明になってゆく気がする。その一方で、生前のパメラの顔がおぼろげになる。

パメラに会ったのは二回限り。

初めてミシェルの家を訪れた時と、ミシェルとルイーズのことで相談があると呼び出された時以外にないことにエリックは改めて気付いた。

今や、夢で見た女性が本当にパメラだったのかどうかも怪しいものだった。

エリックがメリッサの病室の前でそんな妙な思いに囚われていると、突然病室のドアが中から開いた。

「エリックさん……」

顔を見せたのは、エレンだった。

「何をしているんですか？」

怪訝そうに尋ねられ、エリックは現実に戻ったように苦い顔をした。

エレンはエリックの背後を覗き込み、あたりを見回すように首を回した。

「兄さんはいないのね。結構。さぁ、入って」

まるで自分の家のように言うとエレンはエリックを病室に招き入れた。病室と言っても、まったくそうは見えなかったけれど。

「すごい部屋だね」

エリックはスイートルームのような、贅沢な調度品で埋め尽くされた部屋を見渡した。その目が探しているのは、けれど瀟洒なテーブルやソファなどではなかった。

エリックは引き寄せられるかのように窓辺の白いベッドに近づくと悲しげな顔になった。

「母さん……」

青白い顔が傍目にも痩せて見えた。

「今、眠られたところよ」

エレンは小さな声でそう言うとエリックの傍らに立った。

「どうして、もっと早く会いに来てあげなかったんです？　今日もずっと待っていらしたのに」

非難するように言われ、エリックは反す言葉もなかった。

エレンはふーっと息を吐くと、「兄さんが言ったとおりね」と呟いた。

エリックが眉を下げたまま振り向くとエレンは首をすくめて続けた。

「あなたの弱点がわかったわ」

「弱点？」

「そう。どんな強そうに見える人間にだって弱点はあるものよ」

「強そうに見える？　この僕が？」

エリックは耳を疑うように目をすがめながら言った。

「間違えないで。決して、強いとは言っていないから」

しかし、エレンの口からはがっかりするような言葉がためらいもなく続き、エリックは大きな溜め息をついた。

「君のその辛らつな揶揄は誰譲りなの？」

「あら、誰譲りでもないわ。きっと」

その答えを聞いたエリックは、今の今まで彼女の実の両親がすでにこの世にいないことを失念していたのに気付いた。

しかも、その傷は今なお癒えていないというのに……。

―5―

「ゴメン……」

「なぜ謝るの？」

エレンはさっぱりとした調子で言った。

「だって、君のご両親の事を忘れていたから……」

いかにも歯切れの悪いエリックの言い方に、彼女は「忘れていいのだ」と言った。

「でも……」

エリックが言い足そうとするとエレンがそれを押し留めた。

「同情されるのは嫌なの。私は私。これまでも、これからも」

それはそうだろうけど、とエリックは思った。

誰にも「過去」は存在する。

そして、人間は少なからずその過去の影響を受けないでは生きていくことは出来ない。良い事も、そうでないことも。

エリックはそういう考え方の持ち主だった。

だから、人の痛みもわかる。そのつもりだった……。

「同情なんかじゃなく、共感とは捉えられないかな」

「共感？」

エレンは初めて耳にする言葉のようなニュアンスで尋ねた。彼女にとってそれは難しいことなのだろうことは顔を見ればわかった。

「君は誰かに共感したことはないの？」

エレンは少し考えていた様子だった。そして、きっぱりと「ないわ」と言った。

「グレッグ刑事にも？」

エリックはエレンの少しの表情の揺らぎも見逃さないようにしながら、尋ねた。

「ええ」

けれど、それにも彼女はためらわずに答えた。

「同情はしているわ。あんな最低の兄と最悪の父親を持って生まれたことに関しては……。でも、共感はしない」

「第一」と彼女は言った。

「一々、不幸な人間に共感していたら、刑事なんかやっていられない。そうじゃない？」

彼女の言い分は最もだった。それでもエリックには納得がいかなかった。

それはあたかも勝者の論理だった。

勝者の論理が悪いというのではない。けれど……。

「残念だよ。君が時々優しいのはすべて同情だったのかと思うと……」

エレンはとても不愉快そうな目をした。

「あなたは何が言いたいの」

「もういいんだ」

勝手に質問を投げかけ、勝手に自己完結して終わったエリックのやり方に彼女は苛立ちを隠せない様子だった。

「あなたがよくても私はよくないわ。このままじゃ、私が否定されて終わってしまうような気がする」

「否定なんてしていないさ」

「したわ！」

エレンも譲らなかった。

彼女にしてみれば、エリックの理想とする自分に劣ると言われたも同然な気がした。

そんな勝手な見解があるだろうか。エレンのイライラは収まらなかった。

「あなたは結局ありのままを受け入れるのが怖いのよ」

エレンは続けた。

「自分がこうと思った人は絶対そうじゃなきゃ我慢ならない。そうでないと不安でしょうがないのよ」

「どういうことだい」

エリックも黙ってはいられなかった。

「僕が自分の理想を押し付けているって？」

「ええ、そうよ。あなたは少しでも気に入らない部分があるとその一つのために全てを否定する。もうどうでもいいと諦めるのよ」

諦めてしまうと楽ですものね、と彼女は重ねて言った。

「君に僕の何がわかるんだ」

あまりの言われようにエリックの頭にも血が上った。

「わからないわ。だって、あなたがわからないようにしているんでしょう？」

エリックは押し黙った。そして、眠っている母に気遣うようにベッドから離れた。

「どうしてこうなるんだろう……」

エリックはソファに座ると片手で顔を覆った。

「僕の言葉が足りなかったら謝るよ。でも、本当に君を否定したわけじゃないんだ」

理想を押し付けたつもりもないと彼は言った。

「ただ……」

エリックは面を上げずに言った。

「怖いのは確かなんだ。変わってゆくことが、たまらなく悲しくてしょうがない」

エレンは向かいのソファに座ると言いたい言葉を飲み込んだ。

彼女もエリックが自分の身に起こった急激な変化についていけないでいることに薄々気付いていた。

でも、その様子はまるで自分から自滅の道に飛び込んでいるかのような弱さも感じられた。

「あなたは際立った一面だけを見すぎているのよ。そして、もう一つの面に出会ったとき、あなたはそれを『変化』だと受け取るんだわ。すべてを知らなかったことの言い訳に……。なのに、悪いのはそういう見方をされた方の人間なの？」

エレンの言葉はやはり苛烈だった。エリックはただ、ただ項垂れていた。

なぜ、自分は反論しないのか。

なぜ、自分よりも若い彼女に言いくるめられなければいけないのか。

言いたいことは山のようにあった。

しかし、実際、彼女の言うことは正論だった。正論以外の何ものでもなかった。

―6―

その頃、苦悩していたのは、けれど、エリックだけではなかった。グレッグの病室を訪れた彼もまた、なんともやりきれない顔をしていた。

「刑事にならなければよかったとこれほど思ったことはないよ」

警部はグレッグ刑事のベッドの傍らの椅子に腰掛けながら、深いため息をついた。

「どうしたんです、警部らしくない。あなたが弱音を吐くなんて、珍しいですね」

グレッグは半身を起き上がらせた状態でベッドの上から言った。

「いや、刑事を辞めたいと思ったことは正直、これが初めてというわけじゃないけどね」

少なくとも、2，3回はあったことを彼は記憶していた。

「でも、辞めなかった」

グレッグは微笑を見せながら言った。

「あの男に法の裁きを受けさせるまでは辞めるわけにはいかないからね」

君の前でなんだけど、と警部も軽く笑った。

「別に構いませんよ。ちなみに、『あの男』と言うのは、兄ですか、それとも父？」

「さぁ、そこまで手の内を見せることはやめておこう。君の想像に任せるよ」

グレッグはどうでもいいことのように首をすくめて見せると、「それで？」というように警部を見た。

「早くしないとエレノア刑事が来てしまいますよ。あなたは僕に何かを言いに来たんでしょう？　エリックさんのことで……」

「エレンなら、まだ大丈夫だ。あの子は彼が好きみたいだからね」

しばらくはまだ姿を見せないだろうと警部は言った。

「そうでしょうか？　誓ってもいいですが、彼らはきっと上手く行きませんよ」

グレッグは自信有りげに言った。

「君はいつから占い師になったんだい？」

「別に。本当のことを言ったまでです。彼女を幸せにするのはあなたでしょう？」

警部は少し憂いを含んだ笑みを見せると、小さく首を振った。

小さな沈黙が流れ、警部は空気を変えるように椅子から立ち上がると、窓辺に立った。

特別病棟だけあって、外の景色も圧巻だった。目の前を悠々とテムズ川が流れ、その向こうにウィンザー城が見渡せた。

「君は正直なところ、どれだけ知っているんだろう」

警部は少し重そうな口調で言った。

「どこまで、とは？」

「君がR国の言葉が堪能なことはディックも言っていた」

「ディック刑事……」

グレッグは初めて難しそうな顔をした。

「彼は気をつけたほうがいいですよ。あれほど有能なのに、今のポジションに固執しているのがわからない」

しかし、警部はそれに対して驚いた様子もなかった。それどころか。

「彼はエレンの忠実な犬だからね。少しも心配はしていないよ」

と真面目な顔で言った。

「犬……ですか。それは変わった例えだな」

グレッグはその例えを呟くと、妙に気に入った顔をした。

「わからないんだが、エリックさんの家の警報機のスイッチを切っ

たのは本当に君じゃないんだな？」

「ええ。僕じゃありません。神に誓っても構いませんよ」

「じゃあ、一体誰が……？」

「これは推測なんですが」とグレッグは言った。

「あの人じゃないかと……」

「メリッサさんが？　なぜ？」

警部はそれには考えが及ばなかったというように尋ねた。

「彼女は犯人からなんらかの接触があることを知っていたような気がするんです。後から思えばなんですが、彼女は確かに何かに怯えている感じでした」

それは自分がエリックの家を初めて訪ねたときに漠然と思ったことだと彼は語った。

「メリッサさんは最初、どうも僕を怪しいと思っていたフシがあるんです。エリックさんの友人らしくなかったからでしょうね」

「じゃあ、彼女は何かが起きることを予感していたと言うんだね」

「おそらく」とグレッグは頷いた。

「じゃあ、余計に警報機を切ったというのは考えられないと思うんだが……」

しかし、グレッグは首を横に振った。

「あの人には自分のこと以上に守りたい物があった。彼を巻き込むことだけはどうしても避けたかったんです」

「エリックさんのことだね？」

グレッグは今度は無言で頷いた。

「恐らく、犯人は警報機のことを知っていたんでしょう。それで、彼女にそのスイッチをあらかじめ切っておくことを要求したのではないでしょうか？」

「しかし、あの警報機は違う目的で付けたものだ。別の事件に絡んでの物だったのに」

「それでも、あれは彼らにとってはおおいなる障害に違いなかった」

「ということは、また警察内部に別のスパイがいるということになるな」

警部はやれやれというようにため息まじりの声でそう嘆いた。

「それで、君はどこまで知っているんだね？」

警部はまたその質問を繰り返した。

「おそらく全部。警部が知っておられるのと同じくらい、とでも言った方がいいでしょうか」

「ということは、やはりR国の人間の仕業だったんだな」

グレッグは自分はかつてR国の外人部隊に所属していたこともあると正直に明かした。

「君は一体、いくつなんだね？」と警部は感心したというよりも、呆れたように尋ねた。

「27歳ですよ。正真正銘、あなたの愛しい妹さんより二つ上なだけです」

グレッグはからかうような口調で言った。

「それじゃあ、あのことも知っているんだな？」

しかし、それには動じず、警部は意味深に言葉を濁しながら尋ねた。

―7―

「戸籍のことですね」

とグレッグは言った。

警部は大きく息を吐くと、頭を抱えるしぐさをした。

警部があの日、埠頭で殺された男たちのポケットから持ち去った物はサム・ネビルの写真だけではなかった。おそらく、それよりもずっと重いものだった。

「それ以外に知っていることは？」

「言えません」

グレッグは淡々とした表情を変えることなく、その質問を拒否した。

「職務規範に問われても、言えないという事かい？」

「ええ。彼女の承諾がない限り、口が裂けても言いません」

はぁーっと、警部はまた深い息を吐いた。

「君の洗脳を解いたのがあの人だったとはね……」

警部は別の意味で本当に頭を抱えたい気持ちだった。

「あの人を守るために自然と体が動いていました。死んでもいいと思った。その瞬間、僕は神の啓示を聞いたんです」

今まで、自分は何のために生まれ、何のために生きているのかわからなかったと彼は言った。唯一、父親の言葉だけにその意義を感じていたと。
でも、メリッサを救った時、自分が生まれ、ここにいる理由を知ったのだと。

「運命って本当にあるんですね」

グレッグのうっとりしたような言い草に警部はたちまち嫌そうな顔をした。

「しかし、君の事を全面的に信用するところまではいかないね」

「どうぞ。あの方の信頼以外、僕にととってはどうでもいいことですから」

エリックが聞いたら嘆くだろうな、と警部は暗に思った。でも、グレッグにとってはよかったことなのだろう。
実際、彼の顔はとても穏やかに見えた。

「これからどうするんだい？」

「しばらくは現状維持の状態を続けます。その方が捜査上、都合がいいんじゃないんですか？」

食えないところは相変わらずだったと警部は苦笑した。

「犬か……」

「えっ？」

「いや、僕はあの人の犬になるんだなって」

「なんだって？」

警部は不思議そうに、というよりも不気味そうに彼を見つめた。

「こんな気持ちは初めてなんですよ」

浮かれたグレッグと言うのは、見ていて、こちらが恥ずかしくなりそうだった。

「いい気持ちのところを水を差すのはどうかと思うんだが、彼女は君よりずっと年上なんだぞ」

「年齢なんて関係ありません。彼女の美しさをあなたも知っているでしょう？　本当にあの人は女神みたいな人だ」

グレッグの瞳はまるで夢見る乙女そのものだった。

警部は半ばヤケ気味に呆れたように尋ねた。

「君は今まで一度も誰かを好きになったことはないのかい？」

「ええ。ないです」

即答されるとは思っていなかった警部は驚きを隠せないように言った。

「君みたいに容姿端麗な男が？　信じられない」

「姿形は関係ないでしょう。それに僕はとても性格が変わっていますからね」

『悪い』と言わないところが実に彼らしいと警部は耳を傾けていた。

「ついでに、友人もいませんでした」

だろうなと警部は思った。

「そして初めて出来た友人の母君に恋をしたと……」

警部は口に出すのも嫌そうに、けれど仕方なく呟いた。

「恋なんて軽いものじゃありません。崇拝です」

よくわからないという顔をしながらも警部は「はい、はい」と頷いた。

内心、思っていた。グレッグ刑事は犬になるだろうと。

彼の忠誠心というのが半端でないことは今までの父親の呪縛からもわかることだった。

そして、今度こそ彼は心から仕える相手を自分から見つけたのだ。

彼にとって、彼女は新たな主人となるだろう。

しかし、問題はメリッサがそれを全く望んでいないことだろうけれど……。

どちらにしても、警部の悩みは尽きそうになかった。

「それで、ＣＩＡは動き出したんですか？」

グレッグが真面目な顔で尋ねた。

「動きかねているみたいだ。実際、材料が乏しすぎるからね」
警部は正直に答えた。
「君は証言をする気はなさそうだし」
「ええ。嘘は得意ですけど」
はぁーっと警部は今日、何度目かのため息をついた。
「そうそう、ライアンが病院に姿を現したよ」
「そうですか」
グレッグは別段顔色も変えず、答えた。
「そっちの件のことも話してくれる気はなさそうだな」
警部の視線が強くなった。
「話したくても知らないんですよ。でも、エリックさんを救うためなら協力は惜しまないですよ」
グレッグの言葉は実の兄と父親さえも裏切る覚悟があるのだと受け取ることも出来た。しかし、全面的にその言葉を信じられる警部ではなかった。
彼が父親の呪縛に揺らがないという保障はまだどこにもなかった。
「ライアンは何をしに来たんだろうね」

「さあ。生きてるか確かめに来ただけじゃないですか」

グレッグはとても冷めた表情で語った。

「あんな危険を冒してまでかい？」

「危険？」とグレッグは笑った。

「彼が危険を冒すような人間じゃないことはあなたもご存知でしょう？　ちゃんとお膳立てが出来ていたからです。それは内部の誰かがうまくやったんでしょうが……」

「ああ」

と警部は見張りの警官が言っていた言葉を思い出していた。

「マーク・ウエイト警部補は知っているかい？」

「いえ。ただ、名前だけは。最近、移動してきたようですね」

「ああ、そうらしい」

と警部も眉をゆがめながら答えた。

「彼がどうも一枚噛んでいそうな気がするんだ」

「わかりました。気を付けておきましょう」

グレッグは面白そうに口の端を吊り上げた。

「嫌な笑い方だな」

警部はそんな彼を露骨に指摘した。

「そうですか？　癖になっているものですみません」

それでも、彼は本当に謝っているようには見えなかった。その証拠に、その不敵な笑みはしばらく彼の顔からは消えなかった。

―8―

「それにしても遅いな」

警部の目が自然と自分の腕時計に向いた。

「気になりますか？」

グレッグのからかい混じりの瞳に警部は「別の意味でね」とあいまいに答えた。

エリックとエレンはこのところ諍いを起こす頻度が増していた。

エレンに対して初めて本心で接する彼を頼もしく思っていたが、お互い素直になれない相手には違いないらしく、見ていてハラハラする場面が多くなってきていたのも事実だった。

確かにエリックが以前警部に嘆いたように、エレンは特に彼に対して厳し過ぎる傾向にあった。

それはエレンの心の成長の証なのだろうけれど、当のエリックにしてみればたまったものではない。

人は誰でも、許される場所を求めるものだ。

そして、エレンが決してその場所になれそうにないことは警部が一番わかっていた。

なぜなら、彼女も同じだけ誰かに許される必要があったから。

そして、その場所は……。

「警部」

グレッグが警部の背中に声をかけた。

「あなたは自分の一番大切な物を他人に預けられる人ですか？」

警部は急に我に返ったように振り向いた。

「えっ？　なんだって？　すまない、聞いていなかった。悪いが、もう一度言ってくれないか？」

「いいえ」とグレッグはすかさず首を横に振った。

「いいんです。そんな大切なことではなかったので、忘れてください」

グレッグの笑みはどこかもの悲しい笑みだった。

それから、しばらくたわいのない談話が続き、もう一度時計を見た警部がソファから立ち上がったとき、やっとエレンが病室に現れた。警部は彼女の顔を見た時、やはり自分の予想が当たっていたと思わざるを得なかった。

エレンは『後悔』と言う名の憂いを顔に貼り付けていた。

おそらく、また彼をやり込めてしまっただろうことは優に想像がつく。

今頃、エリックはエレン以上に落ち込んでいるに違いない。

ついさっきグレッグが告げた言葉がふと思い出された。

『彼らはきっと上手くいきませんよ』

そのことを内心喜ぶ気持ちが本当にないのかと聞かれると、警部にも真実、答えられなかった。しかし、それは普通の兄妹にも十分あてはまることだというのが警部の良識でもあった。

警部は、「すぐに戻る」と言い置いてグレッグ刑事の病室を出るとメリッサの病室を目指した。
やけに足を取られる心地がして警部は気がせいていた。
大広間のようなロビーを横切ろうとした時、警部は長いソファーにたった一人ぽつんと座り込んでいる彼を見つけた。
彼の目は窓の外を悠々と流れるテムズ川に一心に注がれていた。そして、警部が近づいたのに気付く様子さえなかった。

「何を見ているんですか?」

わかりきったことを聞いてしまったと警部は思わず悔いた。しかし、意外にもエリックは警部の予期しないことを口にした。

「一体、あの人は誰だったんだろう……」

独白のような呟きに警部は「何ですって?」と尋ね返した。
エリックの目は虚ろでさえあった。そして話すこともどこか夢の中にいるようなあやふやさを覚えた。
警部はエリックが見つめる視線の先を追わずにいられなかった。そこには、鉛色に鈍く光るテムズ川が静かに横たわっているだけだった。
このところ、立て続けにいろんなことがあり過ぎて、想像以上にエリックの精神が疲弊しているのは血の気のない横顔を見てもわかる。
警部は心からの同情を示すように、「コーヒーでも飲みますか?」と声をかけた。
しかし、エリックはそれに首を横に振ると思い切ったように口を開いた。

「警部、パメラさんの写真を見せてもらえませんか？」

唐突なその願いは警部を驚かせ、そして興味を抱かせた。

「急にどうしたんです？　何か新しいことでも思い出したのですか？」

エリックは気まずそうな顔をしながら、その反対ですと告げた。

「その反対とは？」

警部は彼の一言一句も逃さないとするかのように、ペンを取った。

「実は……、その、パメラさんの顔がよく思い出せなくなってしまったんです」

「思い出せない？」

警部の眉が自然と寄った。

エリックは自身も難しい顔になりながら頷くと、あの奇妙な夢の話を警部にして聞かせた。

すべてを聞き終わった時、警部の眉は一層、いぶかしげに寄せられていた。

「エリックさんが見たというのは所謂、予知夢というやつですか？」

エリックは額に手を当てたまま、わからないと呟いた。

実際、彼はそう思ったのだろう。

次の日、警察にパメラの死を告げられ、自分が犯人として疑われていると知ったとき、その夢を単なる偶然と思わなかったとしても不

思議ではない。
しかし、それほど重要性は感じていなかったのだろう。虫の知らせ程度には気になっていたとしても……。

「現実と夢の中の出来事が混同するのはよくあることです」

あなたは疲れているし、と警部は言った。
エリックにもその自覚はあるらしく、「ええ」と答えた。

「でも、気になり始めるとどうしても考えずにはいられなくなるんです。あれは本当に彼女だったんだろうかって……」

警部はひどく真剣な眼差しに変わると、ゆっくりと質問を始めた。

「あなたは夢の中で、誰かが流れてゆくのを大きな橋の上から見ていたわけですね？」

エリックは頷いた。

「その川はわかりますか？」

今度は彼は首を横に振った。

警部は質問を変えた。

―9―

「その女性は衣服を着ていましたか？」

「ええ、長いドレスのような物を着ていました」

「あなたはその人が死んでいると思ったと言いましたね、なぜ、そう思ったんですか？」

「手を胸の辺りでお祈りをするように組んでいたからです。彼女はその姿で頭を下流に向けて仰向けの状態で水の上を流れてゆきました」

「あなたは橋の上から叫ぼうとして、目が覚めたんですよね。一体、何を叫ぼうとしたのか思い出せますか？」

警部は先ほどエリックが話した夢の内容を確かめるようにメモを見ながら、尋ねた。

「おそらく、彼女の名前を呼ぼうとしたんだと思います」

「でも、実際は呼ばなかったわけですね？　それはなぜだと思います？」

「あまりの衝撃に声が出なかったのか、あるいは……」

そこで、エリックは数秒の間を置いた。

「あるいは？」

「その人の名前を知らなかったから……」

警部はソファーから立ち上がった。
その足で備え付けの、少し値の張るベンディングマシーンで紅茶とコーヒーを買い求めると、その一つをエリックに手渡した。少し頭の整理が警部にも必要に思えた。

「つまり……」

警部はブラックのコーヒーを一口飲むと、言った。

「あなたがパメラさんだと思っていた夢の中の女性は、本当は彼女ではなかったかもしれないと言うんですね」

エリックは深く頷いた。
夢の中のことなど、誰に話してもわかってもらえないと思っていた。それを真剣に聞いてくれただけでエリックの荷が少し軽くなったような気がした。

「わかりました」

警部はあっさりそう言うと「一緒に来てもらえますか」とエリックを促した。

「どこへ？」

エリックの腕を掴んだまま、警部が答えた。

「警察です。パメラさんの写真もそのときお見せしますよ」

母の見舞いもまだ済ませていないエリックは少し躊躇した。
しかし、警部はいつになく強引で、どこか焦っているようにも見えた。

来た時と同じように厳重なセキュリティの出口を抜けて、気がつくとエリックは警部の車に同乗していた。
警部は車の中から、どこかへ電話をかけると「すまない。急な用事が出来てしまったので今から署に戻る」とだけ言い、話す時間も惜しむようにすぐに電話を切った。
電話の相手はおそらくエレンだろう。
エリックは彼女との会話を思い出し、さらに暗い顔になった。

警部はその後もどこかへ電話を掛けると何やら難しそうな顔で話していた。
エリックは、心の中に巣食うようになった二つの黒い塊について考えていた。
自分でも説明できないその影のような生き物は、エリックをマイナスの思考に突き落とすだけ突き落とし、あざ笑っているかのように思えた。

「エレンとまた喧嘩でもしたんですか？」

ふと、空耳のように警部の声が耳を掠めた。顔を上げると電話を終えた警部の心配そうな横顔が見えた。

「喧嘩と言えるかどうか……」

エリックの答えはあまりに弱気すぎるものだった。
それだけエレンの言葉にダメージを受けている証拠のような気がし

て、警部はいたたまれない思いがした。
確かに彼女に欠けているのは思いやりだった。けれど、全くないというわけではないのだ。
ただ、それ以上に正義や道理の思いが強すぎて、それに支配された言動がエリックの心を傷つけてしまうのだろう。
弱すぎる心こそ、彼女の最大の敵だから。

「私がいけないんです。どうやら、エレンを甘やかせすぎてしまったようだ」

「また、あなたが謝るんですね。そもそも、それが間違いの原因なんじゃないですか」

エリックの指摘は正しすぎて、警部は顔を上げられない心地だった。
それでも、彼は伝えずにはいられなかった。

「どうか、彼女を見捨てないでやって欲しいんです」

「見捨てる？　僕が？」

エリックはシニカルな笑い声をたてた。

「冗談でしょう？　僕の方がとうに彼女から見捨てられていると言うのに……」

「エリックさん……」

今はまだその器でなくても、徐々に彼女を理解して、やがてはエレンの心を託せたらというのが警部の熱い思いだった。
けれど、それこそがエリックの大きな負担になりうると言う考えは

警部の頭には欠片も浮かばなかった。

「苦しいのはもう嫌なんです」

それはエリックの本心なのだろう。もう、どうでもいいという気持ちが彼の言葉には表れていた。

「人を信じなければこんなに苦しむことはなかったってことに、ようやく気付いたんです」

「それは違う！」

警部は突然、車を止めると言った。

「人を信じなくなったらおしまいです」

エリックは苦しそうな顔をしていた。

「エレンもグレッグ刑事も信じたくなくて信じないのではありません。彼らは信じたくても、信じられなかったんです」

「僕だってそうです。本当は最後まで信じたい。でも、それが無理だってわかったんです」

エリックは警部の顔をまっすぐに見すえると言った。

「エレンさんは言いました。僕は光の当たる面だけを見てその人の全てを知ったように思っている。そして、影の部分を見てしまったときに、違う、そうじゃなかったとうろたえるのだと」

警部は目を閉じていた。
自分がその影を見落としていながら相手を責めるのはどう見ても間違っていると言うエレンの考えは、崖の縁を危なげに歩いていたエリックの心を容赦なく、突き落としたのだろう。

「では、もうミシェルさんのことはいいんですか?」

警部はあえて怒ったような声で言った。

「あなたの心だけが彼を救うことが出来るかもしれないのに、あなたはそれを諦めるんですか?」

―10―

（ミシェル……）

エリックにはもう彼がわからなかった。

「諦めるも何も……」

エリックは言った。

「ミシェルがそれを本当に望んでいるのかどうか……。やってもいない人殺しをやったなんていうこと自体、そもそも理解に苦しみませんか？」

「それを解明するのが我々の仕事です」

「ああ、そうですね。あなた方の仕事だというのはわかります。でも……」

エリックは続けた。

「僕の仕事ではありませんよ。あなたの妹さんの言うとおり、僕はミシェルの表の部分だけを見ていたんでしょう。そして、この事件は彼の裏の部分が引き起こしたことなんですよね」

エリックの心は今や闇に吸い込まれようとしていた。

ドロドロとしたタールのような底なしの沼に確かに半分以上、埋まりきっていた。

エリックの口は止まらなかった。

「結局、人間は一人なんです。誰も信じてはダメなんです。一人ならば裏切られることはない」

黙って聞いていた警部は深いため息をつきながら、わかりましたと言った。そして、こう続けた。

「エリックさん、あなたが卑屈になるのは勝手です。でも、これだけは訂正してください」

エリックは何を?と目で尋ねた。

「あなたはまだ誰にも裏切られてはいない」

反論しようとして、エリックは口を開きかけたがすぐに警部の言葉が遮った。

「裏切られるのが怖いだけです。違いますか?」

誰でも裏切りは怖いものです、と警部は言った。

「だから、自分だけは裏切らないようにしようと思うものじゃないんでしょうか」

警部は穏やかな表情でエリックを見つめた。

「あなたがミシェルさんを信じようとする力がエレンを動かしたんです。グレッグ刑事やディック刑事も……」

そして、私を、と警部は言った。

「ミシェルさんが望んでいようといまいと、あなたは真実を知りたくはありませんか？　あなたが信じていた彼があなたが思うような彼だったと証明したくはありませんか？」

エリックは両手で顔を覆い、くぐもるような声で言った。

「信じてもいいんでしょうか……」

警部は黙って頷いた。

信じなければ奇跡は起こらない。言い方を換えれば、信じる者のもとにだけ奇跡は訪れるのだ。

「私も信じていますよ。ミシェルさんが彼女を殺していないと言うことを。そして、彼女のためにも真犯人を見つけます」

そのためにも、あなたには協力してもらわなくてはならないのです、と警部は言った。

「思い出してください。あなたが重要だとは思わないで記憶の隅に追いやっている些細なことを」

記憶の扉が完全に閉じてしまう前に……。

夢の残像　　－1－

出口のない長い夢の中にいるようだった。でも、それも、ようやく終わりを迎える。
終焉と言う名に似つかわしい幕切れで……。

ミシェルは狭い留置所の中で身じろぎをすることもなく、大半を窓から覗くささやかな空を見つめて過ごしていた。
心が死んでしまった段階で、もう生きていないも等しい体だった。
生に対する執着が薄いことは父の死に顔を見た時に何より思った。
どうして自分がかわりに死ななかったのか、ただそのことを長い間思い続けていた。

『なぜ、そんな顔をして生きているの？　あなたの生き方は死んだ人間に対して最も失礼な生き方だわ』

ある日、機械のようにただ仕事をこなしているだけのミシェルにパメラが言った。
それは苦しむミシェルにとって追い討ちをかけるような言葉だった。
と同時に怒りを生む言葉でもあった。

『あなたのお父さんのような人がいなければ母は父のところへ帰ってきてくれていたかもしれない』

それは本当ならば彼女が最も言いたいセリフだったろう。

実の母を失い、その彼女に殺されかけた娘に投げつける言葉ではなかった。それでも、どこかに甘えがあったのかもしれない。
同じ境遇の『姉』という立場のその人に。
彼女はミシェルの問いに答えることなく、ただ寂しげな笑みを浮かべただけだった。

「本当に言い訳の嫌いな人だったな……」

優しいと言う印象はなく、氷のように冷たい人とばかり思っていたのに、死はなぜ優しい思い出ばかり連れてくるのだろう。
ミシェルは両腕の間に顔を埋めた。

自分が犯した罪の重大さは痛いほどわかっている。けれど、後悔したことはなかった。
あるとしたら、深い懺悔だけだった。
死なせた者への、自分を最後まで信じ続けようとしてくれた友への、そして本当の母親のように接してくれたあの人への……。

ミシェルはゆっくりと目を閉じた。

もしも時計の針を戻せるものなら……。せん無いことと思いつつ、考えてしまう自分がいた。
けれど……。

ミシェルは目を閉じたまま、首を振った。

どれだけ時を戻しても、運命は許さなかっただろう。

運命……。それは、あの紫水晶が示す未来そのものだった。

―2―

5年前……。

父の死後、ミシェルにはパメラへの借金だけが残る形となった。ミシェルにとって、母親が再婚した男の娘を即、姉と見なすにはかなりの努力が必要だった。

第一、パメラ自身がミシェルに対して身内の愛情を持って接していたとは思えず、同じ家の中に暮らしていても、どこか他人行儀な不自然さはお互い、隠しようもなかった。

「あの頃の自分は借金を無くすという一念だけで動いていたような気がする」

パメラがどんな意図を持って、父の膨れに膨れ上がった借金を肩代わりしてくれたのか、ただの気まぐれにしてはありえない金額だっただけに、ミシェルも長い間、警戒心のような物を解くことができなかった。

『あなたを雇った理由?』

ある日、ミシェルは思い切って彼女に尋ねてみた。

『ええ。どう考えても、あなたの得になるとは思えないんですよ。父の借金はあなたとは全く関係のないものだし、あなたが僕を本当に必要にしているようにも思えない』

『そうね、得になることはないでしょうね』

パメラはあっさりと答えると、あからさまに失意を浮かべたミシェルの顔を見た。
自分でも不思議だった。彼女の答えに想像以上に傷ついている自分が。
彼とて、本気で彼女が自分を欲していたと思っていたわけではなかった。
けれど、何の逡巡もなく否定されることも正直予想していないことだった。
ミシェルは己の甘さを痛感し、唇を噛んだ。

『そうか、あなたはあなたが憎む女の息子に情けを掛けたかっただけなんですね。それだけの代償を払う価値が僕にあったということだけでも、喜ぶべきことなのかな……』

自らをわざと蔑むように嗤うミシェルを彼女は無言で見続けていた。
そして、彼が嗤うのを辞めるとこう言った。

『あなたのお母さまは憎いと思うけれど、あなたを憎んでいるわけではないわ。もっとも、復讐なら、本人にするわ』

自分がミシェルを雇ったのは、前のマネージャーが突然いなくなって仕事に支障を生じるようになったから、そして、血の繋がらない弟でも身内には変わりなく、裏切られる公算が少ないと考えたからだと彼女は続けた。

裏切りの公算、だって？
ミシェルはそれこそ大声で笑いたい気分だった。
まるでキツネとタヌキの化かしあいのようなものではないか。
いまだお互いの胸のうちを知るわけでもなく、それこそ、よほど赤の他人の方が信じられる公算は高いように思えた。

『僕があなたを裏切らないとでも思うんですか?』

『ええ』

彼女はまた逡巡することなく答えた。

『なぜ? 信用に足る男に見えるから? そんなのはったりかもしれませんよ』

兎の皮を被るのは得意なのだとミシェルは言った。

『人畜無害というのが一番罪がない。僕は今までの人生で痛いほど学びましたからね』

自虐的な言葉が次から次へとミシェルの口から出て来た。

それほど、彼は大きく何かに傷ついていた。

けれど、よくよく考えてみると少しも彼女が言っていることにおかしいところはないのだった。

今思えば、子供のようなわがままで彼女を困らせていただけだったのかもしれない。

彼女の強さが時に眩しく、苦しかった。

根無し草のように寄る辺を失った者同士の連帯感を期待していたわけでは決してない。ただ、彼女も同じくらい傷ついているのだと思っていたかった。

確かに彼女にとって人生を狂わせたミシェルの母親は敵に違いなかった。けれど、明らかに、ミシェルとパメラでは考え方に相違があった。

彼女の怒りは人へ向かうのではなく、運命そのものに向かっていった。言い換えれば、『占い』は運命に対する、挑戦状だったのだ。

そして、ある意味、それ以上の何ものでもなかった。

つまり、彼女が復讐を終えたと認めればそれできっぱり辞められるくらいの執着しか持ち合わせてはいなかったということだ。

彼女の占いは、まず運命を否定することから始まった。そして、それを前提として、相手の未来を占った。

占う相手のリサーチを欠かさず、どちらかと言えばコンサルタント的なアドバイスを彼らに与えていたのは、ただ単に未来を予言することを良しとしない彼女のポリシーにあったのかもしれない。

また、彼女の顧客は普通一般の人間ではなく、地位や名誉を持つ著名人など、リサーチしやすい環境の者をあえて選んでいた。

何も知らない彼らは自分たちのことを彼女に認められた特権階級のごとくに思っていたようだが、事実は全く違っていた。

そして、彼女は彼らを決して甘やかすことなく、彼らの地位に見合った報酬を要求し、成功例だけを重ねていった。

事実、不成功の例も、少なくとも存在しないわけではなく、高額な代金だけを取られたと不服を申し立てる人間もいたことは事実で……。

時には裁判沙汰のようなものに持ち込もうとした輩もいたと聞く。

自分の裁量もわきまえず、安易に占いに頼ったことは全く考慮にも入れず……。

そういったトラブルをミシェルの前にいたマネージャーは上手く処理していたらしい。

彼女に一切の苦難が被ることがないように、細心の注意を払い、あらゆることに配慮し、影のように勤めていたという。

その彼が突然行方を晦ませて、相当困りきっていたというのが実情だったのだろう。
特別、ミシェルでなくてもよかったのだ。

―3―

しかし、人間というものは期待されすぎると重荷を感じ、期待されていないとわかると打ちのめされるものらしい。

ミシェルも例外ではなかった。最初こそは、借金のために仕方なくだったのが、いつしか、姉の信頼を得るべく奔走している自分に気がついた。

もともと、リサーチや下調べと言った緻密な作業や努力が嫌いでない性格もあってか、彼の調査結果はパメラにとって十分すぎるほどに役に立つようになっていた。

二人が出会って二回目の春を迎える頃、ミシェルはパメラから顧客名簿と貴重品の収められた隠し小部屋の鍵を託された。

彼女がミシェルを本当に弟と認めた証のように彼は思った。

その頃には、ただ惰性で働いていた頃とは明らかに違って、占いに対する造詣も深くなっていた。

パメラは隠し小部屋にかなりの水晶を保管していた。

すべて、占いで使用するものだったが、中には相当高価な水晶もあり、総額にするとどのくらいになるか考えただけでもため息がでそうなほどだった。ミシェルは同時にその管理も任されることになり、身辺にはますます気をつけるようになった。

とりわけ、彼女にたかる芸能人や地位だけはあるが中身のない名士などから、彼女を守るのは並大抵のことではなかった。彼らはあからさまに年下のミシェルを馬鹿にした。『若造』と揶揄されて、ないがしろにされることも、一度や二度ではない。

それでも、彼女を守ることが何をおいても先決のミシェルは、コップの水を浴びせられようとも、罵詈雑言を投げつけられようとも、忠実な僕として彼女の側を離れなかった。

パメラが命じたわけではなく、すべてミシェルの独断ではあったが、内心、感謝されているのだろうと信じていた。実際、彼女がどう思っていたかわからない。

ただ、彼女は取り巻きには笑顔を振りまくが、それが作り笑顔だと言うことをミシェルも十分承知していた。

だから、本気で彼女が誰かの相手をするなどと考えたこともなかった。

ある日、ミシェルは彼女の本気の笑顔を目にする。自分にも向けられたことのないような、優しい笑顔を。

『あれは、誰？』

飛び込みの客だった。初めて見る顔で、顧客のことなら、すべて把握しているはずのミシェルの知らない相手だった。

『ああ、ケインさんです。国会議員の方ですわ』

事務兼受付のジェインがこっそりと教えてくれた。

『ケイン？　聞いたことがないな』

彼女はミシェルの問いかけに、いかにも物知り顔で答えた。

ジェインは年こそミシェルと同じくらいだったが、彼が雇われる前からすでにここで働いていた。

容姿は取り立てて美人というわけではなかったが、客のあしらいもうまく、仕事もよく出来た。ただ、人懐こい性格で、噂話の類は三度の飯よりも好きなタイプの女性だった。

『そう言えば、ここしばらくいらっしゃらなかったみたいですね。ああ、そうそう、確か国会議員をお辞めになってどこかの国に行かれていたんですわ。えっと、そう、小さな貧しい島かどこかに……。子供たちのために学校を作るとか、そういうプロジェクトに参加されていたんだったわ』

ジェインはそう言って、自分も懐かしそうな顔をした。

『実はここだけの話なんですけど』とジェインは小声でミシェルに言った。

『ケインさんは一度、先生に求婚されているんです』

『なんだって？』

寝耳に水の話にミシェルは自分でも不思議なほど驚いていた。

『でも、先生がお断りになって、それで傷心のあまり、国会議員も辞めて南の島に旅立たれたんじゃないかって、当時はかなり憶測を呼んでいたみたいですよ』

『それは、いつのことなんだい？』

『えっと、確か、まだフレッドさんがいらっしゃった頃だったから、二年か三年前くらいじゃなかったかしら……』

前任のマネージャーの名前を出されて、ミシェルは異常に緊張した面持ちになった。しかし、それをジェインに気取られまいとミシェルはわざと軽口を言った。

『へぇ、前のマネージャーはそんなに厳しかったのかい？』

ジェインはミシェルの言葉がわからないというような顔をしていた。

ミシェルは言った。

『だって、彼が反対したからなんだろう？』

ジェインはとんでもないと、大きく首を振ると慌てたように言った。

『フレッドさんはそんな心の狭い人じゃありません。自分はいつもただのマネージャーだからって、先生のプライベートには一切口を出されたことはありませんでしたもの』

『でも、相当優秀なマネージャーだったって……』

『ええ、お仕事は完璧でしたよ。特に先生の信頼は厚かったですし。先生はすっかりフレッドさんに頼りきってらっしゃる感じでした。なのに、突然理由も告げずにいなくなるんですもの……。先生もかなりこたえられたご様子でしたわ。それは見ていられないほど、憔悴されて……』

彼女の話を聞きながら、ミシェルの眉根が皺になるかと思うくらい深く寄っていた。彼の機嫌を損ねたことを敏感に察したジェインは『でも！』と急に口調を換えた。

『ミシェルさんがいらしてから、随分、もとの先生に戻られたと喜んでいるんですよ。やっぱり、血は繋がっていなくてもご姉弟なんですね』

けれど、ジェインの言葉はミシェルを癒すどころか、反対に気を重

くした。
ジェインはすっかり黙り込んでしまったミシェルに気付いてか知らずか、さっきの続きを一人、話し始めた。

『私はてっきり、お二人が結婚されるとばかり思っていたんですよ。あんなに若くて、タフで、お金持ちのケインさんを振ったくらいですもの』

そう言いつつも、わからないではないとジェインは言った。

『フレッドさんには、やはり、荷が重かったんだと思いますわ。先生は特別の人ですから』

ミシェルはジェインの話を聞きながら、それ以上にもっと深い事情があったような気がしてならなかった。

『それで、ケイン氏は今頃何をしに来たんだろうね?』

事業のことで悩んでいるような、そんな深刻そうな素振りは微塵も見当たらなかった。

『あら、決まっていますわ。今度こそ、プロポーズのＯＫをもらいに来たんですよ。あの人も辛抱のいい方ですわね』

しかし、皮肉にも、彼女がそれをあまり快く思っていない様子が声の調子からは知れた。

―4―

ジェインはかなりフレッド贔屓だったようだ。あるいは、ケインに対してあまりよい感情を抱いていないかどちらかと推測された。

ケイン氏は長身で甘いマスクの、いかにも女性にもてそうな容姿をしていた。

ジェインの話では二人は高校時代の同級生で、三年ほど前、偶然占い師と客として再会し、それ以来友好を暖めあっていたという。

二人の関係者の間では結婚も秒読みだったと言うから、ケイン自身、まさか求婚を断られるとは思ってもいなかったのではないだろうか。それどころか、国会議員という立場上、プライドを大きく傷つけられたと恨んでも不思議ではない。

失恋のために職を辞し、南の島に移り住んだと聞けば外聞はいいが、実際のところ、彼女の前から逃げ出しただけだったのではないかとミシェルは勝手に想像した。

そして、今、最大のライバルが消えたのをよい事に再び縒りを戻そうと現れたのは明白の事実だろう。

『ケイン氏は今は何をして生活しているんだろう』

『さあ。でも、ケインさんのお父さまはかなりのお偉いさんだって聞きますし、何もしなくても、それこそお金は入ってくるんじゃありませんか？　お金に困らなくていい人は本当に羨ましいですよね』

一般階級の自分たちには相当及びもつかないことだけど……とジェインは苦々しく笑った。

どうやら、ケイン氏へのジェインの反感はそのあたりにあるのではないだろうかとミシェルは思った。

人の目と言うのは不思議なもので、同じ物を見ていても、人によっては全く違う風に見えるものらしい。
誰もが羨む容姿と財力を持ち、普通の若い女性なら、誰でもあこがれるようなケイン氏に対して、ジェインはノーと口にする。
きっと、彼女の目には他の女性には見過ごされがちな『負』の要素が彼の何かを通して見えてしまったのかもしれない。
ただ単に『相性が合わないから』という理由では、片付けられないような気がミシェルにはした。
おそらく、パメラも古い友人だけあって、彼の見た目だけではなく本質そのものを知っていて、容易に頷けなかったのではないだろうか。

女性は男性よりも、おそらく人を見る目はあるのだと思う。
だからこそ、母はうだつの上がらない父にさっさと見切りをつけたのではないかと言うのが正直なミシェルの見解でもあった。
言い換えれば、女性は、それだけシビアに相手を見ることが出来るということになろうか。

『女性に優しさを求めても無駄ってことなのかな……』

『えっ？』

ミシェルが思わずつぶやいた言葉にジェインはとてもへんな顔で振り返った。
それに対してミシェルは苦笑して、肩を竦めただけだった。

ジェインはおそらく自分の耳が聞き違えたのだろうと思うことにした。
穏やかそうな彼の外見から、そのような現実的な言葉を聞こうとは

夢にも思わなかったせいもあった。
ジェインはフレッド贔屓と同様に、ミシェルのこともかなり気に入っていたのだ。
そう、自分の婚約を少し早まったかなと後悔するくらいには……。
事実、彼女は結婚するため、近々仕事を辞めることになっていた。

『ミシェルさん、恋人は？』

『いませんよ。ずっと、それどころじゃなくて……』

突然、彼女に質問されて、ミシェルは自分でも言い訳がましい答え方になったのに気付いた。
しかし、それは半分本当で、半分本当ではなかった。
父親が負った借金返済のためのアルバイトと勉学に明け暮れ、自分の時間さえ持つことは容易ではなかった。
自分のことだけで精一杯で、心の余裕がなかったのも一理ある。
けれど、それ以外に、彼自身が女性に対して心を閉ざしていたことを彼は知っている。
もしも、彼がそれだけ母親を憎まなければ、そういうことにはなっていなかったかもしれない。
現実に、彼はとても女の子に人気があったし、分け隔てなく優しかった。
分け隔てなく優しいと言うのは、別の言い方をすれば、誰にも関心がなかったからだとも言えるけれども。恋愛感情がなくても、人は優しく出来るものだから。

ジェインはミシェルの答えに納得のいかない顔をしつつも、彼が同じくらいの年頃の女の子にとって高嶺の花だったことは確かだと思った。
気配りが出来て、人当たりがよく、また物欲しげでない、そのスト

イックにも思える彼の態度がどこか中世の騎士か王子を思わせた。
幾分、彼女の妄想が入ってはいたが……。

『たぶん、ミシェルさんって理想が高いのでしょうね』

『理想？』

ミシェルは初めて聞いた言葉のように繰り返した。

『ええ。たとえば、先生のような方……』

『姉さん？』

ミシェルはそれこそ寝耳に水だと言わんばかりに目を見開いた。
ジェインはおかまいなしに続けた。

『ええそうです。私、先生ほど綺麗な方って今まで会ったこともありませんもの。ただ単に美しいだけじゃなく、知性や感受性にも溢れていて、本当に同性ながら惚れ惚れしますわ』

『そう……なのかな』

ミシェルは曖昧に答えた。
確かに美しい人ではあった。親友の母親にも劣らないほどの……。
けれど……。

『僕のタイプじゃないよ』

ミシェルはきっぱりと言った。

『あの人はそういう人じゃない』

―5―

ミシェルの母親とパメラの父親が再婚同士だということはジェインの知るところだった。しかも、その再婚は決して祝福されるべきものではなかったということも……。

だから、相当複雑な心境にミシェルがいるというのもわかる気がした。

しかし、実のところ、二人には他人とは思えないような類似点があるように思えた。

それはどこがどうとはっきり言えるようなものではなく、その人が醸し出す雰囲気、または考え方といった、あくまでも抽象的な見方に過ぎなかったのだが……。

ミシェルはと言えば、はっきりと言い切った割りに、まるで自分の発した言葉に飲み込まれたかのように青白く、苦しげな顔で俯いていた。

ジェインは、その時のミシェルの顔を『自分の心の声を初めて聞いたような顔』と記憶している。

しかし、この時の彼女はそれほど重大なこととはまったく考えていなかった。

むしろ、軽口を言ってミシェルを励ましたほどだった。

『でも、お二人は本当の姉弟以上の姉弟ですよね。見ていて、本当に羨ましくなりますわ。うちの弟となんて、喧嘩ばかり。ミシェルさんの爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいといつも思いますもの』

粗野で、乱暴者で困るのだとジェインは大きくため息をついた。

『それに引き換えミシェルさんは、優しいし、気が利くし。先生ご

自慢の弟さんですよね』

ミシェルは、『そんな話は始めて聞いたよ』とあまり信じていない顔で薄く笑うに留まった。

『あら、先生はよく言ってらっしゃいますよ。ミシェルさんのおかげでとても助かっているって』

正直、ここまでやってくれるとはパメラも思っていなかっただろうとジェインは思った。ミシェルは特別な意味で、前任のマネージャー以上の働きをし、パメラを支えていた。

『姉さんは占いを辞めるつもりなんだろうか』

ミシェルのつぶやきのような言葉に、ジェインはさぁと曖昧に答えた。

『ケインさんと結婚されるとしたら、そうなるかもしれませんわね』

彼と結婚すれば何不自由ない生活は約束されたようなもので、あえて働く必要がないのも事実だった。

『でも、そうなったら、そうなったで、ミシェルさんが跡を継げばいいだけのことじゃありませんか』

何の支障もないのだし、とジェインは言った。

『だけど、９９パーセント、ケインさんとの結婚はありえないと思いますよ』

そう言い切ると、ジェインは片目を瞑って見せた。

『ほら、女は鼻が利くっていうでしょう？　私の第六感って外れたことがないんです』

ミシェルは『そうだね』と静かに微笑むと目を閉じた。

おそらく、彼女の第六感は初めて彼女を裏切ることになるだろうと彼は声を出さずに思った。

邂逅　―1―

車の助手席で未だに不安げな表情で車窓に目を当てているエリックを瞳の端に捕らえながら、警部は警部で別のことで頭を悩ませていた。

ライアン氏が警察内部にスパイを忍び込ませているのは想像の範疇内のことだったが、まさか警部補までが関わっているとは警部も思いもしなかった。

おそらく、グレッグ刑事にターゲットが集中し始めたのを危ぶんでの新たな手札なのだろう。

それは同時にライアン氏がかなり焦り始めていることを表してもいるような気がした。

「警部、少し寄り道をしてもいいですか」

じっと沈黙を守っていたエリックが、窓を向いたまま尋ねた。

「ええ、いいですよ」

エリックが立ち寄りたいと言ったのは、意外にも図書館だった。

警部は車を降りながら、あの日のエレンの勇み足とでも言うべく逮捕劇を今さらながら謝った。

エリックは苦笑をしたまま、返す言葉を見つけられないでいるようだった。そしてそのまま、ゆっくりと閲覧室への階段を上り始めた。

警部は物珍しそうに図書館の蔵書を眺めながら、エリックの後を黙ってついて行った。

新しく増設されたと思われる隣室のパソコンルームには結構な人が

見受けられたが、閲覧室自体には数えるほどの人数しかいなかった。

そう言えば、あの日エリックがここにいた意味を警部は深く考えたことがなかった。小説家と後で知り、資料集めで利用していたのだろうとくらいにしか思いが及ばなかったのだ。

「ここにはよく来られるんですか？」

警部がそれとなくエリックに尋ねた。

エリックはさっきよりももっと苦い顔をすると、唯一の逃げ場所なのだと言いにくそうに告げた。

警部が首を傾げていると、エリックは陽の当たる窓際の一番隅のテーブルに腰をかけた。そして、オークの古いテーブルを懐かしそうに撫ぜながら言った。

「もともとは、彼の特等席だったんですよ」

警部の顔がさらにいぶかしげなものになった。

「最初にミシェルと出会ったのがこの場所でした」

警部はエリックの向かいの席に座ると真摯な態度で尋ねた。

「でも、あなた方は同じバイト先の仲間だったんでしたよね」

エリックは頷いた。

「そう、出会ったという表現は少し違いますね。僕が彼を一方的に知っていただけだから……」

「ちょっと待ってください」

と言うと、警部はいつもの手帳を取り出した。

エリックはゆっくり顔を上げると、その当時を思い起こすような遠い目になった。

「実は紅茶専門店でバイトをする前に、僕はここで司書の手伝いをしていた時期があったんです」

司書の手伝いと言えば聞こえはいいが、実際はただの蔵書整理と雑務にすぎなかったと彼は笑った。それでも、たとえどんな形でも大好きな本に囲まれて過ごす日々は楽しかったと幸せそうな顔で語った。

「僕はずっと小説家になりたいと思っていました。でも、それを誰かに打ち明けたことは一度もありませんでした」

「それはどうしてですか？」

警部にすれば単純な問いかけのつもりだったのだろう。しかし、エリックはとても困ったような、切なそうな顔をした。

「恥ずかしかったんです」

彼はそう言うと、すぐに慌てて補足した。

「小説家になることが、じゃありません。あまりに大それた望みだから、笑われるのが怖かったんです」

「ああ、なんとなくわかる気がしますよ。私も学生の頃、映画俳優になりたいと言って、誰にも本気にされませんでしたからね」

その理由がメリッサ・シェリルに会いたいがためだったということは内緒だったが……。

「あなたはどうやらその頃から、自分のことを過小評価されていたんですね」

警部が何気なく告げたその言葉にエリックはハッとしたように彼を見つめた。

「きっと、あなたの周りの人たちがそんな風にあなたのことを扱っていたのではありませんか？」

まるで人間分析でもするように次々と警部に言い当てられ、エリックは言葉を失っていた。

「ミシェルさんはそういう意味で、初めてあなたに勇気を与えた人だった。違いますか？」

エリックはいつの間にか項垂れていた。

「初めはなんていけ好かないヤツなんだろうと思っていました。彼は午後になるといつも現れて、本も読まないのにこの場所を占拠していました。僕は昼寝をするだけならここじゃなくても他にもっといい場所があるのにと、とにかく彼が疎んじられてならなかったんです」

一度、直接注意をしてやろうと思ったことがあったのだとエリック

は言った。

「でも、側まで行って、初めて彼の寝顔を見た時、僕は何も言えませんでした」

その寝顔はとても幸福そうで、眠りを妨げることがとても酷なことに思えたからだった。

それからしばらくして、エリックは大学の友人の頼みで紅茶専門店でのバイトのヘルプをすることになった。

その頃は、ちょうど、母親との確執めいた緊張感に耐え切れず、家に帰るのが億劫でならない時期だった。

だから二つ返事で引き受けたのだが、紅茶の味などまったくわからない、いわゆる味オンチの彼には相当、厳しい仕事だった。

その店は結構な老舗で、買いに来る人間の舌がまた肥えていた。常連さんなどは、にわか店員などよりよほど紅茶について詳しく、エリックのスタートは失敗の連続だった。

そんなエリックをサポートしてくれたのが、なんとあの図書館にいつも昼寝にやって来ていた、彼、ミシェルだったのだ。

―2―

「彼はもちろん僕のことを覚えていませんでした。いや、気付いていなかったと言う方が正しいかな。これは後で知ったんですが、借金の取り立ては彼のドミトリーにまで押し寄せていて、相当居辛くなっていたようです」

「借金？」

警部が不可解そうに尋ねた。

「彼のじゃありません。お父さんのですよ」

エリックはそこまで言うと、すべてを話していいものか少し迷うように言葉を溜めた。

「ミシェルのお父さんはアルコール依存症がかなり進行していて、とても、その、大変だったらしいんです。結構優秀な人だったらしいんですが、荒れた生活をするようになってからは仕事も解雇され、日々の暮らしにも困っていたそうです」

警部は何も、初めて聞く話ではなかった。ミシェルを逮捕した段階で、このくらいのことは調書にとっくに上がってきていた。しかし、親友の口から語られる話はまた別で、警部は興味を持って彼の話に耳を傾けていた。

「有能な人が挫折を味わうのはきついですからね。でも、どうしてアルコール依存症なんかに？」

「どうやら、奥さんとの離婚が引き金になっていたようです」

このことはミシェルもあまり話したがらなかったので、あえて詳しくは聞かなかったのだが、とエリックも多少、口を濁した。

「ミシェルさんはじゃあ、父親に引き取られたというわけですね」

「引き取られたっていうか」

エリックはとても心中複雑そうな顔になった。

「彼は自分の意思で残ったんだと思います。彼はお母さんのことをあまり良く思っていないみたいで、おそらく連絡も取っていなかったんじゃないかな」

彼と彼の母親とは事実、音信不通になっていた。そのこともすでに調査済みのことではあった。

しかし、警部は改めて尋ねた。

「ミシェルさんのお母さんは離婚後すぐにパメラさんのお父さんと再婚なさったんですね？」

「らしいですね」

エリックもあまりそのことに良い感情を抱いてはいないのか、冷たい声で短く答えた。

「離婚の原因もおそらくそれだったということでしょうか？」

それ、というのが何を指すのか、エリックは自分なりの推測をしな

がら「ええ、そうだと思います」とだけ答えた。

「では、ミシェルさんは相当お母さんを憎んでいたでしょうね」

エリックはそれには答えなかった。そのかわりにこう話した。

「ミシェルは大学に通う一方で朝から晩まで、掛け持ちのバイトをこなしてお父さんを支えていました。僕が図書館で見たのは彼の一日のうちで唯一の安寧の時間だったんです」

―2―（後書き）

また、こちらに戻ってきてしまいました。
ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。
近々、更新いたします。

また、よろしくお願い致します。

―3―

エリックはその後もミシェルとの出会いを熱く語った。

何より、ミシェルは自分の境遇を少しも憂いていず、万人に同じように親切に接し、人々から信頼を集めていたと。

そして、手を抜くということが出来ない性分なのか、どんなことにも誠実に対応し、常に責任を頭に置いていた彼の言動や行動は、楽な方へと流されがちなエリックには相当刺激になっていたのだと。

彼がなりたいと思う姿が目の前にあったのだろう。

警部はエリックがミシェルを賞賛し続ける姿を見ながら、素直に思った。

「図書館でのミシェルさんの第一印象とは全く違っていたというわけですね」

「え、ええ」とエリックは少し恥ずかしそうに頷いた。

慣れない接客で困っていた場面を何度も助けられ、エリックのミシェルへの印象は親しむべきものへ、さらには信頼すべきものへと変わっていったのだろう。

お互いの趣味が共通していたというのも彼らを容易に結び付けた要因だった。

「ミシェルさんは読書家だったんですね」

「ええ、　それはもう！」

エリックは力を込めて言った。

「彼こそ、作家になったらいいと思うくらい、いろんな本を読んでいました。彼が一番好きな場所って、どこかわかりますか？　それを聞いた時、僕は心臓が震えましたよ」

「図書館か本屋、なのでしょう？」

エリックは警部にこともなげに答えられ、悔しそうな表情をした。エリックから語られるミシェル像は調書とほとんど大差はなく、好人物としか思えない内容だった。

だからこそ、わからないのだった。警部はしばらく考え込んだ後、思い切ったように言った。

「エリックさん、今度は私の寄り道に付き合って下さいますか？」

「ええ、いいですが、どこですか？」

警部はゆっくりと立ち上がりながら、窓の外へ目を向けた。

「少し遠いので、日帰りは無理かもしれませんが、構いませんか？」

エリックは不思議そうなというよりも、とても不安そうな目で警部を見つめた。

「どこへ、行くのですか？」

警部はその目を真っ直ぐに見返しながら告げた。

「ワイト島です。さ、そうと決まれば急ぎましょう」

警部は急に慌しい態度で戸惑うエリックを促すと足早に図書館を後にした。

―4―

ワイト島……。それは、イギリスの南東部に浮かぶ小さな島の名前だった。

二人はウォータールー駅からポーツマスハーバーまで列車で行き、そこからさらにフェリーに乗ると30分後にはワイト島の玄関であるライドに着いていた。

イギリス国民でありながら、ほとんどロンドン近辺から出たことのないエリックにとって、それはちょっとした小旅行のようなものだった。

いや、ロンドンとて十分精通しているとは言えないのだが……。

ワイト島と言えば海岸線の美しさはさることながら、ヴィクトリア女王が愛した島としても有名である。彼女が晩年を過ごしたオズボーン・ハウスへはいつか行ってみたいと思っていたが、まさかこんな形でこの島へ渡るとはエリックも想像もしていなかった。

「警部、そろそろここに来たわけを教えてくれませんか？　それに、今日中に帰ろうと思えば出来ない距離ではないですよね？」

警部は「それは汽車に乗ったらゆっくり話しますよ」と急ぎ足になりながらエリックに言った。

「汽車？　こんな小さな島に鉄道なんかあるわけが……」

自分の耳が聞き違えをしたのかと思いかけたとき、それは目の前に見えてきた。

「信じられない……」

「さ、乗りますよ」

警部は時間がないとでも言うようにエリックを急かした。警部にとっては別に驚くべきことではなかったようで、エリックは少し落胆した。

自分がどれだけ狭い区間しか移動してこなかったのか、改めて突きつけらたような気がした。

世間は広いというのを身を持って体験するには、少し大人になりすぎていたのかもしれない。

「ここからスモールブロックジャンクションへ行き、乗り換えます」

「一体、どこへ連れて行こうって言うんですか?」

エリックはそろそろ限界がこようとしていた。

「実はあなたの他にもう一人、ミシェルさんのことをよく知っていらっしゃる人がいましてね」

「え?」

「かつて、パメラさんの仕事を手伝っていた方なんです。今は結婚されて、この島でペンションを経営されているんですが……」

警部は言葉を切ると、汽車の窓から流れる景色に目を当てた。

「なるほど、保養に来るにはもってこいの島ですね。現世を軽く忘れられる」

のどかな、急かされる物など何もない自然が連なる風景に警部は感嘆の声を上げた。
そして、スモールブロックジャンクションに着くと、「さ、今度はこれに乗り込みますよ」と目の前の蒸気機関車を指差しながら言った。
普通なら驚くはずの光景も、今のエリックには正直それどころではなかった。

「ミシェルのことを知っている人って誰なんです？」

「ま、行ってみればわかりますよ」

警部は呑気にそう言うと、時代がかった列車に乗り込んだ。

―5―

6人掛けのコンパートメントに落ち着くと、警部は走り出した機関車の窓から嬉しそうに顔を突き出した。

「エリックさんもやってごらんなさい！　童心に返ったみたいな気分になれますよ」

機関車が吐き出す蒸気が、独特な匂いを伴って、顔を出さずとも入ってくる。

警部は何かの拍子に石炭の灰が目に入ったのか、「うわっ」と言いながら慌てて顔を引っ込めると一生懸命、手で目を擦っていた。

「本当に子供みたいじゃないですか。こんなところを妹さんが見たらなんて言うんでしょうね」

少なからぬ皮肉を込めてエリックは言った。

「だって、ここへ来て、これに乗らないって手はないでしょう？　蒸気機関車は子供の頃からの憧れでしたからね」

「結局、ミーハーなんですね、警部は……」

警部はミーハーのどこが悪いとでも言うように唇を尖らせると、また窓の外を覗き込んだ。

「私はどんな時でもその状況を楽しむことにしているんですよ。そうじゃなきゃ、人生の半分も無駄にしている気がする」

エリックは窓辺に肘を乗せると頬杖を付くようにのんびりとした牧歌的な景色を見ているふりをした。
警部ほど楽天的にものを考えられたらどんなにいいか、エリックは不貞腐れる思いだった。

その機関車の旅は１０分程度で早くも終わった。
終着駅を降りるとそこには人家もなく、ただ道が続いているだけだった。
二人はバスに乗ると島で一番大きな町に向かった。
そこに、これから会う人物の経営するペンションがあるらしい。

エリックは詳細を聞く余裕もなく、警部にあちこち振り回され、かなり不機嫌な状態になっているが見て取れた。
普通なら楽しめる田舎の景色も、エリックにとっては壁紙程度にしか思えなかったのだ。
それほど、彼はこれから会うという人物のことが気になっていた。

「怖いですか？　あなたの知らないミシェルさんの過去を知るのは……」

まるでエリックの心の中を読んだように警部が言った。

「怖いですよ。いけませんか。どうせ、警部もエレンさんのように僕が彼の一部分しか見ていなかったと言いたいんでしょう？」

「そう卑屈になるものではありませんよ。それに、誰でも人によって違う対処をとるというのは当然のことですからね。私だって、部下やエレンに対する時とあなたに対する時とでは違うつもりですから。あなたもそうでしょう？」

「僕が？」

「ええ。お母様やヒギンズ夫人に対しては相当いい子を演じているように見受けられますが……」

「いい子だなんて！」

エリックは真っ赤になって怒った。

「まぁまぁ。演じているというのは私がそう思ったと言うだけですよ。それぞれが持っている他人を写す鏡は、必ずしも真実を写しているわけではないってことです」

―6―

「他人を映す鏡、か……」

エリックは一人ごちた。

確かにエリックのそれは、このところ本来の働きをしていないばかりか、曇りがちだった。

彼はただ説明できない焦燥感だけが募って行くのを感じた。

「つい最近発売されたゴシップ誌にパメラさんの事件に関する記事が載っていたのをご存知でしたか?」

警部はふいに、世間話をするような軽さで尋ねた。

それは、恐らくライアン氏がパメラの婚約者として遺体を引き取り、大々的な葬儀を執り行ったことを扱った記事を指しているのだろうとエリックは思った。

「ええ。写真がやたら載っている、例のゴシップ誌でしょう? 見ましたよ。ライアン氏が悲劇の主人公のように取り上げられていて、驚きましたよ」

世間の何も知らない人たちは、あんな嘘でも平気で鵜呑みにするのだろうな、と腹立たしい思いで読んだことを彼は思い出した。

「実はその記事を読んだ人が抗議の電話を掛けて来ましてね。あの記事の内容にはどうも納得がいかないところがありすぎると言うんですよ」

エリックは呆れたように言った。

「なぜ、スコットランドヤードに？　記事を書いたのはゴシップ誌のライターではありませんか」

「それはそうなんですがね……」

警部はもったいぶるような様子で一旦、言葉を切った。

「ことは殺人に関わることなのでね。一概に無視するわけにはいかなかったんですよ」

しかし、エリックも引き下がらなかった。

「でも、そういう電話はさして珍しい物ではないのではありませんか？」

そんな信憑性もあやふやなものに一々付き合っていたら、それこそ捜査に差支えがあるのではないか、とエリックは否定的な意見を述べた。

「たしかに」

警部は首肯した上でやんわりと反論した。

「しかし、我々の仕事は一つの事象をいろんな側面から見ることでして、有力な情報を得るために常に五感を働かせておく必要があるのですよ」

「そして、今回、何か感じるところがあったと？」

そんな当て物のようないい加減な捜査で犯人が捕まるのかとエリックは言いたかった。真実はそんな軽い物ではないと、さっき、警部の口から出て来たばかりではないか。
けれど、エリックは黙っていた。
真実に辿り着くためにはたくさんの過程があるのだろう。
逃げて、遠回りばかりしてきた自分よりも、警部の勘に従って進む方がよほど早く真相に辿り着くのは間違いない気がした。

警部はエリックの問いかけに頷いただけで、あとは黙ってバスの車窓から見える海を見ていた。
青い海から突き出たような白い岩の自然の彫刻に警部は心から感嘆しているようだった。
バスに乗り合わせた人々の顔が警部と同じ、感動の色を見せる中、エリックだけが眉間に皺を寄せたような顔でそれを見ていた。
彼にはそれが、どうしても、巨大な骨で出来た墓標に見えてならなかった。

―7―

「すみません、ウィーバーさん、遅くなりまして。予定ではもう少し早く着いているはずだったのですが……」

警部は白い木製のドアの前で、平身低頭の体で目の前の女性に謝った。

エリックと同じか、少し年上くらいの小柄な女性が親しみやすい笑顔で「お気になさらないで下さい」と部屋に通してくれた。

「ジェインで結構ですわ。こちらこそ、わざわざお越し頂いてすみませんでした」

蒸気機関車に乗り、バスに乗り換えてからここに辿り着くまで、どのくらい時間がかかっただろう。

似たようなペンションは島にいくつもあって、不慣れな土地ということもあり、二人は半分迷子のような状況で日も暮れかかる頃ようやく辿り着いた。

「お電話を下さればお迎えに参りましたのに……。そうそう、あれにはもうお乗りなりましたか？」

あれというのが蒸気機関車だというのはすぐにわかった。

ペンション（というより、小さなゲスト・ハウスのような宿だったが）の壁に所狭しとＳＬの写真がパネルに入れて掛けられていたからだった。

「ええ！　感動の極みでしたよ」

と警部はまた思い出したように目を輝かせながら答えた。

「男の人って、みんなそうなんですね。うちの主人もとにかく機関車が大好きで、とうとう仕事まで辞めてここに移り住んでしまいました」

新婚旅行でこの島を訪れた時、すっかりこの自然と何より機関車にほれ込んでしまった夫が嫌がる彼女を説得し続け、この島で暮らすことを決めたのだと言う。

そして、ようやく去年、格安で売りに出されていた小さな農家を買って、この小さなペンションを始めたらしい。

「本当はもう少し町の中だとよかったんですけど、贅沢は言っておられませんから……」

若干、不満そうな様子で彼女は苦笑した。

「あなたはあまり嬉しくなさそうですね」

それまで黙っていたエリックがさりげなく尋ねた。

警部はようやくエリックの存在を思い出したように言った。

「ああ、すみません。ご紹介が遅れてしまいました。彼はミシェルさんの友人のエリック・サザーランドさんです」

警部の部下か同僚くらいにしか思っていなかった彼女は、それを聞くと懐かしそうな顔でエリックに微笑みかけた。

「ミシェルさんの！　彼はお元気ですか?」

エリックはそう尋ねられて、困惑が素直に顔に出た。

「どうかなさったんですか？　まさかご病気なんじゃ……」

「いえいえ、そうじゃありません。ある意味、病気の方が彼にとってはよかったのかもしれませんが」

警部はそう言うと、姿勢を正すように椅子に座りなおした。

「実は、ミシェルさんは現在、パメラさん殺しの容疑者として拘留されているんです」

二人の飲み物を運んでいた彼女の手から、グラスが滑り落ちた。大きな音がして、ガラスの破片が床の上に飛び散るのも構わず、彼女は次の瞬間、勢いよく声を発していた。

「ミシェルさんが、あの人がお姉さんを殺すはずがありません。絶対、何かの間違いです！」

―8―

警部はこういう場面には慣れているのか落ち着いたもので、落ちたグラスの破片を器用に拾い始めた。

「ええ。私も彼もミシェルさんが犯人だとは思っていません。ですから、あなたにこうしてお話を伺いに来たのです」

ジェインは蒼ざめた表情を幾分か元に戻すと、「失礼しました」と謝り、箒と塵取りで丁寧にそれらを片付けた。

「すみません。あんまりびっくりしたものですから……。エイプリルフールの嘘よりも、もっと心臓に悪いですわ」

ジェインは警部のすすめでそのままテーブルに着くと、胸の辺りに手を置いた。

「でも、誰がそんな嘘を？　ミシェルさんが誰かに恨まれているとは思えないんですけど……」

警部は言った。

「ジェインさん。これは嘘じゃなく、本当のことなんです。それに、拘留されているというのは、彼が自ら自首してきたからなのですよ」

「なんですって？」

ジェインはまた驚いたような声を発すると、首を左右に振った。

「どうして、そんな……。信じられないわ……」

彼女の目は今や涙目に変わろうとしていた。
エリックも彼女の気持ちに同調したように、悲しい目になっていた。
このままでは冷静な聞き取りが出来るか確証もないと危ぶんだ警部は、本題に入るべく彼女に例の電話の話を振った。

「ええ。ですから、我々はどんな小さなことでもミシェルさんのためにも見逃すわけにはいかないのです。先日、お電話を頂いた件で、お話を聞かせて頂けませんでしょうか？」

ジェインは「当然ですわ」と頷くと、ハンカチで涙を拭いた。

「ただ、その前に、あなたとミシェルさんが知り合われたきっかけをお教え願いたいのですが」

暗に5年前を遡ることを示唆された彼女は、彼との過去を思い出すために、静かに目を閉じた。
そして、記憶を手繰り寄せるようにゆっくりと口を開いた。

「ちょうど5年くらい前のことだったと思います。ミシェルさんは前のマネージャーさんの後任として、パメラさんのところにやって来ました」

「前のマネージャーさんというのは？」

「フレッド・ミーガンさんですわ。とても働き者でいい人だったんですけど、急に辞めてしまったんです」

「急にというのは、何も言わずにということですか？」

「ええ。少なくとも私は何も聞かされていませんでした。先生も同じだったと思います。フレッドさんがいなくなってから、随分落ち込んでいらっしゃいましたから」

警部は首を傾げた。

よくあることではあった。

しかし、『よく働く、いい人』が雇い主にも無断で突然、仕事を放棄するということはなかなか考えにくいことだった。

―9―

警部はしばらく考え込んでいたが、結局、その名前だけを手帳に記した。

「それで、ミシェルさんとパメラさんが義理の姉弟だということはご存知だったわけですね？」

ええ、とジェインは頷いた。

「初めて先生にミシェルさんを紹介された時、直接、先生の口から伺いました」

「では、ミシェルさんのお父さんが亡くなられたこともお聞きになっていたんですね」

ジェインは瞳を翳らすと言った。

「本当にお気の毒なことだと思いましたわ。ミシェルさんはどうもご自分の母親を憎んでいらっしゃるような感じがしました。はっきり仰ったわけではないのですが、なんとなく、そういうことはわかるものじゃありません？」

警部は、「さぁ、それは人によるかもしれませんね」とやんわり否定した。

「でも、最初に聞いていなければわからなかったと思うんです」

「何がですか？」

「血が繋がっていない姉弟だということですよ。お二人は雰囲気と言うか、うまく説明できないんですが、とにかく本当の姉弟だと言われてもまったく違和感がないくらい、何かが似ていたんです」

彼女の言うことは全くもってあやふやだった。

エリックは正直、ここに来たことを後悔し始めていた。

彼女の知っているミシェルはおそらく、エリックの知りたがっている彼の真の姿ではないような気がした。

『真の姿……』

エリックは心の中で呟いた。

もしかすると、『真の姿』は幾つも存在するか、または一つもないのではないかと彼は思った。

『僕にも真の姿なんてあるのだろうか……』

警部がジェインに尋ねた。

「彼の仕事ぶりはいかがでしたか？」

「それはもう、素晴らしいものでしたわ。前任のフレッドさんもよく先生に仕えていらっしゃいましたが、ミシェルさんはそれ以上だったと思います」

「ほう、どんなところが、ですか？」

警部が急に興味を示したのがエリックにもわかった。

ジェインは初めて言いよどんだ。
それでも、根が喋らないではいられない性格だとすでに見抜いていた彼は辛抱強く、彼女の言葉を待った。

「ここだけの話にしておいてもらいたいのです。先生の名誉にも関わってくることですから……」

「ええ、それは勿論。お約束しますよ」

警部の瞳は狐のように狡猾な目になった。

「実は、先生はフレッドさんが辞められてから、占いへの執着をなくされていたんです」

「執着、ですか」

エリックが途中で口を挟んだのに対して、警部は「シッ」と言うように自分の口に指を当てた。

「ええ。先生はもともと高校の教師でした」

「えっ？」

これには警部も驚いたように、尋ねた。

「それは本当ですか？」

―10―

ジェインは黙って頷いた。そして、重々しい口調で言った。

「先生のお母様が先生を道連れに自殺しようとなさったことは、もうご存知ですわね」

二人は傷ましげな顔で頷いた。

「幸い発見が早かったので先生は助かりましたが、お母様はそのままお亡くなりになりました」

「発見が早かったのに、亡くなったんですか？」

警部の意見は正しかった。しかし、彼女はその疑問に冷静に答えた。

「先生のお母様はそれ以前から神経を病んでいらして、ほとんど薬漬けの状態だったのです。それで結局、体力が回復せず、一度も目を覚まされぬまま逝かれたそうです」

「睡眠薬ですか？」

「ええ、俗に言う、睡眠導入剤です」

警部は自分の顎に手をやると何度も擦るしぐさを見せた。

彼がイライラと考えあぐねているのがエリックにもわかるほどだった。

ジェインは続けた。

「その事件の後、先生は教職を離れ、占いの仕事を始められたというわけなんです」

「なぜ、占いだったんでしょう？」

素朴な疑問が警部の口から飛び出した。

けれど、これには彼女も答えられないようで「さぁ」と唸ったきりだった。

「ただ、何もかも嫌になられたのだと思いますわ。現実から切り離された生活をしたいと思われたんじゃないでしょうか」

ジェインは彼女の気持ちになったつもりで考えるとそう言った。

「なるほど」

警部は、意味もなく、手帳をぽんぽんと指で叩いた。

「それで、話を元に戻したいのですが、ミシェルさんはどのようにパメラさんの役に立っていたと言われるのですか？」

ジェインは心を決めたように言った。

「占いそのものです」

「は？　なんと仰いました？　占いそのものって、どういうことなんですか？」

警部の口調が変わり始めていることにエリックは驚いていた。こん

な、見るからに焦っている警部を見たのは初めてのことだった。

「ですから、彼なんです。真実、水晶から答えを導き出していたのはミシェルさんだったんです」

警部とエリックは狐につままれたみたいに、声を無くしていた。

「あの人には水晶の中の未来を見ることが出来たんです。紛れもなく、そういう力があったんです」

―11―

エリックはまるでどこかに心を飛ばしてしまったかのように、ぼんやりとした表情になると椅子の背に深くもたれかかった。

気がつくと警部が無言でエリックの方を見ていた。その目は「大丈夫か」と語りかけ、「知っていたのか？」と問いかけていた。エリックの衝撃はジェインにも伝わったようで、彼女は慌てて冷たい水を持ってくると心配そうに彼の顔を覗き込んだ。

「大丈夫ですか？　お顔の色があまりよくありませんが……」

警部がエリックの代弁をするように答えた。

「すみません。あまりに思いがけないことだったので」

ジェインは何度も頷くと言った。

「お察ししますわ。ミシェルさんも自分のことながら驚いておられましたから……」

「驚いていた？　それはつまり、自分の能力というか、そういう力があることを知らなかったということですか？」

「ええ、気付いてはおられなかったと思います」

ジェインはテーブルの上で固く手を結ぶと言った。

「と言いますか、ある日突然、目覚められたのだと思いますわ。だ

って、最初は全くそうではなかったんですもの」

「そういうものが急に見えるようになるってことはあるものなんでしょうか？」

ジェインは首を傾げながら、専門家ではないのでわからないと告げながらもある推測をうち立てた。

「必要に応じて、と言う言葉がありますでしょう？　まさにそれだと思うんです」

そして、その後、彼女の口から語られた真実は二人にとって、非常に興味深いことだった。

「私が辞める少し前のことでした。先生はすっかりミシェルさんを信用されるようになり、経理や占いで使う道具なども彼に全面的に任されるようになりました。ミシェルさんもお姉さんの期待に応えようとそれは一生懸命で、占いのことを勉強なさったり、何より先生のボディガードのようなこともされていました」

「ボディガード？」

エリックは鸚鵡返しに告げた。

どちらかと言えば華奢な体型のミシェルに、それはあまりにもそぐわない単語だった。

「実はちょうどその頃、先生はタチのよくない客とのトラブルを抱えて、正直、仕事どころではない状態におられました」

「タチがよくないと言うのは、例えば、ゆすり、たかりの類という

意味ですか？」

「ええ、そうです」

ジェインはとても不快げに頷いた。

―12―

「確かに先生は前ほどの熱心さを失っていらっしゃいました」

「オーラも消えかかっていた？」

「いえ、決してそういうわけではありませんが、ただ、時々とても暗い表情をなさったり、ぼんやり考え込んでおられることが多く見られるようになりました」

「まさに、やる気を喪失した状態だったんですね」

ジェインは頷いた。

「それで、たぶん、先生らしくないミスをされたんだと思います」

「彼らにそこを衝かれたってわけですね」

たいていのゆすり屋、たかり屋たちが目をつけるのは、それほど大したことではない場合が多い。些細なことをさも大きくするのが、彼らの仕事みたいなものだから。

おそらく、パメラが強請られたということもそんな大きなことではなかったのだろう。しかし、甘い汁を吸う快感を覚えた者たちは、ダニのごとくしつこく、たかり続ける。

それがヤツらの常套手段だった。

案の定、ジェインは告げた。

「幸い、それはお金で片付きましたの。でも、なんだか、そういう

ことがたびたび起こるようになって……。今までの先生なら、もっと毅然とした態度で臨まれていたんですが、それもなく……」

「ミシェルさんはさぞ、心を痛めてらしたでしょうね」

「ええ。それはもう」

とジェインは声に力を込めた。

「まるで、自分の力が及ばないことを心から悔やんでおられるようでした」

エリックはたまらずに言った。

「でも、それはミシェルの過失ではありませんよね」

「もちろんです。でも、ミシェルさんにしてみれば、そういう輩にお金を払うということ自体が許せなかったんだと思います。それと」

ジェインは顔を曇らせながら続けた。

「矢面に立たなければいけないのは先生でしたから。エリックさんは若いこともあって、どうしても甘く見られがちで……。相手にもしてもらえず、悔しい思いをされていたんだと思います」

大切な人間を守りきれないことに対する後悔の念はいかばかりのものだったろうとエリックは思った。

責任感が強いミシェルだけに相当苦しかっただろうことは確かだった。

「ミシェルさんは強くなりたい、力が欲しい、とよく言ってらっしゃいました」

「その思いが幸運にも天へ通じたというわけですか……」

警部の口から飛び出したのは、意外にも皮肉めいた言葉だった。

―13―

「嘘じゃありませんわ。本当に彼は未来が見えるようになったんです！」

ジェインが向きになって、言った。

「誰も嘘だとは言っていません。だが、もしあなたがおっしゃることが本当ならばパメラさんの死も当然避けられたのではありませんか？」

「それは……」とジェインは口を濁した。

「信じていただけないことはわかります。私でさえ、この目で見るまで信じられなかったのですから」

それでも、警部はまだ納得しなかった。

ジェインは心を決めたように言った。

「わかりました。本当のことを言いますわ」

「本当のこと？　では、今までのことはすべてでたらめだったということなのですか？」

「違いますわ！」

と、彼女は頬を紅潮させて言った。

「これを話すと信じてはもらえないと思って、言わなかったことが

ありますの」

「それは何なのですか？」

警部は態度を固くして尋ねた。

ジェインは腹をくくったらしかった。

「ミシェルさんが未来を覗く事が出来たのは、どの水晶でもというわけではありませんでした」

「仰る意味がわからないのですが？」

警部は冷たいと思える声で聞いた。

彼女はもう、答えるしかなかった。

「紫水晶です。先生が持っておられる水晶の中で一番綺麗で、一番高価な玉……」

「あの時価数億はくだらないという？」

「ええ」

彼女は大きな秘密を打ち明けた開放感からか、とても疲れた表情をしていた。この数時間の間に少なくとも一年は年を取ってしまったような……。

「やはり、信じられませんね」

と警部が言おうとしたとき、その声に被るようにエリックが声を出した。

「僕は信じます。ジェインさん、話を続けてください」

ジェインは心からほっとしたような顔になると、先を続けた。

「先生の占いはすべて緻密なリサーチによるものでした。ですから、先生にも『見る力』はなかったんです」

「そうでしょうね」

警部の声はそれはつれないものだった。そして、改めて聞いた。

「じゃあ、その紫水晶はミシェルさんにしか未来を見せなかったというわけですね」

「ええ、そういうことになります」

ジェインは認めた。

「それでは、ミシェルさんが嘘を言っていても誰にも分からないということになりますね」

「警部！」

エリックが尖った声で警部を責めた。

「いい加減にしてください！　あなたは最初から疑ってかかっている。どうしてなんですか！」

彼はイライラしていた。

エレンの目の中の悪魔の存在を誰よりも認めている男が……。

「私は真実が知りたいのです」

―14―

「真実です。私は真実しかお話していません。でも、警部さんのおっしゃりたいことはわかりますわ。誰だって、嘘みたいな話だと思うに決まっていますもの」

ジェインは少し泣きそうな顔になりながら言った。

それを見て、急に警部は態度を軟化させた。まるでさっきまでの厳しい口調がお芝居か何かだったかのように、柔らかい視線に戻っていた。

「すみません、ジェインさん。あなたが嘘をおっしゃっていないことは十分承知しています。ただ、あらゆる角度から物事を見るのが私たちの仕事でして。これはミシェルさんが犯人でないことを証明するためにも避けては通れないことなんです」

「わかっています。何事も疑ってかからなければいけないのが警察の方々のお仕事ですもの。ええ、構いません。何でも聞いてください。私にわかることは全てお話いたしますわ」

ジェインは気を悪くするどころか、ミシェルのために何でも話す覚悟になっていた。

確かに、ただ相手の話を素直に聞いているだけでは、彼女の視点からのみの主観より、引き出すことはできなかっただろう。

言い換えれば、彼女が今まで疑いもせず、どこにも引っかからなかった事柄こそ、警部の一番知りたいことでもあった。

警部の巧みな誘導話術が、ジェインの彼への信用を勝ちとったと言っても過言ではないだろう。

エリックはただただ、彼の手腕に感心していた。

「では、改めてお聞きします。あなたは、先ほど、『自分の目で確かめた』とおっしゃいましたが、それはどういうことなんでしょう？」

それは、エリックも知りたいところだった。

ジェインは記憶を揺り起こすように、天井を仰ぐ様子をした。

「実は私もミシェルさんが本当に見えているのか、半信半疑だった頃があるんです。いえ、ミシェルさんが嘘を言ってらっしゃると思ったわけじゃありません。人間って、こう見えて欲しいと思うとそれを本当に見た気になるでしょう？　それと同じで、ミシェルさんの占いも彼の願望や希望が作用しているんじゃないかって……」

それが一般の真理だと警部は頷いた。

ジェインは続けた。

「今、考えても恐ろしいんですが、先生は一度、暴漢に襲われたことがあるんです」

「それはいつのことですか？」

警部の顔色が変わるのがエリックにはわかった。

「あれは、先生が結婚されて、スイスにご主人と新婚旅行に行かれた時でした」

警部は慌しく手帳のページをめくりながら聞いた。

「それは何年前のことでしょうか」

―15―

「確か今から3年くらい前のことだと思います」

「ミシェルさんが来られて2年ほど経った頃ということですね」

「ええ、そのくらいです」

ジェインはゆっくりと頷いた。

「ちょっと、待って下さい。スイスで、と仰いましたね？　もしかして、交通事故があった頃と重なりますか？」

交通事故……？！

警部の言葉にエリックは鋭く反応した。

「重なるどころか、そのものです。こちらの新聞ではあれは単なる交通事故と処理されたみたいですが、本当は違うんです」

ジェインは悔しげな表情を隠そうともせずに言った。

「一体、何があったんです？」

ジェインは「ちょっと待っていてください」と席を立つと、しばらくして、手帳くらいの小さなノートを手に戻ってきた。

それを見た警部の眼がいっそう輝いた。

「それは日記ですか？」

「いえ、家計簿ですわ。結婚資金を貯めるために日記代わりにつけていましたの」

警部は期待のこもった眼差しでその小さなノートを食い入るように見つめていた。

彼女はノートを繰りながら、言った。

「ミシェルさんはもともと、その結婚には反対でした。先生も正直、それほど乗り気ではなかったのです。でも、ケインさんはそれは、それは熱心に先生に求婚されて……」

警部はまるで宝の山を目の前にした冒険家のごとく目を光らせ、熱心に手帳にペンを走らせていた。

「ケイン氏というのは、パメラさんの最初のご主人のことですね」

「ええ。元国会議員の。ケインさんは以前にも先生にプロポーズされたことがあったんですが、その時は一応、お断りになったんです」

「よほど、ケイン氏はパメラさんのことが好きだったんですね」

ジェインはノートを捲る手を止めると、少し考え込んだ。そして、とても歯切れの悪そうな声で言った。

「ええ、たぶん。そうですわね」

警部は気になりつつも、先に話を進めた。

「それで、パメラさんもとうとう押し切られたということですか？」

「ええ、そんな感じでした」

ジェインは表情を消して、頷いた。

「先生はそれまでも、いろんな方から求婚をされていらっしゃいました。でも誰にも本気にはなれないご様子でした」

「もしかして、パメラさんには特別な人がいらっしゃったのではないですか？」

警部の言葉にジェインは小さく同意した。

「ええ、その通りです」

「そしてそれは、ケイン氏ではなかったのですね」

―16―

それまで黙って聞いていたエリックは、急に落ち着かない気持ちになった。パメラの思い人と言うのはミシェル以外に考えられなかった。

しかし、ジェインの口から出て来たその名前はエリックの想像を見事に裏切った。

「先生はおそらくずっと待っておられたのだと思います」

「誰をですか？」

「フレッドさんです」

「ミシェルさんの前にマネージャーをされていたと言う？」

「そうです」

警部は顎に手を当てながら、首を傾けた。

「けれど、その方は急にお辞めになったんですよね。パメラさんにも何も告げずに」

手帳の名前を睨みつけるように警部は言った。

「ええ。そうなんです。本当に突然に」

ジェインもそれ以上言いようがないというような口ぶりだった。

「荷物とか残ってはいなかったんですか？　住まいはどうされていましたか？」

「フレッドさんは近くにアパートを借りて住まれていました。でも、そこももぬけの殻で……」

「ということは、少なくとも自分の意思でいなくなったのは確かなのですね」

ジェインは首を縦に振らざるを得なかった。
警部は何かしら思いをめぐらせている様だった。

「何かトラブルに巻き込まれた様子などは見当たらなかったですか？」

ジェインは少しも思い当たらないような顔をした。
誰が考えても不自然なことに思えた。しかし、その答えがそれ以上、望めそうにないことを悟ると警部は質問を替えた。

「フレッドさんとパメラさんは、いわゆる恋愛関係にあったのでしょうか？」

「いいえ、なかったと思います。お互い、とてもストイックで、そういう人たちではなかったんです」

ジェインは即答しながらも、言葉を選ぶように話した。

「では、どうして、あなたはパメラさんがフレッドさんを待っていると言われるのですか？」

「それは……」

ジェインはとても言いにくそうな顔になった。

「勘だと言ったら、お怒りになるかしら。でも、一番近い側にいたからこそわかったんです。フレッドさんの方はどうだったか、正直のところわかりません。あの人は常にポーカーフェイスでしたから。ただ、先生のために身を粉にして働いていたと言っても過言ではないくらい、献身的だったことは本当です」

「パメラさんは？　では、彼女の方が積極的だったわけですか？」

ジェインはそれに対してとてもおかしそうに笑った。

「積極的ですって？　とんでもない。先生はとても奥手な方でした」

「奥手……ですって？」

思わずエリックが声を発した。

「ええ。先生はものすごく堅い人だったんです。教師をされていたと言いましたでしょう？　でも実際、それだけではないと思うんです。お父さまのことが相当トラウマになっていたと思います」

「極端に言うと、男嫌いだった？」

「そうですね。どちらかと言えばそうでした」

「でも、パメラさんは相当おモテになったんですよね」

エリックが耐え切れなくなったように尋ねた。

「ええ。先生は女神のように美しかったんですもの。勝手に熱をあげる人たちはそりゃ、たくさんいましたわ」

彼女はありし日のパメラを思い出すように誇らしく言った。

―17―

警部の眉間には、だんだんそれとわかる皺が増えつつあった。そしてそれは、ジェインの話が進むにつれ、ますます深くなっていった。エリックも、自分の接したパメラとジェインの語る彼女とのギャップに折り合いが付けられずにいた。

「ミシェルさんやあなたのお話と、どうも違うようですね」

警部は不信の色を隠すことなく、エリックに小声で言った。

「ええ。僕もそれを考えていたんです」

それでも、彼らはとりあえず、彼女の話を聞き続けることにした。

ジェインは日記代わりにつけていたという家計簿を捲りながら、新たに思い出を甦らせているかのようだった。

「先生たちは、そう言えば結婚式をあげなかったんですわ。どうしてかわからないんですが、あまり派手にしたくはないようでした」

「それはパメラさんの意思で？」

「さぁ、どうだったでしょうか。本当のところ、なぜか、聞いてはいけないような気がしましたの。だって、結婚式を挙げないなんて、よほどの理由がないとありえませんでしょう？　先生は初婚でしたし、なんの障害もなかったのに……」

警部は思い切って尋ねた。

「パメラさんとケインさんの結婚は、あなたから見て、誰からも祝福されるものだったと言えますか？」

ジェインはその質問に、明らかに戸惑う様子を見せた。

警部はそのことに即、満足したかのように、「いえ、いいんですよ」と片手を上げると彼女の答えを求めないというジェスチャーをした。

「少なくとも、あなたとミシェルさん以外は祝福されていたと考えても差し支えはないのですね？」

ジェインは気まずげにノートから顔を上げると小さく頷いた。

「あなたもパメラさんの結婚には反対だったんですか！」

エリックは思いがけないというように彼女を見た。

「結婚に反対だったわけではありません。先生の幸福はずっと願っていましたから。ただ……」

「ケイン氏、ですね。あなたが気に入らなかったのは……」

警部の問いかけにジェインはため息混じりに答えた。

「亡くなった方のことを悪く言いたくはないのですが、あの方はどうも信用できないタイプの人でした」

「ちょっと待ってください！」

エリックが大きな声を放った。

「亡くなったって、ケイン氏がですか？」

ジェインは深く頷いた。

「ええ、暴漢に襲われて……。ああ、ありましたわ。スイスの警察からの電話の内容を書き写していましたの。先生も頭を強く殴られて、生死の境を彷徨ってらっしゃったので……」

「ミシェルさんは？　彼もその電話を聞かれて驚かれたでしょうね」

「いえ、ミシェルさんは、その場にいらっしゃらなかったんです」

「どこにおられたんです？」

「スイスに向かう列車の中です」

―18―

警部が吠えた。

「紫水晶がその事件を知っていたと言うんですか！」

ジェインは警部の勢いに慄きながらも否定はしなかった。

「事件のあった日の朝でした。ミシェルさんが青い顔で占いの部屋から飛び出してくると、良くないことが見えたって仰ったんです。そして、そのまま先生たちの後を追うようにスイスに向かわれました」

「何が見えたのだろう……」

珍しく警部が独り言を呟いた。そして、今度はジェインに向かって尋ねた。

「あなたはもちろん驚いたでしょうね」

ジェインはその質問に対して、少し考える間を見せた。

「ええ、驚きました。いろんなことに対して……。でも、一番心を衝いたのは彼の悲愴な顔でした」

警部がわからないという顔をした。

「すみませんが、具体的にどのような顔だったのか、お教え願えませんか？」

刑事らしい、シビアな質問だった。
しかし、ジェインも最もだと思ったらしく、目を閉じて、そのときの情景を懸命に思い出そうとしていた。

「小さな子供が、そう、迷子になった時のような不安げな顔……。もう二度と母親には会えないんじゃないかって号泣する寸前のような、そんな顔でしたわ」

警部にはなぜか、その顔が見えるようだった。
そしてそれは、ある光景を彼に思い出させた。もう十何年以上前の、彼と彼の妹のその事件を。
魔と名のつくものに魅入られた彼女が必死に自分を取り戻そうとしていた姿。
そして、その彼女を救おうと自ら悪魔に心を売った己のことを。

否。救ったのではなかった。
結局は自分の命と彼女の眼を秤にかけただけなのだ。そして自分は己の命を選び取った……。

そこまで思いが及んで、彼は無意識に首を横に振った。
けれど、いつものように「違う」と言う心の声は身の内のどこからも聞こえてはこなかった。

「警部さん？」

気がつくと、ジェインが神妙な顔で警部の顔を見つめていた。

「ああ、すみません。先を続けてください」

ジェインは「えっと、どこまでお話しましたかしら……」と言いながら、自分のノートを覗き込んだ。
エリックが警部の代わりに、言った。

「ミシェルが水晶によって何かよくないことが起きることを知り、その不幸を止めるためにスイスへ向かった、ってところまで伺いましたよ」

「ええ、そうです。でも、とても間に合わなかったんです」

「事件はすでに起こった後だったわけですね」

ジェインはとても辛そうな顔で頷いた。

―19―

「スイスの警察によれば、先生とケインさんは別荘に向かう途中、道を間違い、引き返そうとしていたところを、後ろから付けてきていた何者かによって襲われたと言うことでした」

「道を間違うとはどういうことですか？」

警部が不信そうに尋ねた。

「なんでも、その別荘へ向かう道は数日前に降った大雨のせいで崖崩れを起こし、通れなくなっていたそうなんです。それで、本道とは違う迂回の道を本来ならば通らなければいけなかったのですが……」

「二人はそれを知らなかったんですね」

「そうだと思います。でも、地元の人の話ではちゃんと迂回路を示した立て札を立て、その道を通れないようにバリケードがしてあったって言うんです」

「おかしいですね。二人が気付かなかったということは、何者かがそのバリケードをわざと避けていたと考えられますね」

「ええ。向こうの警察の方もそう仰っておられました」

ジェインは難しそうな顔で頷いた。

「それで、崖崩れの箇所を発見したパメラさんたちがユーターンし

て戻ろうとしたところを何者かが待ち構えて襲った、ということなんですね」

警部は顎に手を当てるとジェインよりもさらに難しい顔で考え込んだ。

エリックも挟む言葉が思いつかない状況だった。

「暴漢は何人いたと言っていますか？」

警察の報告を警部は知りたがった。

「二人だったと」

「特徴などはわかりますか？」

それにはジェインは首を振った。

「男の二人組だったとしか……。先生は頭を殴られたために脳震盪を起こされており、回復されてからもそのときのことは一切、思い出すことができなかったんです」

「部分的に記憶を失ったわけですね……。しかし、じゃあ、なぜ、男の二人組だとわかったんでしょう？」

「それは、先生を助けてくださった方が病院の関係者にそう話されたからなんです」

「助けた？」

エリックと警部は同時に同じ言葉を発していた。

「目撃者がいたということですか？　でも、その場所は通行止めになっていたと言いましたね？」

ジェインは、おそらくバリケードがなくなっていたために他の観光客もその道を選んでしまったのだろうと言うスイスの警察の見解を述べた。

「その方は旅行者で、トレッキングのために山へ向かわれる途中、たまたま先生たちの事件に遭遇されたようです」

警部は納得のいかない顔でジェインの続きを黙って聞いていた。

「その方の話によれば、男たちは二人いて、それぞれが先生とケインさんに襲い掛かっていたそうです。ケインさんは必死で応戦していたらしいんですが途中で力尽きて倒れたため、その方は先生だけ連れて車で逃げてきたのだと」

「パメラさんはその時点では意識はなかったんですね？」

「ええ。その方は怪我をした先生を車に乗せ、すぐに麓の病院に向かわれ、そこで事件が発覚したというわけです」

―20―

「それで、ケインさんはどうなったんですか？」

エリックの問いにジェインは「それが……」と言葉を濁らせた。

「地元の警察が現場に駆けつけたときにはすでに犯人たちは立ち去った後で、影も形もなかったんだそうです」

「ちょっと待て下さい。もしかして、ケインさんの姿まで消えていたって言うんじゃないでしょうね？」

突拍子もないと思える警部の質問に、彼女は興奮気味で答えた。

「そうなんです！　瀕死の重傷を負っている人間が忽然と消えるなんて、そんなことあるんでしょうか？　向こうの警察は、おそらく犯人が一緒に連れて行ったんじゃないかって言うんですが、理由がそもそもわかりませんでしょう？」

彼女の言うとおりだった。

「口を封じたいなら、その場で息の根を止めてしまえばよいだけのことですよね。連れて行くメリットなんてあるのかな。第一、それだけ怪我をしてるのなら、かえって犯人たちの足手まといになるということも考えられませんか？」

エリックがジェインの意見に賛同しながら、警部に尋ねた。

「確かにどこかに運ぶにしても、後の処理に困るでしょうね。もっ

とも、本当に怪我をしていればの話ですが……」

しかし、警部の口から出て来たのは事件そのものを疑うような言葉だった。

「どういうことですか？」

思いもよらない発言にエリックは混乱しかかっていた。

「これはあくまでも仮定なんですが、ケインさんが犯人と仲間だったと考えるとつじつまが合わないこともないってことです」

「でも、それはありえないと思いますわ」

ジェインはけれど、その推理をあっさり否定した。

それには警部もおやっ、と言う顔になった。

「ケインさんには良い感情は持っていないんですが、でも、さすがにそこまではなさらないと思うんです」

「なぜ、そう思われるのですか？」

「なぜって、ケインさんは先生の幼馴染だからです」

彼女の言い分は、旧友の間柄の人間をそこまで非道な方法で裏切ることは出来ないだろうということだった。

「幼馴染……ですか」

警部は少し考える素振りを見せた。

もし、ケイン氏がある人間と同一人物だすれば、幼馴染だろうと妻だろうと決して手加減はしないだろう。

しかし、問題は……。

警部は顔を上げてジェインに言った。

「パメラさんを助けたという人は今、どこにおられますか？」

期待を大いに含んだ警部の問いかけに、ジェインは残念そうに首を振った。

―21―

「まさか、その善意の人までいなくなったなんてことはありませんよね？」

エリックが呆れたように言った。

ジェインは躊躇うことなく頷くと、「本当にわからないことだらけなんです」と途方に暮れたような顔をした。

彼女の話の続きによれば、現場を慌てて引き上げた警官たちが改めて話を聞こうと病院に向かったところ、パメラを助けたその人物は名前も告げずにすでに立ち去った後だったと言うではないか。

「警察は何をやっていたんです！　明らかな職務怠慢としか言いようがないですね」

エリックの辛らつな意見に警部は苦笑いで答えた。

「いや、きっとこういう大きな事件には慣れていない人材ばかりだったのでしょう。地方の警察署にはよくあることです」

「それにしても、名前や住所くらい聞いておくものではありませんか？　いくら慣れていないからと言ったって、素人の僕でさえ思いつくくらい、初歩的なミスですよ」

エリックはなおも納得のいかない様子で文句を言った。

「そうですね。ただ、その時点では必要性を誰も感じていなかったのかもしれない。こういったことには、経験が大きくものを言うの

です。ある程度の場数を踏まないと、とっさには冷静な判断は出来ないものです」

警部は同業者としての意識からか、スイスの警察官たちの援護射撃をしたように見えた。

時として現れる、警部の他者への生ぬるい思いやりと言うか気遣いが、どうにもエリックには許せる時と許せない時があって……。

今は完全に頭にきた状態だった。

「警部！　これはゲームのシュミレーションなんかじゃないんですよ。現実に起こったことなんです。人の生き死にに関わっている重大事件なんです！」

どうして、警部がそんなにも冷静でいられるのか、その方がエリックには不思議でならなかった。

警部とて実際のところ、腹に据えかねているのは同じだった。

しかし、数年前の事件を今ここであれこれ言ったところで何にもならないのは彼が一番よくわかっていた。

それよりも大切なのはこれから先のことだった。

警部は腕を組んで目を閉じた。

一方、エリックの苛立ちは収まらず、ボヤキとも不平とも取れる苦言をジェイン相手に発し続けていた。

「結局、犯人もわからずじまいで、唯一の目撃者も行方不明。おまけにパメラさんの夫の生死さえわからない。それで捜査は終了したって訳ですか！」

ジェインはただ困った顔で、頷くよりなかった。

数分の瞑想から覚めた警部はジェインに言った。

「ジェインさん、少しの間、彼を預かっていてくれませんか？」

―22―

頭に血が上っていたエリックは、『彼』というのが自分のことだとはすぐに気付くことが出来なかった。
警部はおかまいなしに続けた。

「私が帰ってくるまでで結構です。たぶん、ニ、三日で戻ってこれると思いますから」

「警部さんはどちらへ行かれるんですか?」

「スイスの病院を訪ねてみます。他にも少し調べたいことがありますので……」

やっとこのあたりになって、エリックも自分が置いていかれるのだということがわかった。

「どういうことなんです? なぜ、僕はここに残らないといけないんですか!」

エリックは立ち上がると自分も一緒に行くという意思を強く示した。

「いや、お二人には積もる話もあるでしょうから。じゃ、ジェインさん、宜しくお願いします」

警部はエリックに有無を言わせず、風のような素早さでゲストハウスを後にした。

リビングにジェインと二人だけ残されて、エリックは急に心細さの

ような頼りなさを覚えた。さっきまでの怒りは鳴りを潜め、居心地の悪さだけが彼を支配し始めていた。
それは息苦しさとどこか似ていた。

エリックは目の前のコップの水を一気に飲み干すと大きく息をついた。
ジェインが新しい水を継ぎ足しながら言った。

「ご夕飯がまだでしたわね。おなかがおすきでしょう？　すぐご用意いたしますからね」

ジェインの方は自分の仕事をするだけというスタンスに早くも立ち返っていた。

「ご主人は今日はお仕事なんですか？」

思いついたまま、エリックは沈黙を埋めるように尋ねた。
言ってしまってから、彼女の夫が仕事を辞めてこのゲストハウスを始めたことを思い出した。
我ながら、失言だったとばつの悪い顔をしていたら、ジェインが笑顔で言った。

「そうなんです、彼、今、漁に出かけてるんです」

「漁？　すごい！　船を持ってらっしゃるんですか？」

「いえ、いえ、岬の突堤へです。それでも、お客様に出せるだけの魚は釣ってきてくれるので助かってるんです」

「はぁ……」

エリックはどんな顔をすればいいかわからなかった。

「いざ、ゲストハウスを始めたものの、最初は喧嘩ばかりでした。私はこんな暮らしをしたいわけじゃなかったし、彼の言いなりになるだけっていうのも癪に障ったし。彼は彼で、ここに住みたいというのが一番の目的だったので、生計が立つかどうかまでちゃんと考えていなかったというのもあったと思います」

エリックは彼女の話に小さく頷いた。

「私、本当は夢があったんです」

彼女は何かとても大事な物を思い出すような優しい顔で宙を見上げた。

―23―

「夢？」

エリックは興味深く尋ねた。

彼女は顔を少し赤らめると、「そんな大袈裟な物ではないんです」と恥ずかしそうに言った。

エリックはそれでもいいからと聞きたがった。

ジェインは覚悟を決めたように口を開いた。

「私、両親がいないんです」

「えっ？」

ジェインはエリックの驚きに対して、さほど気にしたような素振りは見せなかった。むしろ、予想した反応だったというように、穏やかな声で続けた。

「でも、不幸だって思ったことは一度もないんですよ。私が育った孤児院のシスターたちはみんないい人たちで、今でも本当の親のように思っていますもの」

エリックは、相槌を打つようにただ頷くよりなかった。

「それでも、自分を産んでくれた親のことはずっと気になっていました。どこにいるんだろう？　なぜ、自分を手放してしまったんだろうって……」

ジェインはやや俯きがちの顔を上に向けた。

「高校時代に、実は何度も院を抜け出したことがあるんです」

「それは本当のご両親を探すため、ですか？」

ジェインは頷いた。

「でも、知ってから後悔しました。そして、世の中には知らなくていいことがあるってことに気付いたんです」

エリックは黙っていた。

「シスターには言えませんでした。あれだけ愛情を注いでもらっていながら、それでも本当の親の愛が欲しかったなんて……」

「でも、それは沸き起こる自然の要求だと思いますよ」

ジェインは少し驚いたような顔でエリックを見た。

「ええ、先生もそう言ってくださいました。肉親の愛情を求めるのは決して恥ずべきことではないのだと……」

「その先生というのは、パメラさんのことですか？」

「そうです。彼女は私の高校時代の恩師でした」

エリックはやっと、合点がいった。

「そうか、だからあなたはパメラさんのことを『先生』と呼んでいるんですね」

「それで、あなたの夢は?」とエリックは改めて尋ねた。

「私、孤児院の先生になりたかったんです。自分が与えられたものを同じような境遇の子供たちにも分けてあげたい、って。先生もとても賛成してくださって、働きながら大学へ通う道を示してくださいました」

「あなただったら、よい先生になられていたでしょうね」

おべんちゃらでなく、心から彼はそう思った。

ジェインははにかみながら告げた。

「そう言ってくださったのは、あなたが二人目ですわ。でも、結局自分には向いていないってことがわかって、その道は断念したんですの」

だから、永遠に夢なのだと彼女は言った。

二人目と言う言葉がエリックの脳裏にいつまでも残った。

口には出さなかったが、なんとなくミシェルではなかったかと彼は想像した。

すると、突然、彼の頭の中に浮かんでくるものがあった。

「ジェインさんはミシェルと仲が良かったんですね」

「ええ、親しくさせて頂いていました」

見たところ、ジェインの笑顔に偽りや、やましさは欠片もなかった。もともと、エリックも彼女を疑っていたわけではない。ただ、記憶の端にずっとひっかかっている、ある女性の存在がエリックに一瞬でも疑いの芽を抱かせたのだった。

「失礼ですが、正直のところ、ミシェルに対してはどのような感情を持っていらっしゃいましたか？」

「どのような……とは？」

エリックのストレートな物言いにジェインは度肝を抜かれた形となった。

「例えば、恋愛対象になりうる存在だった、とか、あるいは男としての魅力を感じていたとか……」

ジェインはあまりにも直接的過ぎるエリックの言葉に思わず声に出して笑った。

「それは、素敵な人だって思いましたよ。優しいし、気が利くし、何より真面目ですし。私が今まで出会った男の人の中でもピカイチだったと思いますわ」

「でも、恋愛感情は生まれなかったんですね？」

「ええ、私なんかにはもったいなくって……」

ジェインは冗談めかして、否定した。

「それに、彼はどちらかと言えば恋愛には向いていないタイプなんじゃないかって思いました」

「それはどういう意味ですか？」

「すみません、言い方を間違えましたわ。とにかく、彼の頭の中は、早く一人前になって、先生を支えることしかないみたいで、それ以外のことは全て雑音でしかないんだと言う気がしましたの」

「雑音……ですか」

それは、父親の借金を返すことだけに明け暮れていたあの頃のミシェルとなんら変わりがないように思えた。

「つまり、女性が寄り付く隙もないという……？」

「ええ、女ってそういうのが自然とわかるものなんです。私のような適齢期の女性には特にね。脈がないってわかっている人のことをムリに追い回したりはしないんです。それよりも自分に合った人を選ぶって言うか……」

「あなたもその一人だったんですか？」

ジェインは即答を避けた。でも、それは時間にして数秒のことだっ

た。

「そうですね。全く意識していなかったかって言うと嘘になるかもしれません。でも、生憎と言うか、幸運にもと言うか、私はそのときすでに今の主人と婚約していましたし……」

迷うことはなかったのですがね、と少し寂しげな笑い方をした。

「じゃ、ミシェルはあなたの知っている限り、誰とも付き合ってはいなかったのでしょうか？」

彼女は「さあ」と言うにとどまった。

「アリシア・ヘイワーズ……」

彼はその名前を告げただけだった。けれど、その瞬間、ジェインが息を飲んだのがわかった。

エリックがなぜその名前を覚えていたかわからない。

だが、その名前がその場の空気を変えたのだけは確かだった。

―25―

「その女性をご存知なんですね」

エリックの問いかけに彼女はどこか意識を飛ばしたような虚ろな目で頷いた。過去を思い出しているのか、それとも……。

「僕は最初、あなたがその人ではないかと思っていました」

ジェインはハッと我に返ると、勢いよく首を横に振った。

「どうして、私が？　名前も違いますのに……」

「でも、彼女のことは知っているんですよね？」

念を押すような尋ね方だった。まるで、警部みたいに……。

「ええ、知っています」

今までの和やかな雰囲気が立ち消え、警戒感を帯びた目がまっすぐにエリックに注がれていた。

突然現れた重苦しい空気に一番戸惑っていたのはエリックだったかもしれない。それは、ジェインが彼女を知っていたと言うこと以上に彼を驚かせた。

「アリシアさんが今現在、どこにいらっしゃるかご存知ですか？」

それだけに、エリックは自然と慎重にならざるを得なかった。

「さぁ、もう随分会っていませんから、わかりませんわ」

彼女の声はどこか冷たくエリックの耳に届いた。

「どのくらい会っていらっしゃらないのです？」

しつこく食い下がるエリックに、ジェインの顔は困惑へと様相が変わった。

「彼女とは孤児院で一緒だったと言う程度で、本当はそれほどつきあいがわったわけではないんです。ただ、忘れられない名前ではありますわ」

エリックは警部ほど尋問に長けたわけではなかった。

「何故？」と尋ねるのは優しい。

しかし、むやみに他人のプライバシーに立ち入ることはエリックのポリシーに最も反する行為でもあったのだ。

隠したいことを暴く。

それが相手にとって嬉しいはずがない。

一介の人間であり、刑事でもないエリックに、そもそも彼女が答えなければいけない理由はどこにもなかった。

エリックの逡巡にジェインは一旦、目を閉じると、決心したような顔つきで逆に問いかけた。

「彼女の名前をどうしてご存知なのか、反対に伺ってもいいでしょうか？」

毅然とした彼女の声に、エリックの心は揺らいだ。
見る限り、ジェインはあまりアリシアに対してよい感情を持っていないようだった。
その彼女の口から語られるアリシアの人となりを聞くことへの恐れが正直、エリックをたじろがせていた。

まるで対決の場と化した緊張した場面に、突然、場違いな声が聞こえてきた。

「ハニー、今帰ったよ。おや、お客さんかい？　ちょうどいい、今日は大漁でね。君も腕のふるい甲斐があるってもんだよ。……ジェイン？　どうしたの？」

ドアを開けて現れたのは、優しい物言いからはとても想像できないほどの大男だった。

―26―

ジェインは夢から醒めたようなホッとした顔で夫を見ると、エリックに言った。

「夫ですわ。まぁ、大変、もうこんな時間！　今からじゃお夜食になってしまいますわね」

思えばこちらに着いてから、すでに相当の時間が暮れていた。話に夢中になって時間を忘れていたが、今になってエリックも空腹を思い出した。

「そうそう、チャールズ。エリックさんをお部屋に案内してくれない？　とても大事なお客様だから粗相のないようにね」

「ああ、わかってるよ。一番眺めのよい部屋にお通しするよ」

ジェインが台所に去り、エリックは彼女の夫に伴われ、海に面した一室に案内された。

「部屋と言っても選べるほどあるわけじゃないんですが……」

笑うと、まるで絵本に出てくるクマのようなあどけなさがあった。正直、寝られればどこでもいいような気になっていたエリックも釣られて笑顔になった。

「お連れさんもご一緒でよかったですか？」

チャールズ氏はエリックたちが記入した宿泊者名簿を見ながら、当

たり前のように尋ねた。

「連れ？　ああ、警部のことですか。彼ならニ、三日、戻って来ないらしいので、気にしないで下さい」

けれど、彼はエリックのその言葉を聞くなり困惑と怯えの混じった複雑な表情になると、

「警察の方だったんですか……」

とそのままベッドに座り込んだ。

「どうかなさったんですか？」

人は見た目どおりとはいかないことの方が多い。

エリックは大きな体を丸めて悩みこむ彼の姿に一層の同情を感じた。

「ああ、すみません。少し動揺して……」

チャールズ氏はそう言いながら、自分の妻がここ数日様子がおかしかったことを素直に述べた。

「あの人のことだとは思っていました。ジェインは彼女のこととなると正直、人が変わるみたいで……」

エリックは突っ込んだ質問だと思いながらも尋ねずにはいられなかった。

「おかしいというのは、具体的にいつからなのですか？」

「正確に言えば、パメラさんが亡くなってからだと思います」

チャールズはゆっくり思い出すように告げた。

そしてその結果、彼の苦悩の色はますます濃くなってゆくようにエリックは感じた。

人がいいと言う言葉がそのまま当てはまりそうなチャールズ氏はどうやら隠し立てが出来ない性格のようだった。

彼の苦悩につけ込むような気がして気が引けないこともなかったが、どうしても彼の反応が見たくてエリックはその名前を持ち出していた。

「アリシアさんについて何か知っておられませんか？」

―27―

しかし、その名前を聞いた時のチャールズの複雑な表情と言ったら！
エリックは正直、彼の顔がここまで変わるとは思ってもいなかった。
何より奇妙なのは、彼自身がその名前に対してとても驚いていることだった。

「アリシアが何か……？」

それは間接的に知っているどころの話ではなかった。
エリックが唖然としているとチャールズは再び、さっきよりもさらに心配そうな声で尋ねた。

「彼女が、どうかしたんですか？」

知りたいのはエリックの方だった。
けれど、ここで焦ってはいけないと思ったエリックはわざと核心には触れず、逆に尋ねた。

「彼女を知っていらっしゃるんですね？」

チャールズは躊躇う素振りを初めて見せた。

「彼女は、高校時代のクラスメートなんです」

その言葉を額面どおり信じるエリックではなかったが、ここは黙って聞いておくことにした。
とにかく、今は少しでも彼女に関する情報が欲しかった。

一方、チャールズも肉親を案じるかのような瞳でエリックの言葉を待っていた。
結局、エリックは一か八かの賭けに出るよりなかった。
手持ちの札はジョーカーただ一枚みたいなものだったから。

「ミシェル、僕の親友なんですが、彼の恋人を事情があって探しているんです」

「ミシェル……？」

当然、ジェインから話を聞いているはずなのに、チャールズは初めて聞く名前のように口の中で呟いた。

「ジェインさんから、お聞きになっていませんか？　パメラさんの弟で、以前、ジェインさんと一緒に働いていたのですが……」

そこまで話すとやっと思い出したのか、「ああ……」と声に出した。

「もしかして、ゴードンさんのことでしょうか？　彼のことなら、覚えていますよ。とても洗練された身のこなしをいつもされていた……」

彼の言葉は、まるでミシェルの中身はどうでもいいといった風にも聞き取れた。

「ジェインが口癖のように言ってましたよ。僕と婚約していなかったら、絶対アタックしていたのにって。しかも、喧嘩の度に言うんですよ。まるで僕と出会った事を後悔しているような、そんな言い方だったな……」

童顔に等しい彼の顔がゆっくりと崩れていった。

「そうですか……。アリシアはミシェルさんの恋人に……」

彼がどちらに対してショックを受けているのか、それはわからなかった。

けれど、アリシアの名前を呼ぶときの彼はとても優しい声を発した。

おそらく、チャールズ自身は気付いてはいないだろうが。

無意識なものほど、真実を語るときがある。

それはこの数週間でエリックが体得した事実だった。

―28―

そのうちにジェインが夕食の支度が出来た旨を告げに来た。
チャールズはまだ何か話したりないような顔をしていたが、諦めたように先に部屋を出た。妻の手前、何か言いにくいこともあったのだろう。
エリックとしてはそう推測するのが自然だった。

エリックが階下に下りると、テーブルには一人分の料理が用意されていた。
ほとんど夜食と言っても差し支えないほど遅い時間帯ではあったが、ジェインの心づくしが感じられる夕食だった。
華美さはないものの、海の幸や地元の新鮮な食材をふんだんに使って調理されたと思われる数々の料理は素材そのものの味が十分生かされていて、どちらかと言えば味オンチなエリックにさえ、とても美味しいと思えるものだった。

ジェインの料理の腕を心から褒め称えたエリックは、食事を終えると早々に部屋に戻ることにした。
今日一日の疲れが思いのほか押し寄せてきて、口を動かすことさえ億劫になっていた。
チャールズはすでに自室に引き上げたのか、どこにも姿は見当たらなかった。

とりあえず、自分に今必要なのは頭の整理と休息だと言い聞かせ、エリックはシャワーを浴びてベッドに潜り込もうとした。
部屋の明かりを消そうとして、エリックはふとベッドの脇の小さな机の上においてある電話に目がいった。
そう言えば、部屋を案内された時にチャールズから説明されたのを

思い出した。

『ほとんどのお客様が携帯電話をお持ちなのであまり使われないと思うんですが、緊急用にとりあえず備え付けてあります』

と言っても、ただの子機なんですが・・・、と彼は笑っていたっけ。

エリックはおもむろに受話器を取り上げた。

「通じている……」

当たり前のことながら、なぜかホッとした。

そして、受話器を戻し、今度こそ眠ろうとしたその時、突然、電話の音が鳴った。

大袈裟でなく、エリックは飛び起きた。

まるで、誰かに自分の行動を見透かされているような気がして一瞬凍りついた。

その音を消したいがために慌ててエリックは受話器を取った。

「もしもし」

『ああ、やっと通じた……』

懐かしい声が耳に届き、エリックは肩の力が自然と抜けるのがわかった。

エリックも安堵したが、警部の方もホッとした様子が伺えた。

『携帯の電池が切れているんじゃないんですか？　何度かけても通じないんだけど……』

そう指摘されて、エリックはバッグの中に置きっぱなしの携帯電話

を取り出した。

「ああ、本当ですね」

真っ暗の画面を見てエリックは呟いた。しかし、触っているうちに電源を切っていただけだとわかった。

「おかしいな。電源を切った覚えがないんだけど……」

『え、なんですって？』

エリックの呟きまでは聞き届けられなかったのか、警部が聞きなおした。

「いえ、なんでもありませんよ。で、なんなんです？　っていうか、いつこっちに帰ってくるんです？」

『実は今、ロンドンにいるんですよ』

「はぁ？」

いけしゃあしゃあと言ってのける警部にエリックは思い切りムカついたような声を出した。

―29―

「スイスの病院を訪ねるんじゃなかったんですか？　まさか、もう済ませてきただなんて言いませんよね」

非難を幾分か含んだような声でエリックが尋ねた。

『いや、ちょっとその前に確かめたいことが出来ましてね』

それでとりあえず戻ってきたのだと警部は言った。

「じゃ、僕も明日そちらに帰って構いませんよね」

当然の権利とばかりに言いかけたエリックに警部は意外にも待ったをかけた。

「どうしてダメなんです！」

別段早く帰らねばならないわけでもなかったが、もともと来たくて訪れた場所ではない。

第一、彼は自分がここにいる理由がわからなかった。

（確かにアリシアさんのことについてはまだ知りたいことがたくさんあるけど……）

『一人が寂しければ誰かをそちらに向かわせましょうか？　確か、エレンが非番だったと……』

「じょ、冗談じゃありません。いつ僕が寂しいなんて言いました？

むしろ、その逆です。のびのびしてますよ」

『よかった。じゃ、もう少し休息を楽しんでいてください』

あなたが戻られる頃にはお母様も退院されているかもしれませんよ、と警部は穏やかな声で付け加えた。

「いつまで、ここにいればいいんですか？」

『そうですね、最初の約束どおり、私がそちらに戻るまででしょうか？』

「だから、それは、いつ……？」

そう尋ねようとしたとき、警部が突然『静かに！』と言った。

エリックは驚いて、慌てて口を閉じた。

しばらくあと、警部が小さな声で言った。

『何か聞こえませんか？』

エリックは受話器を耳に押し当て、息を殺して神経を集中させた。

「いいえ、僕には何も……」

警部はエリックがそう言った後も、まだ物音らしきものを耳で追っているようだった。

『私の勘違いだったようですね、すみません』

とりあえず、早く戻りますと警部は言った。

誰かに聞かせているような節が無きにしも非ずな言い方だった。

エリックはアリシアのことを言っておくべきかどうか迷っていた。しばらく警部が現れないのなら、自分で調べるよりないってことだろうか。

『エリックさん』

警部が少し改まったような声で言った。

『パメラさんのことですが……』

そのとき、エリックにもコトンという、かすかな音がはっきり聞こえた。

「警部……、今……？」

『エリックさん、お願いがあるのですが？』

唐突に警部が言った。

「なんでしょう？」

『写真を撮ってきてくれませんか。よくわかる。あなたならできるでしょう』

「写真？　何の？」

『お願いしますよ。とても楽しみにしていたのに、行けなくなったんですから。あなただけが便りです』

『じゃ、また』と言って電話は一方的に切れた。

―30―

正直、昨夜は眠れたものではなかった。

エリックは寝起きでぼさぼさの頭をさらにぐしゃぐしゃにかき回すと思い切り苦い顔をした。

警部からの電話を切った後、エリックは彼が残した不可解な言葉がどうしても気になって眠れなかった。

だが、彼の眠りを阻止したのはそれだけではない。

西も東もわからない静寂な夜のしじまの中に、ぽつんと取り残されたような不安な気持ちを抱いたエリックは無理に寝ようとしてかえって耳が冴えた状態だった。

そのせいか、普通ならなんとも思わない物音がひどく耳についた。

それは誰かが階段を音を潜めて上り下りする足音だったり、階下で話す夫婦の話し声だったり……。

会話がちゃんと聞き取れたわけではない。高い声と低い声が交互に何かを言い合っていた。

高い声はおそらくジェインのものだったろう。

彼女がほとんど喋っているのに対して、男の声は短い受け答えのようなものでしかなかった。

そしてそれが諍いのようだとわかったのは、時々彼女の声が大きくなるからだった。

その理由がどうやら自分に関することではないかと思った途端、余計に眠れなくなったというわけだ。

エリックは口の端をキュッと結ぶと、ろくでもないことばかり浮かぶ頭をまたガシガシと掻いた。

警部がいけないのだ。スイスへ行くと言っておきながら、自分だけ

ささっと帰ってしまうなんて。

（写真って、どういう意味なんだろう……）

エリックは眠い目を擦りながら、窓のカーテンを開けた。

朝の日差しと共に目に飛び込んできたのは、それこそ目が醒めるほどのブルーだった。

昨日はなぜか海を見てもそれほどの感慨はなかったのに、今朝の海は目が離せないほど神々しかった。

ウィーバー夫妻がここに住みたいと思った理由がなんとなくわかる気がした。

崇高な山を神と崇める人がいるように、今、エリックの前に広がる、生き物のように碧くたゆとうその海を心の拠り所にしたところで全くおかしくはない。

海は何かを語りかけ、何かを教えようとしているようにエリックには思えた。

（そうだ。本当に眠れなかったのは、彼らのせいじゃない）

エリックはすぐさま着替えると髪を手ぐしで直しただけで、そのまま階段を駆け下りた。

―31―

エリックが階下に降りてゆくと、ちょうどジェインが朝食の準備をしているところだった。

「おはようございます。ゆうべはよくお休みになれましたか？」

彼女の晴れやかな笑顔からはわだかまりや少しの後ろめたさも気取ることが出来なかった。

「波の音がもっと聞こえるかと思ったんですが、思ったより静かで驚きました」

静か過ぎて雑音が気になってたまらなかったとは、さすがのエリックも言葉には出来なかった。

「お客様用の部屋の窓はすべて防音になっているんです。以前お泊りになったお客様で海の音がうるさくて眠れないと仰った方があって……」

「そうなんですか。僕はむしろ聞こえた方がよかったですね」

そのほうがどれだけ気が紛れたかしれない。

「チャールズさんは？」

主の姿が見えなくて、エリックは思わず辺りを見回した。

「朝早く、港の突堤に行きましたわ。エリックさんに今日もおいし

い魚を食べさせるんだって……」

「そうですか」

エリックはダイニングの椅子に腰掛けながら思った。
おそらく彼が居ても何もすることはないのだろう。ホスト役はジェイン一人でこと足りるし、何よりお客がエリック一人ではどうしようもなかった。
せいぜい魚をたくさん釣って、夕食に華を添えることが最大の彼の仕事なのかもしれない。

カリカリに焼けたベーコンと半熟の目玉焼き、それにほくほくのジャガイモとパセリの付け合わせを添えただけのオーソドックスな朝食ではあったが、エリックはとても満足だった。
特にパンが素晴らしかった。町に売っているパンとは数段に味の差があった。
まろやかで、コクがあるというのだろうか。匂いに釣られて、何個でも食べられそうだった。

どこに売っているのかとのエリックの問いかけに、ジェインは自分で焼いたのだと少し恥ずかしそうに言った。
エリックはもう何個目かわからないパンを頬張りながら、その腕を絶賛した。

「あなたはペンションなんか辞めて、今すぐパン屋かレストランを始めるべきですよ！」

エリックにとっては最大限の褒め言葉であったのだけれど、彼女の笑みは満面にはならなかった。
そして彼女は物憂い声で言った。

「見切りをつけるというのはとても難しいことですわ」

エリックはそれを聞いて初めて自分の言葉が不用意だったことに気付いた。

彼女はもともとペンションをしたかったわけではない。彼女はもしかすると、まだ夢を諦めきれずにいるのかもしれなかった。

「すみません、なんか余計なことを言って……。でも、本当にあなたの料理は素晴らしいです。向こうへ戻ったら、大いに宣伝させてもらいますから」

ジェインはただ目を細めて笑っただけだった。

―32―

気まずい気持ちを引きずりつつエリックは部屋に戻った。
といって、これといってすることは何もない。
エリックは小奇麗に整頓された部屋をひとしきり見渡した後、窓辺に立って動けなくなった。
清々しかった青空は消え失せ、いつの間にか灰色の厚い雲がとって変わり、大粒の雨が窓を叩かんばかりに打ち付けていた。
碧く穏かに凪いでいた海も白波を逆巻きながら、恐ろしいほどに荒れ狂っている。
あんな海にひとたび放り込まれたら最後、あっという間に飲み込まれ、人間なんてひとたまりもないだろう。
それこそ、海の藻屑と消えるよりない。

しかし、怖いのに目が離せないというのは人間の常で。
エリックは波が生き物のようにうねる様を飽きもせずただ見つめていた。
そんな無意味な時間がどのくらい流れた頃だろう。
彼は首を傾げながら小さく呟いた。

「まさか、本当にそんなことがあっていいんだろうか。でも、そう考えればすべて辻褄が合う……」

今までのもやもやも綺麗に片がつく。
しかし、それはあまりにもありえない仮定だった。
だが、本当にありえないことなのだろうか……。

エリックは低く唸った。

ジェインに聞くのは簡単だった。事実、さっきまでは尋ねる気満々でいたのだ。
エリックはベッドに腰掛けると頭を抱えた。
この期に及んで、悩むことなどないはずなのに。

エリックは携帯を取り出すと、警部に電話をかけた。
しかし、通話音が長く続き、途中から留守番電話サービスの音声が流れ始めた。

「おかしいな、どうして出ないんだろう……」

今まで出ないことなどなかった人だけにエリックは戸惑った。
繋がらない携帯に耳を当てながら、エリックは一人で答えを出していた。
男にはたった一人で立ち向かわねばならない場面が人生に何度かある。
たとえその先に『真実』と言う名の拷問が待ち構えていようと……。

「ぐちゃぐちゃ考えるのは辞めよう。もう何を知っても、驚かないと決めたじゃないか」

エリックは自分の脚をパンパンと叩くと勢いよく立ち上がった。

―33―

その頃、警部はと言えば……。

もちろん、エリックに電話で話したとおり彼はロンドンにいた。

そう。ロンドン警視庁、別名、スコットランドヤードの取調室に。

「そろそろ本当のことをお教え願えませんか、警部？」

取調べに当たっているのは長身でやせぎすの若干、警部より年下かと思われる男だった。

「本当のことも何も、私は何の話かさっぱりわからないのだけどね、ウエイト君」

警部はわざと見下すようなそんな調子で相手の目を真っ直ぐ見据えて言った。

エリックと共に病院を出て、図書館に入った頃から、誰かにつけられていることは薄々感付いていた。

最初はＣＩＡかあるいはメリッサを襲った組織に関係する輩かという警戒心しかなかった。

けれど、ワイト島へ渡り尾行を撒こうと島をうろうろしているうちにそれがどちらでもないように思われてきた。

蒸気機関車に乗り、そのあとバスで移動している間、警部は尾行がどうやら一人らしいことに気がついた。

ＣＩＡや組織なら単独では動くまいと言うのが警部の見解だった。

カップルを装うなりなんなり、もっと尾行そのものに慎重を期する

だろう。
それでも万が一のことも考慮に入れ警部はエリックをあのペンションに残し、先に動いた。
そして、ターゲットがエリックではなく自分だったことを確信したのだ。

フェリーがまさに桟橋を離れようとした時、警部はまるで背中に目があるかのようにワイト島を見つめたままゆっくりと告げた。

「いったい誰の指図で動いているのかね、ウエイト警部補」

まさか君が直々にお出ましになるとは思ってもいなかったよと、今度は振り向いて相手を視界に入れた。

「気付いてないかと思っていましたよ。あんなに楽しそうに蒸気機関車にまで乗って……。確か、あなたの休暇届はまだ提出されていませんでしたよね」

どことなくグレッグ刑事を彷彿させるような嫌味に警部はフンと鼻で笑った。

「馬鹿じゃないのか君は。あんなのは君を撒く常套手段じゃないか」

「そうですね。でもそれはうまくいった場合のみの話でしょう？実際、警部は私に捕まったわけだから」

捕まえたと信じてるところが馬鹿だと言うのだよと、警部は声に出して言ってやりたかった。

初めて対面する男ではあったが、どうも調子が狂う。

警部はもう少し切れる男を想像していただけに物足りなさのような物を感じていた。

（どうせ顔だけで選ばれたようなものだろう。グレッグ刑事には相当劣るのは言うまでもないな。というより、こいつの尻拭いをさせられる部下がほとほと気の毒になってくる）

とりあえず、彼についてロンドンへ戻るしかなかった。

あとはもうひとりの刑事に任せて……。

過去から逃げてきた男　―1―

階段を降りる足音は決して軽やかとはいかなかった。むしろ一段一段、重みを持ってエリックは足を下ろした。
キッチンのテーブルに戻ってきた彼に、ジェインは「雨が降ってきましたね」と空と同じ曇った顔で言った。

「朝はあんなに晴れていたのに……」

彼女は仕事の手を止めて、窓の外を見続けていた。
エリックは椅子に座りながら尋ねた。

「こういうことはよくあるんですか？　その、天気が急に変わってしまうようなことが……？」

「そうですね……。どちらかというと快晴と言うのが少ないような気がします。島特有の気候なんでしょうか？　私は未だに慣れなくて……」

「ロンドンの霧が恋しいですか？」

エリックはただ彼女を笑わせたかった。それなのに、目論見は上手くいかず彼女はもっと悲しい顔をした。

「恋しいです。でも、帰りたいかと聞かれれば、わかりませんわ。あそこは悲しい思い出がたくさんありすぎますもの」

おそらくジェインの心の中ではパメラの死はまだ過去に昇華しきれてはいないのだろう。

エリックは尋ねるなら今だと思った。

「ジェインさん、パメラさんの写真を持っておられませんか？　出来ればアリシアさんの写真も一緒に見せて欲しいんですが……」

ジェインは一瞬動きを止め、それからゆっくりと視線をエリックに向けた。

このとき、『写真』と言った警部の意図はもしやこれだったのではないかと彼は思った。

「写真は……ありません」

しかし、意外にもジェインの言葉は冷たかった。

「写真がない？　本当に？　一人で写っていなくてもいいんですよ。何かの集合写真みたいなものに小さく写っているのでも、どんなのでも……」

しかし、ジェインの答えはノーだった。それはある意味、あまりにかたくなな態度にも思えた。

「ジェインさん、あなたは僕に何かを隠していますね」

その問いかけにジェインは困ったような顔になった。

「隠すだなんて、そんなことはありませんわ」

「じゃあ、どうして写真を見せることを拒むんです。彼女たちが写った写真が一枚もないだなんて、そんなことを信じろっていうんで

すか？」

「でも、本当に一枚もないんです」

ジェインは困惑の色を深めながら、ひたすらノーを繰り返した。

エリックは諦めなかった。

―2―

「アリシアさんはあなたと同じ孤児院にいたとおっしゃいましたね。じゃあ、そこへ行けば彼女の写真があるかもしれないということですよね」

エリックはジェインが見せないつもりなら、そこへ足を運んでも見るつもりだと言った。

「どうしてアリシアの写真を見たいとおっしゃるんです？　彼女が何か関係してるんですか？」

ジェインもけれど譲らなかった。

「関係してるかどうかはまだわかりません。でも僕は本当にその人が存在したのか未だに半信半疑なのですよ」

「どういうことですの？」

「つまり、僕はあなたがアリシアさんだったんじゃないかという疑いをまだ完全には捨てきれていないんです」

ジェインは首をニ、三度振ると「違います」と改めて言った。

「じゃあ、なぜ、写真を見せて下さらないんです？」

「彼女のことは本当に思い出したくないんです。だから、彼女と写っている写真も捨てました。どうしても見たいとおっしゃるのなら、チャールズが持っているかもしれませんわ。彼が本当に好きだった

のはアリシアでしたから」

そのセリフを彼女はどれだけ胸に仕舞っておきたかったことだろう。エリックはそんな答えがまさか返ってくるとも思わず、苦い顔になった。

「先生の写真はもともと、ないんです。先生はご自分がお父さまに似ていることでかなりお母様を傷つけたと思ってらっしゃるところがあって、ご自分の顔はとても嫌っておいででした。それで、仕事の時は必ず黒いレースのヴェールをかぶってらっしゃったほどです。親しい人間や仕事以外では素顔をさらされていましたが、それでも用心して写真は残さないようにされていました」

エリックの顔は自然とうろんなものになった。

「それはへんですね。だって、この間のゴシップ記事にパメラさんがライアン氏と写っている写真を見ましたよ。まるで記念撮影みたいでしたが、あれは合成なんかじゃなかったと……」

「ええ、だから、おかしいと警察に申し上げたんです。あの記事に写っていたのは先生じゃありません」

「じゃ、誰だったっていうんです？」

「わかりません。ただ……」

「ただ？」

エリックは身を乗り出して彼女の言葉を待った。

「ライアンと言う人ですが、あの人はどこかで会ったような気がするんです」

「本当に!?　で、どこなのです?」

「あの写真だけではよくわからないんですが、誰かに似ているような気がしてならなくて……」

「誰か……とは?」

ジェインはとても苦しそうな顔で目を閉じた。

「でも、そんなことがあっていい訳が……」

彼女はそう呟きながら激しく首を振った。

―3―

そして急に頭を押えるとふらふらと崩折れるかのようにテーブルに両手をついた。

「大丈夫ですか！」

エリックは駆け寄って、彼女の体を支えた。

「すみません、ちょっと気分が悪くなってしまって……」

ジェインの横顔は見るからに真っ青だった。

エリックは自分の役割に限界を感じていた。

たった一つの真実を知るために隠したい他人の過去を暴きたて、苦しめる。

そんな権利が刑事でもない自分に、果たして本当にあるのだろうか。

エリックは両手の拳をきつく握り締めた。おそらくエゴ以外の何ものでもないのだろう。

ミシェルがパメラ殺しの犯人でないことを突き止めたいのは、もはや彼自身の為だけではなかった。

「エリックさん」

ジェインが青い顔のまま面を上げると言った。

「『青い炎』って聞いたことありますか？」

「青い……炎？」

脈絡もなく現れた単語に彼の頭の中はリセットを余儀なくされた。

「警部さんに伝えようかどうしようか迷っていたことがあるんです」

エリックは自然と身構えた。

「先生の頭の傷が癒えた頃、スイス警察から犯人に繋がる手がかりと称して一通のＦａｘが届いたんです」

確かに経験不足で慣れない対応だったにしても、夫を亡くし、自らも危険な目にあったパメラに対して、地元の警察はその後も親身になってくれていたようだ。

「そのＦａｘには、ヨーロッパで起きているここ数年のよく似た事件について、というような書き出しで、それらの事件の詳細や特徴が数点、詳しく挙げられていました。その中に、先生の事件に特に酷似した事件が数件あることがわかったんです」

「酷似……とは？」

「つまり、新婚の夫婦が何かのトラブルに巻き込まれて、金品を奪われたり、中には命を落とすというものです」

確かに表沙汰になっていないようなものまで考慮に入れると似たような事件は存在し得るだろう。

ジェインは、スイス警察からの報告書を見る限り、そういう例は決して少なくなかったと言った。

それはある意味、驚くべきことであった。

「中でも、オーストリアで起こったと記載されていたものは先生の事件とそっくりで。その時も結婚したばかりの新婦が襲われています」

「新郎の方はどうだったんですか？」

「新郎は車のディーラーで海外へ出張に行っていました。それで難を逃れたんですが、その後、行方がわからなくなっています」

「どういうことですか？」

ジェインはそれにははっきり答えずに言った。

「奥さんは残念ながら助かりませんでした。でも、息を引き取る前に犯人についてこう一言、言い残したそうです」

「……」

「犯人の首の真横に青い炎の形の痣があったと……」

「青い炎……」

おそらく意識が遠ざかる中、新婦の目にはその痣が青い炎のように生々しく見えたのだろう。

「私、見たことがあるんです。ちょうど、あの人の首の付け根のあたりにもこのくらいの痣がありました」

ジェインの指が痣の形と大きさを模った。

その指はかわいそうに小刻みに震えていた。

―4―

「まさか、それって……ケイン氏?!」

声が裏返るほどエリックは驚いていた。

ジェインはゆるゆると頷いた。

「でも、あなたは、ケイン氏が犯人の仲間だと考えられると警部が言った時、否定しましたよね。痣のことは知っていて、だったんですよね?」

「偶然の一致と言うか、今まで彼の痣と青の炎と言われる犯人の痣を結びつけて考えたことがなかったんです」

そして、彼女はこうも言った。

「そう思いたくないという気持ちもどこかにあったんだと思います。まさか、ケインさんがそんな恐ろしい人だったなんて、想像すらしたくありませんでしたから」

でも……。

彼女は苦しそうに続けた。

「先生はもしかするとわかってらっしゃったのかもしれません」

スイス警察からのＦａｘが届いた直後から、パメラは酷く精神を取り乱すことがあったという。

不眠を訴えるようになり、医者から処方される睡眠薬も増えるばかりだったと。

「それに、ずっと不思議だったんです。普通だったら、まず第一に連れ去られたケインさんのことを案じるとか、探されるとかされると思うんですが、先生は気がつかれてからも一切それがなかったんです。それどころか、向こうの警察の方がケインさんの名前を出されただけで恐慌状態に陥るというか、パニックのような症状を起こされて……」

「それはおかしいですね。警察はそんな彼女に対して、どういう行動をとっていたんですか？」

「何も。先生はその後、ロンドンに戻られましたから、そちらの警察が引き継ぐことになっていたんですが、どういうミスなのか、先生の事件は海外での交通事故の扱いで捜査員の方がこちらに事情を聞きに来られるということもまったくありませんでした」

そもそも、そこがおかしいというのだ。

「パメラさんは警察に抗議しなかったんですか？」

ジェインは同意するように首を振った。

「私とミシェルさんが代わりにスコットランドヤードに直接掛け合おうとしましたが、先生は『忘れたいから、そっとしておいて欲しい』の一点張りで……」

実際、彼女の情緒不安定な様子を見ていたら、その気持ちもわからないではなかったとジェインは語った。

つまり、スイスの警察もジェインたちも最愛の人を失った余りある悲しみでとしか彼女の変化を認識してはいなかったのだろう。

「でも、そのオーストリアの事件の被害者が残したダイイングメッセージの青い痣ですが、それこそ『偶然』だったのかもしれませんよ」

エリックはジェインの言う『偶然』にこだわった。

「エリックさん、私がなぜ今、その『青の炎』を思い出したか、おわかりですか？」

その言葉にはやけに強い力があった。
そして彼女はとうとう自分の心に潜む謎を打ち明けた。

「あのゴシップ誌に載っていたライアンと言う人が、どうしてもケインさんと同一人物に思えてならないんです」

―5―

「ちょっと待ってください！　じゃあ、ケイン氏、いやライアン氏はまた懲りもせず同じ人間と結婚しようとしていたってことですか？　自分が殺し損ねた女性と？　そんなこと、どう考えても有り得ないですよ」

第一、パメラが覚えているはずだ。

犯人の姿を見たとしたら、そのとき彼女はケイン氏のからくりにも気付いたに違いない。

そんな殺人鬼に再びむざむざと殺されるために結婚しようとするだろうか。

いくら脅されていたとしても……。

それにミシェルだ。

彼だって、ケイン氏には会ったことがあるはずだから、いくらライアンが変装をしていたとしても見抜けなかったはずはない。

ましてや、パメラの行方不明の夫なのである。

エリックは大きく首を振ると、そんなことは有り得ないと再び主張した。

「私だって、未だに信じられません」

ジェインは寒気を覚えたように、自分の体を両手で抱いた。

エリックは９９パーセント有り得ないと思いつつ、唇を噛んだ。

事実、彼女は死んだのだ。

エリックと電話で話した翌日に死体で発見されている。

本当に『有り得ないこと』だったのか……。

なんとも重苦しい沈黙があたりを支配した。

とてもエリックには荷が過ぎる展開だった。

「とにかく、警部に話します。本当にケイン氏がライアンだったら、パメラさんを殺したのは彼以外有り得ませんから」

エリックは携帯から警部に電話をかけた。しかし、今度もまた通じる気配がなかった。

「おかしいな。まだ、通じない」

仕方なく、留守番機能に『至急、連絡されたし』のメッセージを残すと、今度はスコットランドヤードの番号を押した。

警部を直接、呼び出してもらおうと思ったのだ。

しかし、電話に出た女性の職員は『今、電話に出られることは出来ません』と伝えるのみで、彼がどこに居て、何をしているのかも把握していないようだった。

とりあえず、そう言えと誰かに言われているのだろう。

さすがにエリックもおかしいと思い始めた。

「わかりました。では、ディック刑事はいらっしゃいませんか?」

女性職員は少しほっとしたように、『しばらくお待ち下さい』と言うと、彼の行方を調べてくれた。

『ディックさんからは現在、休暇届けが出ています。理由などは書

かれていませんね。期間は一ヶ月の予定だそうです』

語尾にかすかな羨ましさを滲ませながら、彼女は告げた。

「どうもありがとう」

エリックはやや、心をどこかに飛ばしたような声で電話を切った。

「どうなっているんだ……」

というよりも、何が起こっているのか……。

エリックは思わずジェインの顔を見た。

彼女はエリックよりもさらに蒼白な顔で、窓の外を睨んでいた。

―6―

ディック刑事が一ヶ月もの長期休暇を申請していると言うこと自体、信じがたい出来事だった。
ましてや、あの彼である。
こんな重大な局面でそんな身勝手な行動をとるとはとても思えず、エリックは大いに理解に苦しんだ。

（そもそも、彼女も一緒なんだろうか？）

エリックは急に足元に火をつけられたような焦燥感と胸の辺りを騒がすもやもや感で自分自身戸惑った。
迷惑極まりない、その精神の揺らぎに、どう対処してよいかわからず、彼はただイライラと室内を歩き回った。
考えまいとすればするほど心臓の鼓動は自分の耳にも届くようになり、耳が真っ赤になった。

「どうかなさったんですか？」

心配というよりもどちらかと言うと不審を帯びたジェインの眼差しが痛かった。

「いや、なんでもありませんよ」

決まり悪さを最小限押し殺し、そう答えると、エリックは彼女と並んで荒れた外の景色に目をやった。

「チャールズさん、遅いですね。こんな天候ならさっさと帰ってくればいいのに。雨で魚も獲れないでしょう」

けれど、なぜかそれに対するジェインの返答はなかった。
おそらく何か考え事に集中していて聞こえなかったのだろうとエリックは軽く片付けた。

それよりも……。
問題は山積だ。
まだまだ増えることは目に見えている。

もう、エリック一人の力ではどうしようもないところまで来ていた。

―7―

同じ頃、ロンドン警視庁でもこう着状態は続いていた。

ウエイト警部補は見かけによらずしぶとい男だった。すぐに尻尾を出すかと甘く見ていた警部も次第にイライラし始めていた。頑固さにかけては二人とも五分五分の勝負と言えた。

「君はライアン・マクレガーと繋がっているんだろう？　それとも黒幕はもっと他にいるのかい？」

「何の話でしょう？　さっきから同じような質問ばかり。いい加減、私もうんざりしているんですが」

「とぼけても無駄だよ。このことは上に報告させてもらうからそのつもりでいたまえ」

警部は決して甘くはない声音で言った。

しかし、ウエイト警部補はその言葉には動じず、顔に似合わない地味な眼鏡のつるを右手の薬指で押し上げながら言った。

「それはこちらのセリフですよ、警部。あなたはご自分の立場がまだおわかりにならないと見える。自分がしたことをもうお忘れなのですか？」

ウエイト警部補の焦点をぼかした物言いは警部の神経に大いに障るものだった。

「私がしたこと？　さぁ、思い当たることが多すぎてどのことかわ

からないんだが……」

相手の動向を探る上でも余計なことを自分から言うのは間違いだった。

「ではヒントを差し上げましょう。『写真』と言えばおわかりになりませんか？」

「写真？　さぁ……。次のヒントはもうないのかい？」

「ありますよ。あなたの罪の数だけ……。その全てを私がもっていると言ったらあなたは驚きますか？」

警部は心の中で密かに舌打ちをした。

彼がただの当てずっぽうでものを言っていないことだけは確かなようだった。

この男に降伏するつもりは毛頭ないものの、己の迂闊さを少し呪いたい気分にはなった。

「ウエイト君、そういう持って回った言い方は辞めてくれないか。虫唾が走る。単刀直入に言ってみればいいじゃないか」

警部はいかにもキレたような口調を装った。

「いいでしょう。私も上司にこういうことを言いたくはないのですが、あなたがご自分からおっしゃる気がないのなら仕方ありません」

自分だけが司法の使徒だといわんばかりに、彼は裏切り者を見る目で警部に対すると言った。

―8―

「先日、管内で発生した誘拐事件についてですが、こう言えばおわかりですか？」

「ああ、すでに迷宮入りの候補になっているアレだろう？　それに関しては私も大いに言いたいことがあるんだが、まず、君の話を聞いてからにしようか」

警部は腕を組むとウエイト警部補に対して軽く煙幕を張った。

効果があったかなかったか実際のところはわからないが、心持ち彼の頬が引き攣ったように警部には思えた。

「あくまでもそうやって白を切る気なんですね。いいでしょう。では単刀直入に伺いますが、あの日、警部はどこにいらっしゃいましたか？」

その質問は確かに意表を突くものではあった。

しかし、警部には眉一つ動かさずに答えることが出来た。

「あの日は確か署内にいたと思うが……。私に聞くまでもなく、確認は取れているんだろう？」

ウエイト警部補は淡々とした口調で言った。

「確認は取れています。取れてはいますが確証はどこにもありません」

「どういうことだ」

警部は瞬きせず、彼を見ながら言った。

「あなたの子飼い、もとい、息のかかった人間たちからもたらされた証言など確たる証拠にはとても成り得ませんからね」

「それは上の意見でもあるのかい？」

「いいえ。残念ながら」

でも、と彼は続けた。

「怪しいと感じ始めている人間は上層部の中にもいますよ」

警部はふーっと息を吐いた。

「君が煽動していると言うわけか」

「まさか！　私にはそんな権限はありませんよ。自然の論理です」

「ふーん、それで？」と警部はたちまち興味をなくしたかのように聞いた。

「結局、君はなんの確証も得てはいないまま、自分の一存で私を拘束したと言うわけだね。それで、よくも許されると思ったものだな」

警部の眼光が急に鋭くなり、ウエイト警部補の顔色が見る間に蒼ざめた。

「ウエイト君、言っておくが、私をあまり甘く見ない方がいい」

「どういう意味ですか、私は真実に基づいて……」

警部がダーン！と音をさせて机を蹴った。

「君の真実など、知ったことではないね。この際だから、忠告しておこう。真実など、いくらも作れると言うことを。そう、君のボスにも伝えたまえ」

そう言って、警部は険しい顔をしたまま、取調室を出て行こうとした。

「ちょっと、待って下さい！　あなたは私の質問に何も答えていませんよ。あなたはあの夜、埠頭で撃たれた外国人の男のポケットから、確かに何か、抜き取りましたね？　しかも、それを外部の人間に既に渡してしまっている。これは明らかな越権行為、つまり規則違反に当たりませんか！」

「当たらないね。盗られた物を取り返しただけだ。そして、それをその本人に返したにすぎない。それのどこが規則違反だというのかね」

「しかしっ……」

なおも詰め寄ろうとしたウエイト警部補に彼は投げ捨てるかのように言った。

「我々は忙しいんだ。可能な限りの手続きの省略は有り得て当然だ。

正直、そんなこともわからない人間だったとは思わなかったよ。君の茶番に付き合うのは金輪際、お断りをする。君も公僕の一人なら、誰のための警察なのか十分、肝に銘じておくべきではないのかね」

そう言って、荒々しい形相で出て行く彼を止められる者は、今度こそ誰一人いなかった。

―9―

まるで逸るように足が急いていた。
多少の道草を食った感は否めなかったが、決して無駄な時間を過ごしたわけではない。
敵の情勢を探ろうと思えば、相手の懐に飛び込んでみるのが最速の方法だった。

「しかし、こちらも情報を流しすぎたな……」

迂闊に喋ってしまったことの中に、言わなくてもいいことが確かにあった。

「彼が気づいていなければいいが……」

その勝算がかなり低い確率であることを彼は同じ刑事として認めざるをえなかった。

彼が向かっていたのは、とある駅だった。
無論、エリックのいるワイト島へ向かうためではない。本来の目的地であるスイスに彼を急き立てる理由があった。
パメラを救った第三者の男が敵だったのか、それともジェインの言うように味方だったのか、さすがの警部にも推し量ることは出来なかった。

「しかし、ここは犯人の仲間と考えるのが堅実なところだが……」

セント・バンクラス駅に着いた彼は、迷わず一等席のチケットを購

入すると、パリ行きのユーロスターに乗車した。
パリで下車し、ＴＧＶに乗り換えローザンヌへ向かおうと言うのだ。
もとより、飛行機などという選択は警部の頭にはみじんもなかった。
列車好きの彼が飛行機など乗るわけがない。
警部はある青年の顔を思い浮かべて苦笑した。
きっと、彼がこの場にいたら嫌な顔をしただろう。

『結局、ミーハーなんじゃないですか』と。

今頃、勝手にロンドンに戻ってしまった自分に対して相当、不満を募らせているに違いない。
それとも、もう一人の刑事と合流して、彼なりの推理を紐解いている頃だろうか。

無駄な時間など一秒もないというのが警部の理念だった。
全ての時間が一つの未来へと通じている。
どの瞬間を奪っても、その未来にはたどり着くことは出来ない。
そう、まるで一本の線路のように。
だが、まだその先は見えそうで、未だ見えないのだった。
混沌とした闇と長いトンネルがその結末を隠していた。

警部は窓の向こうに続く、平和的で、似たような田園風景をただぼんやりと眺めていた。
その横顔に刻まれた憂鬱の陰は、そう簡単に消えそうにはなかった。

―10―

ワイト島では未だ、もやもやした空気が二人を取り巻いていた。不安を助長するかのような雨も、あいかわらずだった。

先に動き出したのは、ジェインだった。

彼女は眼差しを曇らせたまま、何かを諦めたように首を振ると、エリックにコーヒーをすすめた。

エリックは彼女が入れてくれたコーヒーを飲むためにテーブルにつくと、これからのことについて考え始めた。

彼はもともと、旅好きの人間ではなかった。

取材旅行に出かけることも時にはあったが、その時でさえ、分刻みに近い計画を立てなければ不安になる方だった。

たとえば、電車一つに乗り遅れることさえ厭うような……。

もちろん、自由な、行き当たりばったりという旅はしたことがなく、また出来るとも思わなかった。

「せめて、警部と連絡が取れれば……」

ロンドンで何が起こっているかはわからないが、事件がらみのことで足止めをさせられているのは間違いない。

そう言えば、警察内にライアンの仲間がいるようなことを警部が洩らしてはいなかったか。

ロンドンに帰ることは簡単だったが、この状況ではそれが得策とも思えない気がした。

第一、警部がそれを喜ばないだろう。

忙しく動き回るジェインに目をやりながら、エリックは自分の存在

を持て余していた。
ジェインには、部屋の掃除や、料理の準備や、することはいくらでもあった。
けれど、エリックには何もなかった。
そう、何も。
出かけようにも雨が邪魔をしたし、本を読もうにもちっとも内容が頭に入らない。
ただ、活字だけ追って、ページを稼いだところで、少しも面白いとは思えなかった。

エリックはとうとう我慢できずに、ジェインに声をかけた。

「ジェインさん、何か手伝うことはありませんか？」

ジェインはハッとしたように窓拭きの手を止めると、初めてそこに彼がいたことを認識したような驚いた顔をした。

「いいえ、何も。エリックさんはどうぞ、くつろいでいらして下さい」

それが苦痛なのだとは、エリックも声には出しにくかった。
あくまでも、それは彼の勝手な論理だから。

「そうだ、確か、エントランスに島のガイドブックのようなものが置いてありましたよね。見せてもらっていいですか？」

ジェインは「ええ、ちょっと待ってください」と言うと、薄い冊子を手に戻ってきた。

「たいして、エリックさんの興味を引くものがありますかどうか…

―11―

エリックは薄いパンフレットをぺらぺら捲った。

「お天気がよければ、テニスなんかも出来るんですが……」

「テニス？」

ジェインは頷くと、ここから少し行った所に公営のテニス場があることを教えてくれた。

エリックは、ため息をついた。

「どっちにしたって、ダメですよ。パートナーがいませんし……」

「それなら……」、と言い掛けてジェインはすぐに口を閉じた。

不思議そうに首を傾げるエリックに、ジェインは少し複雑な顔をしながら、続けた。

「チャールズがお手伝い出来るでしょう。時々、働いているんです。その……アルバイトみたいなものですが」

エリックは思わず口笛を吹いた。

「なるほど！　コーチとしてですか？　じゃぁ、相当お上手なんでしょうね」

「さぁ、どうでしょう」

ジェインの言葉はどちらかと言えば、煮え切らないものだった。

「あなたも、されるんですか？」

「は？　何をでしょう？」

受け答えも、どこか噛みあわない。

「テニスですよ。一緒にはしないんですか？」

ジェインは首を横に振ると、「そんな暇はありませんわ」と一言、言った。

「でも、お休みはあるんですよね」

「休みなんて……」

と、彼女は急に疲れたような声を出すと、目の前の椅子に座った。

「年中無休のようなものですもの、ペンション経営なんて。こちらの都合でお客様に迷惑をかけるわけには行きませんし、しょっちゅう休んでいたら、食べてはいけませんもの」

それを聞いて、エリックはとても気の毒そうな顔をした。

そう言えば、彼女はここでの生活もこの仕事も好きでやっているわけではないことを言葉の端々ににおわせていた。

こんなはずではなかったという思いが彼女の中に大きな不満として常にあるのだろう。

この場所にいないチャールズ氏は、そのことについて、どう思っているのだろうとエリックは考えた。

「でも、あなたはよくやってらっしゃると思いますよ。二日しか滞在していない僕が言うのもなんですが、料理もお上手だし、部屋も綺麗に整えられていた。こういうことは当たり前のようで、本当はそうじゃないんです。あなたのもてなしはとても心がこもっていましたよ」

ジェインは、エリックの言葉に少しくすぐったいような顔をした。

「ありがとうございます。そう言って頂けると、救われる思いですわ」

しかし、彼女が続けたのは、決して甘い言葉ではなかった。

「でも、どんなに堅実に働いたところで、落とし穴はどこにでも潜んでいるものですわ。そして、善良な人間は悪魔によって足元を救われますの」

エリックは、このときの彼女のあまりにも悲観的な言葉が後々まで、頭から離れなかった。

―12―

それからしばらくパンフレットを見続けていたエリックは、ドアを開ける大きな音に気付き、顔を上げた。
どうやら、ずぶ濡れご亭主のご帰還らしい。
そう思って、歩いてエントランスへ向かった彼は、チャールズが伴っている女性を見て、心から驚いた。
思わず声になりそうになったエリックに、彼女は目配せのようなものをすると、「しっ！」と言うように首を横に振った。
エリックは怪訝な顔になると、とりあえず、キッチンにいるはずの女主人を呼びに行った。

「ジェインさん、ご主人がお帰りになりましたよ。あの、お客さんも一緒みたいですが……」

エリックに言えることはそれだけだった。エレンが何を考えているかわからないが、何か意図があってのことと思うしかないだろう。

「お客さまが？　おかしいわ。今日は予約はもう入っていないはずなんですけど……」

不審げにジェインが大きなタオルを手に玄関に向かう後をエリックもただ無言でついて行くよりなかった。

「チャールズ……！」

まるで頭から水をかぶったみたいに雨を滴らせている大柄の男は、殊勝な顔で妻に言い訳をした。

「ハニー、君の言うとおり、傘を持っていけばよかったよ。岬の突堤に着いた頃はまだいい天気だったんだよ。でも、急に雲が出てきて、気がつけば土砂降りさ。すぐに帰ろうと思ったんだけど、あまりに雨が酷くなってきたから、近くの店の軒先で雨宿りをしてたらね、この方が傘を勧めてくれたものだから、遠慮なく入れてもらって帰ってきたというわけなんだ」

ジェインは深いため息をつくと、エレンのほうに向き直った。

「どうも、主人がご迷惑をお掛けしたようで……。さ、どうぞお入り下さい。暖かいコーヒーくらいしか用意できませんが」

「いえ。あの、それより、こちらはペンションをなさっているんですか？」

「え、ええ……」

「よかったわ！　実は、今朝こちらに着いたんですが、予約していた宿がダブルブッキングだったとかで泊まれないとわかって……。あの、急なことなのですけど、こちらでお世話になることは可能でしょうか？」

エリックは今度こそ、声を発しそうになったが、すかさず彼女に睨まれて渋々口を噤んだ。

「ええ、可能ですわ。どうぞ、ご滞在なさってください。これも何かの縁ですし……」

エレンはとても嬉しそうな顔になると、

「ここまで来る間に実はご主人から、伺っていたんです。奥さまのことも。お料理がとてもお上手だそうですね。一度泊まった人は必ずリピーターになるくらい、なのですってね。とても楽しみだわ！」

エレンはまるで別人のように陽気な旅の女性を演じると、エリックには目もくれずに部屋の調度品などを褒め始めた。

開いた口が塞がらないというのは、まさにこのことだと彼は思った。同時に、メリッサやヒギンズ夫人の前で出版社の編集者を見事に演じきっていたことを思い出し、彼女は天才なのではないかとも思った。

「それにしても……」

気になるのは、スカートの丈だった。

短いのである。

しかも、いつも彼女が着ている様なカチッとしたスーツなどではなく、カジュアルな、いやよほどラフな、胸元の大きく開いたレモン色のセーターが妙に彼女を女っぽく見せているような気がして、なぜか落ち着かなかった。

（警部が見たら、卒倒するかもだな）

と、心の中でエリックは思った。

（ジーンズじゃ、どうして駄目だったんだろう？　つまり、バックパッカーの女の子に似せたかったわけだろう？　今どき、ミニを履く女の子も珍しいんじゃないか？　第一、女の子の一人旅は危険に満ち満ちてるって、刑事ならわかるだろうに……）

声にならない心の声でぶつぶつ文句を言いながら、エリックは後で

絶対、警部に言いつけてやろうと心に決めていた。

―13―

チャールズが濡れた衣服を着替えに行き、ジェインも後を追って姿を消したその隙に、エリックは小声でエレンを問い詰めた。

「どうなってるんだい？　一体、警部はどうしたの？」

その問いに彼女は完全なる不満そうな顔で、ただ一言、「警部は忙しいんです」と言った。

「忙しいのはわかってるよ。でも、大体、ここに連れてきたのは警部なんだよ。その言いだしっぺが先にいなくなるって、おかしいと思わないかい？」

「警部から何か聞いているんじゃありませんか？」

彼女はエリックに向かい合うと刑事の顔で言った。

「暗号めいたことなら、言われているけど……」

「なんて？」

彼女が勢い込んで尋ねた。

「せっかく楽しみにしていたのに、行けなくなったから、写真を撮ってきてほしい・・・だったかな。彼はＳＬ機関車が好きなんだね。すごく子供みたいにはしゃいで乗り込んでいたよ。でも、それ以上にまだ彼が楽しみにしていたことがあったなんて、僕には想像もつかないよ」

「警部がそう言ったんですね？」

エレンがせかすように言った。

「ああ。写真って言うのは、なんとなく、彼女の写真のことじゃないかと思うんだけど」

「写真？」

エレンの義眼の方の瞳の色が明らかに変わった。濃いブルーの色がさらに濃くなったようにエリックには思えた。

「パメラさんのか、あるいはアリシアさんのか、どちらかのことだと思う」

「それで、もう手に入れたんですか？」

「まさか！」

とエリックは両手を上げた。

「僕は刑事じゃないんだよ。そこまでの権限はないし、彼女の嫌がることもしたくない」

「彼女って、ここの女主人のことですか？　たしか、ジェインという……」

「ああ、そうだよ。彼女はどうやら、パメラさんのこともアリシアさんのこともよく知ってるらしい」

エレンはしばらく、黙って何かを考えているようだった。
そして、一息つくと言った。

「わかりました。エリックさん、ご苦労様でした。あとは私が引き継ぎますから、ロンドンへでもどこへでもお帰り下さい」

「ちょっと、待ってくれ。そんな言い方はないんじゃないかい？」

「しっ！　大きな声を出さないで。あなたと私は無関係ってことになっているんですから」

それはそうかもしれないけど、とエリックは言った。

「このことは警部も知っているの？」

「ええ、彼の指示ですから」

「そのスカートも？」

「え？」

思わず口をついて出た言葉にエリックは思わず苦い顔になった。しかし、途中でやめるわけにもいかず、彼は続けた。

「いや、あまり似合っていないなと思って。もう少しマシな服はなかったのかなって」

エレンは心外とでも言うように、目を丸くした。

「あなたに服装のセンスがあるなんて思わなかったわ。言っておきますが、これは私の趣味じゃありません。警部がこれを着ろと言ったのよ！」

彼女もよほどエリックの言葉に腹が立ったのか大きな声で言った。

今度はエリックが「しっ！」と唇に指を立てる番だった。

「警部がそう言ったからって、何も君がその通りにする必要はないんじゃないか？　彼は男だから、こういう服を着た女性がどんな危ない目で見られるか、あまりわかっていないんじゃないかな」

多少、皮肉を含んだ言葉に彼女は苦笑を浮かべながら言った。

「男性だからこそわかる真実みたいなものがあるんじゃないかしら。どうやら、あなたは例外らしいけど……」

エリックは混迷を深めた顔で何かを言いたそうに唇だけ動かした。

「さ、帰るんですか？　帰らないんですか？　帰らないなら、おとなしく、私の邪魔だけはしないで下さいね」

彼女はそう告げると、階段を降りる足音を聞きつけると同時にそっぽを向いた。

エリックは帰らない選択があったことに安堵しながらも、その理由には目を瞑った。

―14―

足音は、二階でエレンのための部屋を用意して降りてきたジェインのものだった。
彼女はエレンに一通りの説明をすると部屋を案内するためにエレンを伴って、また二階に戻っていった。
エリックはダイニングの椅子に座りなおすと、さっきまで眺めていた島のパンフレットを形だけ開いた。
そこへ、今度はチャールズが服をすっかり着替えて戻ってきた。

「災難でしたね」

「ええ、でも成果はありました」

乾いたタオルで濡れた髪を拭きながら、チャールズが言った。
栗色のくせ毛が雨に濡れて、さらにクルクルと巻いていた。
大きいなりをしていても、どこか子供っぽさが抜けない男だった。

「こんな天候でずっと釣りをしていたんですか？」

「えっ？　ああ、魚じゃありませんよ。人魚みたいに綺麗な人だけど」

人魚みたいにというのは、エレンのことだろうかとエリックは首を捻った。
確かに、十人並み以上の容姿であることは彼も認めざるをえなかったが、人魚というのは言いすぎじゃないかと彼は思った。

（第一、人魚って美人なんだろうか？）

そんなことに頭を悩ませていた彼は、チャールズの本心など知るよしもなかった。

「それより、すみません。魚の方の成果はゼロで……」

「いえ、あっ、チャールズさんはテニスのコーチもされてるそうですね」

「えっ？」

「ジェインさんに伺いましたよ。今度、相手をしてもらおうかな」

エリックの言葉に彼は急に元気をなくしたように、俯き加減で答えた。

「彼女が言ったんですか？　え、ええ、確かに前はそんなこともやっていましたが、今はもう全くラケットにさえ、触っていませんよ」

「そうなんですか、それは残念だな」

エリックはさほど残念そうではない声を出しながら、言葉に出来ない違和感みたいなものを感じていた。

「じゃ、毎日、ずっと魚釣りをして過ごしてらっしゃるんですか？」

その言葉はある意味、皮肉と受け取られないとも限らなかった。

しかし、チャールズは人がいいのか、はたまた鈍感なのか、その言葉の裏に気づいた様子もなく、

「いいえ、週二回はボランティアで蒸気機関車の整備や清掃をしています」

と少し元気を取り戻したような口調で言った。

「はぁ、ボランティアですか……」

それで収入が得られないのなら、働いていないのも同じじゃないかとエリックは思った。

機関車好きが高じてこの島にやってきたと聞いた。

渋るジェインを説得してまで連れて来ておいて、生計のためのペンション経営は彼女に任せきりで、自分はしたいことだけしているように見えるのがどうも気に入らなかった。

（しかも、とんでもないナンパ野郎だったとは……！）

それが一番エリックの気に触ることだったとは彼自身、自覚がないようだったが。

正直、チャールズにはもったいないくらいの奥さんがいるのに、他の女性と相合傘で、しかも家に連れて帰ってくるなんて、普通では考えられないと彼は思った。

少なくとも、エリックの常識の中ではあり得ない事だった。

「綺麗な女性がお好きなんですか？」

エリックは皮肉たっぷりに聞いた。

しかし、チャールズは悪びれもせず、少年のような笑顔で「ええ、好きですよ」と言った。

「そう言えば、アリシアさんもさぞ綺麗な人だったんでしょうね。

忘れられないくらい」

この言葉にチャールズは笑顔を凍らせた。

さすがに、エリックも言いすぎたと後悔したが、もう遅かった。

―15―

「どういう、意味ですか？」

彼の声は心なしか震えていた。

エリックは気まずい顔をしながらも、誤魔化すと言うことが出来なかった。

「言葉通りの意味です」

「ですから、それがどういう意味なのか、お聞きしているんです」

チャールズの今までのおとなしい印象からは想像できないほどの怒りがその声からは感じられた。

「あなたが本当にお好きだったのは、アリシアさんだったんでしょう？」

そう言い終わるか終わらないうちに、何か大きなものが落ちる、派手な音が階段の方から聞こえた。

いや、物なんて軽いものじゃなく、もっと重い……。

「ジェインさん！！」

エレンの悲鳴のような声が聞こえて、真っ先にチャールズが階段下に駆けつけた。

「ジェイン！　ああ、なんてことだ！」

彼は頭から血を流して横たわっている妻を抱き起こしながら、激しく泣き崩れた。

「何をしているんです！」

エレンが茫然自失の状態のエリックに言った。

「早く、救急車を呼びなさい！！」

エリックはエレンに叱りつけられて初めて目の前の状況に気がついた。

そして、夢中で救急車を呼ぶと、そのままへたり込んだ。

救急車はすぐに到着すると、ジェインとその夫を乗せて病院へと走り去った。

それは本当に一瞬のことだった。何が起こったのか、すぐには理解できないほどの……。

事実、現実に起こったことだとは思えないほどの衝撃が彼を襲っていた。

「一体、あなたは何をしているんです！」

エレンが魂の抜けたままのエリックの前に立つと言った。

「何をって……」

エレンは額に手をやると、自分を落ち着かせるように首を振った。

「いいえ、あなたのせいではないわ。ごめんなさい」

彼女もあまりのことに動揺しているのか、リビングをうろうろとただ闇雲に歩き回っていた。
エレンがここまで取り乱している姿を見たのは、初めてかもしれない。
メリッサが誘拐された時も動揺して見えたが、この比ではなかった。
いつも毅然と物事に対処している彼女が想像以上に激しいショックを受けているのが、エリックにもわかった。
実際、彼はこの時、ことの重大性にまだ気付いてはいなかった。

「大丈夫。彼女は死んではいないわ。でも……」

エレンは知っていた。
ジェインがおそらく、一人ではなかったことを。
それは、まるでもう一つのある命のことを彼女に思い出させた。

「ああ、神様！」

エレンは無意識に神に祈っていた。
今まで、神になど祈ったこともないのに。いや、むしろ、神などいないと豪語していたはずなのに。

二階の客室に連れて行かれたとき、ジェインの顔色がよくないことに気がついた。
時々、おなかの辺りを押さえ、気持ち悪そうにしていた。

「大丈夫ですか？」

と声をかけた彼女に、ジェインはなんでもないと答えたが、顔には脂汗のようなものが浮かんでいた。

「すぐに横になった方がいいのでは……」

そう言って、階下に降ろそうとしていた時、それは起ったのである。

エリックが驚愕の事実にようやく気付いたかのように、恐る恐る口を開いた。

「まさか、彼女は僕らの会話を聞いていたんじゃないでしょうね……」

エレンには違うと否定することが出来なかった。現に彼の声は朗々と彼女の耳にも届いていたから。

そして、それはある意味、絞首刑を待つ囚人に死の宣告を与えるほどの重い言葉だったと言っても過言ではないだろう。

エリックの顔が次第に蒼ざめていくのがエレンにもわかった。

しかし、彼女は悲しい顔をすることしか出来なかった。

―16―

「あなたのせいじゃないわ」

エレンにしては力のない声だった。

「けれど、彼女がこうなったのは僕のせいなんでしょう？」

まさか、ジェインが聞いてるとは思わなかった。いや、違う。エリックはすっかり、彼女の存在を忘れていたのだ。

二階にいると思って。まだ、とうぶん下りてはこないだろうと勝手に思い込んで……。

しかし、そんな言い訳がなんになろうか。

エリックは今すぐ消えて無くなってしまいたいくらいの絶望感に苛まれていた。

一番自分がしたくなかったことを、結果的に彼女にしてしまったのだ。

もう十分傷ついているはずの人に、追い討ちをかけるような真似を……。

「僕は馬鹿だ。どうしても、あの人が許せなくて、つい言葉が滑ってしまった……」

頭を抱えるようにして呟いたその言葉を彼女が拾った。

「あの人というのは、ご主人のこと？」

エリックは頷くしかできなかった。

「あなたは彼女が好きだったの？」

「おそらく、彼女を嫌いだって言う人はいないと思う。彼女は何かに耐えているようだった。パメラさんの死や、チャールズさんのことや、ペンション経営のことや……。幸せを誰よりも望んでいるのに、一番遠い場所にいるかのような人だった」

エレンはそれだけでは、何もわからなかった。

彼と同じくらいすべてを把握するには、時間がとにかくなさすぎた。

彼女は警部からもほとんど情報は得られていなかった。ただ、くれぐれも慎重を期するようにと言われてきただけだった。

パメラの事件を解明する上で、ジェインはとても重要な人物だからと。

きっと、それは本当だったのだろう。

数人の部下を引き連れ、ワイト島に乗り込もうとした彼女に、警部は大きく首を横に振った。

秘密裏に行えと。出来れば、自分が刑事だとジェインだけでなく、他の人間にも悟られないようにと。

『しかし、それでは任務が遂行出来ません！』

そう勢い込んで告げた彼女に、警部は言った。

『彼がやってくれるだろう』と。

それどころか、彼女はエリックにしか話さないだろうと。

エレンにはわけがわからなかった。

どうしても納得がいかない彼女に警部は言った。

『わけがわからないって顔だな』

『当たり前です！　兄さんが彼を買っているのはわかりますが、それでもあの人は刑事ではないんですよ？』

『そんなことはわかっているよ』

『じゃあ、なぜ……』

警部はエレンの肩に優しく手を置くと言った。

『彼と君とでは決定的な違いがある』

『それは何ですか？』

『それは……』

警部は少し言葉を惜しむような複雑な顔で言った。

『彼が男で、君が女だと言うことだよ』

ますます、わけがわからない顔になったエレンに苦笑を浮かべながら、彼はエレンを取調室から出した。

そのあと、すぐにウエイト警部補が入ってきて、警部への取調べが行われたのだった。

―17―

逆ではないかと最初は思った。女性には女性の方が話し易いものなのではないかと。

今までの経験から言っても、ジェインはそういう意味で失敗したことは一度もない。

むしろ、男性に対する方がやりにくいと言う認識はあった。

エレンが若い女性だというだけで、端から相手にしない。甘く見る。

あからさまに蔑視に近い目を向ける者さえあった。

もちろん、そんなものに屈するようなエレンでは当然なかったが。

ああ、そう言えば、一人だけいた。

まっすぐにエレンの目を見つめ、真正面から正義を挑んできた人間が。

それが、今、この目の前で崩折れている、彼だった……。

エレンは警部の言葉を思い返していた。

男と女の違いだけだと言われたことがショックだった。

それならば、いっそ、刑事と一般人の違いと言われたほうがまだましだと思った。

しかし、今、目の前の彼を見ていると、警部の本当に言いたかったことがわかってしまった気がした。

違いは単なる『男と女』の差などではなく、『エリックとエレン』の違いだったのではないかと……。

そんな負けを認めるような考え方をなぜしたのか、彼女にもはっきりとはまだわからなかった。

「話してください、何もかも。あなたが聞いたことでいいから。それから、あなたがどうしてチャールズさんを許せないと思ったのか、

そのことも……」

エリックの声はあまりに小さく、聞き取りにくかった。
そばに寄ると体が小刻みに震えていることがわかった。

彼と出会ってから、まだそんなにたってはいないものの、エリックはかなりの喜怒哀楽を彼女に見せていた。
本気で喧嘩をしたことも、親友を無条件に信じる馬鹿正直なところに呆れたことも、母親に対する不器用な彼の愛情を少し羨ましいと思ったことも、かつてのエレンには到底なかったことだった。
初めて出会った、理解できないことが苦ではなく思えた人間だったかもしれない。

エレンは彼の側から立ち上がった。

「わかったわ。彼女が階段から落ちたのは、やっぱりあなたのせいじゃない。たしかに、きっかけはそうだったかもしれない。でも、彼女はあなたの話に動揺して足を滑らせたわけではなかったの」

エリックが目だけで彼女を追った。

「ジェインさんは、自分から足を外したのよ。階段から、まるで身を投げるように」

後ろから見ていた彼女が一瞬手を伸ばすのが遅れるほど、それは思いもかけない出来事だった。

―18―

だからと言って、エリックの罪の意識が消えるわけではなかった。むしろ、余計に彼の心を暗くした。

「夫婦のことは夫婦じゃないとわからないわ」

彼女はいつのまにか平静を取り戻していた。

そういう態度も、エリックには解せないところだった。

彼女はいつ、いかなる時も刑事なのだ。いたわりの言葉よりもありのままの、時と場合によっては無神経にも思える言葉がすんなり出てきてしまうのだろう。

しかし、彼は違った。

エリックは苦しすぎる心とたった一人で闘うように首を激しく横に振った。

「だとしても、僕がやったことは最低だ！　もう元には戻らない……」

もしも、もしも、彼女が死んだら……。

エリックは思わず両手で顔を覆った。

「しっかりしなさいっ！　エリック・サザーランド！」

エレンは部下を叱咤するときのように大声を張り上げた。

「泣いて、すべてが解決するとでも思うの？　そんなことが許されるのは子供だけよ！」

意地悪なことを言う。
こんな時くらい、もっと優しくしてくれてもいいものを……。
彼女の苛烈さには慣れてきたつもりだったが、今は腹が立つくらい、その非情さが恨めしかった。

「どうせ僕は子供だよ！　君みたいに強くないよ。だけど、それのどこがいけないって言うんだい！」

「いけないとかいけなくないとかじゃないわ。みっともないって言っているのよ」

みっともない……だって！
エリックの顔に血の気が戻ってきた。

「彼女が死ぬかもしれないんだよ！」

「死なないって言ってるでしょう」

「どうして、そんなことがわかるんだい？　あんなに血が出ていたんだよ！」

「だからよ。だからこそ、大丈夫だって言っているの」

エレンはふーっと息を吐いた。

「私を誰だと思っているの。こんな修羅場なんて、数え切れないほどこなしてきたわ。あなたは確かに素人だから、しょうがないのかもしれないけど、こんなことで一々泣いていたら刑事なんてやってられないの」

エリックは唇を噛みしめた。
価値観の違いもここまで来るといっそ、見事だというしかない。
エリックはなんだか、馬鹿馬鹿しくなってきた。

「わかったよ。これからは君のいない所で泣くことにする！」

ええ、そうして頂戴、とエレンはあっけらかんとした顔で言った。
エリックは立ち上がると、電話の受話器を取った。

「言っておくけど、警部にかけるんじゃないからね。タクシーを呼んで、彼女の病院へ行くんだ。君もついて来たかったら乗せてあげないでもないよ」

本意ではないがねと付け加えつつ、彼はタクシー会社に電話をかけた。

「じゃあ、お願いするわ」

エレンはそう言うと、警部によく似た苦笑を密かに洩らした。

―19―

しかし実際のところタクシーに乗ったのはエリックただ一人だった。エレンは用事を思い出したと言って、タクシーが来るまでにゲストハウスを後にしていた。

彼女には病院へ赴くまでにしなければならないことがあった。

アリシアとパメラの写真である。

家主の留守の家捜しは通常許される行為ではなかったが、チャンスは最大限に生かさなければならないという考え方は兄妹共通のものらしかった。

決して褒められたことではないが……。

だから、エレンはゲストハウスに残る理由が言えず、わざわざ回りくどい方法で彼に嘘をついた。

エレンは雨がおおかた上がった空を眩しそうに見上げた。彼女の顔はすっかり刑事の顔に戻っていた。

確かゲストハウスから少し離れた通りに喫茶店があったのを思い出すと、彼女はエリックの乗ったタクシーが通り過ぎるのを待ち、その店の中に入っていった。

こじんまりしたその店は観光客が立ち寄るには少し寂れた、魅力のない店に思えた。

しかし、あえてその店を選んだのにはわけがあった。

明らかに地元の人間ではないとわかる派手な容姿の彼女に、ぱらぱらといた客の視線が自然と集まった。

「あんた、もしかして、ウィーバー夫妻のところのお客さんかい？」

窓際の席でパイプ片手に新聞を読んでいた初老の男が、ずれたメガネの間から値踏みをするようにエレンに声を掛けた。

「え、ええ、そうですが、どうしてそれを？」

やっぱり、そうだと言いながら、彼はテーブルの上のコーヒーに口をつけた。

「うちの家内が窓越しに見てたんだと。あそこの旦那がえらく別嬪な若い女の子と歩いてるのを。まぁ、わしはさほど驚かなかったがね」

彼は次に大きなサンドイッチを口に運ぶと、ゆっくり咀嚼しながら言った。

エレンは首を傾げながら尋ねた。

「どうして驚かなかったんです？」

「そりゃ、あんた、今に始まったこっちゃないからさ。あの男は見かけによらずプレイボーイってヤツでね、都会から来た若いお嬢さんたちは何も知らずにホイホイ彼の後についていく。ああいう、カラがデカイだけの男が近頃じゃモテるのかね」

老人は二つ目のサンドイッチに手を伸ばしながら言った。

「そんなことはないと思いますけど……」

エレンは遠慮気味に言った。

「まぁ、最近じゃ、若い女の子たちはみんなウィーバーのゲストハ

ウスに取られちまうって言うのが、もっぱらのオーナーたちの言い分だったがね。なぁ、ジム？」

ジムと言われたのは、その喫茶店のマスターだった。まだ３０代にはなっていないと思われるその男は苦い顔をしながら言った。

「さぁ、そこまでは……。ただ、彼が客引きみたいなことをやってるんじゃないかって噂はちょくちょく聞きましたよ。実際はそんなに悪いことができる男じゃないんですけどね」

彼はどちらかというと、チャールズを庇うような言い方だった。

「客引き？」

エレンはまだ何も注文していなかったことを思い出し、コーヒーを注文すると言った。

「ほらね。当のお嬢さんは何にも気付いちゃいないのさ。彼はただのエサで、自分たちはあのペンションの獲物だったってことが……」

「シェパードさん、言いすぎですよ。あんたはお酒も飲まないくせに、コーヒーで酔っちゃうんだから。あんまり口が酷いと本当に出入り禁止にしますよ」

ジムはそう言うとコワイ顔で睨みつけた。

「そりゃ、困る。ここのサンドイッチが食えなくなるくらいならこの世とおさらばしたほうがまだましだ。うちのばぁさんのときたら、カスカスで食べられたもんじゃないんだから！」

「だから、それは奥さんが悪いんじゃなくて、パンに問題があるって、ずっと言ってるでしょう？」

「はぁ？　なんだって？　すまんね、わしは耳が遠いもんだから何を言ってるか聞こえないよ」

都合が悪くなるとすぐこれだ、とジムは両手を上げて降参のポーズをした。

「でも、それ本当なんですか？」

え、パンの話ですか？　とジムは間抜けにも聞いた。

「いえ、その、客引きって……」

ジムは口を出したそうにしているシェパード老人を目で黙らせると、エレンに向かって言った。

「あくまで、噂です。僕も正直、事実は知りませんが、同じペンションのオーナーの中にはそう思ってる人間もいるようですね」

「それは面白くないでしょうね……」

ふいにエレンの本音がこぼれて、ジムが、えっ？　という顔をした。

「いえ、なんでも」

エレンはそう言うと慌てて旅行者の仮面を被り直した。

「でも、最近はもうそんなこともなくなったって、ブルックさんさ

から聞いたよ。テニスのコーチも辞めて、今は蒸気機関車のほうを手伝ってくれてるって」

そう口を挟んだのは、カウンターの席でスポーツ紙を読んでいた別の男だった。

「テニスのコーチもなさってたんですか？」

エレンは内心呆れる思いだった。

ジムはカウンターに座る男に言った。

「いや、あれは短期間っていう名目で頼まれていただけだったらしいよ。オーナーが彼のテニスの腕をどこかから聞きつけて無理を言ったとか……。彼はずっと断ってたらしいんだが」

「そんなにお上手だったんですか？」

「ええ、なんでも学生時代、プロ選手にとスカウトされたこともあったそうです。でも、足を怪我してダメになったんだとか……」

「嘘か本当かわからんけどね」

「シェパードさん！」と、ジムはまたコワイ顔で彼を睨んだ。

大勢の中には彼をよく言う者もあれば、悪く言う者もある。

どちらを鵜呑みにすることなく、エレンは心の手帳に刻み込んだ。

―20―

「まぁ、あいつ目当てに島の女どもがテニスを始めたのは事実だよ。ああ、確かにこの島には若い男は少なくなったからね」

マスターがコホンと意味深な咳払いをすると言った。

「僕も一応、彼と同い年なんですけどね」

ああ、そうじゃった、そうじゃった、とシェパード老人は言いながら、声に出して笑った。

「それにしては、いつも野郎しかおらんのう、この店は……」

あなたたちが入り浸ってるからでしょう、とエレンはもう少しで言いそうになるのを堪えた。

コーヒーが目の前に運ばれてきて、エレンはそのついでを装って何気なさそうに呟いた。

「そんなに悪い人には見えませんでしたけど……」

「ええ、全然悪いやつじゃありません。とても気のいいやつなんです。むしろ気がよすぎて、そういう変な噂が立っちゃったんでしょうね」

ジムは心から同情するように言った。

「じゃ、女の人にだらしがないってわけじゃないんですね?」

当たり前です！　と彼は言った。

「チャールズは彼女一筋なんです。あんなに奥さんを愛してるって人も珍しいんじゃないかなって感心するほど」

エレンは心持ち、眉を寄せた。

「奥さんを裏切ったこともない？」

女の人にモテるんですよね、と付け加えながらエレンは尋ねた。

「そりゃ、あの通り優しさのかたまりみたいな男ですからね。女の子たちが誤解するんですよ。本人はただ普通に接しているだけなんだと思うんだけど」

誤解させるような真似をするというのもどうかと思うがね、とシェパード老人は大きく聞こえるように呟いた。

ジムがきつい視線を彼に送ったが、エレンも老人の意見には賛成の思いだった。

「お嬢さんはどう思ったかな？」

シェパード老人は、エレンの場合を知りたがった。

「そうですね……。彼、釣竿とバケツを持って、ずぶ濡れの姿でお土産屋さんの軒先に佇んでいたんです。なんだか、その姿が飼い主とはぐれてしまった大型犬みたいで、思わず声をかけずにいられないって感じでしたわ」

「母性本能をくすぐるってやつですね」

と、カウンターの男が言った。

「そうなんでしょうか……。わかりませんが、放っておけないタイプって言う気はしましたね、確かに」

それで、傘に入れてやったのだとエレンは白状した。

「それがヤツの手なんだよ」

とシェパード老人は言うと、サンドイッチのおかわりをジムに頼んだ。

ジムはマスタードを一杯入れそうな顔つきで、パンをざくざく切りだした。

「チャールズは奥方のために、あのペンションにお客を連れて行く。まぁ、言ってみれば、そういうことさ。そうでなければ、競争が激しいペンション経営なんぞ、新参者の彼らに続くはずがない」

と言うことは、ジムが言った客引きの噂もまんざら嘘ではないということになる。

現に、エレンも彼に誘われている。

「今日のお宿はもうお決まりですか?」と。

たった、それだけだったが、彼の目は甘い蜂蜜のように潤んでいて、思わずイエスと言いそうになった。

結果、言ったも同じようなものなのだが……。

よくわからないと思うエレンの憂い顔をどう誤解したのか、老人が気の毒そうな顔で話しかけてきた。

「お嬢さん、ショックなのはわかるが、早いうちにあいつの正体がわかってラッキーでしたぞ」

「それはどういう意味ですか？」

エレンの右側の眼が奥で光った。

―21―

「実はチャールズを巡って女の争いが起きましてな」

とその老人はとんでもないことを言い出した。

これには、ジムだけでなく、カウンターの男も驚いたようで、立ち上がってきた。

「シェパードさん、ろくなことを言い出すんじゃないよ。この人が驚いているだろう?」

「ろくなことであるもんか。現にこの島じゃ、そのことでもちきりだったじゃないか。わしは間違ったことは言っておらん!」

「だからって、旅の人に聞かせるようなことじゃないでしょう」

すみません、とその男はエレンに謝ると「本当にこの人はコーヒー一杯で酔っ払うんだから」と呆れたように言った。

そう言えば、どことなく目の辺りが充血しているように見えた。

「カフェイン中毒ってあるんですかね?」

ジムが苦笑をエレンに向けた。

エレンは、さぁと首を傾げると、一口含んだ。

「普通においしいですわ」

その答えに、ジムは瞬きを忘れたように数秒間眼を見張ると、次の

瞬間、声に出して笑っていた。

「普通においしいだなんて、そんな感想を言った人は初めてですよ。マーク、聞いたかい？」

もともとカウンターにいた男も「ああ、聞いたよ」と笑みをこぼした。

「確かにジムのコーヒーは普通においしい。その通りだな」

それ以上でもそれ以下でもなく、とマークと言う名の男は言った。

「私、そんなつもりで言ったのでは……」

「いや、いいんですよ。本当のことなんですから。それより、スミマセン。へんなことばかりお聞かせして、どうか気を悪くなさらないで下さい」

ジムはこれはサービスだといって、サンドイッチの皿を差し出した。

「あっ、シェパードさんのは別にありますよ。ご心配なく。もっとも、そっちにはたっぷりマスタードを利かせてありますけど」

本気とも冗談ともつかぬ軽口で彼は告げた。

エレンは恐縮しながらも、彼の好意を受けた。

「でも、そんな素敵なご主人がいらっしゃるのに、どうして奥さんは自殺なんかしようとなさったのかしら」

「自殺？！」

彼らの視線が一斉にエレンに集中した。

「今、なんて言いました？」

驚愕の表情で問いかけたのは、マスターのジムだった。

エレンは自分の失言に気付いたように、ハッとした様子で目を伏せた。

その場にもしエリックがいたら、それこそ目を見開くほどのしおらしさだった。

「すみません……。どうか、聞かなかったことにしてください。単なる事故かもしれないんですから……」

「どちらにしても聞き捨てなりませんぞ」

シェパード氏がテーブルの上に身を乗り出さんばかりに彼女に言った。

「さっき、あなたはチャールズのゲストハウスに泊まっているとおっしゃいましたね？」

ジムが聞いた。

「ええ、正確に言うと、泊まる予定でした」

「それはつまり、それが叶わない状態になるかもしれないって意味なんですよね、ジェインさんに何かが起こって……」

エレンは静かに頷いた。

「一体、何があったんです?」

ジムの押しの強い言い方と、二人の客の逃れがたい好奇の視線に絡めとられたように、エレンは仕方なくというように口を開いた。

「自殺というのはきっと私の思い込みですわ。ただ、奥さんが階段から落ちたって言うのは本当なんです。さっき、救急車で運ばれていきました。ご主人のチャールズさんも一緒に……」

あの救急車のサイレンはそれだったのか、とジムは窓の方を向いて言った。

しかし、階段から落ちたと言うだけで『自殺』と結びつけることはあまりにも突飛な考え方ではないかと彼らは思った。

そのことを暗に尋ねると、エレンは意外にも自分もそう思うと答えた。

「ですから、思い込みだと言ったんです。なんだか、チャールズさんのお話を伺っていると奥さんがかわいそうに思えてしまって、つい、心に浮かんだ事を言ってしまったんですわ」

「モテる旦那を持つのも良し悪しがあると？」

シェパード老人の口角が皮肉めいた形に歪んだ。

「おそらく、チャールズさん自身は自分の魅力には気付いていらっしゃらないのでしょうね。あの方の場合、とびきりハンサムだというのとも少し違う気がしますし……」

「だったら、何が若い女性を惹き付けるんでしょうな」

エレンは少し間をあけてから、平坦な、独り言に近い口調で言った。

「孤独の影、のようなもの……かしら」

孤独の影……。

三人の男が同時にその言葉を呟いた。

彼らにはわからないだろうとエレンは思った。正直、エレンにもわかりはしなかった。

孤独というものは誰の心にも棲んでいて、普段、表に出ることはあまりない。

それが、チャールズの場合、制御装置が壊れたかのように顔にも、声にも、姿にも溢れている。

まるで孤独そのものに支配されてしまった人間のように。

笑い方にしてもそうだ。笑顔に悲しみが張り付いているのではなく、悲しみの中に笑顔がある。

そういう庇護心を誘う表情やスタイルが女性をたまらなくさせるのだろう。

孤独の纏い方は人それぞれだ、とエレンは固い頭で思った。

「それで、彼女の容態は……？」

マークが心配そうな顔で尋ねた。

「脳震盪をおこされていたようでしたが、命に別状はないと思います」

思いがけず刑事っぽい口調になって、彼女は慌てて看護師という嘘の身分を告げた。

三人はエレンの言葉を信じ、一様にほっとした様子を見せると複雑な嘆息をそれぞれ洩らした。

「しかし、わしは、いつかこういうことが起こると思っていたよ」
シェパード老人がしみじみとした調子で言った。
「シェパードさん、まだ自殺と決まったわけじゃ……」
ジムが苦い顔をしながら、老人をたしなめた。
しかし、シェパード氏は少しもこたえる風がなく、
「いや、たとえそうじゃなかったとしても、あの人はもう限界に来ていたと思うよ」
むしろ遅かったくらいだ、と続けた。
自分がジェインだったら、とっくに見限っている……、あの事件の時すでに、と。
それに関して、二人は何も言わなかった。言えなかったと言った方が正確なところだろう。
「事件って、何があったんです？　さっき、チャールズさんを巡って女の争いがあったと仰ったのと関係がありますの？」
エレンの好奇心にかられた質問に三人はお互いの顔を見比べた。
エレンは内心、気が気ではなかった。
今の質問が彼らの口を無口にしたのは確かだった。それでも、刑事として通らなければならない関門だった。

―23―

「結局、懲りていなかったということだな、あの男は……」

シェパード氏はまるで深呼吸するみたいに大きく息を吐いた。

ジムは視線を落とし、レタスとハムでまた別のサンドイッチを作り始め、マークは苦い顔で目の前の冷めたエスプレッソを一息に飲んだ。

奇妙な空気があたりに漂い始め、エレンは思わず眼を眇めた。

一方で、彼女は時間も気になっていた。彼女にはエリックが病院から戻らないうちにしなければならない大事なことがまだ残されていた。

知らず知らず、焦りがエレンを襲い始めた。冷たい汗が夏でもないのに背中を伝う。

失敗は許されない。タイムリミットはすぐそこだった。

しかし、このとき、時計の針に押されていたのはエレンだけではなかった。

三人のうち、一番苦い顔をしていた男が無音の空間に耐え切れなくなったかのように口火を切った。

「実は、ウィーバーさんのところに救急車が来たのはこれで二度目なんですよ」

それはエスプレッソを一気飲みしたばかりのマークだった。

「まさか、ジェインさんは以前にも……？」

彼は、いや、と首を横に振ると、その時はゲストハウスに泊まって

いた宿泊客だったと告げた。

「風呂場で手首を切っておったんですよ。幸い、発見が早かったから命は助かったが、どうやらクスリも飲んでいたらしく、警察がかなり煩く夫妻にまで纏わりついておったな」

シェパード老人が横合いから口を挟んだ。

「でも、それはジェインさんたちには何の関係もなかったんですよね？」

頷かれるものだとばかり思っていたエレンは、その直後マークの言葉によって裏切られた。

「それが、そうとも言い切れなくて……」

マークは助け舟を求めるようにカウンターの向こうで腕を組んでいるジムに視線を送った。

ジムは傍観を決め込んでいたが、渋面のまま、重い息を一つ吐くと仕方なさそうに口を開いた。

「そのお客というのが、どうやらチャールズさんの昔の恋人だったらしいんです」

ざわざわという鳥肌が立つ音が心臓にまで到達しそうだった。

（アリシア・ヘイワーズ……！）

エレンは無意識にもその名前を告げそうになり、寸前で慌てて口唇を引き結んだ。

話を全て聞き終えた後のエリックの疲れたような声がにわかに脳裏に甦ってきた。

『アリシア・ヘイワーズって、一体、誰なんです？　僕にはさっぱりわからなくなってしまった』

ミシェルとチャールズとジェイン、そしてアリシア・ヘイワーズ。

登場人物が増えていく度に、複雑に絡まる人間関係。

いや、ことはもっと単純なものだったのだろうか……。

エレンは唇を噛みしめ、眼の奥に力を込めた。

「その女性の名前を教えていただけませんか」

彼女は右手でゆっくり警察手帳を出しながら、重い声で尋ねた。

―24―

おもむろに見せられた警察手帳は、まさしく伝家の宝刀ばりの威力を発揮した。
エレンは先ほどとは打って変わった真剣な顔つきになると、

「失礼致しました。実は私はこういうものです」

と、あっさり己の身分を明かした。
彼女の出自を聞いてもなお未だに信じられない表情の三人の男たちが、本来のあるべき姿に戻った彼女に憤慨する気も起こらなかったのは幸いだった。

「潜入捜査ですか？」

一番先に立ち直ったマスターのジムが顎に手をやりながら尋ねた。

「のようなものです」

エレンは声まで硬質なものへと変えると、背筋を伸ばした。

「ただの娘さんではないと思っていたが、まさか刑事さんだったとは……」

シェパード氏は苦虫を噛み潰したような顔つきで言葉尻を濁した。
憤慨するところまでは行かないが、彼の気分を害したのは間違いなかった。
彼の口が今までのように自由に語られそうにないことを肌で感じると、ただ残念でならないエレンだった。

しかし、そんなことを恐れていては刑事は勤まらない。エレンは唇をキュッと結びなおした。

「じゃ、やっぱり、あのことを調べに来られたんですか？」

マークが気まずい雰囲気を取り繕うように声を出した。

『あのこと』がジェインのゲストハウスで客が自殺未遂を計ったことを指すのは明白だった。

「いえ、でも関係はあります。話を戻しますが、その人の名前はもしやアリシア・ヘイワーズだったのではありませんか？」

彼らは彼女の名前をはっきりと覚えていないのか、そんな名前だった気がするとだけ告げた。

「ただ……」

とジムが言った。

「彼女のことは奥さんのジェーンさんも知っていたみたいでした。幼馴染だったかな。実のところ、騒いでいたのは彼女だけで、僕らは深刻には捉えていなかったんですよ」

「騒いでいたんですか？　アリシア・ヘイワーズが……？」

エレンは信じられないという顔で尋ね返した。

答えを返したのは意外にもシェパード老人だった。

「あれは一月、いや二月ほど前だったかのう？　この場所でひと悶着ありましてな。そう、今お嬢さん、いや、刑事さんが座っている

まさにその席ですよ。アリシアとかいうその女がチャールズを呼び出して一方的に復縁を迫っておりましたわ」

シェパード老人の言葉にジムが同意するように頷いた。

―25―

エレンはアリシアが二ヶ月前にこの島の、しかもこの同じ場所にいたと聞き、蒼ざめた。
ミシェルの供述どおり、彼女は住んでいたアパートから忽然と消えて以来、ようとして行方が掴めなかった。
事件と失踪の両面で捜査は今も継続中だったが、残された状況証拠も乏しく、成果は正直ないも同然だった。

「彼女はどんな様子でしたか？」

エレンの問いにマークが答えた。

「どこか不安定に見えましたね。すごく綺麗な人だっただけに、そのアンバランスさが引き立っていました」

「美人だったというわけですか？」

「ええ。それも、かなりの。ここらではめったに見かけないほどの美人でしたね」

ジムが思い出すように言った。

「皆さんは、その時もここにおられたんですよね？」

マークは隣の設計事務所に勤めており、昼食はここでとることが日課だった。シェパード氏に関しては、ほとんど毎日、この店のサンドイッチを食べに訪れているという。

「他にも客はいましたが、彼女たちが入ってきたと同時くらいにいなくなりましたね」

「どうしてですか？」

「そりゃ、諍いを始めたからですよ」

とシェパード氏が言った。

ジムも嫌な記憶を思い出すような苦い顔になった。

「ただの痴話喧嘩ではなかったですからね。チャールズはすでに結婚しているわけだし……」

「彼女は彼が結婚していることを知らなかったんでしょうか？」

エレンは何気なく尋ねた。

「さぁ、それはなんとも……。でも、おそらく、彼らはニ、三年、いやもっとかな、会っていなかったんじゃないかと思いますね」

「それはどう言うことですか？」

「実は二人は一緒に入ってきたわけではないんです」

エレンが怪訝な顔でジムを見つめた。

「チャールズは電話か何かで急に呼び出されたのでしょうね。最初に彼女が店にやってきていて、しばらく後に彼が来たんです」

二人の客は同時に頷いた。

「そのとき、チャールズは彼女が誰かわからない様子でした。あたりを見回して、別のテーブルに座ろうとしたくらいで……」

「チャールズさんは近眼だったんですか？」

「いや、違うと思います。メガネをかけているところを見たことはないし、反対に視力は良い方だと聞いています。ブルックさんという人が蒸気機関車の仕事をしているんですが、チャールズは目だけはいいって、褒めてましたから」

そう話したのは、マークだった。

「じゃあ、どうして彼女がわからなかったんでしょうね？」

女性は化粧一つで変身するというが、それでもかつての恋人を忘れるというのはどう考えてもありえないことだった。

顔を変えない限り……。

「服装は派手でしたか？」

「いいえ。でも、いいものを着ているという感じはしました。都会的っていうのかな……。気軽な服装ではなかったですね」

エレンは押し黙った。

彼らの証言からすると、やはり彼女は自分から失踪したことになる。しかも、逃走資金は潤沢だったことも話の内容から伺える。

本当にその彼女はミシェルの言っていた彼にとっての光のような女性だったのだろうか。

エレンはますますわからなくなっていた。

砂糖壷の中にたった一匹、迷い込んだ蟻を探すようなものだった。

何かがおかしい。それさえわかれば……。

エレンは急に立ち上がった。

「皆さん、ここでしばらく待っていて下さいますか？　確かめてみたいことがあるんです」

そう言って彼らの協力を仰ぐと、彼女は鳥のようにその家に急いだ。

過去の断罪　　－1－

ディック・アストレイはその頃、イギリスの北西部のとある小さな村にいた。
ウィンダミア湖にほど近いその村は避暑地として有名なだけではなく、彼の生まれ故郷でもあった。
彼は毎年、夏の終わりになると有給休暇を掻き集めてこの村に戻ってくる。
そして、何よりもまず、この名もない小さな湖の縁に立つとしばらくの間、時を過ごす。

今年は例年よりかなり遅れたものの、湖はいつもと変わらず彼を待っていたかのように静かな面を揺らした。
彼はしばらく湖の岸に佇み無言で湖面を見つめていたかと思うと、白い小さな花束を湖に向かって投げ入れた。
花束はまるで白い鳥のように湖の真ん中あたりに着水すると、そのままゆっくりと水の中に消えた。
ふだんの彼を知るものがもし、そのときの彼の横顔を眼にしていたら、おそらく彼本人だとは気付かなかったかもしれない。
哀しみと苦悩に彩られたその表情からは、いつもの屈託のない明るさとは無縁の暗い影のようなものしか、読み取ることが出来なかった。
ディックは乾いた唇を湿らすように口を少し動かすと、何かを小さく呟いてその場所から歩き出した。

向かうのは村はずれにある小さな一軒の家だった。
古い石垣を通り抜け、牧草地の延長のような場所にあるその家は今では母親が一人で住んでいるだけだった。

「ただいま、母さん！」

ディックはベルも鳴らさずに家の中に入っていくと、母親の姿を探した。

台所からはおいしそうにジャムを煮る匂いがしている。

小さな子供の頃から、少しも変わらないその匂いにディックはようやく、笑みを取り戻した。

「おかえり、リック。今日あたり、帰ってくる頃かと思って、おまえの好きな桃のジャムを煮ていたんだよ」

母親は少し足を引きずるように台所から出てくると、可愛いわが子を抱いた。

「母さん、足、どうしたの？」

ディックが心配そうに足の辺りを覗き込んだ。

「ニ、三日前に、ちょっと挫いてしまってね。でも、大丈夫。腫れもかなり引いたから。それより、ゆっくりしていけるのかい？」

「うん。そのつもり。それより、テトの姿が見えないんだけど……」

母親は少し寂しげな顔で窓の外を見つめた。

「あの子なら、りんごの木の下にいるよ。去年の冬は寒かったからね。テトの体にはきつかったんだろうよ」

「テト……」

ディックは一瞬言葉を詰まらせると、外に向かって走り出していた。
庭に生えているりんごの木の下に可愛い小さな花が一つ咲いていた。
テトはディックの親友だった。たくさんいた猫の中でも一番、彼に懐いていて、楽しい時、悲しい時、いつもそばにいてくれた。
あの、とても恐ろしいことがあった日も……。

「二十才くらいだったかね。猫にしちゃ、長生きした子だって獣医のヘンリーさんも感心してたよ。ただ、おまえに一目合わせてやりたかったね」

それだけが悔いが残るんだよと母親は寂しそうに笑った。
ディックは溢れる涙を止めることができなかった。
自分が会いたかったと同じくらい、テトもディックに会いたかっただろうと思うと、やりきれない思いが込み上げてきた。

「そうだね。テトは長生きしたから、幸せだったのかな」

この村を離れて、警察官になってから、年に一度しか会えなくなっていたが、それでもテトのことはディックの心の支えにずっとなっていた。

いつかは訪れる別れ。
そんなものを本当はもうかなり前から覚悟してきたつもりだったのに……。

「さぁ、出来たての桃のジャムでお茶にでもしようかね。おまえも疲れただろう?」

母親はそう言って、先に家の中へ入っていった。

ディックはしばらく、そのりんごの木の側に立っていた。
やわらかな風が吹いて、あの子の声が一瞬、聞こえたような気がした。

「テト、おまえに聞いて欲しいことがあったんだ、兄さんのこと……」

ディックは泣き腫らした眼で空の雲に語りかけた。

―2―

母親、お手製のジンジャーブレッドに出来立ての桃のジャムを添えながら、ディックは昼下がりの懐かしい我が家を見渡した。
テトが好きだった食器棚の上は、もう他の猫のねぐらになっていた。
それを少し寂しいと思いながら、それでも、テトの存在を今でも身近に感じている自分に心からほっとしていた。

「母さん、兄さんのことだけど……」

濃い目のダージリンティを一口飲むと、ディックは思い切って母親に話を向けた。
けれど、彼女は急に厳しさを帯びたような顔になると、

「あんな親不孝は知らないね。もう顔だって覚えてやしないよ」

と、苦々しく言い切った。
普段優しい母親がそんな憎まれ口を叩きたくなる理由もわかるだけに、ディックはなんとも言えない辛い気持ちになった。

兄は高校を中退し、都会で働くと言ってこの村を出て以来、一度として帰ってはいなかった。
もともと田舎暮らしが嫌でしょうがなかった彼は、おそらく二度と帰らない決心でこの村を出たのだろうと酒を飲むたびに寂しそうに呟いていた父親の姿が今も焼きついて離れない。
その父が亡くなって3年。
その葬儀にさえも帰って来なかった兄に対して、最初は怒りしかなかった母親も、日が経つにつれ、怒りから諦めに、そして最近では寂しさに変わってきているのではないかと薄々感じているディック

だった。

「それで、兄さんからの葉書は届いているの？」

住所も書いてない手紙をもらったって、どうしようもないよ、と呟きながら、母親は痛めた足を引きずりつつ、タンスの中の小さな小箱を取り出した。

「おまえが何かの手がかりになるかもしれないって言うから、取って置いているだけだからね」

そうでなければ読まずに捨てているよと、愚痴っぽく言いながら、母親は一通の葉書を彼に渡した。

それは、何ということのない、どこかの湖の写真が写った絵葉書だった。

「そんなに帰って来たかったのなら、一度くらい戻ってくればよかったんだ……」

小さな、小さな呟きはおそらく自分でも無意識に飛び出した言葉だったのだろう。

ディックは母親の耳に届かなかったことを救いに、その絵葉書をそっとカバンにしまった。

「一応、鑑定はしてみるけど、所在はやはり掴めないかも知れない」

わかっているよ、と母親は元気のない声で言った。

「もう、あの子のことはとっくに諦めているよ。父さんとも話してたんだ。うちの息子は最初から、リック一人だけだったんだって。

そう思った方がずっと楽だからね」

そう呟く母親の体がまた一回り小さくなった気がして、ディックはただ悲しかった。

「そのうち、ちゃんと俺が連れて帰るから。だから、それまで健康でいてよ、母さん」

母親は目じりに浮かんだ涙を隠すように笑うと、「そうだ、にんじんケーキもあるんだったよ」と言って台所に戻って行った。

―3―

母親にはゆっくり出来ると頷いたものの、実際のところ、そうもいかないことはわかっていた。
本来なら、今回関わっている事件が大詰めを迎えている段階で、勝手な個人行動は慎まなければならないはずだった。
もしも、警部と主任であるエレンの許可がなければ、当然自分はここにはいなかったに違いない。
しかし、不思議なことに彼らは嫌な顔一つせずすんなり送り出してくれた。
警部などからは『一年に一度と言わず、もっと頻繁に帰ってあげなさい』という暖かい声さえも掛けられている。
だが、それがただの寛容さからくるものではないことも彼はひしひしと感じ取っていた。

「外されたのか……」

考えられる理由はただ一つ。
おそらく、エレンは知らず、警部だけの意図によるものだろう。彼は抜け目がないだけでなく、恐ろしく慎重な男だった。

ディックはやるせない顔で俯いた。
自分は決して彼らを裏切らない。それは誰よりも自分がよく知っているはずだったのに……。
たった一つの嘘が彼を今、追い詰めている。

「どうすればよかったんだろう……」

ディックは頭を抱えるようにテーブルに肘をついた。

あの日、病院でエリックに会い、ライアンがさっきまでそこにいたことを知るやいなや、彼は無意識に走り出していた。
そして、自分の後をついて来ていた二人の警官を病院のエントランスのところで立ち止まらせると、

「ここから、二手に分かれよう。俺は向こうを探すから、君たちは病院内をもう一度隈なく捜索してくれ」

とわざとそんな命令を出した。

自分がなぜそういう行動をとったのか、よくわからない。
ただ、ライアンには聞きたいことがあった。いや、どうしても聞かねばならないことがあったのだ。
警察官としてではない、個人の立場で……。

「警部はどこまで知っているんだろう」

本当にそれだけのことだったのだ。
こんなチャンスは二度とあるはずもなかった。

しかし……。

それを疑われているのは明らかだろう。
二人の警官からも報告が届いているはずだ。

やましい気持ちはみじんもない。
また、彼を逃がそうと思ったからでもない。
自分の心の中をさらせるものならば、腹部をかっさばいてもよかった。

それでも、信じられないと言われるならばどうしようもないが、自分の潔白は自分の身で晴らす覚悟くらいは出来ている。

それでも、知りたいと言う気持ちに勝てなかった。

そして、その真実を知る人間はあいつしかいないのだった。

「兄さん、あんたはどれだけ俺を苦しめば気がすむんだ」

未だ行方の知れない兄と、唯一の手がかりを持つ、あの男とを結ぶ事の起こりは、彼がまだ幼い子供の頃にまで遡らなければならなかった。

―4―

思えば、あれだけの血を見たのはあの時が最初だった。
トラウマになってもおかしくないほどの凄惨な現場に、7歳のディックはまだ子猫のテトを抱きしめたまま茫然と立ち尽くしていた。

夏にだけ都会からやって来る綺麗な母親と優しそうな父親。そして、人形のように可愛らしい小さな少女。
ディックは、少し離れたその家に、時々、畑で取れる野菜や牛乳を届けていた。
ＴＶの画面からそのまま現れたように美しい女性は、その度にディックに珍しいお菓子やクッキーをお駄賃だといって持たせてくれた。
その人はとてもいい香りがして、ディックはいつも見とれていた。
その人がディックに優しく微笑みながら、言ったのだ。

「いつもおいしいお野菜を届けてくれてありがとう。よかったら、うちの娘とお友達になってくれないかしら」と。

人形のように透けるように色の白い女の子は母親の後ろに隠れて、不安そうにディックを見ていた。
だから、ディックは笑顔で頷いた。今度、うちの子猫を見せてあげると約束をして。

それなのに……。

ディックは、あの優しかった人とその夫と可憐な少女が折り重なるように倒れている姿をどうしても現実のものと思うことが出来なかった。
だって、昨日約束したばかりだったのだ。嬉しそうに、少女が微笑

んだのもまだしっかりこの目に残っている。

テトは血の匂いに興奮したかのように低い唸り声を上げると、何かに対する強い威嚇からかディックの二の腕に突き刺さるほどの爪を立てていた。

ディックはその痛みをまるで彼らの痛みと感じ、ただぼろぼろと涙をこぼした。もう二度とあの優しい笑顔と声には会えないのだと思うと悲しくて、悲しくてしょうがなかった。

それでも、ディックは張り付いて離れようとしない足を引き剥がすかのように持ち上げると、そのまま知らせに走ろうとした。

そのとき、彼の視界に銀色の光が写った。

それは兄が時おり自慢そうに見せていた外国製のナイフそのものだった。

ディックは震える手でそれを拾い上げ、祈るような気持ちで持ち手のイニシャルを読んだ。

紛れもなく、それは、兄、レイモンドのものだった。

蒼ざめたディックがしたことは今から思うと7歳の子供がしたとは信じられないようなことだった。

兄の関与を確信した彼は、遺体のそばに落ちていた黒光りのする銃を見つけると慌てて自分のシャツで綺麗に指紋を拭き取った。

そして、他に兄の痕跡がもうないか確かめると、そのナイフを手にテトを連れて走り去ったのだった。

それから先のことは正直、あまりよくは覚えていなかった。

ただ、第一発見者としてもう一度その場所に行かなければならなかったとき、彼は酷く暴れて、抵抗した。

大人たちは7歳の子供の心には相当のショックだったのだろうと簡単に許してくれたが、本当の理由を知るものはもちろん、誰もいな

かった。

ディックはそれから、長い間高い熱にうなされ、学校も休まなければいけないほどだった。

そして、彼が元気を取り戻した頃には、すでに兄は父親と派手な喧嘩して家出をした後だった。

結局、別荘での殺人事件はその頃頻繁に問題を起こしていた浮浪者の仕業ではないかと騒がれるようになったが真相はずっとわからないままだった。

そして、今も犯人は捕まってはいない。

当時、小さな村を揺るがすほどの大事件だったにもかかわらず、警察も村人も外部犯行説を疑わなかった。当然、捜査も浮浪者中心にしか行われていなかったことになる。

まだ子供だったディックにはとうてい知り得ることではなかったが、それはある意味、奇妙なことと言えた。

おそらく、被害者が村民の誰かであったなら事情はもっと違っていたのかもしれない。

と言うのも、彼らにとって別荘に時おりやって来る都会の人間たちは外部者でしかなく、どちらかと言えばよそ者扱いの傾向にあったからだ。

例えば、村人の誰かが新聞社の取材で、

『大変気の毒な事件だと同情はするけれど、たまたま運が悪かったのだ』

というコメントしか言えなかったとしても、それはそれで誰も遺憾にも思わなかったというように。

それでも、ディックの父親と母親は別荘地と家が近かったこともあり、亡くなった家族に対しては深い哀悼の意を表していた。

まさか自分の息子がその死に大きく関わっていたなどとは夢にも思わずに……。

もともと、ディックの兄、レイモンドはそんなことが出来る人間ではなかった。

クラスの中では勉強はいつも一番で、運動も出来、華があり、ディックにとっては年の離れた自慢の兄だった。

弱きを助け、強きを挫くというマンガのヒーローそのもののように頼もしい兄は、弟からだけでなく、学校の皆からも相当の信頼を集めていた。

しかし、一方で、友達も多く社交的だった彼は、家にいることはほとんどないとうくらい、遊びにも熱心だった。

優しく、正義感に溢れていた理想の兄が変わってしまったのは、それこそ、一年ほど前からだった。

何かに対していらいらすることが多くなり、遊びに出かけたまま朝まで帰らなかったことも一度や二度どころではなくなった。

どうも付き合い始めた連中が別荘組の金持ちの息子らしいと、父親の友人がわざわざ注進に来てくれるほど、村でも彼の素行は評判になりつつあった。

何が彼をそこまで変えたのか、誰にもわからなかった。

ただ、彼が都会にあこがれていたことは事実だった。

小さい頃から、別荘にやってくる洗練された都会の匂いを振りまく若者たちを見続けているうちに、上昇志向のようなものが妙な形に蓄積されていったのだろう。

16，7歳の彼は肉体的には十分大人でも、精神的にはまだまだ子供だったことが今なら十分伺える。

昼間から学校を休み、悪い連中たちと飲み歩き、彼らに勧められるまま、大麻にまで手を出していた。

彼の手にはいつも銀色のナイフが鈍く光り、怖いものなど何もないというように、好き勝手をしていた。

村人のまとめ役だった父親との毎晩のような大喧嘩は家族の崩壊を物語ってさえいた。

ディックは彼の持つ、光る物が怖かった。いつか、兄がそれで父の

胸を刺すのではないかとビクビクしていた。
年の離れた弟には手を出さないものの、父親や大人を見る兄の目はもはや普通ではなかった。
何かに体ごと乗っ取られて操られているような精神の危うさを幼いディックでさえ、常に感じるようになっていた。
猫や、森の生き物を愛し、昆虫さえ殺すことの出来なかった兄が簡単に人を殺してしまったとその頃、ディックが信じていたとしても不思議ではなかった。

だが……。

「ライアン・マクレガー……」

テーブルに拳をぶつけながら、ディックは憎々しげにその名前を吐いた。
あの頃、兄とつるんでいたこの男を探し当てるのにどれだけの時間がかかったか。
彼はこれまでに何度も名前を変えていた。もちろん、別荘で悪ふざけをしていた頃も本名ではなかった。
有名な政治家の息子で、誰からもちやほやされていた、あの意気地なしの男が実は共犯の男だったとしかし、誰が知りえよう。
そう言えば、兄が金ズルの坊ちゃんを見つけたと酔って騒いでいたことがあった。
あの頃から、レイモンドはおかしくなっていったのだった。

お金だけで繋がってるような希薄な友情。
最愛の兄を悪に陥れた張本人の憎い男。
それが、ライアン・マクレガー、またの名をマシュー、その男だった。

―6―

あのあと病院を出たディックはライアン・マクレガーの姿を見失うことになる。
しかし、確かに帽子を被った彼らしき背の高い男がその先の駐車場に紛れ込んだのを見たディックは、その影を追って車の並ぶ間を縫うように探し歩いた。

その時、一台の車が彼の目の前を急発進して行き、それに気を取られていた一瞬の隙をつくかのように何者かが彼の背後に立った。
非番で拳銃を携帯していないことに気付いたのは、その時だった。

「命知らずの刑事さん。もしかして、俺を探していたのかな」

背中に容赦なく拳銃の先を突きつけながら、その男は笑うように言った。
それでもディックが振り返ろうとすると、

「おっと！　命は大切にした方がいい。丸腰の警官を撃つ趣味はないんでね」

と改めて銃を強く彼に突きつけた。
ディックは息を飲んだ。これが、本当にあのマシューなのだろうかと。
兄の話に時々出てきていた彼は金持ちと言うだけの、ボンボン息子に過ぎないと聞いていたが……。

「どうするつもりだ……」

ディックは前を見据えたまま、低い声で尋ねた。

「さぁ、どうしようか」

ライアン・マクレガーはまるで小動物をいたぶるかのように今の状況を楽しんでいた。

「今に応援が来る。捕まるのは時間の問題だぞ」

「応援……応援ね。まぁ、それまでに君の命があるかどうかだがね」

ディックはギリギリと奥歯を噛んだ。

自分の命は惜しくはなかった。

ただ、今ここであいつに殺されるわけにはいかなかった。刺し違えるならまだしも……。

背中を冷たい汗が伝った。

「あんたが昔やったことについて聞きたい」

ディックは掠れ気味の声を出した。

「昔？　さて、どのくらい昔のことを言うのかな？」

ライアンはあくまで余裕だった。

「一番最初に殺ったことだ。ウィンダミア湖の近くの別荘で……。ここまで言えばわかるだろう」

一瞬、背中の上で銃の先が揺れたようにディックは感じた。

―7―

「ウィンダミア湖の別荘……？　なんのことかわからないな」

とぼけているのか、本当にわからないのか、判断のつきにくい声でライアンは言った。

そして、こう続けた。

「しかし、今死ぬかもわからないって時に、知りたいことがそれっていうのも、なんだか可哀想な話だな」

いいだろう。冥土の土産に少しだけなら思い出してやってもいい。

彼はそう言いながら、ディックの背中に当てていた拳銃を降ろした。

ディックが慌てて振り向こうとした時、彼はまた鋭い声で言った。

「動くな。銃はまだ君を狙っている。少しでも動くと、容赦はしないよ」

瞬間、ディックの背中に緊張が走った。

「ウィンダミア湖の近くに、確か、小さな村があったっけ。そう言えば、うちもあの当時別荘があったよ。いや、別宅か。何しろ、父親はあちこちに女を作っていたからね、どこに誰が住んでいたのか覚えちゃいないが……」

「一度も住んだことはなかったのか？」

ディックは目を閉じたまま尋ねた。

「さぁ、どうだったかな。やっかいばらいに、しばらく住まわされてたことがあったような気もするけれど、記憶は薄いね」

さぁ、これで気は済んだかい？

彼はそう言うと、再び銃を構えた。

「いや、知りたいことがまだだ。あんたは嘘を言っている」

ディックは重い声で言った。

「嘘？　心外だな。何を証拠に勝手なことを言っているのかな。時間稼ぎなら、もっと……」

しかし、ディックは彼に最後まで言わせはしなかった。

「証拠なら、さっき、あんたが自分で言ったんだろう。『あの当時』って。あんたはとっくにわかってるんだよ、ウィンダミア湖の近くで起こった殺人事件のことを！」

背中に突き刺さるその視線がどれだけ剣呑なものか、後ろを向いていていても伝わってきた。

「おまえは何を知っている」

「あんたには絶対、教えない。たとえ、死んでもね」

ライアンは高らかに笑った。

「おまえの命を生かしも殺しも出来るのは俺だってことを忘れていないか。まぁ、いいだろう。別にどうしても知りたいわけじゃないからね」

お気の毒様。

そう言って、彼がディックに向かって引き金を引こうとしたときだった。

パーン！

という銃声が二人の近くで轟いた。

「何っ！」

ライアンが慌てたように周りを見回した。

「ディック！　伏せるんだっ！」

その声は紛れもない警部の声だった。
ディックは急いで車の間に体を伏せた。

「ライアン！　おまえがそこにいるのはわかっている！　観念しろっ！」

警部は二、三発続けて銃を放った。
ライアンは舌打ちをすると、車の間を器用に走り抜けた。

「どこだ！　ライアンっ！」

銃を手にした警部がディックの元に辿り着いたときには、ライアンはすでに自分の車に乗り込んでいた。そして、猛スピードで駐車場を走り抜けていった。

「ディック、大丈夫か！」

警部は逃げたライアンを追おうともしないでディックの体を気にかけた。

「すみません……。彼を取り逃がしてしまいました」

ディックは申し訳ない顔で謝った。

「君が銃を持っていないことをエリックさんから聞いて、慌てて飛んできたんだが……。本当に無事でよかった」

しかし、ディックは警部の顔がまともに見られなかった。ただ、すみませんと頭を下げるだけだった。

「ディック」

警部の声には有無を言わさないものがあった。

ディックは平常心を揺り起こすと警部に目を合わせた。

「今年の長期休暇がまだだったな。しばらく、お母さんにも会っていないだろう。申請は私が出しておくから、親孝行をして来なさい」

「しかし、捜査のほうがまだ……」

思いがけない警部の申し出にディックは戸惑った。

「捜査は我々だけでも十分、進められる。君は少し休養した方がいい」

休養というのが口実だというのは理解できた。しかし、その理由までは及ばなかった。

「それは命令ですか」

「いや、提案だ。決めるのはあくまで君だ」

警部の目は今まで見たこともないくらい真剣だった。

「わかりました。でも、何かあったらすぐ呼んで下さい」

すぐに、駆けつける旨を彼は警部に伝えた。

わかったと警部は頷いた。

警部はライアンの乗った車の車種と色と番号を携帯で部下に伝えると、自分はまだ仕事が残っているからと病院へ向かおうとした。

「警部」

ディックはそんな警部を呼び止めると、苦渋に満ちた顔のまま尋ねた。

「このことは主任も承知されているんでしょうか？」

「承知するだろう」

彼は素っ気無いと思うくらい簡単にそう言っただけだった。

―8―

警部のあの全てを見透かされているような冷たい目を思い出すたびに、ディックは薄ら寒い気持ちに襲われる。
実際、ディックはあの目で言葉をなくした。
警部が自分の素性を知らないわけはないと思う。だが、エレンの両親を襲った犯人の身内とまで割れているかどうかは不明だ。

あの時現場に落ちていたナイフのせいで、兄の犯行と疑わなかったディックだったが、銃の指紋を拭き取ったのはやりすぎだったかもしれない。
もしかすると、そこに残っていたのはレイモンドのではなく、マシュー、つまりライアンのものだったということも大いに考えられるのだ。
この長い沈黙の年月のうち、疑惑は彼の中でほぼ確信へと変わってきている。
病院の駐車場で、もし警部の到着が少しでも遅れていたら、ディックは兄の無実を証明するどころか、今、ここにもいなかっただろう。
ライアンと言う男が人を殺すことなど、少しも躊躇するような男ではないことを彼は改めて身を持って知ったのだ。

「警部はどこまで話を聞いていたんだろう?」

自分がまさか逃がしたとまでは思われていないにしても、鋭い彼なら何かを微妙に感じ取ったはずだ。
ライアンが一介の刑事相手にすぐに手を下さなかったと言うことからも何らかの疑惑が湧いて当然だった。

ディックは困惑を極めたように額に両手をあてがった。

もし、尋ねられたら、答えられるだけのことは答えようと決めている。

だからと言って、自分から話す勇気はまだ正直、ないのだった。兄の所在、安否もつかめない以上、ディックの確信はあくまで推理の域を出ず、信憑性もないに等しい。

その一点から、彼は後ろめたさを警部に対しても、エレンに対しても持ち続けざるを得ないのだ。

真実が遠い理由が、幼かったとは言え、自分の過失から起こったことであるだけに、彼は一生、あの事件から解かれることはない。

ディックが再び、苦悩の縁へと堕ちそうになったそのとき、彼の携帯が着信音と共に震えた。

当分、鳴る予定のなかったその音が彼に新章の始まりを予感させた。

祈り　―1―

エリックは病院の処置室の前でジェインの夫と共に祈っていた。
チャールズはすっかり憔悴しきった様子で、両手で顔を覆ったまま、ぶつぶつと言葉にならない声を発していた。

「僕が殺したんだ。僕が彼女を……」

かろうじて聞こえたその独白にエリックは目を見張り、

「何を馬鹿なことを言ってるんです！　ジェインさんは死んだりしません。あなたが信じなくてどうするんです！」

と、エレンが自分に言ったように、彼を励ました。

手術中のランプはずっと長い間灯ったままだった。
その間、何人の医者やスタッフたちが処置室を慌しく出入りしていったことだろう。
エリックたちはその緊迫した光景にいながら何も出来ない自分たちの無力さをまざまざと身の内に感じていた。

「ばちが当たったんです」

チャールズが、やがて、頭を膝に押し当てたままくぐもるような声で言った。
その大きな背中は怒りのせいか、哀しみのせいか、小さく震えていた。

「どういうことですか」

聞き捨てならないチャールズのつぶやきにエリックが噛み付いた。ばちが当たるとしたら、彼女にではなく、チャールズの方にあってしかるべきではないか。

「僕が悪いんです。何もかも。僕がジェインをもっと大切にしていたら……」

自覚があったのなら、なおさら許せないとエリックは思った。

「やめて下さい。あなたへの罰をどうしてジェインさんが受けなくちゃならないんですか。自分が悪いと思っているなら、よけいにそんなことはこれっぽっちも考えるべきじゃありません。それに、ジェインさんは自分から飛び降りたように見えたと……」

勢い余ってもらした言葉にチャールズは恐ろしげな顔でエリックを見つめた。

「何……ですって？　そんな、嘘だ……」

「嘘かどうか、あとで彼女に聞けばわかりますよ。ジェインさんの後ろにいた、エレンさんがずっと彼女の様子を見ていたんです」

エリックは失言を悔いながらもどうせ後でわかることだからとすぐに開き直って言った。

「ジェインが……」

チャールズの泣き腫らした目はうつろで、何も見えてはいないよう

に揺れていた。
エリックは急に彼が不憫になり、背中をさすってやった。
それでも、掛ける言葉は思いつかなかった。

「やっぱり、ぼちが当たったんです」

チャールズは再び同じ科白を口にした。
そしてエリックがそれ咎める前に、放心したようにただ言葉だけ、続けた。

「彼女は一人じゃなかったんです。彼女のおなかの中には子どもが……」

その言葉の意味にエリックは愕然とし、気がつくとその場にくずおれていた。

悲しみというものは決して数値で表せるものではない。しかし、もしそれを測る装置があったとしたら、そのときのエリックの悲しみは針を振り切るほどのものであっただろう。

「じゃ、ジェインさんはそれを承知で自分から落ちたというんですか？」

エリックは気を取り直すと、「そんなことはありえない！」と強く彼女を弁護した。

「でも、そうとしか考えられない！」

チャールズは両の手に拳を作るとそれで自分の膝を何度も強く叩いた。

「落ち着いてください！　まだ、そうと決まったわけでは……」

エリック自身、自分の気持ちを整えるので一杯で、どう言葉を継げばよいかわからなかった。

「いや、そうなんです。彼女は僕と別れたがっていた。子どもが出来たとわかったときも彼女はそれほど嬉しそうには思えなかった」

マタニティブルーと言う言葉をエリックは思い出した。おそらくジェインもそうだったのではないか。時おり、憂鬱そうに見えたのも、もしかするとそのせいだったのかもしれない。

けれど、チャールズは首を横に振り続けた。

「たとえそうだとしても、その原因を作ったのは僕なんです。僕は彼女に忍耐ばかりを強いていた……」

その自覚があったのなら、どうしてもっと早く彼女を救う手立てを考えなかったのか、エリックは彼が歯がゆくてならなかった。

「アリシアがやって来たときも、ジェインはすごく怒っていました。何やら言い争いもしていたようで、挙句に彼女が自殺未遂のようなことを……」

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

あなたは何を言ってるんですかと、エリックは慌てて口を挟んだ。

「アリシアさんが、ここに来たんですか？　一体、それはいつなんです？」

「ニか月くらい前です」

エリックは信じられないという顔になると、

「アリシアさんの話をしたとき、どうしてそれを言ってくれなかったんです！」

と強い声で言った。

「彼女のことはもう終わったことだったし……」

「終わっていないから、こういうことになったんじゃないんですか

！」

エリックは優柔不断なチャールズの態度が今回の最大の原因ではないのかと彼を責めた。

「それで、アリシアさんは何をしにここにやって来たんです？」

チャールズは苦々しい顔になると言った。

「それがよくわからないんです」

―3―

「よくわからないって……」

エリックは呆れたようにつぶやいた。

「アリシアさんはあなたに会いに来たんでしょう？　そして、ジェインさんと喧嘩になって、それでアリシアさんは突発的に自殺をしかけたってことじゃないんですか？」

「確かに彼女は僕に会いに来ました。でも、とても話にならなくて、彼女にはすぐに帰るように言ったんです」

チャールズはアリシアに突然呼び出され、困惑した様子を語った。

「でも、彼女は帰らなかった。そして、今度はジェインさんに会いに行って喧嘩になったということですね？」

「家に帰ると、アリシアがジェインと言い争っていました。ジェインはめったなことでは怒らないんですが、そのときはまるで別人みたいに彼女を責めていました。それで、僕は二人とも落ち着かせようと思って、アリシアをとりあえず一晩泊めて、後日話し合おうと思ったんです」

「その夜、アリシアさんは自殺を図ったんですね」

チャールズは頷いた。

「傷が深くなかったことと、発見が早かったことで、彼女は一命を

取り留めました」

「発見したのは、誰だったんですか？」

「ジェインです。アリシアの様子がおかしかったので、ジェインは気になっていたんだと思います」

「おかしいというと？」

「情緒が不安定と言うか、とにかく普通と言う感じではなかったんです」

それを聞いて、エリックはパメラを思い出した。確かにそういう状態の人間のあしらいは苦手だった。

でも、彼はかつての彼女の恋人ではなかったのか。

エリックは心を鬼にして言った。

「アリシアさんはあなたの高校時代のクラスメートだったんでしょう？　そしてあなた自身、憎からず思っていた。その相手が自殺未遂を図るほど思いつめていたのはあなたの存在を巡ってだったんじゃないんですか？」

しかし、チャールズはそれに対して、強く頭を振った。

「やめてください、あなたまで。僕が愛しているのはジェインだけです。アリシアは、彼女とは、そういう関係じゃないんです！」

それは決して譲れない決定事項のように彼は告げた。

「アリシアは僕に言いました。何もかも捨てて自分と生きて欲しい

と。そんなことは出来るはずがないと僕が言うと彼女はそれならば、ジェインを殺すか自分が死ぬと言いました」

「最初は取り合いませんでしたが、あまりにしつこく食い下がるので、言ったんです。僕はもうすでにジェインを選んでいると、彼女が死ねば僕も死ぬだけだと」

本当に愛しているのはジェインだけなのだと彼はすすり泣くように言った。

「アリシアは本気でそう思っていたわけではないと思います。彼女とはもうしばらく、会っていなかったし、なぜ、今さらという気持ちが強かったんです」

「でも、あなたは好きだったんでしょう?」

チャールズは一瞬答えに窮した。

そして、その答えはまるきり別の口から語られた。

―4―

「この人にはどうしてもイエスと言えないわけがあるんですよ、エリックさん」

凛とした声に振り向くと、いつの間にやってきていたのかエレンが険しい表情で立っていた。

エレンは唖然とした顔で見つめるチャールズを反対に厳しい目で見つめ返すと、エリックが想像だにしないような重い現実を告げた。

「先ほど、ジェインさんとアリシアさんの育った孤児院で確認が取れました。チャールズさん、あなたとアリシアさんは本当の兄妹だったんですね」

エリックは息を飲み、目を丸くした。

「兄妹？　でも、二人は同級生だって……」

エレンはエリックの質問には答えず、驚いて言葉も出ないチャールズに向かうと、自分が本当はスコットランドヤードの刑事であることを明かした。

チャールズは夢ではないかと言う顔を一瞬したものの、すぐに現実に戻ったように項垂れた。

そして、覇気のない声でこう言った。

「どうして、誰も彼も僕らの幸福の邪魔をするんです。一体、僕らが何をしたって言うんですか」

「僕らと言うのは、ちなみにあなたと誰のことを言っていらっしゃ

るんでしょう？」

「決まっているじゃありませんか！　僕とジェインですよ！」

逆ギレを起こしたような彼の勢いに対して、エレンは冷ややかな視線を向けた。

「あなたは自分が幸せになればそれでいいんですか？　もうひとりの分身とも言うべき人間がどうなろうと……」

「じゃあ、どうすればよかったっていうんです！　僕とアリシアは確かに血の繋がった兄妹です。物心つく前に引き離され、お互い別の家庭で育ったんです。僕も彼女も自分たちに双子の兄妹がいたなんて全く知りませんでした。それが、皮肉にも高校で出会い、お互いそうと知らずに惹かれ合いました。でも僕らの顔はあまりにも似すぎていたんです……」

「それで、真実を知ったんですね」

「ええ……。僕は両親を問い詰めました。母が泣く泣く教えてくれましたよ。自分は本当の両親の子どもではなく、まだ赤ん坊の頃にある孤児院からもらわれてきたのだと。そして、僕には双子の妹がいたことを……」

チャールズは顔に片手を当てたまま、苦しげに言った。

「あなたはそのことをアリシアさんには……」

「打ち明けましたよ。とても苦しい告白でした。彼女の悲しげな顔は今も忘れられません」

彼の声にその苦悩が十分表れていた。
エレンはあくまでも刑事の顔で尋ねた。
「でも、アリシアさんはあなたほど納得されなかったんですね」

―5―

「ええ、彼女は何かの間違いだと言って取り合いませんでした」
そう語るチャールズの目にはなんとも言えない影があった。

「でも、あなたの心は動かなかった」

エレンは淡々とした調子で質問を繰り出していく。
思いもよらない事実の暴露にただ、ただ圧倒されているエリックにはとうていついていけない展開だった。
チャールズは答えるのもしんどそうに頷いた。

「あなたの養父母は確か、敬虔なカトリックの信者でしたね」

エレンの問いに、彼は自分もそうだと告げた。
そういう家庭で育った彼には、社会規範をも覆す禁忌に対して真剣に悩むことはあっても、受け入れることはとうていありえないことだったのだろう。

「インセスト・タブーはもっとも許されざる禁忌です」

彼は厳しい顔で言った。

「真実を知った段階で、もうあなたの中ではアリシアさんは妹としか見れなくなっていた……」

けれど、アリシアは違った。

「あなたは本当のご両親のことをご存知なんですか？」

「いいえ。僕は今でも今の両親を本当の親だと思っていますから」

今さら知りたいとも思わないときっぱり彼は言った。

「アリシアさんもそうだったんでしょうか？」

「わかりません。彼女は一度、よその家庭に望まれて行ったらしいのですが、二年ほどたって、また孤児院に戻されたそうです」

「では、その後はずっとそこで？」

「ええ、たぶん……」

チャールズは自分の片割れの不遇に心を痛めている様子だった。しかし、それ以上でもそれ以下でもないというのが彼の偽らざる本心のようだ。

「じゃあ、ジェインさんとは……？」

「彼女はアリシアと同じ孤児院で暮らしていました。当時、二人は姉妹のように仲がよかった……」

チャールズは語尾を震わせながら語った。

しかし、エレンがそんなことで質問の手を緩めるはずがなかった。

「つまり、あなたは事実から逃避するために、ジェインさんに乗り換えたというわけですか？」

「違います！」

チャールズは真っ赤になって反論した。

「でも、アリシアさんはそう思っていたんじゃないですか？　もしかすると、ジェインさん自身も……」

―6―

「乗り換えるとか……そういうのではありません」

しかし、彼の声は元気がなかった。

「僕の心があなたにわからないように、僕も彼女たちの心はわかりません。でも、そういう単純なことではなかったんです」

エレンはすかさず言った。

「ジェインさんの気持ちはともかく、アリシアさんの気持ちもわからなかったんですか？」

双子なのに？　という揶揄めいた意味合いもこめて、彼女は聞いた。それに対して、チャールズも反論した。

「双子と言っても、僕らはずっとお互いの存在を知らなかったんです。昨日や今日で、相手の気持ちなど慮れることなんて、無理です」

「そうでしょうか」

エレンは顎に手を添えながら言った。

刑事という職業柄、疑うことが常になってしまっている彼女には、彼の言葉がすべて言い訳にしか聞こえなかった。

「アリシアは結果的にわかったと言ってくれたんです。もう、僕に迷惑をかけないし、我侭も言わないと……」

エレンは腕組みをしたまま、目を閉じて聞いていた。
おそらく、あきらめることが出来ないアリシアに対して、彼は誠心誠意、説得を続けたのだろう。
兄として、彼女を諌めることしか、彼には出来なかったのだとエリックも思った。
やがて、アリシアは心が決して戻ることの無い愛しい恋人に対して、最後の手段を講じたのに違いない。
嫌われるよりも、そばに居続けるという道を……。

「あなたは円満に解決してほっとしたわけですね」

エレンはやはり棘のある言い方しか出来なかった。
チャールズはその言葉に眉をひそめながらも、ええと頷いた。

「きっとわかってくれるとは思っていましたよ。彼女は賢い女性でしたから。ただ、そのかわりにと約束させられたことがありました」

「約束？」

エレンは閉じていた瞳をゆっくりと開いた。

「自分たちが双子の実の兄妹だということを、誰にも言わないでほしいと……。それが別れる彼女の条件でした」

「誰にも？　ジェインさんにもということですか？」

「ええ。彼女には特に、言ってほしくなかったようです」

ちょっと、込み入ったことをお聞きしますが、とエレンは今さらのような尋ね方をした。

「その頃、ジェインさんもあなたを好きだったということはあるんでしょうか？」

本当のところはわからないが、憎からず思っていてくれたのではないかとチャールズは素直に答えた。

「正直に言って、彼女のことは嫌いではありませんでした。むしろ、僕の方が二人の間で迷っていたというところはあったと思います。二人はいつも一緒にいましたし、初めの方はよく3人でランチしたりして過ごすことが多かったんです」

明るく華やかな性格のアリシアは太陽のように、また穏やかで誠実そのもののジェインは広くて澄んだ空のようだったと彼は言った。二人はお互いに無いものを補い合い、それこそ仲のよい姉妹のようだったのだろう。

その二人が一人の男を取り合うなどということは考えられず、自然に一方の淡い思いは自然消滅したのと考えるのが普通なのだろうと聞いているだけのエリックにも思えた。

「でも」

と彼はふと思いついたように言った。

「いつかバレるとは考えなかったんですか？　あなたとアリシアさんは顔がそっくりだったんですよね？」

―7―

「いつも一緒に行動していたのなら誰かがいつか気付きそうなものでしょう?」とエリックは首を傾げながら尋ねた。
それに対するチャールズの答えは酷くあいまいだった。

「僕の知る限りにおいては、おそらくそういったことはなかったと思います」

エレンは彼の目を見ながら思った。
むしろ、彼は他人に知られることを望んでいたのではないか。
たとえ誰かの目に二人が兄妹として留まっても、彼は嘘をつきとおす事は出来なかっただろう。

「それは言い換えれば、あなたが知らなかっただけで気付いていた人もいたかもしれないということですね?」

エレンは感情を消し去った声で言った。
チャールズはぎこちなく頷くと「そうですね」と肯定した。

「ジェインさんはどうですか? 本当に気がついていなかったと思いますか?」

「少なくとも、高校を卒業するまでは知らなかったと思います」

歯切れの悪い言葉は続いた。

「では、ジェインさんはいつお知りになったんでしょう?」

エレンは畳み掛けるように尋ねた。
チャールズは困ったような顔になると、「もっと早く伝えるつもりだったのです」とつぶやくように言った。
彼がジェインに本当のことを告げたのは、実に結婚してしばらくしてからだったらしい。
そう告げた彼の眉は複雑そうに寄せられたままだった。
おそらく、とエレンはまた推察した。
アリシアとの約束に縛られて言えなかったというよりも、事実を告げることで波及するジェインの心理状態の揺れを彼は恐れていたのではないかと。
あくまでも推測の域に過ぎないが、もしジェインがこの真実を知っていたら、彼女は結婚を考え直していたような気がする。
凡庸に見える彼の風貌は表向きの鎧のようなものだ。
どうすれば人の心を惹き付けるか、彼は本能として知っている。
カトリック信者の家庭で養われたのは、禁忌を忌む精神と嘘がつけないということだろう。他人にも、自分にも。
とりわけ、自分に嘘をつくことは彼のポリシーに大いに反することなのは確かだ。

「あなたはそれを告げたとき、どう思いましたか？」

「え？」

と彼は意外そうな声を出した。ジェインのではなく、チャールズの心境を問うエレンの真意を正直、図りかねている顔だった。

「罪悪感を感じましたか？」

「罪悪感……」

彼はしばらく思案した後、「もちろんジェインに対しては感じました」と答えた。

「アリシアさんに対しては？」

「妹に対しては申し訳がないような気持ちがしました。でも、実際、彼女とは高校を卒業して以来会っていなかったんです」

あえて、アリシアを妹と呼んだ彼は、約束を破ったことについては心を痛めている様子で語った。

しかし、エレンにはそんな態度はどうでもよかった。

かんじんなことは、彼がアリシアと疎遠になってからもずっとジェインに秘密を隠していたということだった。

（彼女だけには知られたくなかったということか……）

やはり、彼はズルイ男だとエレンは思った。

―8―

エリックがたまらないように尋ねた。

「ジェインさんはどうだったんです？　あなたとアリシアさんが本当の兄妹だったと告げられてショックを受けられたのではないのですか？」

エリックには目に見えるようだった。失望と落胆、そして混乱が彼女を襲う様子が……。

「ジェインはとても驚いて、考える時間が欲しいと言いました」

「たしか、ジェインさんもカトリックの信者でしたね」

「ええ、でも彼女が傷ついた理由はそういうことじゃなかったと思います」

これは彼女にとって裏切り以外の何ものでもなかっただろうとチャールズは消え入りそうな声で言った。

「そうですね。彼女はあなたがアリシアさんと別れた本当の理由と自分と結婚した意味を深く考えるでしょうね」

エレンは硬質とも言える固い声で言った。

「ジェインはずっと誤解したままでした。確かに、僕は妹とわかるまではアリシアが好きでした。でも、知ってからは彼女をそういう

対象では見られなくなった」

「だから、かわりにジェインさんを愛したんでしょう？」

「違います！　代わりとかではなく、僕は純真に……」

「しかし、ずっとあなたたちを見ていたジェインさんがそう思うでしょうか。突然、あなたたちが別れて、そしてあなたはジェインさんと付き合うようになった。アリシアさんはそれでもあなたをずっと慕っていた。ジェインさんとしてはものすごくアリシアさんに対する負い目のようなものがあったんじゃないでしょうか。それが、実はこういう理由からだったとわかって、あなたの本心を遡って疑ってしまうのは当然なことでしょう？」

チャールズは言葉もなく、唇をきつく噛んだ。

「あなたが言ったとおり、これは完全なる裏切りです。あなたはそれからも、ジェインさんがあなたの愛を疑うような行為を繰り返していますね。この島に来る若い女性や、テニスサークルの生徒たちに、あなたは親切以上の行為を振りまいている」

あなたの節度が疑われてもしょうがないのではありませんか、とエレンの言葉には容赦がなかった。

誰にでも愛想がよい人間はいる。ただ単に奉仕の精神の強さから、男女を問わず心から優しくなれる人間が……。

それがいけないというのではない。人に優しくすることが悪いはずはないのだから。

ただ、彼の場合、もう少し己の立場や妻の心情を思いやる必要があったろう。

チャールズの見た目は決して悪くない。いや、むしろ良い方だと言える。だからこそ、彼の笑顔の功罪を見極める必要があったのだ。

「じゃあ、どうすればよかったんですか！　僕は特別の意味で彼女たちに接していたわけではありません。確かに、言い寄られたこともありました。でも僕はジェインを裏切ったことは一度もなかった。これからだって、そんな気はほんのかけらもありませんよ！」

開き直ったかのようなチャールズの言葉にエレンは断罪するような視線を向けた。

「では尋ねますが、もしアリシアさんが実の妹でなかったとしてもそう言いきれますか。ジェインさんがこだわったいたのはそういうことなんじゃないですか？」

―9―

チャールズは色をなくした。
おそらく彼は本当にそこまで考えることをしなかったのかも知れない、とエリックは思った。
それでも、隠されると反対に勘ぐってしまうのが人間の常だ。

「じゃあ、アリシアとの約束を破って、すぐにジェインに打ち明けていればよかったんですか！」

チャールズの声は一際尖っていた。
エレンはイライラしたように首を横に振った。

「あなたはあくまで自分を正当化しようとしているけれど、それは違うんじゃないですか？　あなたが誠実であらなければならなかった人は誰なんです？　あなたが一番大切な人はどっちなんです？」

あなたはアリシアさんを突き放してでもジェインさんに真実を打ち明けるべきだった、とエレンは言った。

「アリシアさんは気の毒だったと思います。でも、兄と妹が恋愛することが出来ないことは神が定めたことです。あなたはどうやっても、彼女にそれを説く必要があった。どんなに冷たくしても、それが本当の兄としてのあなたの役目だったのです」

チャールズは拳を握ったまま、エレンの言葉に傷ついた顔をした。
誰もが保護欲を抱きそうになるその憂い顔に、エレンは今度はきっぱりとノーを突きつけた。

「アリシアさんとはずっと会っていなかったと言いましたね？」

エレンの言葉に迷いのような逡巡はなかった。獲物を追い詰めるような苛烈さがその眼には宿っていた。

チャールズはその厳しい目にひるんだように頷くだけだった。

「では彼女がどこにいたか、ご存知なかったわけですね」

「ええ……」

チャールズは力なく答えた。

「あなたが大学へ進み、ジェインさんがパメラさんの元で占いの手伝いをされていた頃、アリシアさんも実はあなた方の近くにいたんです」

「なんですって！」

チャールズの声は驚きで裏返っていた。

「どこにいたんです？」

彼女の性格をよく知る彼は、アリシアが近くにいたとしたら絶対接触を図ってこないわけはないと断言した。

そうでしょうね、とエレンは言った。

「アリシアさんはあなたにこれ以上嫌われることを恐れていた。でも、あなたたちのそばにはいたかった。そこで彼女は、ある決心をしたんです」

―10―

エレンは全てを見通しているかのように静かに尋ねた。

「ジェインさんが働いていた占いの館のすぐ側にレストランがありましたね」

チャールズは怪訝そうな顔をしながら、頷いた。

「ええ、僕とジェインはよくそこで食事をしました。それが何か……？」

エレンはチャールズの目をひたと見つめるとその先を告げた。

「アリシアさんはそこで働いていたんですよ、ウエイトレスとして」

そんな馬鹿な……とチャールズは一笑に付した。

「そんなすぐ近くにいて、僕とジェインが気付かないわけがないじゃありませんか。僕らはしょっちゅう、そのレストランに行っていたんですよ？」

ジェインとの待ち合わせにも頻繁に使っていたのだとチャールズは言った。

しかし、エレンは真顔で首を横に振った。

「でも、アリシアさんはそこにいたんです。別人の顔になって……」

とたんにチャールズの顔が強張った。

「別人の顔……」

チャールズは視線を移ろわせ、しばらくして目を閉じた。
エリックは、それだけで彼の衝撃がどれだけ深いかわかった。

「アリシアさんがニヶ月前にあなたに会いに来た時、あなたは彼女だと気付かなかったそうですね」

エレンは喫茶店のマスターらから聞いた話をそのまま語って聞かせた。
チャールズの目は、もはや放心したように光がなかった。

「信じられませんでした。誰かが僕をかついでいるのかと思ったほどです」

そのくらい、彼女の顔には昔の面影が無かったとチャールズは言った。

「でも、まさかそんな前から顔を変えていたなんて……」と、チャールズは頭を抱えた。

そして、ゆっくりと彼女の言葉を思い出すように顔を上げた。

「アリシアは言いました。自分はもう昔のアリシア・ヘイワーズではないのだと。だから、二人でやりなおせるのだと……」

彼女の言っていることは無茶苦茶で、とても相手にする気にはならなかったとチャールズは言った。

「頭がおかしくなりそうでした。僕はジェインと幸せに暮らしているのに……。アリシアと言えども、僕らの幸せを壊す人間は許せないと思いました」

チャールズの顔は急にきつくなり、声はとてつもなく憎しみを帯びていた。

「それで、あなたはなんと言ったのですか」

「いい加減にしてくれと……。もう二度と僕らの前に姿を現さないで欲しいと、言いました」

「アリシアさんは、でも、納得しなかったんですね」

「アリシアは、それなら、ジェインに僕らが双子の兄妹だったことをばらしてやると脅しました。僕は我慢できなくなって、言ったんです。ジェインはもう知っていると……」

そのときの彼女の恐ろしい顔は今でも忘れられないとチャールズは言った。

―11―

「そして、アリシアさんはその足でジェインさんのところへ行かれたと言うわけですね」

チャールズはさらに厳しい顔つきになった。

アリシアの精神状態は、もうその時点で普通ではなかったのだろう。そんな彼女がいきなり尋ねてきて、ジェインにどんな言葉を投げつけたのか、想像するだけでエリックは辛くなった。

おそらく、アリシアは言葉だけでなく、その容姿でも彼女を傷つけたことだろう。

かつての親友がそれほどまでに夫に執着していたと知った時のジェインの心情を思うとエリックはとても居たたまれない気がした。

どんなやり取りがあったかわからないが、その後、アリシアはペンション内で自殺を図っている。

ジェインにとっては追い討ちを掛けるほどの出来事だったに違いない。

しかし、エリックにはどうしても腑に落ちないことがあった。

「ちょっと待って下さい。ミシェルがアリシアさんに出会ったのは、それ以前のことなんですよね？」

エレンはエリックの方を向くと複雑そうな顔で時間を止めた。

それは、どう言葉を告げればいいか考えているようなポーズだった。

実際、エレンもつい先ほど知らされたばかりで、信じられないでいるのだった。

その時、手術室のランプが消え、中から担当医や看護師が次々と姿を現した。
チャールズは真っ先に医師の前に立つと、

「ジェインは、妻は大丈夫なんですか！　おなかの中の子どもは……！」と悲愴な顔で尋ねた。

「奥さんは心配いりません。お子さんも危ないところでしたが、大丈夫です。落ちるときにおなかを庇われたのがよかったんでしょう。普通なら考えられないことですが……」

医師の言葉に彼ははらはらと涙をこぼすと、天に向かって十字を切り、それから何度も医師に頭を下げた。
そして、そのまま、入院やこれからのことを話し合うために病院のスタッフの後をついて行った。

エリックも思わず、神に感謝の言葉をつぶやいていた。
しかし、エレンは安堵の表情を浮かべながらも、重苦しい空気を纏ったままだった。
エリックはようやく、彼女の暗い表情に気付くと、さっきの質問にまだ彼女が答えていなかったことを思い出した。

「どうしたんです？」

「ミシェルさんとアリシアさんが出会われたのは確かに彼女の働いていたレストランです。そう、おそらくジェインさんが仕事を辞めて、この島に移り住んで以降でしょう」

そう言えば、ジェインはミシェルに恋人がいたことを知らなかったと言った。

ジェインが嘘をついている様子はなかったし、二人が彼女に隠れて付き合っていたというのも考えにくかった。

「だとしたら、やっぱり、アリシアさんは自分からミシェルの前から消えたことになりますよね。どうしても、昔の恋人が忘れられずに……」

たとえ、実の兄であっても、とエリックは付け加えた。

けれど、エレンはエリックの言葉になかなか反応しなかった。
エリックは次第にイライラしてきた。
こんなに歯切れの悪い彼女を見るのは始めてかもしれない。
だからこそ、不安が焦燥感となって、いやな予感とともに彼の心の中を騒がせるのだろう。

「なんで、黙ってるんです、あなたらしくない。はっきり言って下さい！」

―12―

エレンには迷いがあった。
部下からの報告が正しいとすれば、すべてが根底から覆ってしまう。

ふいに、エレンは突然襲ってきた激しい頭痛に、立ちくらみしそうになった。
最近になって、残された方の右目の奥に鈍痛が走ることがあった。
しかし、この痛みはその比ではなかった。

右目を庇うように当てられた手は、自分でも制御できないほどに震えていた。
思わずついた、壁の手さえも、今にもずるずると落ちてゆきそうで、エレンは慌ててその細い指に力を込めた。
エリックに対して背中を向けたまま、エレンは声を振り絞るように言った。

「ここからは守秘義務です。あなたは、もう、彼のことも、すべて、忘れた方がいい」

エリックは怒った。
ここまできて、今さら『守秘義務』をいきなり持ち出す彼女がわからなかった。

「僕は今でもミシェルを信じているんです。あなたが教えてくれないなら、警部に聞くだけです！」

いきり立っているエリックには、エレンの苦痛の表情を読み取る余

裕も無かった。

「彼は今、ロンドンにいるんでしたね？　いいえ、構いませんよ。僕が自分で電話をしますから。そりゃ、すんなりと教えてもらえるかどうかはわからないけれど、君のように守秘義務なんて言葉を使われることはないでしょうからね」

彼はそんな捨て台詞を残すと、警部に電話を掛けに、外へ出て行った。

エレンはその後姿を見届けるように薄目を開けた。

そして、次の瞬間、絶望するように目を閉じた。

解けない鎖　―1―

その時、エリックの頭の中にはミシェルのことしかなかった。
病院の外に出たエリックは、携帯電話の一番上に登録されている番号を押した。呼び出し音が流れる間、エリックはドキドキと激しく跳ねる心臓の音を聞いていた。
早く出て欲しいと願う一方で、彼はいつでも自分から切れるように電源のボタンからも指が外せないでいた。

（もう逃げないと決めたじゃないか……）

エリックはそわそわとその場を歩きながら、心を落ち着かせようと自分に言い聞かせた。
それは時間にして、一分も満たなかっただろう。

『はい』

低いだけでなく、どこか憂いを含んだような抑えた声が数回のコール音の後、エリックの耳に届いた。

「……」

エリックは正直、声が出なかった。
どうして？　という思いが頭の中を目まぐるしく駆け巡った。
彼は「すみません、間違えました」と言って電話を切ると、もう一度同じボタンを強く押した。
今度はツーコール目で相手に繋がった。

『はい……？』

しかし、その声はやはり彼が期待した警部の声ではなかった。

「あの、すみません。そちらはハワード・キャンベルさんの携帯ではないのでしょうか？」

『ええ、違います』

エリックの眉が思い切り寄せられた。

「もしかして……」

エリックは今度は故意に電話を切ると、電話帳の一番上に登録されている番号を見直した。

「なんてこった」

エリックがそう呟き、空を仰いだ時、手のひらの上で賑やかに携帯が鳴り出した。

『失礼じゃないか、勝手に切るなんて。電話をしてきたのは君の方なんだからね』

笑いを含んだ、それでいて、拗ねたような声。

それが最も似合わないとエリックの認める、かの男の携帯に何故、掛ってしまったのか、エリックは首を傾げた。

『エリック、なんとか言ったらどうなんだい？』

痺れを切らしたように、電話の向こうでは声を聞かせろと喧しい。

「グレッグ刑事……、あなた、いつ僕の携帯を触ったんです？」

エリックは、その時、全てを把握した。

ジェインのペンションから何度掛けても警部に繋がらないと思っていたが、自分はどうやら、最初から間違って、この番号を押し続けていたらしい。

『いつだったかなぁ、忘れた。それより、この間は何度も掛けてきてくれてたみたいなのに出られなくて悪かったね』

彼は携帯の電池が切れていて、ついさっき履歴を確認したばかりなのだと付け足した。

エリックは脱力気味に体を曲げながら、「ああ、そうですか」と言葉を返すよりなかった。

おそらく、エリックの携帯の一番上に自分の番号を登録しなおしたのはグレッグだ。ちなみに、それまではその場所には警部の番号があった。

『君ねぇ、普通、もっと感動的な言葉は出てこないのかい？　大丈夫でしたか、とか、もう、お体はいいんですか、とか』

「あっ、そうそう、もう、お体は大丈夫なんですか？」

事実、グレッグはエリックの母親が攫われた折に負傷し、今も病院のベッドの上で絶対安静のはずだった。

『エリック、君は本当に薄情な男だ』

「どうでもいいですが、エリック、エリック、と気安く呼んで、い

つ僕はあなたの友達になったんです？」

傷の具合は大いに気になったものの、今はこんな悠長な会話をしている場合ではないという思いが、彼の傷と今のエリックの心情とを天秤で計った。

『いいじゃないか、いつだって。文句を言うなら、君だって僕のことをグレッグと呼び捨てにすればいいんだ』

「出来ませんよ、そんなこと！　それより、もう切りますよ。僕は今、すごく急いでいるんですから」

『ちょっと、待ちたまえ！　君、今、どこにいるんだい？』

「どこって、ワイト島です」

エリックはなんの考えなしに場所名を言った。

しかし、グレッグは、

『ワイト島？　わかった、じゃあ、すぐに行くから、待っていてくれたまえ。いいね。また、掛ける』

そう言って唐突に電話を切った。

回線を切られた携帯を手に持ち、エリックはしばらくそのまま、固まっていた。

（あの人は何を言ってるんだ？）

エリックはすぐに悪夢を振り払うかのように首をぶるぶるとニ、三度振ると、今度こそ警部の携帯に電話を掛けた。

―2―

拍子抜けるほどあっさりとその電話は繋がった。
エリックは警部の第一声を耳にするなり、なんともいえない感慨に見舞われたと同時に、己の間抜けさを呪いたい気分になった。

『一体、どうしたんです？』

エリックの心細げな様子が透けて見えるかのような警部の言葉に、エリックはとうとう弱音を吐いた。

「警部、いつこっちに戻ってくるんです？　もう、僕ひとりの手には負えませんよ」

『エレンがいるでしょう？　彼女はお役に立っていませんか？』

そう間髪入れずに尋ね返され、反対にエリックは言葉に詰まった。

「いや、役に立つとか、あの人はそういうレベルの人ではないですから……。とにかく、エレンさんもすべて含めて、僕には手が余る感じなんです」

切羽詰まったような声に、警部が苦笑する気配が伝わってきた。

『確かにエレンは気難しいところもあるでしょうが、洞察力にかけては誰にも引けを取らないはずですよ』

「それはもう十分わかっていますよ。でも、僕はあなたじゃない。彼女の心をそう簡単に開くことなんて出来ないんですよ」

「わかりますか?」とエリックに尋ねられ、警部も少し言葉を探しているらしかった。

『何か、ありましたか?』

あったどころの話ではない!とまくしたてると、エリックは警部がいなくなってからの出来事を長々と話した。
どれが重要で、どれが優先順位の最上位に立つのか、エリックは話していてわからなくなった。
警部も電話ではよく伝わらないのか、今にもそっちへ飛んで行きたいくらいだと言った。

『ですが、実はこちらも込み入っていまして、身動きが取れない状況なんですよ』

頼みの警部からまさかそんな答えが返ってくるとは思わず、エリックは困り果てた。

『わかりました。他の刑事をそちらに差し向けましょう』

警部はそう言うと今まで聞いたことのない刑事の名前をエリックに告げた。エレンの直属の部下で、主に情報収集に携わって影で働いている、精鋭部隊の中でも特に優秀な男だと言う。

「ちょっと、待って下さい。どうせなら、ディック刑事にしてくれませんか?」

彼なら気心も知れている。これ以上、他の人間に神経を煩わされるなど、考えただけで倒れそうになるとエリックは訴えた。

警部はそれに対して、珍しく言いよどんだ。

『ディックは今、休暇中なんです。すみません』

エリックは改めて警部の口からその事実を聞き、声を失った。
ディックの性格から言っても、最大の山場に遭遇しているこの最中に休暇を取るなど全く考えられないことだった。
しかし、警部はエリックの疑問について答えるつもりは少しもなさそうに言葉を先んじた。

『ちょっと事情がありましてね。そういうことになっています』

奥歯に物が挟まった言い方とはこういうことを言うのだろう。
けれど、これ以上の詮索はエリックといえども許さないと言う警部の強い意志も透けて見えて、彼は何も言えなくなった。

「じゃ、いいです。もう、誰でも。とにかく、一日も早くお願いします！」

エレンの直属の部下というのが大いに気になるところではあったが、警部の言葉を信じようと思った。

「あっ、そう言えば、グレッグ刑事はもう大丈夫なんですか？」

エリックの何気ない問いかけに、

『さぁ、まだ絶対安静のうちなんじゃないですか。最近、見舞いに行っていないのでわかりかねますが……』

と警部は言った。

「そうですよね。あんな大怪我を負ったんですから」

血液が特殊で、もう少し処置が遅ければ、確実に命を落としていただろう彼の容態を思い出して、エリックは言った。

「じゃあ、やっぱりあれは冗談だったんだろうなぁ」

その呟きを警部が不思議そうに拾って、問いかけた。

『なんの話です？』

「いや、ね、さっき、僕が間違えて彼の携帯に掛けてしまったんです。それで話してるうちに、グレッグ刑事がこちらに来ると言い出して……」

『なんですって！』

「だから、冗談に決まっていますよ。あんな体で動くこと自体無理ですものね」

しかし、警部は答えるどころか、むしろ唸った。

『彼ならば、やりかねませんよ』

「えっ？」

エリックは耳を疑った。

『エレンはそこにいますか？』

いいえ、とエリックは答えた。

『わかりました、あとで彼女にも連絡を取っておきます。さっきの件ですが、やはりそちらに一旦戻ることにします。詳しいことはまたあとで……』

警部はそう言うと急いで電話を切った。

事件の真相への扉は確実に開かれようとしていた。

けれど、最大のカギを握る人間の心は遠く置き去りにされたままだった。

―3―

エリックが病院内に戻るとエレンはすでにその場所を立ち去った後だった。
エレンの口から真相の続きが語られると期待していたわけではなかったが、やはり肩透かしを食らったようで、後味の悪さは否めなかった。

アリシアがチャールズたちの前に現れたのが、約二ヶ月前。
彼女がミシェルの前から姿を消したのがこの頃だとすると、辻褄が合う。
しかし、腑に落ちないのはミシェルの語ったアリシア像と現実の彼女との間にあまりに差がありすぎることだった。
ミシェルから婚約者としてルイーズを紹介された時と似た不可解さがエリックの思考を混沌とさせていた。

（ミシェルはアリシアが自分以外の誰かを心に閉じ込めていることを知っていたのだろうか？）

父親を失い、義理の姉の元でただ流されるままに生きていた彼にとって、希望だったとまで言わしめたその女性の心の迷いに、ミシェルは本当に何も気付いていなかったのだろうか。

エリックはその時、ふと新たな疑問に辿り着いた。

（彼女は今、どこにいるんだろう……）

ジェインもチャールズも、その後の彼女の行方を知らずにいるようだった。

実際、ミシェルたちも見つけられなかったと言った。

「写真……」

アリシアは顔を整形しているというから、高校や、孤児院を探しても無駄だろう。

とすると、あとは整形を施したと思われる病院関係を当たるしかないか……。

そこまで思い至って、エリックは不思議に思った。

アリシアがチャールズたちを追って彼らの近くにいたとしたら、顔を変えた時期も同時期かそれ以前と考えられる。

問題は手術費用だった。

チャールズやジェインが全く気付きもしないほど変えるには相当のお金が必要だったのではないだろうか。

高校を出たばかりの、しかも孤児院で暮らしていた彼女が、それほどのお金を持っていたとは到底考えられない。

「どういうこと……なんだ」

エリックの脳裏を不吉な影が過ぎった。

―4―

どんなに望んでも手に入らないものはこの世にごまんとある。
それを『運命』とすぐに諦められる者もいれば、どうしても諦めきれず、どんなことをしてでも手に入れようとする者もいる。
アリシア・ヘイワーズの場合、明らかに後者の人間だったということだろう。
しかし、アリシアを疑うと言うことは、エリックにとってはミシェルを疑うということでもあり、胸中はかなり複雑だった。

『あなたはある一面だけを見て、その人をそういう人間だと思い込んでいる』

エレンが言った言葉が今も脳裏にこびり付いて離れない。

ミシェルの父が亡くなり、彼がパメラのマネージメントをするようになったのが約五年前。
ジェインはミシェルより早くパメラの元で働いていたことになるから、アリシアもその頃にはもうすでに整形を施していたことになる。
ということは、彼女の整形についてはミシェルの関与は1パーセントの可能性もない。
それなのに、この無視しきれない、得体の知れない不安感はなんなのだろう。
エリックが俯いてため息をついたとき、病院のスタッフらしき女性が声を掛けてきた。

「あの、エリック・サザーランドさんですか？」

「はい、そうですが……」

不審げに頷いた彼に、その白い清潔な制服に身を包んだ若い女性は、預かり物があるんですがと、小さなノートを差し出した。

「これは……」

それは、ジェインが日記代わりにつけていたという、あの家計簿だった。

「エレノアさんという方から、あなたにお渡しするようにと」

「あの、それでエレン、いや、エレノアさんは？」

彼女はそれだけをエリックに渡すように頼まれたらしく、その他の伝言も何も受け取ってはいないようだった。

エリックは忙しく業務に戻る彼女に礼を言うと、近くのソファーに腰を下ろした。

最初に浮かんだ疑問は何故、エレンがこれを持っていたかということだ。

ペンションでジェインから詳しい話を聞いていたとき、彼女はまだそこにはいなかった。

エリックは中を見ていいものか迷っていた。

エレンがこのノートを自分に託した意味もわからなかった。

「警部が来るまで、待っていたほうがよさそうだな……」

エリックはそうつぶやいて、壁の時計をぼんやり見つめた。

―5―

結局、その日、警部はワイト島には戻ってこなかった。
新しいホテルに移ったエリックは、とりあえず居場所だけでも彼に知らせたかったが今度こそ警部とは連絡がつかない状態になった。

さまざまなことが一日のうちに起こり、頭の中が興奮状態でなかなか寝付くことが出来なかったエリックは、翌朝、誰かがドアをノックする音で無理やり起こされることになる。
モーニングサービスを頼んだ覚えもなく、普段からも決して寝起きのよい方ではないだけに、エリックはその時、すこぶる機嫌が悪かった。
しかも、ノックの音は彼がドアを開けるまでしつこく続けられた。

つり上がった目をごまかそうともせず、エリックはその失礼な闖入者に対して不機嫌なオーラ全開でドアを開けた。
そして、文句を言おうと目線を少し上げて、目の前に立つその人物を見た途端、彼は一気に眠気が吹き飛んでしまった。

「……！」

黒装束、いや、黒のロングコートに身を包んだその姿は、一見ストイックな殺し屋に見えないでもなく、エリックは思わず後ずさった。
その怖気づいたような様子がおかしかったのか、その男は満足そうな笑みを見せ、こう告げた。

「いつまで寝てるつもりだい？　もう太陽はとっくに空のかなただよ」

彼でなくては出てこない気障な言葉だけに、エリックはようやく目の前の状況を信じる気になれた。

「グレッグ刑事、こんなところで何をしてるんです！　まだ、安静にしてなきゃいけないはずなのに……」

その言葉に心外そうにグレッグは目を眇めると、

「僕は決して約束を違える男ではないのでね」

と幾分か不機嫌な声で応じた。

「それより、この先には入れてもらえないのかい？」

「何しろ病みあがりなものでね、早く座りたいんだ」とエリックの揚げ足を取るような嫌味とも取れる言葉で言い切ると、エリックの返事も待てないように、ドアの隙間から身を滑らせ彼は強引に部屋に入ってきた。

やっぱり蛇みたいだな、と思ったが、エリックは我慢して言わずにおいた。

グレッグは部屋に入るや否やぶるっと身震いすると、昨夜ここに一人で泊まったのかとエリックに奇妙なことを尋ねた。

「見ればわかるでしょう？　僕は今、あなたに起こされたんですよ」

グレッグはエリックの返答も上の空で部屋の真ん中あたりまで来ると、突然、バタッと倒れた。

「ちょ、ちょっと、グレッグ刑事！　どうしたんです！」

だから言わんこっちゃないとエリックは慌ててフロントへ電話を掛けようとした。しかし、その彼のパジャマのズボンの裾を掴みながら、グレッグが声も絶え絶えに言った。

「部屋を……」

「え？　なんですって？」

エリックは彼の言葉を聞き取ろうと、屈んだ。

「部屋を替えてもらってくれないか」

「どうしてですか？」

当然の質問にグレッグはエリックのパジャマを掴む手に力を入れた。

「いるんだ……」

「何が……ですか？」

その時点でエリックも嫌な予感がしていた。

「君には見えないのかい、僕の上に何かがまたがっているだろう……」

ぎゃあと言って、彼の側から飛びずさろうとしたが、グレッグが離さないものだから、エリックはそのまま仰向けにひっくり返ってしまった。

「は、離して下さい。僕には何も見えません、見えてませんから！」

「だったら、目を開けて、僕を起こしてくれ」

「出来ません！　それより、そ、その手を今すぐ離してください、は、は、離して……」

エリックの引き攣ったような顔は、今にも泣きそうなほどに歪み始めてた。

彼はあまりの恐怖に気付いてはいなかったが、その時のグレッグの顔も笑みで歪み切っていた。

「わ、わかりました。今すぐ部屋を替えてもらいます！　ゆうべ寝付かれなかったのもそのせいだったなんて……」

エリックは這うようにして電話台に近づいていくと震える手で受話器を掴んだ。

「一人で大丈夫かい？　見える人間が一人でもいたほうがいいと思うんだが……」

「そ、そうですね……」

彼はそう答えると、フロントに電話で事情を話し、別の部屋を所望した。

「ツインだよ、僕も泊まってあげるから」

エリックはグレッグの好意に対して、その時、心から礼を言った。

―6―

目がしっかり覚めて頭の働きが活発になってくると、なんとなくキツネにつままれたような感じがしないでもないエリックだった。
ホテル側も突然の言いがかりに困ったような対応に終始していたが、

「妙な噂を流されたくないだろう」

という一見脅しに近いとも思えるグレッグの一言で別の部屋と取り替えてくれることになった。

「本当に霊が見えるんですか？」

ツインの見晴らしのよい部屋に移ったエリックは、ソファーに悠々と足を組んでくつろいでいるグレッグに向かって疑わしげな声を出した。

「見えるよ。さっきのがどんなヤツだったか説明してあげようか？」

あくまでもクールに返答するグレッグの様子にますます疑惑が膨らむエリックだったが、ミイラ取りがミイラになる可能性も無きにしも非ずで、

「いえ、結構です。全然知りたくありませんから！」

と、あえて首を横に振った。
グレッグはそれを見てクイっと首をすくめたに過ぎなかった。
実際、彼には見えていた。

しかし、だからと言って、霊の存在を信じていると言うのとも少し違う。
グレッグにとっては霊も魔法使いの使徒も悪魔でさえも、人間外と言う一括りの中でしかない。
言ってみれば、いてもいなくてもどうでもいいもの。
それにかこつけて、捜査を煽動するエレンなどは、それだけでも受け入れがたい存在だった。

「それで、グレッグ刑事、あなたはどうしてこの島にやってきたんですか？」

「どうしてって、君を助けるためじゃないか」

「助けるって？」

エリックは全然わからないという顔になり、グレッグはイライラしたように言った。

「数日前にものすごく頼りない声で連絡をくれと言っていたじゃないか」

その時、グレッグはまだ身体を動かすことも出来ない状態でベッドに縛りつけられたまま、悶々としていたのだと言った。

「あれは、あなたに電話をかけたわけじゃなく……」

そんなことはわかっていた。
エリックが自分を頼ってくれるはずがない。
それでも、妙に嬉しい気がしたことをグレッグは言わずにおいた。

「君はなんというか、他人に思えないんだよ」

「は？」

息子っていうか……。

ありえない言葉だと自分でもわかるだけに、それも言わずにおいた。

しかし、今まで家族の縁の薄さをことさらに諦めてきた自分が、こういう人類愛のような感情を抱くことになるとは新しい驚きだった。

それだけでも、生きてきてよかったと思うグレッグだった。

―7―

あ、そうそう、とグレッグがエリックを振り返りながら言った。

「キャンベルさんなら、待っていても来ませんよ」

「え？」

お兄さんの方ですよ、とグレッグはエリックの顔を見ながら言い直した。

「どういうことなんです？」

エリックは眉をひそめながら尋ね返した。

「なんだか、それどころじゃないことが起こったみたいでね。珍しく慌てふためいていたようだったけど……」

「会ったんですか？」

「いや、携帯に電話がかかってきたんだ。今にも乗船しようという時にね」

グレッグを止めるはずだった彼が来れなくなったのはよほどの理由からだろう。しかも、連絡が繋がらないなど……。

「何かあったんでしょうか？」

「さぁね」

どうでもいいようにグレッグは言うと、そのまま立ち上がって窓に向かうと背を向けた。

「さぁね、って……。警部はあなたの体のことを心配していたんですよ。まだ出歩けるような状態じゃないのにって。それなのに、あなたは警部のことが気にならないんですか？」

エリックは納得がいかないように無表情なその背中に不満をぶつけた。

「気にならないとはいっていないよ。気にしてもしょうがないとは思うけどね。そういうことは個人の問題だと思うし、他人がとやかく口を挟む事柄でもない」

「それって、少し冷たいんじゃないですか」

背中を向けたままのグレッグがどんな顔でそんなことを言ってるのかはわからないが、それが彼の本意だとしたら頷けなかった。

「あなたが瀕死の重傷を負っていたときに、警部がどんなに心配したかわからないんですか。あなたの身体の中には、たくさんの人の血が今も流れてるんですよ！」

「だからって、人間が代わるわけじゃないんだよ。生かされたことにたいして感謝はしている。でも、それとこれは違うんだ」

「何が違うんですか。僕にはあなたの言うことがわかりませんよ」

もともとわからないではあったけれど……。

ますますわからなくなったと、エリックは言った。

「君こそ、どうして、そう他人のことに口を挟んでくるのか。僕にはそのことの方がわからない」

エリックは一瞬黙り込んだ。けれど、瞳を揺るがすことなく言い切った。

「そんなこと、大切だからに決まってるじゃありませんか。僕だって、どうでもいい人のことをそこまで気にしたりはしませんよ。あなただって、そうなんでしょう？　僕のことが心配になったから、こうして傷を押して来てくれたんじゃないんですか」

人を動かすのは、ストレートな心の気持ちなんだとエリックは思っていた。

努力をして人の心を動かすことは出来るかもしれない。

でも、それは本当の思いやりからではなく、どこかに自分のためと言う偽善が含まれている。

警部もエレンも、ディックも、あの時はグレッグの命を助けるためだけに動いていた。

彼にそのことがちっとも伝わっていないかと思うと、エリックはとても情けない気持ちになっていた。

「言っておきますけど、あなたの身体の中にはあなたの毛嫌いしている人の血もたくさん入ってるんですからね」

誰とは言わないけれど。今は絶対、教えてあげないけれど。

後ろを向いたままの背中が一瞬、ギクッとしたようにエリックには思えた。

そして、グレッグはゆっくりとこちらに向き直ると困ったような顔

で言った。

「君は参るよ。ぽんぽん、ぽんぽんと。そうやって、僕の思考をめちゃくちゃにする人間は本当に君だけだよ」

エリックはそうかなぁと思った。

エレンなら、もっとはっきり言うはずなんだけど。

ただ、同じ言葉でも心に響く時とそうでない時がある。

きっと、そういうことなんだろうなと彼は思った。

―8―

「それでキャンベル警部に何の用だったんだい？」

グレッグは再びソファーに座ると、エリックに尋ねた。

今度はエリックが窓に向かって立ち上がる番だった。彼としてはただ話すのが面倒臭かっただけなのだが、グレッグはそうは思わなかった。

ムッとした声で、「どうせ、僕では頼りにはならないだろうけどね」と不機嫌さを露にした。

「そうじゃなくて。話せば恐ろしく長くなるんですよ」

グレッグはそれでもいいからと、強く、エリックを促した。

エリックはため息をつくと、今までのあらましをおおまかに話した。その間、ずっと目を閉じて聞いていたグレッグはエリックが話し終えると同時に目を開き、開口一番こう言った。

「つまり、そのジェインと言う女性は、今回一番の被害者ってことになるね」

的確に痛いところを指摘され、エリックは自然と俯いた状態になった。

ジェインに対してはどうしても罪悪感が付きまとう。

もし、自分がよけいなことを言わなければ、いやその前に、この島に来なければこんなことにはならなかっただろうという思いが今もエリックを苛んでいた。

「彼女には信じられる人間がいなかったんじゃないかな」

「え？」

「亡くなったパメラさん以外に」

エリックは思わず黙り込んだ。

「人は大切な人が亡くなった時、誰でも混乱し、悲しみ、絶望に近い感情に溺れそうになる。それでも日が経つにつれ、その感情は薄らいでゆき、やがては普通の生活へと皆、戻ってゆく。でも、だからと言って、大切な気持ちがなくなってしまうかと言うとそういう訳ではないんだ。それはずっと変わらず、それぞれの心の中で生き続ける」

グレッグは続けた。

「男と女の間もそういうことだろう？　一番好きな人が自分以外の誰かと結婚したとしても、それでその人への愛が終わるわけじゃない。好きな気持ちは重石のように胸に沈むだけなんだ」

「つまり、ジェインさんは今でも恩師であるパメラさんを一番に信じていて、アリシアさんは兄のチャールズさんを今なお諦めていないってことですか？」

「そういうことになるね」

エリックは感心したような眼差しでグレッグを見つめた。

「な、なんだい？」

「いや、あなたもそんなことが言えるんだなって……」

「どういうことだい！　君は僕をからかっているのか？」

違いますよ、とエリックは慌てて手を振った。

「褒めてるんですよ。さすが、刑事だなって」

「当たり前じゃないか、き、君は僕をなんだと思っているんだい？」

照れているのか、怒っているのか、彼自身よくわからない感情に取り乱していることだけは事実のようだった。

―9―

「コホン、それでだね……」

とグレッグは仕切りなおすように足を組み直した。

「問題はもっと他にあるんだろう？」

問題……。それは大有りだった。

ジェインの事故ですっかり忘れていたが、とても自分だけでは手に負えないようなことをエリックは抱えていた。

しかし……。

「何だい、やっぱり僕には言えないって言うのかい？　君はさっき、見直したと言ったばかりじゃないか」

そういう問題じゃないんですよ、とエリックは苦笑いのようなものでごまかした。

「まさか、僕が信用できないっていうんじゃないだろうね？」

ある意味、そうだと言いたかった。でも、それを言えば彼を必ず傷つけた顔をする。

エリックは頭を掻き毟りたい衝動に駆られていた。

「あいつか……」

グレッグはエリックの懊悩する様に何かを察した。

「ライアンに関係することなんだね」

エリックは仕方なく「ええ」と頷いた。そして思い切ったように言った。

「僕はまだどこまで、あなたのことを信じていいかわからないんですよ」

はっきり答えたエリックの言葉に、やはり彼は少し悲しげな顔をした。

「当然だろうね。それが普通の人間の答えだよ」

エリックや彼の母、メリッサを裏切らないと自分自身に誓うことは出来る。けれど、他人に信じてくれと告げることは、彼にとってまだまだ勇気がいることだった。

「君が言いたくないと思ったら言わなくていい。知らなければ、裏切ることはないのだから」

そんな寂しい声を出さないでくれ、とエリックは思わず頭を抱えた。

「ああ、わかりましたよ！　言います、言えばいいんでしょう！」

それは、まるでヤケを起こしたような声だった。

「僕はどうせ警察の人間じゃないんだし、守秘義務に触れることもないんですよ。それに、あなたは一応警察の人間だし、何も不自然なことはない。ですよね？」

「あ、ああ」

「じゃあ、あなたを信じて話します」

まだ、警部にもエレン刑事にも話していないことです。

彼はそう言って、ジェインから聞いた話を語り始めた。

―10―

エリックがグレッグに語ったことは、まさに秘密の暴露だった。
もし、彼が未だにライアン側の人間だとしたら、エリックはとんでもないことをしたことになる。
警部やエレンたちを裏切るだけでは終わらず、捜査の大いなる妨げになるばかりか、ミシェルに不利になることは明らかだった。
いや、考えようによってはそれだけでは終わらないだろう。事実は捏造され、真実は闇に永遠に葬られてしまうことも有得ない事ではない。
それでも、エリックは止めなかった。
ただ彼を信じたいという思いだけではない何かが、彼を突き動かしていた。

「ケインという人物はおそらく、ライアン自身のことだろう」

グレッグはため息をつくように言った。

「パメラさんと結婚していたことは知らなかったんですか？」

彼女の婚約者だということは知っていたが、その前に偽名で結婚していたとは知らなかったと彼は答えた。

「誰かとしょっちゅう結婚している男だからね。ただの結婚詐欺師だよ」

それは嘘だとエリックは言った。

「僕はあなたを信じて話しているんです。あなたも嘘はやめて下さ

い」

「ウソ？」

グレッグの眉間に皺が寄った。

「青い炎ですよ。聞いたことがないなんて言わせませんよ」

その言葉を聞いた瞬間、グレッグの顔色が変わった。

「青い……炎」

そして、変わったのは顔色だけではなかった。

彼の手が突然、ガタガタと震え始めたかと思うと、飲もうとしていたコーヒーカップの中身が大きく揺れた。

「グレッグ刑事？」

驚いたのはエリックだけではなかった。

グレッグはもう一方の手で一生懸命、カップから手を離そうと戦っていた。しかし、その手もまた異常な震え方をしているのをエリックは見逃すことが出来なかった。

「グレッグ刑事！」

エリックが見かねてグレッグの手を掴もうとした時だった。まるで電流が走ったかのような衝撃と同時に、彼の身体は弾き飛ばされてしまった。

「な、なんで……」

エリックが茫然と立ち尽くす中、グレッグはカップの方でない手を自分の懐に入れた。
そして、掻き毟るしぐさをすると恐ろしい悲鳴を一声上げて、そのまま意識を手放した。

―11―

「あの人、ばかじゃないですか！」

エリックは倒れたグレッグの胸のあたりから血がにじみ始めているのを見て、慌ててフロントに電話をすると至急、救急車を呼んでくれる様にと叫んだ。

フロントは度重なるトラブルから面倒なことが起こっていると見て取ったのか、救急車だけではなく、警察までも呼んでいた。

そのおかげで、エリックはようやく警部に会うことが出来たのだったが……。

「まぁまぁ、そう怒らないでやってください。彼も止むに止まれぬ行動だったんでしょうから」

警部は真っ赤になって怒っているエリックを宥めようと肩をたたいた。

「だからって、縫ったばかりの傷口を掻き毟るだなんて自殺行為じゃありませんか！　しかも、突然ですよ。それまで、普通に喋っていたのに……」

エリックにしてみれば、驚いたなどという状態ではなく、それこそ目の前で起こっていることが悪夢としか映ってはいなかった。

「前に言ったことがあったでしょう？　彼の洗脳を解くのは容易なことではないんです」

警部の声は彼に対して同情的であった。

「しかし、これでただのマインドコントロールではなかったということがはっきりしましたよ」

「それは彼の努力だけではどうにもならないと言う意味ですか？」

「調べてみないとわかりませんが、相当根が深いというか、もしかすると科学的な何かを施されているのかもしれません」

彼はおそらくこのままロンドンにある医療施設に送られることになるだろうと、警部は言った。

「でも、大丈夫なんですか？　反対に命を狙われるなんて事はないでしょうね？」

エリックは心配そうな顔で警部に尋ねた。

「信頼できる筋に任せてありますから、心配はいりませんよ。なに、蛇の道は蛇ってね。私もそちらのツテが満更ないわけでもないのでね」

時々、警部は裏のような顔を見せる。エリックはそういう警部も嫌いではなかったが、同時に不安にも襲われた。

「それで、どうして警部がここにいるんですか？」

フロントが迷惑そうに警察を呼んだことを告げたとき、エリックはてっきり地元の警察がやってくるとばかり思っていた。

しかし、実際、現れたのは警部一人でエリックは意表を突かれたのだった。

警部はそれに対して、少し口を濁しながら、たまたまだと言った。
結果的に警部が来てくれたことは大いにありがたいことではあったが、隠し事をされているのは明らかで、エリックは落ち着かない気分になった。
また、そんな子供だましのような理由で納得させようとしたこと自体、自分が甘く見られているようで腹が立つ思いだった。
しかし、今はそんなつまらないことで争っている場合ではなかった。

フロントはどう警部に言いくるめられたのかわからないが、エリックに対して、また別の部屋を用意してくれた。
さすがに、血溜りのあとの残る部屋ではゆっくり過ごすことは難しいと思っていただけにエリックにとってはありがたかい提案だったのだが……。

新しい部屋に入るのをことさらに躊躇しているエリックを見て、不思議そうに警部が声を掛けた。

「どうしたんです？」

エリックはさっきとは、また違った意味で青い汗を流していた。

「ここ、最初の部屋じゃないですか……」

「ああ、そうでしたか。でも、もうここしか残っていないそうですよ。何か不都合でも？」

何も知らない警部はエリックの背中をグイグイ押した。
しかし、扉にしがみつくようにして拒むエリックを見て、なんとなく理解したのだろう。少し意地の悪そうな声で部屋の中を覗き込ん

だ。

「なるほど、この部屋は出るんですか」

「えっ！　なんで、わかるんです？　警部にも見えるんですか？」

エリックが必死の形相で振り向いた。

「残念ながらというか、幸運にも見える人間ではなくてね。でも、だからこそ怖いって感情もありませんけど」

エリックはぽかんとした顔で警部の話を聞いていた。

「見える人間はどんなにか怖いだろうって思いますよ。でも、見えないものを怖がることはできませんからね」

あなたは見える人なんですか？

警部の質問にエリックはブルブルと首を振った。

そういう考え方があるんだと教えられ、エリックは脱力したようにその場でしゃがみ込んだ。

―12―

「それで？」

警部は部屋の中央で固まっているエリックに向かって声を掛けた。

「え？」

エリックは目に見えないものを追うようなしぐさをしながら、あいまいに答えた。

見えないけれど、怖いものは怖い。

見えないから余計に怖いってこともあるじゃないかとエリックは思いながら、一人、神経を過敏に尖らせていた。

「グレッグ刑事ですよ。一体、何があったんです？」

エリックは窓辺の日の差すあたりに立つとやっと落ち着いたように息を吐いた。

「警部、ライアン氏が実はケイン氏だったって言ったら驚きますか？」

「え？」

今度は警部が尋ね返す番だった。

エリックはジェインから聞いた話をグレッグに語ったように警部にも話して聞かせた。

警部はしばらく腕を組んで考え込んでいたが、やがて重い口を開いた。

「グレッグ刑事もそれを認めたんでしょうか？」

「認めたというか、彼も知らなかったようです。ただ、たぶんそうなのだろうとは言いました」

警部は長いため息をついた。

エリックはこの時になって、初めて自分が余計なことを喋ってしまったのではないかと心配になった。

グレッグを信じると決めたことに今も躊躇いはない。

しかし、そのことだけに重きを置いて、捜査のことを深く考えていなかったことは事実だった。

「青い炎ですか……」

しかし、警部が気に掛けていたのはどうやら違うことらしかった。

「確かにその名前は警察関係者の中でも時々上げられて来ているのは間違いないんです。でも、物証に乏しいのと、あと現場の地理です」

「地理？」

「スイス、オーストリア、カナダ……、すべて彼に関する事件は外国で起こっているんです」

「イギリスでは一件もないってことですか？」

ええ、と警部は頷いた。それゆえに、捜査資料も少なく、彼の正体もほとんど掴めていないのが実状だと。

「パメラさんの事件が実際起こったのも、スイスでしたね？」

警部は頷くとまた腕を組んで、難しい顔になった。

「おそらく、彼女は知っていたのかもしれません。いや、おそらくスイスでの襲撃のあと知ってしまったんでしょう」

「だとしたら、ですよ。なぜ、またその恐ろしい殺人者と婚約なんかしたんですか？」

彼も顔を変えていたんでしょうか？

警部はそれに対しては無言だった。

そして、別のことを言った。

「グレッグ刑事がおかしくなったのは、おそらく『青の炎』という言葉を聞いてからでしょう。その言葉に何らかのトラップが掛けられていたと考えるのが自然でしょうね」

―13―

他の人間にとってただの単語にすぎなくても、ある人には呪縛になり得るのが言葉の持つ力だとエリックも思っている。

例えば、名前にコンプレックスを持っている人は、自分の名前を尋ねられるだけでも嫌な気がして、なるべくその話題から遠ざかるように話を変える。

エリックに当てはめるとするならば、それは父親に関することだろう。

父親がいないことでいじめられることはなかったが、人と違うという境遇はそれだけで一歩も二歩も皆から遅れを取っているような疎外感を育てた。

ましてや、写真以外で一度も顔を見たことのない父である。

いわば、幻のような存在で、想像することさえ彼には難しかった。

母親は、ことあるごとに父親と彼を比較しこそすれ、優しい思い出を語ることはなかった。

言ってみれば、エリックが聞かされ続けたのは父親としての『彼』ではなく、母親の最愛の人間というイメージの方が強かった。

それゆえに、彼は『父親』に関することには一々反抗に近い感情を抱くようになっていた。

グレッグにとって、その言葉はエリックにとっての『父親』のワードと同じ意味を持っていたのではないだろうか。

マインドコントロールによって、『青の炎』という言葉を聞くと無意識にそれを排除したくなるような信号を送られると言うか……。

嫌なもの、排除すべきものと認識することによって、意味などわからなくても、エリックのそれと同じ行動を無意識にとってしまう。

そういう脳の働きに変えられたというのが正しいような気が彼にはした。

だからこそ、その変えられた脳と自分の取り戻した理性が一つの頭の中でせめぎ合ったために彼は激しい混乱を起こし、崩壊寸前で自ら気を失うという暴挙に出たのだろう。

エリックの苦しそうな表情を見て、警部は言った。

「彼は大丈夫ですよ。新しい主人も見つけましたし」

新しい……主人？

と、エリックはとても変な顔で聞き返した。

「あ……」

警部はしまったという顔になり、思わず天を仰いだ。

「警部、新しい主人ってどういう意味なんです？」

エリックが詰め寄るように再び同じ質問をし、警部も逃げられないと思ったのか渋々告げた。

「あなたとあなたのお母様ですよ。彼はメリッサさんを救ったことを彼が生まれてきたのはそのためだったと上書きしたのです」

「上書き……？」

そうです、と警部は頷いた。

「事実、彼がいなければメリッサさんの命が無事だったかどうか、定かではないでしょう」

それにはエリックも同意できた。

「彼にとっては自分の存在する意味が父親と義理の兄のためという認識しかなかった。実際、彼はそういう風に幼い頃に変えられています」

反抗する気力もなくなるほど、彼は自分の人生を最初から捨てていたのだろうと警部は言った。

しかし、その運命をあなた方は変えてしまった。

「グレッグはどんなことをしても新しい自分を取り戻すことをやめないでしょう」

エリックは少し考えた挙句に言った。

「でも、彼は結局、誰かのために生きることしかできないということですか？　それで、自分のために生きていると言えるんですか？」

警部は言った。

「言えると思いますね。誰かのために生きること、それこそが彼にとっての自分のために生きることなんです。その相手は誰に命令されたわけでない、彼が心から大事だと思える人なのですから」

―14―

エリックはなんとも複雑そうな顔になっていた。
警部の言うことはよく理解できる。けれどここに一つ問題があった。

「率直に聞くんですが、その、グレッグ刑事の洗脳を解いたというのは、もしかして母だったんですか？」

もしかしてもしなくても、そうだよと言いそうになったが、警部はぐっとこらえた。そのことを一番認めたくないのはかく言う自分だというのをよくよく知っていたので。

「でも、それはたまたまでしょう。あの時、彼が助けたのが別の人物なら、確実にその対象は違っていたわけだし……」

もしかするとあなただったかもしれないんですよ、とあえて警部は笑って言葉を濁した。
しかし、エリックにはわかっていた。
おそらく、他の人物だったら、グレッグはここまで運命的な出会いを感じたりはしなかっただろう。

どうでもいいんですけどね、とエリックはぽつりと言った。

その横顔はとても平気そうには見えなかったが、警部は深く詮索することをやめておいた。
エリックが母親に対して相当の確執を抱きながらも、人並み以上に愛情を持っていることも彼は十分理解していたから。

結局、と警部は再び口を開いた。

「生きてるだけで誰かのためになり得るってことですよ」

はぁ？という顔でエリックはその先の言葉を待った。

「つまり、積極的に人のために生きる努力をしなくても、そこに生きて存在しているというだけで誰かの助けになっている場合もあるってことです」

エリックはしばらく言葉が出なかった。

「ということは、僕も今、そういう立場にあるかもしれないと……」

当たり前です、と警部は言った。

「あなただけじゃない、万人の人に言えることだ。ただ、そのことに誰も気付いてはいないみたいですがね」

エリックはふーっと大きく息を吐くと、ついでに伸びをした。

「わかりました。彼の呪縛を解いたのが母だったというのは思いも寄らない展開だったけど、喜ぶべきことだということで納得しますよ。味方は多いに越したことはありませんからね」

これで、敵はライアン一人に絞れるとエリックは言った。

しかし、警部はエリックほど楽観してはいないようだった。

「ライアンの協力者がまだどのくらいいるのか、それは不明なんですよ」

「え？」

警部はワイト島を離れた本当の理由を初めてエリックに話した。

「じゃ、まだ警察内部に彼の息の掛かった人間がいると？」

彼なのか、父親のマクレガー長官なのかは定かではないが、邪魔を仕掛けてくるものはまだまだあるだろうと警部は難しい顔をした。

エリックはふと何かを思い出したように言った。

「警部、アリシアさんに双子の兄がいたって知っていましたか？」

警部は否定も肯定もせず彼を見つめた。

「それだけじゃないんです。そのお兄さんというのが、なんとジェインさんのご主人だったんです」

「そうらしいですね」

警部は少しも驚いた様子を見せず、そう言った。

―15―

「知っていたんですか？」

エリックの驚きは当然と言えた。

警部は素直に頷き、語った。

「アリシアさんの身元を知らべた時、戸籍にも辿り着いていましたから。ただ、そのことは私もそれほど重い事案とは認識していなかったのです」

警部は「これは言い訳以外の何ものでもないのですが……」とさらに続けた。

「ある二つの真実があるとします。人はそれを同時に見た時、同じ目で見るとは限らないのです」

「どういうことですか？」

あまりに抽象的な例えにエリックは眉根を寄せた。

「優劣です。短時間に脳の中で処理し、整理しなければならない場合、一つの際立った事案の方に心が向いてしまうものなのです」

ますます、警部の言いたいことはわからなくなった。

警部も承知で喋っているのだろう。しかし、それは単なる弁解ではないような気がしてエリックも気が抜けなかった。

「つまり、アリシアさんのお兄さんがジェインさんのご主人だった

ということよりも、もっとインパクトがある事実があったということですか？」

警部の顔は厳しいと言うよりも、真剣で、切なげだった。

「実はルイーズさんがシドニーさんだったと判明したとき、当然、我々は彼の出生についても調べていました」

エリックは黙って頷いた。

「なんと、彼もまた孤児でした。そして、彼には姉がいたんです」

「姉？　それは本当の、という意味ですか？」

「そうです。二人は幼い頃、親を亡くしています。そのときのショックで姉は両親のことを全く覚えてはいなかったそうです」

「……」

「姉は真っ直ぐな心の持ち主でした。孤児院ではシスターたちを助け、同じ境遇の親のない小さな子たちの面倒をそれはよく見ていたそうです。小さい弟にとって不幸だったのは、彼女が彼一人の姉ではなくなったということでした」

「警部……？」

「彼は反抗期を迎え、彼女にことさらに反抗するようになっていった。そして、彼女の友達であるアリシアさんに傾倒していったのです」

「ちょっと、待って下さい。まさか、そんな馬鹿な……」

エリックは頭に手を置いた。その手は少し震えていた。

そして、彼は振り絞るように言った。

―16―

「シドニーの姉がジェインさんだって言うんですか？」

そんな大事な事実を何故、今まで警部は黙っていたのか。

いや、自分は刑事ではないのだから、そんなことを論じていてもしょうがない。

けれど、最初から警部が知っていて彼女に接していたかと思うと、どうしても解せない気持ちが湧き起こった。

「最初から知ってたんですね、この島に来る前から。あなたは初めから、そういう目でジェインさんを見ていたというわけですか」

エリックの厳しい質問に警部は目を逸らさなかった。

「我々は刑事ですから」

「我々はって、それはあなたの言い分でしょう？　僕は違う！」

エリックは自分の心の目が警部の刑事としての眼に劣るとは思わなかった。

しかし、警部はエリックの熱を冷ますように穏やかに言った。

「なにも彼女を疑っていたわけではありません。ただ、それはあまりに重い事実だったと言うことです」

警部はそこで一旦言葉を閉じた。そして、自分の鞄の中から一枚の写真を取り出した。

「エリックさんに撮ってきて欲しいといったのは、ジェインさんの写真でした」

あの時は自分に対してウェイト警部補の監視がついていたためはっきり言えなくて申し訳ありませんでした、と警部は謝った。
そして鞄から取り出したばかりの写真をエリックに見せた。

「これがシドニー・ラッセンの写真です」

イーストボーンの崖の下から見つかったと言う彼の遺体は損傷が激しく、身元がなかなか判明しなかったと聞いた。
そのせいか、写真の男がシドニー本人だと言われても、ぴんとはこなかった。
ただ、証明写真のようなその写真に写る彼は、エリックがルイーズとして会った彼よりもずっと若い印象を受けた。

「彼は一体、何者だったんです？」

味方だったのか、敵だったのかと、エリックははっきり問うた。

「おそらくどちらでもあり、どちらでもなかったのでしょう」

曖昧な答えは、更なる混乱をエリックに与えた。

「ミシェルさんはあのイーストボーンで発見された遺体をシドニーだと証言しました。しかし、我々はそれを鵜呑みにしたわけではありません」

「じゃあ、警部が本当に彼女に会いに来た目的は……」

「ジェインさんに確認をお願いするためです」

エリックは思わず、自分の顔を覆った。

なんて残酷な再会を警部は彼女に強いようとしていたのか。

旅の本当の目的を知り、エリックの心はすでに折れそうになっていた。

しかし、警部の告白はそれだけでは終わらなかったのだった。

―17―

今回の事件はただの愛憎劇では終わらない様相を呈してきたと警部は言った。

「調べれば、調べるほど、他人しか出てこない。かんじんのパメラさんに辿り着くのがこれほど難しいとは想像もしていませんでしたよ」

「それで、辿り着けたんですか？」

エリックの問いかけに警部は答えに窮したように首を一度だけ振った。

「話を戻しましょう。シドニーですが、高校を卒業すると彼はアリシアさんを頼って孤児院から出てきています」

「ジェインさんじゃなく……ですか？」

ええ、と警部は答えた。

エリックはかすかに思い出していた。

ミシェルの取調べに立ち会ったとき、彼がシドニーとの出会いを行方不明になったアリシアを一緒に探すためだったと語っていたのを。

アリシアの消息を知るために孤児院に出向き、彼女が弟のように可愛がっていた少年がいたことを彼は知ったのだった。

「だとしたら、おかしいですね。シドニーはアリシアさんがいなくなったことを知らなかったとミシェルに語っているんでしょう？」

その上で、怪しいパメラを追い詰めるために、二人で共謀してあんな芝居を打ったのではなかったのか。

「じゃあ、シドニーは最初からミシェルに嘘をついていたってことになりますよね？　でも、どうして……」

「嘘かどうかはわかりません。ただ、彼は知っていたのだと思います」

「何をですか？」

「アリシアさんが一体誰であったのかを……」

一瞬、警部の言葉が上滑りしたように聞こえて、エリックはもう一度、確認するように尋ねた。

「アリシアさんが、なんですって？」

「エリックさん、あなたは彼女に会っていると言ったのです」

エリックはうろんげに彼を見つめた。

警部の顔は今までにないほど真剣そのものだった。

エリックは思わず耳を塞ぎたくなった。

その予感こそが真実以外のなにものでもなかったことを彼は思い知る。

警部はエリックの動揺を慮ることなく、無常に言い切った。それが彼の仕事だと自分で自分に言い聞かすかのように、とても冷たい声で。

「あなたがパメラさんだと信じていた人こそ、アリシアさんその人だったのです」

―18―

「何を……言っているんですか」

エリックは恐慌を起こす一歩手前の状態でなんとか踏みとどまった。しかし、警部が繰り出してくる言葉の羅列は、もうとうにエリックの許容状態をはるかに超えていた。

それでも黙っていることの方が苦しくて、すぐにエリックは言葉を継いだ。

「パメラさんという女性は最初からいなかったと言うんですか？」

いいえ、と警部は言った。

「パメラ・オースチンさんという女性は確かに存在します」

エリックはイライラしたように言った。

「おかしいじゃないですか。じゃあ、なぜ、それが彼女ではないと言い切れるんです？　ミシェルは最初から僕を騙すつもりだったって言うんですか！」

警部は答えなかった。

ただ、悲しげな目でエリックを見つめた。

エリックはその目を見つめ返すことが出来ず、天井を仰ぎ見ると込み上げて来るものを堪えるべく唇をきつく結んだ。

長い話になります、と警部は初めに言った。

そして、「あなたには酷なことですが、聞く勇気はありますか」と彼に尋ねた。

エリックは視線を外したまま、何かを睨むように頷いた。

警部はソファから立ち上がると、窓に向かって歩き出した。そして、そのまま外の景色に目を移したまま静かに話し始めた。

「パメラさんはスイスで何者かに襲われてから、療養所を点々としています。原因不明の目眩や幻覚に悩まされ、もはや正常の生活が送れないくらい、彼女の精神状態は崩壊寸前まで進んでいたのです」

「……」

「けれど、療養所を変え続けた理由はそれだけではありませんでした」

「どういうことなんです」

「脅迫状です」

「脅迫状？」

警部はゆっくりと体をエリックの方に向けると言った。

「結局、事件はスイスだけでは終わらなかったのです。彼女が生きていると知った犯人は『必ず殺す』という意味の手紙をその後も彼女に送り続けていました。おそらく、ミシェルさんが処理をして彼女には直接目に触れないようにはしていたのでしょうが、全てが全てうまく言ったわけではなかったのでしょう」

「パメラさんは今なお自分の命が狙われていることを知ったと言う

んですね？」

「おそらく。しかも、その犯人は彼女がとても良く知っている人物だったのです」

「ケイン氏！」

「ええ。ですが、彼だけなら、彼女はこれほどまでに混乱をきたすことはなかったでしょう」

「じゃあ、誰が？」

しかし、その問いに警部はすぐに答えてはくれなかった。

「ミシェルさんはとりあえず、パメラさんの不安を除くためと見えない刺客から逃れるために彼女を次々と転院させていきました」

しかし、彼女の容態はよくなるどころか、ますます悪くなるばかりだった。

薬の量もだんだん増えていき、彼女は自分で自分の命を絶つ行為を発作的に行うようになっていった。

彼女に付き添い、仕事を辞めること対してミシェルは全く抵抗を感じなかった。その頃すでにジェインは結婚のために仕事を辞めていて、占いの館を閉じることに問題もなかった。

けれど、療養を続けていくためにはかなりのお金が必要で無収入でのやりくりには限界があることを彼は肌で感じとっていた。

―19―

そのためにも仕事を続けていくことは譲れない選択だった。

「それで思いついたのがパメラさんの替え玉でした」

脅迫者にパメラが健在であることをアピールする目的も同時にあったのだろうと警部は言う。

「まさか、それがアリシアさんだったって言うんじゃ……？」

そうです、と警部は躊躇いもせず頷いた。

「待って下さい」

エリックは頭を抱えるとしばらく何も言えない状態になった。

頭の中をさまざまなことが駆け巡った。

ミシェルに再会した日のこと、彼の家に行って初めて姉と言う人に紹介されたこと。

そして、不釣合いな婚約者にもやもやを募らせながらも彼の幸福を祈ろうと彼自身、力を貸したこと。

少しづつ暴かれていくミシェルの嘘にエリックは何度も打ちのめされながらも、それでも全てが嘘だったわけではないと信じていた。

そう信じることが彼の最後の砦とでも言うように、エリックは堪えてきた。

けれど、最初から、それこそが虚飾でしかなかったと知らされ、エリックは何も考えられなくなってしまった。

『裏切り』の文字が割れんばかりに頭をたたき続けるのみだった。

「真実など一つもなかったということか……」

エリックは消え入りそうな声で呟いた。

大きな星が目の前で堕ちて、世の中全体が真っ暗闇に包まれてしまったかのような気がして、彼は目を開けていられなくなった。

警部はそんなエリックの様子に心を痛めながらも真実を語ることをやめなかった。

「幸い、パメラさんの素顔は知られていませんでした。占いの時はベールで顔を隠し、おまけに大の写真嫌いときていましたから、替え玉を探すことはそれほど大変なことではなかったはずです」

アリシアはきっとミシェルにとって女神のように見えたはずだった。

身長も体重も、顔の輪郭も、髪の色さえも彼女は恐ろしいほどパメラに似ていた。

アリシアが孤児で、寄る辺のないもの同士だったということも、ミシェルに危険な賭けを犯させる勇気を与えたのだとも言えた。

「よく自分の恋人をそんな危険な目に遭わせようと思いますね」

エリックの声はまるで見知らぬ人の声のようだった。

そのことが思いの外、警部の心も傷つけていた。

「アリシアさんとミシェルさんですが、二人はそういう間柄ではなかったようです」

真実こそが真の敵というようにきつい目をしたエリックに警部は言葉を自然と選んでいた。

しかし、どんな取り繕った言葉で告げようが、真実は真実でしかないことは警部が一番心得ていた。

エリックは乾いた笑いを引き攣らせながら、投げやりに言った。

「本当にすべて、嘘だったんですね。彼女がミシェルにとって大切な女性だったということも、彼女が突然失踪したということも……」

そして、ハッと気付いたように彼は警部に視線を合わせた。

「じゃ、シドニーは一体何のために彼らといたんです?」

行方不明になったアリシアを探す目的でミシェルと彼は出会ったはずだった。

しかし、その理由こそが有り得ないことだったことを考えると、シドニーの存在はまさに宙に浮いた形になってしまう。

ましてや、彼はルイーズと言う女性まで演じていた。

一体、何のために……。

「警部……」

エリックの声は耳を澄まさなければ聞こえないほど小さく、掠れていた。

「殺されたのは一体、どっちのパメラさんだったんです」

エリックの唇の震えが彼の動揺の激しさを物語っていた。
警部はまるでそんな彼の姿から逃げるように目を閉じた。

「あなたが会った方の人です」

エリックの体がぐらっと傾いだ。
足元に底なしの穴がぽっかり開いたような心もとなさを感じ、体が震えた。
日の光がとても眩しくて、彼は泣きたくなった。
一人の人間が亡くなったという事実は変わらないのに、エリックは言葉に出来ないほどのショックを受けていた。

亡くなったのは、アリシアだった。パメラではなく……。

その事実だけでもう十分だった。

―21―

「もうたくさんだ！」

エリックはテーブルの上に拳を叩きつけると、その手で顔を覆った。テーブルの上の冷めたコーヒーは一口も口を付けられぬまま、辺りに飛び散った。

「それは全部、あなたの推測なんでしょう？　警部！　そうだと言って下さい。でないと僕は、この世のすべてのものを恨みたくなる。あなたのことも大嫌いになりますよ……」

まるで子供に戻ったかのようにひ弱な声でエリックはくぐもるように言うと、小さく、小さく体を丸めた。

警部はしばらくその様子に言葉を無くしたように動かなかった。しかし、心を決めたのだろう。

エリックの対面のソファーが軋み、彼が腰を据えた音がした。

「聞きたくなければ聞かなくてもいい。あなたの自由です」

エリックは答えることが出来なかった。

哀れみや、同情の言葉を期待していたわけではない。

けれど、救われる言葉が欲しかった。

本当ではないと。ただの推測に過ぎないのだと、彼に言って欲しかった。

しかし、警部はエリックの期待には応えてくれないばかりか、コートとバッグを持って立ち上がった。

彼が出て行く気配を察したエリックは、顔を上げると彼を呼び止めた。

「あなたは最低の嘘つきだ。ミシェルを信じろと言ったのはあなたじゃないですか。なのに、あなたはこの無残な現実だけを僕に突きつけて黙って出て行こうと言うんですか！」

警部は目を閉じたままドアの前に立ち尽くしていた。
そして静かに口を開いた。

「今は何を言ってもあなたの心には届かないでしょう」

エリックは再びテーブルを強く叩いた。

「それをあなたが言うんですか！　ミシェルは最初から僕を騙していたんですよ。最も信じていた親友に裏切られた気持ちがあなたにわかるとでも言うんですか！」

「ミシェルさんはアリシアさんを殺してはいません」

エリックの目が大きく見開いた。

「でも結果的に彼女はパメラさんの身代わりになったじゃないですか！」

「身代わりとして殺されたわけではなかったのです。彼女を殺した犯人はアリシア・ヘイワーズと知っていて彼女に手をかけたのです」

縺れた糸が激しく引きちぎられるような展開にエリックはついていくことが出来なかった。

「アリシアさんが殺された本当の理由を知りたければついて来なさい。あなたが真実を受け入れると本当に決心出来るのなら」

もし、これ以上の真実の暴露に耐えられないのであればついて行くべきではなかった。

しかし、エリックの足は何かに操られるかのように警部の後を追いかけていた。

遠すぎた夢　　－1－

警部が無言で案内する先は、エリックの全く想像もつかない場所だった。

「警部、どこへ行くんです?」

途中から心配になったエリックは彼に何度も声を掛けた。
しかし、警部はその度に容易にエリックの声を無視して早足で歩き続けるのだった。
その背中はまるで何かに対して怒っているかのようでさえあった。
エリックは警部の与える無言のプレッシャーと背後より迫り来る得体の知れない恐怖との板ばさみ状態で呼吸困難に陥りそうになっていた。

エリックがたまらず大声で彼を呼び止めようとした時、その建物は見えてきた。

「どうして……」

エリックの足が止まりかけた。
しかし、その一瞬の躊躇いも許す気はないというように、警部は病院のエントランスに入っていった。
彼が誰に会いに来たのか、エリックにはようやく理解できた。

「待って下さい!」

彼は今度こそ大きな声で警部を呼び止めた。

警部は前を向いたまま、歩みだけを止めた。
病院のロビーは休診時間ゆえなのか、閑散としていた。それでも、二人のただならぬ様子に聞き耳を立てている人も少なくなかった。

「ジェインさんのところへ行くのならやめて下さい！　彼女はまだ術後間もない状態で、心の傷も癒えてはいないんです」

必死の形相で留める彼に警部は容赦のない一言で黙らせた。

「死に寛容はありません」

エリックの心臓を雷が貫いたほどの衝撃が襲った。
警部はまるでエリックの思いすべてを拒絶するかのように一度も振り返らず、また歩き出した。

「警部！」

それでも、痛む胸を押さえるようにエリックは彼の名を呼んだ。
無駄な抵抗だとわかっていた。
自分には彼を止めるだけの言葉がないことが悔しくてならなかった。

―2―

警部とエリックの足取りの違いは、二人の距離が物語っていた。
警部は使命のために、エリックはミシェルのために。
けれど、その思いの違いはますます広がっていくばかりだった。

ジェインの病室の前に誰かが立っていた。

「ディック刑事……」

彼は少しやつれた印象で、エリックを眩しそうに見ていた。
エリックは彼にも聞きたいことが山のようにあったが、今はそれどころではなかった。

「休暇は終わったんですか？」

「ええ、警部に呼び戻されました」

ぎこちない笑顔がディックの内面を映し出していた。
エリックは気付かない顔で、同じような笑顔を返すとわざと黙り込んでいる警部に目を当てた。

「もう引き返せないことだけは言っておきます」

警部はまるで怒ったようにエリックに言った。

「僕はもう逃げないと決めたんです。それに僕が傷つこうが真実は変わらない。余計な同情は無用です」

「あなたは一般人だ。本当ならここまで知る必要はなかったんです」
「でも、部外者ではありませんよ。結末を知る権利はあるでしょう」
「結末……」と、警部は噛みしめるように呟いた。
そして、心を決めたように病室のドアをノックした。
「はい」
不安そうな声の主がドアの向こうから近づいて来た。
ドアを開けたチャールズは警部を見るとハッと視線を外した。
「スコットランドヤードのキャンベルと申します。奥様にお伺いしたいことがあるのですが」
「つ、妻はさっき眠りについたところです。絶対安静だと医者からも言われているんです」
「ええ、わかっています。病院からの了承も取った上でお願いをしています。どうか、中に入れてください」
「でも、本当に手術が終わって間がないんです。何の用か知りませんが、とても無理です！」
「チャールズ」
ドアのところで押し問答をしている彼らの耳に、静かで力のない声が聞こえた。

「入っていただいて頂戴。私は大丈夫だから」

「でも！」

チャールズは泣きそうな顔で振り返ると自分の妻の顔を見た。
彼女の顔は窓の光を受けて、凛と輝いて見えた。
それは、刹那の幻のようにチャールズには思えた。

「警部さん、スイスから戻ってこられたんですね。お話を伺いますわ。その前にすみませんが、主人を外に出して頂けませんかしら。この人がいると私も落ち着いて話せませんから」

「ジェイン！」

「お願いします」

ジェインの哀願の意思を汲み取ると警部はディックを呼んだ。

「ご主人を連れ出してくれ」

「わかりました」

ディックはそれだけ答えると抵抗するチャールズを有無を言わさず病室から連れ出した。

―3―

チャールズは病室を出されてからも、しつこく何かをわめいているようだった。
まるでこの日が来ることをもうずっと前から知っていたような、いや、恐れていたような悲しみに満ちた彼の大きな瞳がエリックの脳裏に焼きついた。
どこか憂いを抱えたような今までの彼の言動や態度を思い出し、エリックの胸は切なくなった。

「お怪我をされたそうですね」

ディックに連れられたチャールズの声が遠ざかっていくのを待って、警部は穏やかに声をかけた。
ジェインは上半身をゆっくりベッドの上に起こすと、

「不甲斐無いの一言です」

とどこかさばさばしたような口調で言った。

「それは、そんな馬鹿なことをした自分に対して？　それとも目的を達成できなかったことに対して？」

ジェインは数秒考えた後、

「どちらも、ですわ」

と疲れたような笑みを洩らした。

「それでも、命は大切にしなければいけませんよ。もうあなた一人の体ではないのですから」

警部のその声を聞いた彼女の目から一筋の涙が頬を伝い落ちていった。

彼女は自分でも驚いたように、その涙を拭うと次の瞬間には毅然とした表情に戻った。

それは、自分の脆さを恥じるようなそんな風にも見えた。そして、エリックに視線を移すと今度は悲しい顔をした。

エリックはそんな瞳に返す言葉をなくしたように俯くしかなかった。だから、そのときの彼女の本当の顔を彼は一生知らない。

ジェインは警部に向かうと覚悟を決めたように顔を上げた。

「なんでも聞いてくださって結構です。逃げも隠れも致しませんから」

あなたがお知りになりたいことはおそらくすべてお答えすることが出来るでしょう、と彼女は言った。

警部は深く頷くと、

「あなたはいつも逃げなかったじゃないですか。最後のあの日を除いては……」

と言った。

「逃げることを知らなかったんです。もっと早くに逃げていたら、おそらくこんなことにはなっていなかったでしょう」

もう二度と戻れない過去を悔やむように彼女の笑顔は歪んだ。

―4―

「一体、誰のためだったんです？　それが私にはよくわからないんですよ」

警部の質問にジェインは「さぁ、誰のためだったんでしょう」とまるで他人事のように答えた。

「なにもかもがもう遠い昔のことのようで……」

ジェインの視線はチャールズが去ったドアの方向に流れた。

「あなたは本当に彼のことを愛していらっしゃるんですね」

警部はジェインの視線を追うように尋ねた。

「ええ。でも、それが間違いの元だったとようやくわかりましたわ。今ならすぐに諦められることが、その時はどうしても出来ませんでした」

長い話になることを覚悟したのだろう。彼女はベッドのそばのスツールに座るよう、警部とエリックに勧めた。

しかし、エリックは小さく首を横に振ると、彼らから少し離れた場所に立つことを選んだ。

警部はジェインが勧めてくれたスツールに腰を降ろすと言った。

「あなたは完璧に演じていた。なのに、どうしてあんなミスを犯したんです？」

「ミス？」

「いや、そうじゃない。あれはわざとだったんですね」

「なんのことですか？」

エリックは警部とジェインがお互いの腹の探りあいをしているのかと思ったが、そうではなかった。

彼女は警部の言葉がどのことを指しているのかわからないと言うように首を傾げた。

「あなたがスコットランドヤードに掛けてきた電話ですよ」

警部は、ジェインが掛けた、ある三流誌のパメラの死に関する記事の内容に対する抗議の電話のことだとさらりと告げた。

「あの電話がなかったら、パメラさんの事件は静かに終わっていたでしょう」

「静かに？」とジェインは眉間に激しく皺を寄せて警部に尋ねた。

「三人の人間が亡くなっているのに、静かに終わるんですか？　本当に？　一番悪い人間はのうのうと生きているのに？」

「あなたはそれが許せなかったんですね」

違います、とジェインは首を横に振った。

「私は自分がしたことが恐ろしくなったんです。それだけです」

彼女は震える自分の体を両手で抱いた。

「三人、と今仰いましたね。アリシアさんとシドニーさんのほかに、まだ亡くなった人がいるんですか？」

エリックが驚愕の表情で尋ねた。

「そのことは追々わかりますよ」

警部はそう言うに留まった。

―5―

「チャールズさんはご存知だったんですか？」

何を、と今度は彼女は聞かなかった。曖昧な質問形式に少し焦れたようにため息をつくと、それでも我慢をして彼女は答えた。

「いいえ。彼は知りません。あの人は全く関係ありません」

「そうでしょうか」

ジェインの反論を封じるようにその言葉は続けて発せられた。

「薄々、勘付いておられたんじゃないですか？」

そして、それをあなたも気付いていた……。

警部の質問はジェインの神経を酷く疲れさせるものだった。それでも、彼女は己の忍耐を掻き集めるように、まっすぐ彼を見据えると口を開いた。

「警部さん、あなたはどこまで知っていらっしゃるんですか？」

警部はすぐには答えなかった。

緊張の糸が今にも切れそうな危うい空気の中で、エリックは息をすることも忘れていた。

「そうですね。実のところ、まだすべてを知っているわけではないのです」

「ということは、私が嘘を言ったとしてもわからないということですね」

嘘の種類によりますが、と警部は当惑げな顔をした。

「ただ」

と彼は彼女の目をまっすぐに見つめると言った。

「あなたがついた過去の嘘については言及出来るつもりです」

ジェインは無言だった。
逆にそれが彼女の答えだとも言えた。
彼女は悪寒がするように再び自分の体を両手できつく抱くと小さく息をついた。

「終わりというものはあっけなくやってくるものですね。望まないことをしたわけではないのに、私はこれが夢だったらどんなにいいかといつも思っていました」

彼女は相反したことを言うと静かに目を閉じた。

後悔しない日はなく、幸せとは程遠い日々だったと続けた彼女の言葉は、まさに懺悔以外の何ものでもなかった。

―6―

悲しいことやショックなことがあまりにも度重なると、頭の中は飽和状態になって、もうそれ以上の悲しみはゼロと同じ感覚になるらしい。

そうでもしなくては、とても精神の均衡を保っていられない、せめてもの心の防御本能なのだろう。

エリックは冷めた頭でそう考えた。

人のつく嘘は悲しい。ましてや誰かを傷つける嘘は……。

それが信頼していた人々の口から発せられたという事実が、たまらなく辛いエリックだった。

警部は手帳を取り出すとゆっくり尋ねた。

「あなた方は本当はとても仲が良かったそうですね」

アリシアさんの所在を尋ねるために孤児院へ伺った折、あなた方をよく知るシスターが教えてくれたのですよ、と警部は明かした。

「彼女はとても聡明で、私の誇りでした」

ジェインは瞳を移ろわせ、まるで彼女の幻に語りかけるように厳かに呟いた。

「あなた方は、そして、とてもよく似ていた」

二人の育った孤児院のシスターは、姉妹のように、お互いを支えあうように生きていた彼女たちの姿を今もよく覚えていた。

「あなた方の間にチャールズさんが現れるまでは、何もかもうまくいっていたと言うことですか？」

チャールズ……。

と、彼女は消え入りそうなほど小さな声でその名を告げた。
まるで永遠に失った宝物のように。

「あなたは実のところ彼のことをかなり前から知っていましたね」

エリックの頭が警部の言葉と同時に彼女を向いた。
彼の心の奥で、落ち着かないものがざわざわと騒ぎ始めていた。

「あなたは自分の出生の秘密を知るために院を抜け出している。そのときですね、彼の存在を知ったのは……」

警部は彼女の心に訴えるように問いかけた。
彼女は誤魔化すつもりもないらしく、素直に頷いた。

「最初は興味からでした。でも、高校で実際出会って、私にはもう彼のことしか見えなくなっていました」

「じゃあ、あなたは最初から知っていたわけですね。チャールズさんが双子の兄だと言うことを」

警部の質問は、エリックがどうしても首を傾げずにはいられないものだった。

―7―

彼女はガクッと項垂れると同時に両手で顔を覆った。そして嗚咽のような声を洩らすと、しばらくそのままの状態で動かなかった。

戦慄がエリックの背中を走った。

今まで知り得たすべての情報がものすごい勢いでフィードバックされてゆく。

エリックはとてもではないがそのスピードについていけそうもなかった。

グラッと傾いだ自分の体がまるで他人のもののように、感覚もなかった。

「あなたなのですね、本当のアリシアさんは。そして、パメラさんの替え玉をしていた人こそが、ジェインさんだったのですね」

ガタン、と大きな音が聞こえた。

それが自分が倒れかけて、テーブルに寄りかかったときの音だとは、すぐにはエリックもわからなかった。

それほど、警部の発言は衝撃的で思いもよらぬものだった。

「どうして……。なんで、そんな……」

あとに続く言葉はエリックにもわからなかった。

ただ、涙だけが込み上げてきて勢いよく流れた。

それは裏切られた悲しみよりも、真実の残酷さに対してなのだろう。

思考は拒絶の意思を示し、しばらく何も考えられなかった。

警部はエリックを振り向かなかった。

彼も神の悪意をこれほど恨めしく思ったことはなかった。

「ミシェルさんも知っていたんですね」

警部の非情な問いかけに、彼女は顔から手を離すと静かに答えた。

「あの人はどうしても先生を失いたくなかったのです」

そして、あなたはチャールズさんを失えなかった……。

彼女は再び口に手を当てて、涙を流した。

―8―

皮肉にもエリックの見立ては、決して外れてはいなかったことになる。

エリックは浅い思い出を紐解くように、混沌の海の中、彼女との会話を甦らせていた。

短い沈黙を破ったのは警部の声だった。

「ここに一枚の写真があります。孤児院からお借りしてきました」

アリシアはしっかり目を閉じて、明らかに拒む様子を見せた。

エリックはゆっくりとおぼつかない足取りで警部の側に立つと、彼の手の中の写真を見つめた。

それは高校生くらいと思われる二人の少女がにこやかにカメラに向かって微笑んでいる写真だった。

二人は本当によく似ていた。おそらく別々に出会ったら同一人物と見紛うほどに……。

「これはあなたとジェインさんですね。どちらがあなたか教えて頂けますか？」

苦しげに眉を寄せながら、彼女は目を閉じたまま答えた。

「髪の長い方が彼女です」

アリシアの瞼がピクピクと痙攣するのを警部は気の毒そうに見やった。

「本当によく似ていらっしゃったのですね。しかし、あなた方は完璧を求めた。ただ一人の人間のために……」

そう。チャールズ・ウィーバー、その人のために。

「言い出したのはあなただったのですか」

「違います！」

彼女は激しく首を振りながら、はっきりと否定した。

「では、ジェインさん？」

アリシアはその問いかけにも首を横に振った。

「じゃあ、一体誰が？」

まさか、ミシェルさんだと言うのではないでしょうね？

付け加えられた警部の言葉に、エリックの体が凍りついた。

―9―

アリシアは、けれど、またゆるく首を振った。
警部は深追いをせず、質問を少し替えた。

「あなた方はいつ、入れ替わったのですか？」

アリシアは遠いかなたを見るような虚ろな目をして言った。

「ジェインが仕事を辞めて、チャールズと結婚する、その頃です」

警部は疑いのこもった目で彼女に尋ねた。

「それはちょっと信憑性に欠けますね。いくら、あなた方がよく似ていても、チャールズさんには区別くらいついたでしょう？」

「ええ、ですから、整形手術をしたのです」

警部はまだ信じられないと言う顔をしながらも、改めて尋ねた。

「あなたがジェインさんになりたかったのはわかります。でも、ジェインさんはよく承知をなさいましたね。あなたがジェインさんになるということは、彼女自身がもう今までどおりの自分ではいられなくなるということですよ。いくら親友の頼みでも、そこまで出来るものでしょうか」

それに対して、アリシアは顔を苦痛で歪ませた。
警部はその顔を見ながら、質問を重ねた。

「ジェインさんはその時すでに決心をしていたというわけですね。自分がパメラさんの影武者として生きることを……」

アリシアのきつく閉じた目がふるふると震えていた。

「なぜだと、思われますか？」

エリックの頭がガンガンと痛くなった。まるで外からも中からも金槌のようなもので叩かれているほどの衝撃で、目を開けていることさえ困難だった。

ウソ、ウソ、ウソ……。

何もかもが、最初から、ウソだった。

ジェインと信じていた女性も、親友と信じていた男のことも、エリックには本当は誰だったのか、もうわからなくなった。

人の心が怖いと言ったエレンの言葉の意味が生傷にトウガラシをすり込むようにジンジンと毒が広がるごとく体中に染み渡っていった。

視界が霞み、世界の何もかもを恨み始めた彼の目の前に、いつか夢で見た女性の幻が静かに姿を現した。

その時、エリックはハッと気がついた。

あの哀しげな顔は懺悔以外の何ものでもなかったと。

まるで許しを請うような、それでいてどこか開放されたような綺麗な顔はアリシアでも、パメラでもなかった。

ということは……。

「ジェインさんはミシェルを愛していたんですね」

彼の愛する人の身代わりを望むくらいに……。

―10―

しかし、エリックの声に答えたのはアリシアではなく、警部だった。

「そうなのでしょうか？」

それはとても意外な反応だと言えた。

「どういうことですか、警部？」

エリックの答えをすんなり否定した警部の考えがエリックには読めなかった。

警部はそれには答えず、アリシアの目をまっすぐ見つめた。

「アリシアさん、あなたがジェインさんとして仰ったことのすべては空想のものですか？」

ジェインは激しく首を横に振った。

「いいえ。あれはジェインが私に話してくれた彼女の記憶そのものです」

アリシアが完璧にジェインになりきるためにも、ジェインは自分に起こったこと、感じたことのすべてをアリシアに伝えていた。

警部は彼女の必死の説明に満足そうに頷くと、「だからこそなのです」と言った。

「だからこそ、我々はあなたの言葉を心から信じた。本当のジェイ

ンさんもあなたが演じたままの人だったのでしょう?」

純粋で、一途で、正義感に溢れ、忠義に厚い……。

そして何より恩師であるパメラのことを崇拝していた。

「ジェインさんは抗いきれない正義感のために、ただ、ただ、心のままにパメラさんの手助けをしたいと思われたということではないのでしょうか?」

確かにチャールズとの結婚に迷いが生じていたことも理由の一つではあっただろう。

しかし、彼女の性格から推察して、病んだパメラを見捨てて自分だけが幸せを選ぶような女性とは決して思えないのだと警部は言った。

「ですが」

警部は声のトーンを落とし、続けた。

「エリックさんがパメラさんと紹介されて出会ったジェインさんはすっかり別人のようだった。とても神経質で、精神的に不安定になっていたのです。何故だったのでしょう? 三ヶ月ほど前、彼女がこの島にやってきた時、実はあなたも正直、とても驚かれたのではないですか?」

―11―

アリシアは警部の問いにあえて口を噤んだ様子だった。
警部には彼女自身の混乱が見て取れた。

「では、質問を替えましょう。あなたがチャールズさんと結婚をされて、ジェインさんはパメラさんの身代わりをされていたわけですが、それに関して、ミシェルさんはどう思われていたと思いますか」

アリシアは苦渋に満ちた顔をしながらもゆっくりと思い出すように答えた。

「よくはわかりませんが、ミシェルさんは感謝をされていたと思います。ジェインの話では、ミシェルさんは先生のことをとても大切に思われてるということだったので……」

「あなたは彼とパメラさんが血の繋がっていない姉弟だということを当時、知ってらっしゃいましたか？」

「ええ……、ジェインから聞いていました」

アリシアは肯定はしたが多くを語らなかった。
警部はあえてそこのところを掘り下げて、言った。

「失礼ですが、あなた自身、彼に対して同情のようなものを感じられたのではないですか。自分の境遇と少し似ているように思われて……」

アリシアは目を閉じると大きく息を吐いた。

「全く、感じなかったとしたら嘘になります。でも、ミシェルさんと私とでは全然違いました。あの人は純粋にお姉さんのことを心配しておられたんです」

「あなたは直接、彼と話したことはあるのですか？」

レストランで働いていた時、ほんの少しだけ話したことはあるが、ちゃんと話したことはなかったとアリシアは言った。

「じゃあ、あなたの意見はジェインさんの受け売りに過ぎないというわけですね。それでは、彼がパメラさんのことを本当はどう思ってたかという正確な答えにはなりませんね」

「確かに、私はミシェルさんの口から直接聞いたわけではありません。でも、ジェインは常に公正な立場で話をしてくれていました。ミシェルさんが先生をそういう意味で愛しておられたとしたら、絶対にわかります！」

ほほう、と警部は言った。

「どうしてそこまで言い切れるのです？」

「それは、ジェインがミシェルさんと先生を心から信じていたからです」

「つまり、彼女はミシェルさんに恋愛感情を抱いてはいらっしゃらなかったということですね」

アリシアはどこか観念したかのような表情で頷いた。

「少なくとも、あの時はそうだったんです。私がジェインとして生きる決心をし、彼女が先生として生きると決めた時は……」

おそらく、その時点では彼女たちの不安を目にすることは出来なかったのだろう。

お互い、うまくやり通すことだけで頭が一杯で、その先に何が起こるかということまではとても考えが及ばなかったに違いない。

―12―

「そもそもこの事件の発端はなんだったのでしょう」

警部はツールから立ち上がると言った。その体は自然とエリックに向けられていた。

エリックは虚ろな視線を過去に巡らせるようにゆらりと揺らした。

「普通、我々、警察が関わるのは、事件が起こってからの場合がほとんどです」

捜査中に起こる連続事件は別として、と彼は注釈を入れた。

「しかし、実際はそこが出発点というわけではない。殺人事件においては、むしろ、事件そのものがすべての終焉と言っても過言ではないでしょう」

アリシアは唇を噛みしめながら、警部を見ていた。

警部は続けた。

「この事件の場合、終焉はパメラさんの死のはずでした。しかし、蓋を開けてみると本当に亡くなったのは彼女ではなかった」

「待って下さい、じゃあ、本物のパメラさんは生きているってことですか？」

それは今までエリックが考えもしないことだった。しかし、それは大いに在りうる事だった。

しかし、警部はエリックではなく、アリシアの方に体の向きを変えると言った。

「そうなのですか、アリシアさん？」

アリシアは警部の強い視線に耐え切れないように俯くと首を左右に振った。

「そう、彼女はおそらく亡くなっています。そして、そのことこそが今回の事件の発端だったのではないでしょうか」

警部はエリックの前に立つと手帳に挟んだもう一枚の写真を彼に見せた。

「この人を知っていますね？」

エリックは、ハッと息を飲んだ。

「ええ、間違いない、彼女です！　僕が会ったパメラさんはこの人です……」

警部は小さく頷くと、今度は同じ写真をアリシアに見せた。

「では、アリシアさん、あなたにもお聞きします。この人は一体、誰ですか？」

アリシアは写真に目を合わすことが出来なかった。

しかし、警部はそれを許さなかった。

「アリシアさん、よく見てください。これはあなたではないのです

か？」

違います！　と、アリシアは首を激しく振りながら叫んだ。

「ジェインです。私じゃない……」

そう、と警部は落ち着いた声で言った。

「メイクのせいで別人に見えますが、確かにジェインさんです」

これがどういうことかわかりますか、と警部はエリックに尋ねた。

エリックは写真と目の前のアリシアを見比べると自信がなさそうにつぶやいた。

「もしかして、ジェインさんは整形をしていなかったということですか？」

つまり、ジェインは二人いた……。

警部はその答えに満足したようにゆっくりと頷いた。

そして凍て付くような冷たい目でアリシアを見つめると、こう告げた。

「あなたは、それを知らなかったのですね。てっきり、彼女もあなたと同じようにパメラさんに似せて顔を変えたものと思っていた」

そして二ヶ月前、ジェインさんがこの島に現れて初めてその事実に気づいたのですね……。

警部の言葉にアリシアの表情が強張るのがエリックにもわかった。

―13―

「アリシアさん、あなたは本当にもとの自分を捨て切れたのですか？」

警部は厳しい眼差しのまま、彼女に問いかけた。

一瞬、彼女が息を飲んだのがわかった。しかし、それだけだった。

「あなたは確かにジェインさんになりきろうとした。きっとその努力は半端なものではなく、相当大変なものだったのでしょう。それこそ、毎日逃げ出したくてたまらないほど。それでも平穏な日々はあなたの努力で続いていた。そう、これからもずっと続いていくはずだった」

警部は何が言いたいのだろうとエリックは思った。その意図は彼には判りかねた。

「なぜ、ジェインさんはこの島にやってきたのでしょう」

警部の問いかけに、彼女は一切答えなかった。

暗い眼差しはただ一点を見つめていた。まるで、救いを求めるように、薬指に光る小さなダイヤだけを……。

エリックはたまらなくなり、彼女のかわりに答えた。

「それは、チャールズさんとよりを戻すためだったのでしょう？」

「よりを戻す？」

警部はいぶかしげな顔でエリックを見た。

「本当のジェインさんは彼に対して特別な愛情を持っていたわけではなかったのですよ」

「でも婚約をしていたわけだから、少なからず、気持ちは彼にあったんじゃないんですか？」

「推測に過ぎませんね」

警部の答え方は冷たかった。

「でも、チャールズさんだって言っていたじゃないですか。彼女が、もう自分は昔のアリシア・ヘイワーズではないのだから、二人でやりなおせるのだと言っていたって……」

そこまで語って、エリックは何かに気付いたようにハッと口を噤んだ。

そして、急に蒼ざめた。

「どうして……？」

警部は彼の心を読んだように疑問を言葉にした。

「ジェインさんはパメラさんの代役をしてはいましたが、アリシアさんになったわけではなかった……」

エリックは言葉を無くしたように、ただ警部にすがるような視線を向けていた。

混乱している彼と裏腹にアリシアは不思議と落ち着いていた。

そのことが警部にはある人物を思い起こさせていた。

「それがどういう意味か、あなたならわかりますね？」

「チャールズがあなた方に嘘を言ったと？」

「そうです」

「何のために？」

―14―

「さぁ、それはわかりません。それに関しては、後でゆっくりチャールズさんにもお聞きすることになるでしょう」

警部はどこまで真相を知っているのかわからない口調で言った。実のところ、エリックにも彼の心は読みきれなかった。すべてを知っていてアリシアを翻弄しているようにも見え、一方では彼女に鎌をかけて真実を聞き出そうとしているかのようにも見えた。

一筋縄でいかないのは、二人の共通した性格だった。だからこそ警部は、手の内をそう簡単に彼女に見せないのかも知れなかった。

アリシアはため息のような長い息を吐くと言った。

「それには及びませんわ。チャールズは本当のことを言っただけですから」

「どういうことです?」

警部は彼女の言葉に、さして驚きもせず尋ねた。

「警部さんはもうすべておわかりになっていらっしゃるのでしょう? ジェインが何のためにこの島にやってきたのか。そして、何が起こったか……」

警部は自分の顎に手をやりながら、狡猾とも思える眼で彼女を見据えた。

「ええ。でも、完璧ではありません」

あまりにも苛烈な視線に、正直、逃げられると確信出来る者はいないとさえ思えた。また、対抗できる者も。

しかし、アリシアに関しては違った。

彼女はあくまでも冷静だった。彼女が今立ち向かっているのは警部ではなく、過去の出来事だけだった。

「警部さん、何もかも壊してしまいたくなることってありませんか？　明日のことなどどうでもいいから、すべてを無くしてしまいたいと思うことって……」

抽象的な質問に警部は少し考えてから、「自分も人間ですから」と答えた。

アリシアはどこか寂しげな笑い方をすると、言った。

「ジェインはそれを実行しに来ました。けれど、私はそれを拒めなかった。そういうことです」

「では、ジェインさんはわざとあなたの振りをして、チャールズさんに会ったというわけですか？」

彼女は肯定も否定もしなかった。

ただ、酷く苦しそうに表情を歪めると、唇を震わせた。

彼女は何かを恐れているように見えた。

真実を話すと言った彼女の本心に嘘はないのだろう。

だが、何かが彼女の理性の邪魔をした。

「あなたの嘘を一つ教えましょうか」

警部の視線は彼女の背後に向けられていた。まるで、一つ一つ彼女に憑いた霊を払うように、強い視線のまま……。

彼女は無言だった。

「あなたはミシェルさんについて、ほとんど会ったことがないと言いましたね」

「ええ、それが……何か」

「しかし、ミシェルさんはそうは仰らなかった」

警部は彼女の背後から、彼女自身へと視線を移した。

「それでは、彼が嘘をついているのでしょう」

「本当に？　私はそうは思いません」

アリシアはあくまで表情を変えなかった。

―15―

「ミシェルさんは確かに嘘をついている。でも、真実も告げています」

「何を仰りたいのです」

「彼があなたのことをどう話していたか、知りたくはありませんか？」

アリシアの瞳の中に今までになかった苛立ちが見え隠れしていた。警部がそれを見逃すはずがなかった。

「人は嘘をつくとき、必ず真実も同時に告げています。なぜかわかりますか？」

彼は傍観者であるエリックに問いかけた。

「嘘に、より真実味を持たすため、ですか」

エリックは突然ながら、思うままを告げた。

「それもあります。しかし、たいていの人間はそれほど器用ではありません。よほどのプロでない限り、そういう小細工はかえって自分を混乱の中に貶めるだけです」

悪魔の心を持ったものはそれの限りではないでしょうが、と彼は付け加えた。

「じゃあ、何故なんです？」

「彼らが語る真実はたいてい本人が重要と思わないものに限られる。つまり、無意識の仕業によるものです」

嘘は心を重くする。確かに、これほど自分自身を裏切る行為は他にないだろう。

「嘘をつき続けるということはかなりのストレスです。しかし、目的のためにはどうしても耐えるよりない。そんなとき、人は無意識にどうでもいい真実を嘘の中に散りばめるのです。ある意味、歪んだ現実逃避の一種と言えます」

自分の頭の中だけで作り上げた虚構と言う名の現実。それから逃げるために、たわいのない真実に頼る。その刹那の安寧だけが自分を保つよすがなのだと。

しかし、アリシアも屈しなかった。

「私ではなく彼の言葉が真実だと仰るのは、いわばそういう単純な理由からだけですか？」

それでは、どちらが本当に嘘をついているかどうか見極めることは困難だと彼女は瞳をぎらつかせながら言った。

「あなたが、その真実を見分けられる人間だというのならまだしも……」

「残念ながらそういう能力はありません。しかし、私には経験があ

る。それに、協力者もね」

「協力者？」

「我々にはあらゆる情報網があるということです。そのおかげで、一つ一つ嘘を暴くことなんて、そう造作もないことなんですよ」

「じゃあ、あえて私になどお聞きにならずともよいのではありませんか。正しいと思う方を勝手にお信じになれば」

半ば投げやりなアリシアの言葉に警部は薄笑みを洩らした。

「では、その前提で話を進めさせて頂きます。あなたは本当はミシェルさんをとてもよく知ってらっしゃるということで……」

アリシアはまだ完全には納得していない様子で、唇をきつく結んだ。

―16―

警部はそのことについて細かく言及することはせず、ただ彼女の表情の変化を見守っていた。

アリシアを追いつめたいわけではなかった。むしろ、口を閉ざされることが怖かった。

すべての決定権は彼女が握っているも同然で、真実に近づくためにはまず彼女という難関を越えなければならなかった。

彼が突けるところは整合性それのみに尽きた。

「ミシェルさんとあなたは少しの間付き合っていましたね？」

彼女は無言のまま、不機嫌そうに横を向いた。

「では言い方を変えましょう。付き合っているという自覚はあなたにはなかったかもしれないが、ミシェルさんの方はあなたを心の拠り所に思っていた」

アリシアは横を向いたままで答えた。

「彼は先生のことでとても疲れていたんです。特別、私を愛しているとかそういうのではなかったけれど、安らぎを求められているのはわかりました」

「彼はあなたに結婚を申し込んだんですね？」

「ええ」

「それで、あなたはどうしましたか？」

「出来ないといいました。私には好きな人がいるからと……」

ミシェル自身、本気ではなかったと思うと彼女は答えた。
彼はただ現実の辛さから逃げ出したかっただけなのだと。

「あなた方の関係をジェインさんは知っていたのですか？」

「いいえ……。ジェインとミシェルさんが一緒に店に来ることもなかったですし、最初は彼が先生の弟さんだということも知りませんでした」

率直に言って、彼はどういう人でしたか？

警部の質問にアリシアは無難な言葉でしか答えなかった。

「とても繊細な人だと思いました。そう、稀に見るくらい誠実な人だと……」

アリシアが働いていた店は昼間は普通のレストランだったが、夜は酒場に様変わりした。それはさして珍しいことではなかった。
つまり、昼間には来ないお客たちが入れ替わり立ち代わり現れていた。
若くて綺麗なアリシアは客あしらいもそこそこ出来て、彼女目当てで飲みに来るお客も少ないとは言えなかった。
彼らはたいてい日常に疲れた顔でやって来る。嫌なことを忘れるために酒を飲み、胸に溜まった愚痴を吐き出すことで、彼らはひと時の安らぎを得ていた。

ミシェルもそういうお客の一人だった。ただ、彼が抱えていたもの

は彼の荷には重すぎるほど深刻なものだったが……。

アリシアは、彼の泣きたいほど優しい声を思い出していた。

傷ついた十字架　―1―

いつもたった一人で店の隅のほうで飲んでいる彼の姿は、酒場には不似合いでどうしても気にならずにいられなかった。

あの日も彼の顔はまるで吸血鬼に生気を取られたかのように、いつにも増して色がなかった。

「どうしたの何かよくないことでも?」

アリシアはしつこい客を撒いて、ミシェルのテーブルに座ると彼の手に自分の手を重ねた。

冷たい手だった。

「もう駄目かもしれない……」

彼は片手で顔を覆うとくぐもるような声で言った。

「何がダメなの?」

仕事がうまくいかないの?

アリシアはありったけの優しい声を出して尋ねた。

媚びようとしてではない。ただ、他の客には湧かない感情が彼に対してはあった。

ミシェルはわずかに頷くと「何もかもがうまくいかないんだ」と嘆いた。

ともすると酒場の喧騒にかき消されてしまうほどの小さな声はアリ

シアの心に沁み付いた。

それからは彼の姿を見かけると、アリシアはほかの客を後回しにしても彼のテーブルを優先して訪れるようになった。

そうは言っても、あくまでそれだけの間柄だった。ただ、彼のそばにいると心に安寧が生まれたというだけの……。

（今思えば、破滅の序曲はあの頃から、もう始まっていたのかもしれない……）

チャールズへの気持ちが醒めたわけではなかった。

彼を追いかけてロンドンにまでやってきたものの、チャールズは自分を拒み続けて取り付く島もなかった。

大学を卒業したらすぐにもジェインと結婚するから、もう邪魔はしないでくれと釘も刺され、アリシアは表面上は頷くよりなかった。

行き場のない思いがささやかな癒しを求めていたとしてもそれは仕方がないことだったのではないだろうか。

彼がただの通りすがりのような人間であったなら……。

— 2 —

ミシェルは自分から多くを語る客ではなかった。
それでも、彼の仕事がパメラの補佐だということを追々に知り、少なからずアリシアは驚いた。
アリシアにとってもパメラは高校時代の恩師には違いなかったが、正直、ジェインほど彼女に傾倒していたわけではなかった。むしろ、彼女が時おり見せる教師特有の潔癖さや生真面目さが陰鬱に感じて、どちらかと言えば苦手なタイプと言えた。

ミシェルが抱えていた苦悩は、本人のあずかり知らぬ所で自然にアリシアの耳に入ってきた。
ジェインはよほど彼のことが気に入っていたのだろう。彼女との会話の中に、ミシェルの名前はかなり頻繁に登場するようになっていた。

あの当時、アリシアの心はそういう意味から言うと、とても落ち着いていたのかもしれない。
ジェインの心が、元々チャールズには遠い位置にあったことは間違いないにしても、完全に離れてしまうのも時間の問題だという勝算があったから。
後に、ジェインのミシェルに対する気持ちはそんな甘いものではなく同志のようなものらしいとわかってからも、ジェインの心からチャールズそのものが消えつつあったことは疑いようもない真実だった。

少なくともあの頃は、パメラを頂点に、ミシェルとジェインは二等辺三角形を形作るように両方から彼女を支えていたのだと思う。
パメラがケインと結婚するまで、そのバランスは綺麗に保たれてい

たのではないだろうか。

その夜のミシェルはいつもは頼まないような濃い酒をオーダーすると、早いピッチで飲み始めた。
アリシアは、それまでとは比べ物にならないほどの無茶な飲み方に気付くと、見かねたように彼の手からグラスを取り上げた。
彼はすでに酩酊に近い状態で体を傾けながら、それでも眼だけは強い力で彼女を見ていた。

酔えない苦しさが一目でわかった。
彼はシニカルに微笑むと「君もどう?」と酒瓶を振った。
アリシアは怖い顔で彼を睨んだ。
ミシェルはそれを見るとつまらなそうに彼女からグラスを取り戻し、また酒を呷った。
そして、テーブルに頬杖をつくとアリシアに尋ねた。

「君は好きな人はいるの?」

突拍子もない質問だった。それより何より、彼がアリシアに何かを尋ねたのは初めてだった。

「ええ、いるわ」

彼女は正直に答えた。

「叶わない相手だけど……」

ふーんと怠惰そうに呟くとミシェルは思いついたように続けた。

「じゃあ、僕と付き合わない? 僕は君がとても気に入ってるし」

最低なプロポーズだと彼女は苦笑いした。

お酒の上で彼女を口説いてくる客はいくらもいたが、ミシェルの言葉はそれらのどれとも違った。

彼の寂しさの原因がどこにあったのか、アリシアはすでに知っていた。

『先生の結婚は９９パーセント、間違っていると思うわ』

数日前に会った時のジェインの言葉がアリシアの耳にまだ生々しく残っていた。

―3―

彼が荒れている理由をパメラの結婚と結びつけたのには他にも理由があった。

『ミシェルさんは本当の弟さんではないけれど、それは献身的に先生に仕えていらっしゃると思うの』

そう語ったときのジェインの口ぶりは、それが報われているとは言えないというニュアンスを暗に伝えていた。

彼らの姉弟になったいきさつはそれこそ、彼女の口から随分前に聞かされている。

ミシェルとパメラの間に恋愛関係に似たものがあったのか、それはわからない。

ただ、思うのだ。そうでなくても、人は自分ではない誰かを選ばれた時に計り知れない寂しさを味わうということを。

（それがどういう理由であったとしても……）

「今度、昼間の君に会ってみたいな……」

誰にも興味を示さないと思っていた男の寂しい一言にアリシアの心がわずかに動いたのは確かだった。

「そうね。ランチを食べに来てくれたら、コーヒーくらいはサービスしてあげるわ」

ミシェルはただ笑っただけだった。

彼も知っていた。
こういう場所で語られる科白がすべて真実ではないことを。
だからこそ、思ってもいないことを自由に語れることを。

ミシェルはそれから昼間にもその店を訪れるようになった。

相変わらず、ジェインはそのことを知らないらしく、アリシアも告げるきっかけを失っていた。
ジェインからミシェルの話を聞くたびに、今日こそは、今日こそはと思うのに、なぜか話せなかった。
別に自分が彼のことを知っていると伝えたところで何も変わらないとわかっていたが、それでも不安定な後ろめたさのようなものが胸の辺りにまとわりついて離れないのだ。
やましさなど欠片もないと思っていても、ジェインの知らないミシェルのことを自分は知っているのだと思うだけで、口が重くなった。
普段なら、そんな些細なことを気にする性質ではないはずなのに。

ジェインからミシェルの話を聞きながら、どこかでジェインがミシェルと付き合うことを望んでいた。そうすれば、チャールズは失恋して、完全に自分のところに戻ってきてくれるかもしれないと思ったのは正直な気持ちからだった。

(そのためにも、自分はあえて彼らにとって部外者であらねばならなかった)

しかし、そう言い聞かせる一方で、都合のよい言い訳だと思っていることも事実だった。

―4―

明るい時間の方が居心地よく思ったのか、ミシェルは計ったように昼になるとそのレストランに現れるようになった。　夜の彼と違って、昼間の彼はとてもほがらかで紳士的だった。
ジェインがよく彼のことをまるで貴公子のようだと話していたのも、なんだかわかるような気もした。
相変わらず、仕事の方は大変らしくて時たま憂鬱そうに眉根を寄せていることもあったが、それでも夜に現れなくなったということはおおむね順調なのだろうとアリシアは思っていた。

そんな頃、あの事件は起こった。
新婚旅行に行ったパメラが暴漢に新郎共々襲われたのだ。
地元の警察から一報を聞いて、驚き慌てふためいたジェインがミシェルの携帯に電話をかけてきたのは、ちょうど彼がランチを食べ終えた頃だった。

『もしもし、ミシェルさん？　先生が大変なんです。すぐ、戻ってきてください！』

受信機から洩れるほどの大きな声は午後の静かなレストランにも響き渡った。
食後のコーヒーを注ぎにミシェルのテーブルに近づいていたアリシアの足が思わず止まるほど、ミシェルの顔は真っ青を通り越して白くなっていた。

「どうかしたの？」

心配そうに尋ねるアリシアにミシェルは急に立ち上がると、

「姉さんが暴漢に襲われたんだ！」

そう言うなり、レストランを飛び出していった。

（なぜ？）

アリシアは自分の心に聞いた。

（なぜ、自分は嘘を言ったのだろう……）

あんなにも必死に。

（嘘は嘘を広げる……）

小さな綻びはやがて大きな破綻に繋がるということは十分わかっていたはずなのに。

―5―

自分はおそらく嘘をつくことは平気なのだろう。でないと、あんなとんでもないことを言うはずがない。しかも、ほんの少しの罪悪感もなしに……。

現実に戻ったアリシアは目の前の敵を見た。

一方、彼女の心に起こった微妙な変化を彼も見逃さなかった。今までなかった瞳の光の強さがそれを教えていた。

「あなたが見破ったという私の嘘はもうそれだけですか」

警部は首を横に振りながら言った。

「残念ながら違います」

別に残念になど少しも思ってはいないだろうに、とアリシアは警部を見ながら目を眇めた。

ふいに恐怖のような、悪寒のようなものが彼女の体を走り抜けた。彼の目はさっきから自分を見ているようで、実は全く別のものを見ていたのではないかと言う奇妙な錯覚に囚われだした。

それは今まで味わったことのない、気味の悪い感覚だった。

内面の動揺を気付かれぬように、そっと彼から視線を外した時、警部があるものを鞄から取り出した。

アリシアは信じられないと言うように、警部を批難した。

「あなたは刑事の癖に泥棒のようなことまでなさるんですか！」

彼が手に持っていたのは日記代わりにつけていたという例の家計簿だった。
警部はアリシアの怒りには触れずに言った。

「なかなか見つかりませんでしてね。うちの有能な刑事が家捜しをして、やっと見つけ出しましたよ。あの時、あなたは無造作にこのノートを出してきましたが、本当はとても大事なものだったのですね」

台所の床板の下に隠すほど、と警部は言った。

「ご主人には了解を得ています。あくまでも任意で」

「でも、それは私のものです」

「本当に？」と警部は首を傾げた。

「違うでしょう？　これは正真正銘あなたのものじゃありません」

誓って言えます、と警部は真面目すぎる顔で言った。

「あなたこそ、嘘を仰っているわ。書いた本人が言うのですから間違うわけがありません」

そのとき、彼女はまた嫌な予感に襲われた。
まるで、何かに体ごと巻き取られているかのような、身動きが徐々に封じ込められていくような本当に嫌な気持ちだった。

「あなたは今、自分からそれを認められましたね」

「え？」

そういうことだと警部は言った。

アリシアには何がなんなのか皆目わからなかった。ただ、嫌な気持ちだけが心臓の辺りを締め付けていた。

「我々があなたがジェインさんではないと疑った最大の理由ですよ。このノートの筆跡は、ジェインさんがパメラさんの元に残した膨大な書類の字とは似ても似つかないものだった」

わかりますか？

―6―

「つまり、あなたがジェインさんになりきる上で最も大切なアイテムだった」

いわばカンニングペーパーのようなものだと。

完璧に思えたメッキが一枚、一枚、剥がされてゆく。

アリシアは背中を焦燥感とは別の悪寒に似た何かが這い上がってくるのを感じ、思わず自分の体に両腕を回した。

彼女を支配しようとしているものは、あまたの後悔以外何ものでもなかった。

それでも、今さら後戻りは出来ないのだった。

「その優秀な刑事さんというのはあの人ですか？」

アリシアの思いがけない言葉に一瞬、警部に隙が生まれた。

アリシアは言葉を続けた。

「すぐに普通の人ではないだろうというのがわかりました。とても利発で、聡明な方だったので覚えています」

警部は不審げな顔で、彼女の言葉の意図を探ろうとしていた。

「警部さんの妹さんだそうですね」

血の繋がらない、とアリシアは言った。

「ええ。それが何か」

「いえ、別に。ただ、シンパシーを感じただけです。あの方は今、どこに？」

警部は慎重に答えた。

「別の任務についています。警察はとても忙しいところですので」

しかし、その時を境に警部の言葉数が少なくなったのは事実だった。自然と彼女への追及の手が緩んだ気がして、エリックはえもいわれぬ不安を覚えた。

アリシアの病室に看護師と医者が飛び込んできたのはちょうどそのときだった。

面会の時間をとっくに過ぎていることと、まだ患者は安静にしていなければならないことをこんこんと説教されて、警部とエリックはたちまち病室から追い出されてしまった。

警部は病室の外にいた二人の私服の警官にニ、三、短い指示を出すとゆっくりと歩き出した。

―7―

冷たいリノリウムの床を踏みしめる硬質の靴音だけが、長い廊下にこだました。
静寂というには孤独すぎる沈黙の世界に、二人は閉じ込められてしまったかのようだった。
エリックは警部の背中を、警部は時空の隙間をただ凝視し続けていた。
お互い別のことを考えているらしいことは明らかで、エリックはと言えば、疑問や矛盾の数々を飲み込んだまま、思考は過去と現在の間をゆらゆらと彷徨っていた。
彼自身、自分の頭の中を要約することができないことに一番歯がゆがっていたのは本当だ。
エリックが新たに知り得た事実は、彼の理解を大きく超える虚構の渦と化し、彼を容易に溺れさせた。
茫然自失の極みに陥っていたと言ってもいいだろう。

そんな彼も下りのエレベーターに乗り込み、圧迫されそうな緊張感にとうとう耐え切れなくなると、ようやく自分から言葉を発した。

「警部は、いつから彼女が本当のジェインさんではないと気が付いていたんですか」

警部はハッとしたように驚いた顔でエリックを見つめると、次の瞬間、遠い目をしながら言った。

「最初からと言えば嘘になるかもしれませんが、彼女と話しているうちに少しずつ疑惑を抱き続けていたのは確かです」

疑惑と呼ばれる正確なものは正直、エリックには思い当たらなかった。
ただ、そういう自分も、最初から彼女に対しては疑念のようなものを感じていたのは否めない。
根拠も何もないのだけれど。
現に、彼女にはストレートに尋ねて、嫌な顔をされていた。

「違和感とでも言うんでしょうか……」

警部が何気なく言った。

「彼女はおとなしい平凡な女性を演じていながらも、本来の強さを捨て去ることが出来なかった。何かを守ろうとする時、人は必ず無意識に本性を現すものです」

―8―

警部はそう語りながらも、心はどこか別の方向を向いているように見えた。

アリシアが思わず我を忘れてしまうほど守りたいものとは……。

「まさか、チャールズさんだって言うんじゃ……？」

エリックの呟きに警部は上の空で答えた。

「彼はおそらくシロでしょう。彼が今回の殺人で得られるメリットは今のところ考えられませんから」

「じゃあ、一体……」

メリットがあるかないかで言及すれば対象者は自ずと限定される。そしてその中にミシェルの名前は否応なく警部の脳裏に刻まれているのだろう。

エリックは、他人の頭の中から誰かの名前を消してしまいたいとこれほど望んだことはなかった。

「何を考えているんですか？」

あまりに深刻そうな顔をしていたからだろう。

ふと気付くと警部が心配そうな目でエリックの顔を見つめていた。

「それはあなたでしょう？」と反対に尋ねたい気持ちを堪えるとエリックは、心のままを告げた。

「さっき、警部の頭の中からミシェルのことを消してしまいたいと思っていたんですよ」

「それはとりとめのないことを考えていたんですね」

警部は怒ったようなエリックの声に対して、宥めるように軽口で応じた。

（いつのまに彼は保護者みたいなものの言い方をするようになったんだろう……？）

エリックの心の声はそのまま不満げな顔となって表れた。

自分が彼の掌の上で上手く踊らされていると思うことがこんなにも悔しいと思ったことはない。

他愛のない反抗心からなのか、それとも抗いがたい反感からなのか、彼自身区別がつかなかったけれど、イライラするのだけは確かだった。

エリックはエレベーターから降りると言った。

「あなたは僕が困っているのを見て、面白がっているんじゃありませんか？」

突拍子もない言葉に警部の笑みが消えた。

彼の言葉は警部の心にも少なからず傷を与えた。

エリックも言ってしまってからさすがに後悔したが、感情の揺れは容易に収まるものではなかった。

―9―

「あなたからそんな言葉を聞こうとは思ってもいませんでしたよ」

暗い暗い地の底から聞こえてきたようなその低い声は二人の間に見えない幕を落とした。

エリックは一瞬言葉を失いかけたが、それでもすぐに気を取り直すと言った。

「だとしたら、あなたの目がふしあなだったということです」

エリックの言葉はさらに辛辣さを増し、警部の生身の心臓を突き刺した。

「どういう意味です」

「言葉のままですよ……」

警部の顔はまるでマスクを被ったように無表情になった。

エリックは自分の心と声が別々の人格を持ってしまったかのような錯覚を覚えた。

誰かを傷つけるということはその何倍も自分が傷つくということだ。

それを知らない彼ではもちろんない。

なのに、人を傷つける言葉が溢れ出して止まらない。まるで攻撃せずにはいられないかのように……。

コールタールを塗りつけたような真っ黒い塊になり下がってゆくのが自分でもわかった。

エリックの言葉の余韻があたりに充満しつくす前に警部が言葉を発

した。

「辞めましょう、不毛な諍いは。私もどうかしていました」

ため息と同時に洩れたような、とても疲れた声だった。
まるで自分だけの問題で、エリックの内面を無視したような、そんな言い方に彼には聞こえた。
その瞬間、エリックの不満のボルテージは頂点に達した。

「なぜ不毛とか言うんです！　僕はこんなに怒っているのに、なぜ理由も聞かずに話を打ち切ろうとするんですか！」

あなたは僕の心の内を知りもしないで、勝手に何事もなかったかのように収めようとする。どうして、そんな僕の気持ちを無視したような真似が出来るんですか！

エリックは矢継ぎばやに感情的な声で捲くし立てた。
ヒステリックなエリックの声だけが静かで敬虔な病院の廊下にいつまでもこだましていた。
それはまるで、払拭できないエリックの内面そのままを表していた。

―10―

しかし、警部にもエリックの言い分にばかり耳を傾けていられない訳があった。それはどんな時にも私情を挟まない彼には有り得ない理由からだった。

どうにもならないジレンマは、時として人を冷酷にする。

「あなた一人がいつも辛いわけではない……」

警部は知っていた。

自分がどれだけ短気で心が狭い人間かということを。

だからこそ、最大限の努力で日々、忍耐強い人間を演じてきていた。

演技。いや、そんな生やさしいものではない。

ありのままの自分を理性ひとつで封じ込めるのだ。

ありったけの言い訳を駆使して、自分を騙し、寛容を導き出す。

その過程の中でどれだけ自分の心を犠牲にしてきたことだろう。

なのに……。

この若者は何もわかっていないのだ。

人を許すということがどれだけ苦痛を伴うかということを。

心のままを曝せないということがどれだけストレスを生んでいるかということを。

何も、全く、わかろうともしない。

いつも、自分のことだけしかない。

彼の自分中心に物を考えるやり方は潔いかわりに、とても幼稚でさえある。

自分を大切にするということは、一歩間違えば自分しか正しくない

という思い上がりでしかないことも、彼は思い及ぼうともしない。
だから、苦手なのだ。自分に正直すぎる人間は。

（あなたはいつでも許される側の人間なんですよ）

許される側の人間は、許す側の人間の努力を知らない。
そういう人間に限って、いつも許されて当然だと思っている。
許さない人間を心の狭い人間だと軽蔑している。
許すということがどれだけ辛酸を舐めるほど、苦痛を伴うものか、
少しでも考えたことがあるのか！

警部はこれだけのことをきつく目を閉じて考えていた。
自分の発した言葉がおそらくエリックに届いていることを承知で、
拳を強く握り締め、彼の言葉を待っていた。
その言葉によっては自分も今度こそ、鬼にならないといけないとい
うことも警部は心の奥底で覚悟していた。
二人の間に取り返しのつかない亀裂が走ろうと、もう自分には取り
繕う力も感情も残ってはいないことを思いながら。

彼の心はまさに急速冷凍中の魚のようだった。

―11―

『兄さんはどうして刑事になったの？』

その時、ふとエレンの声が甦ってきた。まるで空耳かと思うほど確かな声色で。

かつて、エレンが自分と同じ刑事になりたいと知って、彼は一生懸命引き止めたことがあった。

『私が刑事になることを反対するのは自分が後悔をしているから？』

『危ない目に遭わせたくないからに決まっているだろう』

兄として、それはまともな答えだった。しかし、エレンが欲する答えはそれではなかった。

義眼ではない方の瞳は曖昧な言い回しでは納得が出来ないと強く伝えていた。

『私は兄さんを助けたいの。兄さんの役に立ちたいの。私にはそれしか、恩返しのしようがない……』

恩返し……。

その言葉にどれだけ自分が傷ついたか、今も忘れることは出来ない。

『私は兄さんのためなら命だって賭けることが出来る。だって、兄さんは私を人間として生かせてくれたのだから』

違う。

自分は悪魔の眼と引き換えに、己の命を救っただけだ。
エレンの心と美しい瞳を犠牲にして……。

（自分は最低の人間なのだ……）

握りこんだ拳が震える。

『私はそんな優しい人間などではないんだ。あの時、おまえの目を傷つけたのは……』

『私を殺人者にしないためでしょう？　兄さんを殺していたら、私も生きてはいなかった』

兄さん、あなたは私を救ってくれたのよ。どんな理由からでも、それは事実なの。
だから、今度は私があなたを救う手伝いをさせて。
それが私の唯一の望みだから……。

彼女の声は警部の内側から、ゆっくり染み込んでいった。まるで、暖かい日差しが氷の像を溶かすように。

（エレン……！）

自分が刑事になった理由を彼はようやく思い出した。

誰かを裁きたいわけじゃない。
誰かを懲らしめたいわけじゃない。
生を取り戻したいから。
亡くなった人の、残された人の……。
失った日常を取り戻すため。

『もしも、もしも、誰も許してくれる人がいなくなったとしても、兄さん、あなたは、あなただけは私を許してくれる。そうでしょう？』

心に巻き付いて離れなかった鎖がパラパラと腐って堕ちてゆくのが彼にもわかった。

その瞬間、光が戻ってきた。

―12―

誰かのために熱くなれる心。
決して媚びる事のないまっすぐな瞳。
裏切られることを極度に恐れる繊細すぎる魂。

自分にはもう感傷程度にしか残っていない輝きをエリックは未だに持ち合わせていた。

（それがたまらなく羨ましかったということか……）

警部は迷いの森からようやく抜け出て来たかのような心地がした。

彼は一度大きく天を仰ぐ仕草をすると、携帯を取り出した。
彼の指はある番号を躊躇いもなく押し続けていた。
その番号の相手が3秒後に現れると彼は心を決めたように告げた。

「後のことは頼めるかい？」

不躾な言葉にも関わらず、相手には十分通じる内容だったらしい。

『行くんですか？』

「行かなければならないだろう」

相手はしばらく無言だった。そして、数秒後言った。

『私が行きます。あなたにはまだやらなければならないことがある』

「それは君も同じだ」

『いいえ。私の代わりは誰でも出来るでしょうが、あなたの代わりは誰にも出来ない』

今度は警部が黙る番だった。

『どうしたんです？』

「いや、君がそんなことを言うヤツだったとは正直驚いているんだ」

彼は電話の向こうで小さく笑ったようだった。

『変わったんですよ。いや、変えられたのかな……』

警部は目を閉じた。

『妹さんのことは私に任せてください。大丈夫。私にも多少の伝手は存在しますから。それより、あなたはこの事件を一日も早く終局に向かわせなければ。それこそが彼女が一番望む事でしょう？』

「すまない」

刑事はそう言うと電話を切った。

彼の背後で不安と疑心暗鬼の塊と化したエリックが睨むように立ち尽くしていた。

「どこへ行くんです」

「どこへも行きませんよ」

エリックの緊迫したような声とは裏腹に、警部の声はどこか間延びしているようでさえあった。それがうまくはぐらかされた様に聞こえて、エリックは余計に向きになったようだった。

「エレンさんが、どうかしたんですか」

先ほどの電話から、推測したか予感するものがあったのだろう。洞察力だけを取れば、彼も一流の刑事に引けを取らないだろうと警部は思った。

「どうして彼女のことだと思うんです？」

警部はただ単に彼がそう思う根拠を知りたかった。電話の相手の声はエリックには聞かれていないはずだった。そして、自分も彼女の名前は一度も告げていない。

「あなたが、そんな顔をするからでしょう」

自分の顔を鏡で見てみろと言われ、警部は今さらのようにハッとした。

「あいにく、ここには鏡が見当たらない。で、私はどんな顔をして

いますか？」

エリックは彼の顔をまともには見ず、少し視線をずらし気味に言った。

「気弱な、魂が抜けたような顔ですよ。目から光が消えている」

警部は声に出して笑った。

「それはまるで死んだ人間のような顔ですね」

「その通りですよ！　あなたの心は死んでいる。違いますか！」

直接、彼には痛い言葉だった。

死んでいると言われればそうなのだろう。

現に彼女がいなくなったと聞いてから、自分は平静ではいられなかった。

正直、捜査のことなどどうでもよいと思うくらいに。

警部は観念したように、エリックに向き合った。

「そうです。妹のことです。あなたもお知りになりたいでしょうから、率直に申し上げますが、エレンは現在行方不明になっているのです」

行方不明！？

エリックの体に今までに感じたことのない緊張が走った。

「どういうことなんです！　まさか、誘拐されたんじゃ？」

しかし、その問いかけに警部はまともに答えることが出来なかった。

「わかりません」

彼女が自分の意思で消えた可能性も捨てきれないというのが彼自身の見解だった。

「わからない、ですって？」

しかし、彼がそれで納得してくれるような相手ではないことを警部は十分知りすぎるほど知っていた。

―14―

警部はおもむろにエリックの顔を見つめると、フレッドという名前を覚えているかと唐突に尋ねた。
エリックはしばらく記憶を揺り起こすのに時間がかかっているようだった。
そしてふいに何かを思い出したように顔を上げると興奮気味に言った。

「確かミシェルの前にパメラさんのマネージャーをされていたという人ですよね。突然姿を消したと言う……」

警部はエリックの記憶力の確かさに改めて感心しながらも目だけで頷いた。
エリックは警部の言葉を待ちきれずに言った。

「その人がどうかしたんですか？　まさか、エレンさんの失踪に関係してるのでは……？」

警部はせっつくようなエリックの視線に困惑気味の瞳を返した。
彼の中ではいまだに迷いと葛藤が完全に整理できずに存在するらしく、そのために慎重に言葉を選ばざるを得ない事情があったのだが、そんなことは与り知らないエリックはただひたすらに子犬のような目で警部を見つめるしかなかった。
さまざまな感情の揺らぎのせめぎあいの末、警部は覚悟を決めたように重い口を開いた。

「エレンは実はパメラさんの事件のほかにある事件を独自に追って

いました」

それは警察内部が把握していないだけではなく、警部自身つい最近知ったことだった。

エリックには警部の言わんとすることがおぼろげながら理解することが出来た。推測ではあったが、それはエレンの本当の両親に関わることなのだろう。

しかし、それがかなりのリスクを負うことであろうことも容易に想像し得た。

「エレンさんの両親を殺害した犯人がわかったんですか?」

単刀直入すぎるエリックの問いかけに警部は少し躊躇を見せた。

「はっきりとした確証を掴んだわけではないと思います。ただ……」

エレンが何かを焦っていたことだけは事実なんです、と警部は苦々しい表情を隠そうともせずに言った。

焦っていた……?!

エリックは、最後に会った彼女を出来るだけ克明に思い出そうと目を閉じた。
しかし、エリックには彼女がそれほど追いつめられていると思われる兆候も記憶も何一つ呼び出すことは出来なかった。
それはどうやら警部も同じらしかった。

「でも」とエリックは思った。

「いくら焦っていたからと言って、エレンさんは個人的な理由で職場放棄をするような人ではないでしょう。しかも、あなたに何の連絡もしないなんて……」

「実は……」と警部はますます苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「その関係者というのが、パメラさんの事件に関わっている人物とどうもリンクしているようなのです」

「まさか……それがフレッド氏だと?」

フレッドこと、フレドリック・ミーガンは偽名だったと警部は告げた。
そして彼はどうやらフレッドの本当の名前を知っているらしかった。
その先をなかなか告げようとしない警部の煮え切らない態度に、イ

ラつくようにエリックは言った。

「警部！　それで、あなたはどうしたいんですか」

警部は表情を隠した顔で、今は捜索に全力を尽くすのみだと告げた。

「警察のことを言っているんじゃありません。あなた自身がどうしたいのか僕は聞いているんです！」

エリック自身、わかっていた。

警部が今すぐにでもエレンを探しに飛んで行きたいと思っていることは。そして、それが出来ない現実も。

それでもエリックは彼自身の口から彼の本音が聞きたかった。

―16―

エリックのようにただ純粋に心のうちを語れたら……。

おそらく、それは誰しもが望むことだろう。

けれど大人の皮を長く被りすぎた警部にとって、それは決して楽なことではなかった。

様々な矜持で武装された心と体は真実を語る口までも重く変えていた。

「私が今追わなければいけないのはパメラさん殺しの犯人です」

「警部！」

エリックの咎めるような声が耳に痛い。

しかし、警部はあくまで冷静な態度を崩すことはなかった。

そして彼が選んだ言葉はエリックの反論を真っ向から拒絶するかのような大人の言葉だった。

「我々はプロですから、使命と私情を混同することはありません」

そして、と警部は続けた。

「私は誰よりも彼女を信じています。同じプロの一員として」

今度はエリックの耳が痛くなる番だった。

大人と子どもの違いをまるで見せつけられたように羞恥心のようなものまで湧き上がってきた。

エリックには、まだ彼ほどの覚悟も大人のスキルも備わってはいな

かった。
ただ素直に心のままを開くのが潔いとは限らない。
警部はまさにエリックが太刀打ちできないと思える人物だった。

「さっきの電話の人はじゃあ、誰なんですか」

警部は視線をエリックから逃がすと少し迷いながら、その名を告げた。
それはエリックもよく知る人間の名前だった。しかし、同時に首を傾げる名前でもあった。

エリックの疑問はそのまま素直に口に出た。

「どうして……グレッグ刑事なんですか」

エレンの下僕のように仕えていたディック刑事なら、まだわかる。しかし、見た目にも彼女といつも反目しあっていたグレッグ刑事を警部の代わりに選んだわけがエリックには正直のところわからなかった。

複雑そうな表情はやがて困惑なものへと変わっていった。

彼が優秀な刑事であることはエリック自身、認めるところだった。しかし、長い間父親のマインドコントロールに縛られてきた男だ。警察内部でも、かなりダークな存在として認識されているのも、過去の怪しい行動が否定出来ない所以だった。

実際、彼がどこまで関与していたのかわからないと警部は言うが……。

けれど、それを差し引いても然るべき重大な懸念材料が彼にはあった。

「ライアン・マクレガーはまだ捕まっていないんですよね」

エリックは瞳を曇らせながら言った。

警部にはエリックの言いたいことが十分すぎるほどわかっていた。しかし、それに対して首を横に振るしか出来なかった。

―17―

エリックはじれったい思いで、口早に言った。

「グレッグ刑事がライアンの弟だってことを忘れたわけではないでしょうね？」

本当はこんなことを言いたくなかった。

しかし、事実を見逃せないというのも真理だった。

「彼は……大丈夫です」

即答とは言いがたい彼の口ぶりに警部自身の迷いが透けて見えた。

それでも。
何を言ったところで、捜査の方針も警部の考えも変えられないことはエリックにもわかっていた。
事実、エリックが考えることを警部が考えないはずがない。
ましてや、グレッグは病院に逆戻りになったばかりではないか。
しかも、あの様子ではしばらく正常な捜査につくことさえ危ぶまれた。

『さっきの電話の相手は本当にグレッグ刑事だったんだろうか……』

彼なりの思惑が読めないところがエリックを不安に駆り立てた。
頭の中が混乱を極めて言葉も出なくなったエリックをよそに、無駄な押し問答に見切りをつけたのか、警部は一刻を惜しむようにその場を去っていった。
たとえようもない無力感が波のようにエリックに押し寄せてきた。
エレンに最後に会ったのがいつだったか、エリックは額に皺を寄せ思い出そうと試みた。
しかし、不思議と彼女の姿は鮮明とは言い難く、アリシアの影に自然と消えてしまうのだった。

それでも、エリックは諦めなかった。
混迷を深めた思考の中から、彼女の姿だけを取り出すと、その場所から慎重に記憶を辿っていった。
短いキーワードがその過程の中で見え隠れしていた。
その一つが彼のすぐ近くにあることをエリックは思い出すと急遽、足を返した。

喪失　　－1－

輝きが失われてゆく。
目の前にあるすべての物の色が灰色の不透明な水でぼかされたように、儚く見える。

『兄さん……』

最後のときに呼ぶ名前はきっとその名前だろうと思っていた。
しかし、今チラチラと脳裏に見え隠れするのは、なぜか別の人間の顔だった。

エレンは病院でエリックと別れてから、最後の仕事となるかもしれない任務を成し遂げるべく、再びジェインのゲストハウスへと戻っていった。
アリシアこそがジェインその人だと証明する決定的な証拠がどうしても必要だった。

重い足取りでゲストハウスに辿り着くと、彼女は改めて周辺を見渡した。
ゲストハウスの前には彼女が丹精込めて作ったとわかる小さな庭があった。
豪華な花は見当たらなかったけれど、自然で、訪れた客をある意味ほっと出迎えるような演出がそこには感じられた。

エレン自身、花の優しい生命力に癒される心地がした。

ふと、エレンの視線がある花の上で止まった。

釣鐘のような花弁を揺らし、天を仰ぐように咲いている紫色の花・・・。

その瞬間、エレンの心の中にわずかな違和感が生まれた。

それは池のほとりなど、どこにでも見かける可憐な花だった。

花好きの人間が自宅の庭に植えることもよくあることで、見過ごそうと思えば見過ごせる範疇のことではあった。

「リンドウ……」

しかし、名前にして呟いてしまうと、それだけではすまない何かをエレンは感じた。

「確か、トリカブトほどではないけれど毒性を持っていたのでは……」

夫までも騙すほど完璧に演じていた彼女の心に巣食っていたものを、目の当たりにしたような薄ら寒ささえ覚えた。

それは見えない、無意識の悪意のような……。

そう思うと、主のいないその建物自体が突然不気味な生き物のように思えてきた。

何もかも偽りでこしらえた彼女だけの城でアリシアは本当に一生を過ごすつもりだったのだろうか。

そのために親友を裏切り、死に追いやる結果になったのだとしても……。

しかし、エレンにはどうしても信じられなかった。
あれほど聡明に思えた彼女が自分の愛を貫くためだけのために、こんな馬鹿げた、自分の人生を捨てるほどの愚かとわかる行為をするだろうか。
しかも、完全な見切り発車の形で。

何より。
恋は盲目と言うけれど、それほどアリシアがチャールズを想い続けていたとはなぜか思えないのだった。

―2―

しかし、それはあくまでもエレンひとりの見解によるものであった。たいていの容疑者が後付でもっともらしい嘘をつく。そして、さも真実のように飾り立て、殺人の動機としていかにも相応しく取り繕う様は取り立てて珍しいことでもなんでもない。

けれど、アリシアがそこまで姑息な人物だとはさすがにエレンも思いたくはなかった。

とすると、アリシアは本当にあの凡庸な男を愛していたというのだろうか……。

エレンは疼くように痛む右眼でそっと空を仰いだ。

眩しいほどに降り注ぐ光のシャワーが、けれどその眼にはもうほとんど届いてはいなかった。

「なんて無意味なのだろう……」

エレンはため息のような声を出した。

まもなく、その眼は死霊どころか何ものも映さなくなってしまうのだろう。

何も見えない闇の世界。

それは彼女から、今度こそすべてを奪うことを意味していた。

そして、待っているのは、孤独なのだろう。

エレンは薄い笑みを洩らした。

自分は本当の両親を亡くしたときから、いや、あの悪夢のような日々が現実のものだとわかってから、これ以上孤独になることはない

だろうと思っていた。
けれど、神は更なる試練をエレンに与えたもう気らしい。
いや、神ではなく、悪魔か……。

「悪魔にも寿命があったということか」

嘲笑めいた笑いが自然と込み上げてきて、エレンは思わずその眼に触れた。
まるで氷のように冷たすぎる瞼はもうすでに死んでいる左眼の感触に似ていた。

ふと、エレンから笑みが消えた。

「いつから……」

いつから、その眼はおかしくなっていたのだろう。
見えるものと疑わずに信じてきた過去がすーっと遠ざかるように離れてゆく。

「いつから、見えていなかった……？」

エレンは愕然と膝を折るように地面の土の上に手を付いた。

これほど重い事実はなかった。

―3―

足下が崩れ去るとはこのことを言うのだろう。
蟻地獄の穴に突き落とされ、ズルズルと暗闇の中に落ちてゆくような無力感と果てしない絶望感。
あてどない不安がみるみるエレンの考える力を奪っていった。

「いつからなんて、覚えているわけがない……」

エレンは苦悩に歪んだ顔で虚ろに視線を彷徨わせた。

飼いならしたつもりでいた。
その眼は凶暴だった左眼とは違い、おとなしく従順で、これまでエレンを困らせたことはなかった。
だから、安心しきっていたのだ。
その緩んだ心に悪魔はまんまと付け入ったとでも言うのか。

所詮、悪魔は悪魔だったのだ。裏切りなど奴らの専売特許ではないか。

「怒りを忘れた報いだ……」

エレンは静かに目を閉じた。

ぬるま湯の心地よさに溺れていたのは自分だ。

『何のためにここまで生きてきたのか、思い出しなさい』

エレンは血の味がするまで唇を噛みしめた。
何かが炎のような勢いでエレンの体の中を駆け巡るのを彼女は感じた。
そして、頭の中が急にクリアになると、突然、わかったことがあった。

（病んでいたのは自分だ、この眼ではなく……）

エレンはスクっと立ち上がるとゲストハウスの中に入っていった。
まるで最初からその『場所』を知っていたかのように歩き出すと、その距離をためらうことなく進んでいった。
そして、問題の『場所』の上で立ち止まるとゆっくり、床に手を当てた。
どうしてわかったのかとか何がそうさせたのだとか、エレンは全く気にも留める様子もなく、その床板を捲った。

「これか……」

それはエレンが一度も目にしたことのないはずのジェイン（アリシア）のノートだった。
エレンの片頬がわずかに上がり、微笑みの形を象った。

それから、彼女が病院に取って返し、病院のスタッフにノートを託すまでそう時間はかからなかった。

―4―

覚悟を決めてから、彼女が決心するまで時間はそうかからなかった。
まるで何かから解き放たれたようなこの開放感はエレンの心を身軽にした。
右眼は相変わらずぼんやりしていたが、あの声を出さずにはいられないほどの苦痛はなりを潜め、エレンの心に安寧を与えていた。
それは、自分が一番恐れていたものから完全に回避できたことを意味するのだろう。

こんなに嬉しいことがあろうか。
もう何も怖くなかった。

自分を縛っていた枷の存在を思うと後ろめたさがわずかに残る。
それはある意味、哀しい喪失だった。

しかし、たった一つのものを守るためには犠牲も少なからず必要なのだ。
切り捨てることも……。

「だって、仕方がないわ」

エレンは呟くように言葉を吐いた。
自分の人生が終わると思った時に浮かんだものは、今まで失えないと思った者たちではなかった。

未練というよりも恐怖。
その恐怖から救われるためなら、悪魔とだって契約できた。

そう、今までだって共存してきたのではないか。
今まで支配していたものがされる側に回っただけのこと。

「死ぬのは怖い」

そう思うことがなぜいけないのか。
生きるためになすべきことをしただけだ。

エレンは胸を張って風に告げた。

これからは自分のしたいようにするだけだ。

迷いはなかった。

恋愛は一種の風邪のようなものだと思っていた。
現に彼の小説はそういう哲学の基、書かれている。
つまり、風邪がいつかは治ってしまうように、恋も時が来たら収まっていくというような……。

人間同士の関係は一度結ばれると消えるということはめったにない。
よほど相手を嫌いにならない限り、決別がそう簡単に訪れることもないだろう。

しかし、思いは必ず冷める。

安定期に入ったと誰もが信じている状態というのは、別の角度から見ると情熱が消えかかっている状態なのだとエリックは思う。
ゆえに、結婚している二人が必ずしも愛し合っているとは信じきれない彼だった。

母親と父親の関係がよい例だった。

今も夫のことを一番に思っている母親に対して、父親の愛情が少しも見えてこない。
身重の妻を残して旅に出て、音沙汰もなくそれっきりなんてことがあるだろうか。
記憶喪失にでもならない限り、そんなことはありえないことだった。

（ヒギンズ夫人は父さんが生きているようなことを言っていたけど……）

いっそ、死んでいてくれた方が諦めもつく。

エリックは父親のことになると冷たくなる自分の心を知っていた。一度も会ったことのない人間に対してこんなに悪い感情しか抱くことが出来ないのは珍しいことだった。

―2―

そんなことを考えながら行き着いた先は、さっき出て来たばかりの病室だった。
重い扉の前には二人の警官が手持無沙汰そうに立っていた。緊張感にやや欠ける警官の表情を一瞥し、エリックはそのまま病室に入ろうとした。

「待って下さい」

一人の警官の手がドアにかけたエリックの手を強い力で押し留めた。思わず睨みつけそうになったが、あえてエリックは堪えた。

「どこへ行かれるんです」

この期に及んでどこへ行くのかとは、なんて馬鹿げた質問だろう。エリックは大袈裟なため息と共に、声を掛けた警官を見据えた。

「中の人に会いに行くんです」

「申し訳ありませんが、こちらは面会謝絶となっています」

今はどなたにも会わせる訳にはいかないのだと、もう一人の警官も同調した。
仕事なのはわかるが、あまりにも不条理だった。
自分が警部と連れ立ってこの病室から出て来て、まだそれほど時間はたっていない。
エリックにはどうしても彼女に確かめたいことがあった。

「どうしても会わなきゃいけないんです」

エリックは感情的にならないよう、警部の立場も考えて慎重に言葉を選んだ。

しかし、彼らは「関係者以外通すわけにはいかないときつく言われている」の一点張りで、とうとうエリックの忍耐もぶち切れた。

「僕はその関係者なんですよ。疑うのなら、警部に確認をとってみて下さいよ！」

エリックに睨まれた警官は、怯んだようにこう告げた。

「ええ、それはわかっています。しかし、先ほどまでおられた主治医の方が病人の病状がかなり悪いご様子なので、金輪際、誰も入れるなと……」

その時、エリックの頭に嫌な予感とも言うべき思いが過ぎった。

「待って下さい。それは、僕らと入れ違いに入ってきたお医者さんのことですか？」

確かにエリックと警部は慌てて入ってきた医者と看護師達によって、その先の聴取を中断させられ、そのまま病室を追い出されていた。

「ええ……」

エリックの腕を掴んだままの警官がそう頷きながら、ようやく手を放した。

妙な話だった。

アリシアは長い内訳話に多少の疲労を感じていたようだったが、病

状が悪くなったようには全く見えなかった。
少なくとも、病室を出るまでは……。

（まさか、自殺を……！？）

だが、そばには医師がいたのだ。発作的に彼女が何かをしようとしたところで止めるなり、対処するなり出来たはずだ。

「アリシアさんの他に、まだ中に誰かいるんですか？」

エリックの問いかけに、警官達はお互い顔を見合わせながら首を傾げ、そのうちの一人は指を折って人数を数える仕草をしてみせると、「いいえ」と首を横に振って答えた。

エリックは自分の顔が引き攣るのがわかった。

あの時、病室に入ってきたのは確か医者を含めて３人だった。
けれど、その警官が折った指は明らかに４人の人間を示していたのだった。

―3―

「おい、ちょっと待て。病室に入って行ったのは医者と看護師二人、合わせて三人だったぞ……」

先に気付いたもう一人の警官が慌てたように言った。

「間違いないんですね！」

エリックの声は見事に裏返っていた。

その事実が意味するのはただ一つ。

警官はくるりと向きを変えるとアリシアの病室のドアを思い切り、引き開けた。

「しまった！　やられた！」

警官のあとに続いたエリックが病室の中で見たものは、主のいない空っぽのベッドだった。

ことの重大さに慄き、蒼ざめている警官に対して、エリックは厳しい声を放った。

「警部に、早く連絡を！」

はっと我に返った一人が、携帯電話に手をかけた。

エリックはそれを見届けると、もう一人の警官に向かって尋ねた。

「彼らが病室を出て行ったのはいつですか？」

「つい、さっきです。まだ、それほど時間はたっていません」

すると、側から電話をかけ終えたばかりの警官が口を挟んだ。

「警部はすぐにこちらに来られるそうです！」

このとき、彼はもっと頭を働かせるべきだったのかもしれない。あまりにも出来すぎた逃走劇にもう少し慎重になるべきだった。

けれど、その時のエリックは直感だけを信じ、疑いの目を向けることすらしなかった。

「じゃ、今から追いかければまだ追いつくかもしれないんですね？」

「ええ、おそらく……」

そう告げたのがもはやどっちの警官だったか、エリックは覚えてさえいない。

彼の頭の中にあったのは、アリシアの安否と犯人を取り逃がすまいとする焦燥感に似た強い思いだけだった。

もし、今の彼の姿を見たら、グレッグと言わず誰でもがこう指摘しただろう。

「君はいつから刑事になったのか」と。

そうだ。彼はここで思いとどまるべきだったのだ。自分が何者だったかを思い出し、おとなしく警部が現れるのを待つべきだったのだ。

「おそらく、今ならまだ遠くへは行っていないはずです」

警官はエリックを急き立てるようにエントランスの向こうを指差した。

―4―

警官たちはエリックの姿がエントランスの向こうに完全に見えなくなると、肩で息をついた。

「危ないところだった……」

一人はあからさまにホッとした様子で呟いた。

「君が正直に出て行った人数を喋るからだ」

「よく言うよ、俺はおまえのヘマをフォローしてやっただけだ」

確かに、その男が指を4本折らなければ、エリックは妙な疑いを抱かなかったはずだ。

ミスリーディング。

しかし、彼らはそれを逆手にとってうまくエリックを追い払ったつもりでいた。

そう、このままエリックが彼らのウソに気付かず、消えた逃走者の行方を追い続けたならば……。

「気付いたところで、もう遅い。今頃、彼らは裏口から無事逃げ果せているはずだから」

「で、結局、どこへ行ったんだ?」

「さぁね、そこまでは知らないよ」

おそらく、深く意味を考えない性格なのだろう。
金で買収されるやつというのはそんなものだ。警官だろうと、医者だろうと、関係ない。人間の資質、それに尽きるのだろう。

「それで、いくらもらったんだ?」

「あ、ああ、わかってるよ。何も独り占めしようなんて思ってないさ」

彼はポケットから折りたたんだ札束を取り出した。

警部たちが出て行ったすぐあと、医者と看護師たちは何食わぬ顔で出て行こうとした。
しかし、何か様子がおかしかった。
看護師二人がもう一人の看護師を隠すようにしている。そして、当の看護師の具合は酷く悪そうだった。

「どこか具合でも悪いんですか?」

その時、片割れの警官が彼の肘を突き、言った。

「なんでもありません。さぁ、どうぞ……」

よく見ると、警官と医者達はアイコンタクトを取っていた。
その時、彼にはすべてがわかった。

「ええ、どうぞ。誰にも言いませんから」

自分のあの一言でその場の誰もがホッとした顔をした。

特に、相棒は歪んだ含み笑いで彼を見た。

―5―

札束をどこで、誰から受け取ったのか、それはわからない。だが、そんなことは後から嫌でもわかることだろう。
彼はかけていた伊達眼鏡をそっと外し、崩した感じに着ていたシャツのボタンを上まで留めると、乱れていた髪形も手ぐしで直した。

「こういうことはよくあるのか」

「こういうこと？　ああ……」

シニカルに唇の端を吊り上げると、札束を数えていた男が言った。

「まぁね。別にどうってことじゃないだろう。毎日、毎日、張り込みや下っ端の仕事ばかり。この程度の旨みでもないと、こんなカッタルイコトやってられないっての」

高みに上れるヤツにはとてもじゃないが俺達の気持ちなんかわからないだろうな、と彼はほざいた。

「だから、犯罪に手を貸すのか」

罪の意識に囚われる人間だったら、そもそもこんなことに手を染めたりはしないだろう。怒りで目の前が見えなくなりかけていた頃、背中から聞き慣れた低い声が聞こえた。

「お疲れ様。どうだ、何も変わったことはなかったか？」

「ハ、ハイ。何も異常はありません！」

片割れは慌てて札束をポケットにねじ込むと姿勢を正して、その声の主を見た。
なぜ、ここに上司がいるのかという不思議そうな顔だった。

「そうか、ご苦労だった。じゃ、引き続き警備を続けてくれたまえ」

ところで、と上司は言った。

「さっき、私の携帯に電話があったんだが、どういうわけかすぐに切れてしまってね」

すみません、間違えてかけてしまったんです、と彼は頭を掻いた。

「ふん、そうか。いや、何事かと思って、折り返し電話をしたんだが私も間違えてこちらの彼の携帯にかけてしまってね」

上司の手がもう一人の警官の肩を叩いた。

「彼も忙しかったのだろう。会話をする余裕もなかったのか、そちらの話し声だけ伝えてくれたよ」

こんな風にね。

警部はおもむろに携帯を取り出すとわざとそこから洩れ聞こえる音声を聞かせた。
札束を数えていた警官の顔が見る間に青くなり、ゆっくりともう一人の警官の顔の上へと移っていった。

「そうですね、とても興味深い話でした、私にとっても……」

そう言って、もう一人の警官が取り出したのは通話ボタンが押されたままの携帯電話だった。

「ニール刑事、我々は君のことをもうずいぶん前から疑わしく思っていてね。ただ、証拠が掴めなかったんだよ」

ディック、と警部はもう一人の警官の名前を呼んだ。

「彼に手錠を掛けたまえ。ニール君、申し開きはあとでいくらでも聞こう。但し、我々の諮問機関に於いてだがね」

裏切り者に対する警察の追及は決して甘いものではないとその声音が物語っていた。ましてや、『身内』という言葉は警部には通用しそうもなかった。

「特定の人物との癒着について、君にはゆっくりと聞かなければいけないことがある。それから、君の直接の上司はウエイト警部補だったね。彼のことについても君にはいろいろと教えてもらわなければならないだろう」

黙秘も否定も受け付けない強い姿勢が彼の剣呑な眼に表れていた。

酷薄な笑みと共に……。

―6―

射殺しそうなほど鋭い目付きでディックをねめつけると、ニール・ダグラス刑事は無言のまま警部が従えていた他の刑事たちに連行されて行った。

「素直に吐くでしょうか」

心配な面持ちのディックに対して、警部はまるで全て見越しているかのような口調で言った。

「すぐに落ちるだろう。多少は抵抗するとしても、いずれは同じことだ」

エリックが聞いたこともないような冷たい言葉も部下の前では平気で呟く。警部の裏の顔を知り尽くしているディックでさえ、えも言われぬ畏怖を感じた。

「金で雇われている者は己というものを持たない。どちらか楽な方に転んでしまいがちなんだよ」

部署の中に内通者がいることは前々からわかっていた。そしてそれはおそらく、一人や二人ではないのかもしれない。しかし、それは言い換えれば警察機構全体が腐敗していることに他ならない。ニール・ダグラス刑事などは氷山の一角でしかないのだろう。

親玉をあぶりだすには彼はまだまだ小者だった。

「それより、いいんですか、追いかけなくても……」

ディックは気になってしょうがないという風に言った。

「ああ、それなら大丈夫だ」

アリシアの無事も確認していると警部は言った。

駆け込んで行った医者の胡散臭さはディックが見ても一級品だった。まるでニールを捕まえるための格好のえさのような……。

「まさか……」

何事も臨機応変に対応することが必要だと警部は嘯いた。

「ご存知だったんですか？」

というよりも彼が仕組んだことだったのかとディックは思った。警部ならばどんなチャンスも逃さずやるだろうというのが自ずと出た答えだった。

「ニールはウエイト警部補の配下だった。そしてやつは常に金に困っていた。ギャンブル好きで相当の借金を抱えていたのさ」

スルスルと警部の口から語られる真実はすなわちニール逮捕の種明かしだった。

「君の機転のおかげで証拠まで取ることができた」

警部は携帯を揺らしながら機嫌のいい声で言った。

しかし、ディックの心はそれに反してひどく重かった。

「私はエリックさんが心配です。警部、あの人を追わなくていいんですか？」

さっき、追わなくていいかとたずねたのは偽医者ではなく彼のことだったのだとディックは改めて告げた。

「追いかけるさ」

けれど警部の足は動かない。まるで地面に張り付いたかのように。

「警部！」

業を煮やしたディックが声を荒げた。

「私は時々あなたがわからなくなる。どうしてあなたは彼を巻き込むんですか」

―7―

警部は数秒、考える時間を要した。

「君が口出しをするようなことではない」

それは不機嫌さが露になったような冷たい横顔だった。

ディックはそれ以上、言葉にならなかった。怒らせたことを後悔したからではない。ましてや、彼の言葉に納得したからでもない。静かな反感は前から抱いていた。それがどういう種類のものなのか、自分でも判然としなかったが、ようやく少しだけその正体がわかったような気がした。

「そうですか、わかりました。でも、これだけは言わせてください」

ディックは背筋を伸ばすと、やや警部を見下ろすように言った。

「あの人は純粋に警部を信じています。その期待だけは裏切らないであげて下さい」

警部はまるで睨むように鋭い視線をディックに向けた。それこそがおまえには関係ないことだろうと言いたげに唇を噛みしめて。

「それから」

ディックは口調を変えずに続けた。

「主任は我々が生命をかけても探し出します」

それは報告ではなく、宣言だった。
反対をされるかと思った。勝手な行動は慎むようにと言われるだろうとは覚悟していた。
しかし、警部の答えは……。

「好きなようにすればいい。君たちの自由だ」

但し、仕事に差し支えないように、それと……。

「責任は各自で負いたまえ」

今度は目を見なかった。

遠ざかる背中がやけに寂しげで、ディックは見続けていられなかった。
百戦錬磨と揶揄され、仕事では常にしたたかさしか見せない警部にとって、自分が唯一命取りになる存在になることを彼女は知らないのだろうとディックは思った。

―8―

その頃エリックは見えない逃亡者たちをあてもなく追いかけていた。しかし、病院から遠のくに連れ、次第に彼の胸のうちは不安でいっぱいになってしまった。

もしも、アリシアが自らの意思で彼らと共謀して逃げ出したのだとしたら……。

ありえない妄想だと思いつつ、打ち消すだけの材料もなく、エリックは苦しげな表情になった。

エリックの脳裏に過去の痛い言葉が浮かんできた。

『あなたはある一面だけを見て、その人をそういう人間だと思い込んでいる』

今もエリックの心の奥に深く突き刺さり続けているエレンの言葉だ。彼女にそう指摘されるまで、自分は一度も己の目を疑うことなく、無防備に人を信じて生きてきた。

だが、一般の人間なんてみんなそういうものではないのだろうか。多少は葛藤をしつつも、その人間を受け入れようと努力する。

エレンは刑事だ。もともと、人を疑うような思考も苦にならないのかもしれない。

けれど、エリックは違った。

善良とまでは言わなくても、彼にも信念はあった。自分が信じた人間は決して裏切らないだろうというくらいの人を見る目はあるつもりだった。

それが今回の事件で大きく揺らいでしまったことは自分でも認めざるを得ないことではあるが……。
それでも。

信じた人、すべてに裏切られるのは悲しい。

（そう思うこと自体が、己の心の弱さなのだろうか……）

きっと、エレンならこう言うのだろう。

『だから親友だと思っていた人間にも騙され、利用されるのだ』と。
あなたが思っているほど彼はあなたを思ってはいなかったということよ……と。

それがすべてだとしたら、笑うしかないなとエリックは思った。
たとえ、そうだとしても、自分は自分を裏切れない。エレンや警部に愚かだと言われようと、自分は疑うために生きてきたわけではない。
その信念が間違っていたとしても、それはあくまで結果でしかないんだとエリックは強く心に言い聞かせた。

僕は彼らじゃない。
たとえ、信じるものに裏切られても、これからも信じることは辞めない。
そう心を強くした時だった。

「あれは……！？」

エリックは思わず己の目を疑うかのように手で擦ってみた。
数メートル先の喫茶店から出て来た女性の服には明らかに見覚えが

あった。
胸元が大きく開いたレモン色のセーター……。

「なんで……」

しかも、その隣に立っている男は……。

「ライアン！！」

なぜ、エレンがあの男と！
エリックは彼らに追いつこうと夢中で走り出した。
しかし、それを知ってか知らずか二人は目の前に横付けされた車に乗ると一度もこちらを顧みることなく車中の人となった。

エリックは悔しそうに地団太を踏むと携帯を開いた。しかし、相手先は話し中の模様でかかる気配がない。
エリックは憎々しげに違う番号を押すと目だけは遠ざかり続ける車を一生懸命、追っていた。
だが、そちらも警部と同じように話し中だとわかるとエリックはその携帯を叩き付けたい衝動に駆られた。

「警察は一体、何をしているんだ！」

警部が捕まらないのは仕方がないにしても、ディックはさっき病院にいたではないか。それとも、自分と同じように連れ去られたアリシアを追っているのか。
その頃、裏切者を巡っての駆け引きが病院内で行われていたとは知るよしもない彼は、一人頭を抱えた。

確かにはっきり顔を見たわけではない。けれど、あの趣味の悪い服

だけはエレンのものだと断言できた。
そして、側にいた男もライアン以外に考えられなかった。

「彼女は行方不明ではなかったのか?!」

極秘の捜査だとも考えられる。
現にあの服装で簡単にチャールズは引っかかったではないか。
けれど、あのライアンが同じ手法で彼女の罠に落ちるとは考えられなかった。同時に、彼女が、そんな子供騙しのような手口がライアンに通じると思っていると考えること自体有り得ないことだった。
それでも、二人が一緒にいたことはエリックのその目が証明していた。

(警部は彼女が焦っていたと言っていた。しかも、彼はライアンからエレンを極力遠ざけていた……)

エレンが自分の一存で行動していたとしたら、警部の知るところではない。もしかすると、彼女は自分から行方を晦ましているのではないのか……。
次々に妄想が浮かんできて、エリックは頭が痛くなった。

「どうしました?」

エリックの苦悩する姿が尋常でなく見えたのか、喫茶店のドアが開いて店主らしき男が声を掛けた。

「さっき、出て来た人は……」

しかし、その先をなんと続ければよいのか彼にはまだ頭が回るような状態ではなかった。

エリックの混乱を見て取った店主は「よかったら中で休んで行かれませんか」と声をかけると、一人では歩けないエリックの肩に手を貸した。

―9―

「すみません……」

抱えられるようにして、窓際の席に座らされるとエリックは小さく声にした。

おおよそ観光客相手ではない、地元の人間がたむろするに相応しいような小さな垢抜けない店。

なぜこんな場所からエレンとライアンの二人が出て来たのか、考えるだけでまた頭が痛くなりそうなエリックだった。

事実、彼は二人のことで頭がいっぱいで、店内が尋常でない張り詰めた空気に包まれていたことに気付いてもいなかった。（といっても、店内にいたのは店主を含めて3人の人間だけだったのだが。）

重苦しい空気を断ち切るように、店主はどこかに心を飛ばしたままのエリックの前にコーヒーとサンドイッチの皿を置くと、「どうぞ」と微笑んだ。

「あ……」

エリックはその声にやっと現実に引き戻されたかのように顔を上げると、ぼんやりと目の前の男の顔を見つめた。

エリックにとって、それは何日か振りに見た他人の笑顔だった。

その事実は、彼の手から思わず、コーヒーカップを落とすに十分なほどの衝撃を彼に与えていた。

「あっ！」

ガチガチに緊張していた店内の空気が一気に緩んだというのか、魔

法が解けたというのか、客の一人がどこかホッとするようにエリックに近づいてくると、まだ現実を受け入れられずに立ち尽くす彼におしぼりを差し出した。

「あんたは大丈夫だったのかい？」

「え？」

エリックがまだパニックから覚めやらないでいると見て取ると、その客は自らテーブルの上を拭き始めた。

「シェパードさん、あとは僕がしますから……」

床に落ちたコーヒーカップとその中身を含んだせっかくのサンドイッチを残念そうに見つめながら、シェパードと呼ばれた客は店主の声かけにゆるく首を振った。

「ジム、あんたは面倒だがこの人にもう一度、あのサンドイッチを作ってやりなよ。そう、コーヒーもついでにな」

わしの勘定につけておいたらいいさと付け足しながら、その客はテーブルの上に飛び散ったコーヒーを拭き終えると、無駄になったサンドイッチの皿を運ぼうとして、もう一度エリックに声を掛けた。

「あんた、本当に大丈夫かい？」

しかし、エリックはなぜか答えることができなかった。

ただ、自分の意思ではないのに両の目から涙がこぼれて落ちた。

どこからか乾いたタオルを持ってきたもう一人の客が心配そうに声

を掛けようとして、ふいに口を閉じた。

「何があったか知らないが、泣きたい時は泣けばいいんだ。男だからって、我慢することはないさ」

シェパードと言う老人の大きな掌で背中を叩かれたエリックは、それを合図にテーブルに突っ伏すように倒れこむとそのまましばらく涙を流した。

―10―

理由のない涙。いや、ありすぎて、何が一番悲しいのかもはや自分でもわからなくなっていた。
頭を休めるまもなく、次々に苦しいことばかりがエリックを襲う。試練と言うには過酷すぎる現実がこれでもか、これでもかとエリックの理性を叩き、実際、飽和状態の際を彷徨っていたのだろう。
そんな己の精神の危機にも彼は気付く暇もなかった。

目の前に新しいコーヒーとサンドイッチが置かれるのがわかると、エリックははっと気付いたように顔を上げ、「すみません」とさっきの無意識の行為を謝った。

「大丈夫ですよ、あれは僕のおせっかいだったんだし、それに今度はそこの老人のおごりですから」

老人と言われたことにムっとしたように店主を見ると、シェパード氏はふんと鼻を鳴らした。
マークという設計技師は持っていたタオルを改めてエリックに渡した。
エリックは申し訳なさそうに受け取ると、涙で濡れた顔を拭いた。

「みっともないところをお見せして……」

見ず知らずの他人に優しくされて号泣するなど、自分でも信じられない出来事だっただけに、恥ずかしくて正直今すぐにもこの場から立ち去りたい心境だった。
しかし、それではあまりにも恩知らずと言うものだろう。
エリックは目の前のコーヒーカップに手を伸ばすと、おそるおそる

というように口に運んだ。

「おいしい」

びっくりするほど美味だというわけではないが、寂れたというマイナスのイメージを持ってしかこの店を見ていなかっただけに、新鮮な驚きが素直に口を出た。

「そうでしょうとも。こっちもなかなかいけますよ」

まるで自分のことのように老人は嬉しそうな顔をするとエリックにサンドイッチを勧めた。

エリックは言われるままサンドイッチも口に入れると、老人の言葉に深く頷いてみせた。

「本当においしいです。パンが違いますね」

わかりますか？

と言ったのは、店主のジムだった。

「サンドイッチは言ってみれば、パンが命みたいなものですからね。これだけは妥協できないんですよ」

だから、値段もいいんですがね。

苦笑しながらマークが口を挟んだ。

しっとりした食感。中のハムやチーズの味の邪魔をすることなく、それでていてはっきりパンの味を主張している。噛めば噛むほど味が出て、ついもう一口放り込みたくなってしまう。

病み付きになるとはこのことだろうと、エリックも思った。

コーヒーもさることながら、このサンドイッチはエリックの知っているサンドイッチの中でも絶品だった。

「この島の人はみんなパン作りが得意なんですか？」

「え？」

ふいに思い出したように口にして、エリックは慌てて言い換えた。

「あ、すみません。たまたまなんですが、他にもこれと同じくらい美味しいパンを焼く人を知っているものですから……」

「もしかして、それって、ウィーバーさんのことですか？」

ウィーバーと言われて、それがアイリスのことだと気付くまで数秒かかった。

「アイリス、じゃなかった、ジェインさんを知ってらっしゃるんですか？」

知ってるも何も、とジムは言った。

「このパンは彼女が焼いたものですよ」

―11―

ここだけの話ですがね、とジムは言った。以前、ジェインのペンションに泊まった旅行者が彼女のパンの美味さについて語っていたのを偶然耳にしたのがそのパンとの出会いだったらしい。

「そうじゃな、それまでのサンドイッチは今のと比べ物にならんかった」

シェパード氏がその頃を振り返るような目をした。ジムは苦々しい顔をしながらも、肯定せざるを得ないというような口調で言った。

「いや、僕も最初は本気にしていなかったんですよ。でも、実際食べてみたら、本当に雲泥の差でした」

パン職人の焼いたものよりも素人が焼いた方が美味しいなんて、彼には考えも及ばなかったのだろう。でも、いざそのパンの虜になってみると、一部の観光客だけにしか知られないというのがとても残念に思われたのだと言う。

しかし、彼の熱烈なラブコールに対して、ジェインは容易に首を縦に振らなかったらしい。

「ジェインさんにとっては自分のペンション用のだけで手一杯だったんです」

それはそうだろう。エリックもあのペンションに一日いて、彼女の忙しさを目の当たりにしていた。

「でも、焼くだけならご主人にも出来たんじゃないですか？」

これといった仕事をしていないチャールズにはうってつけだっただろうに。

しかし、その言葉にシェパード氏がはでに首を振った。

「話にならんね。あいつがそんなことを自分からするわけがない！」

『髪結いの亭主』ってのを知っているかい？　と彼は聞いた。

「あいつはまさにそれだよ」

「シェパードさん！」

ジムがまた始まったとでも言うような困った顔をして、咎めた。

「いや、言わせてもらうね。あいつは男のクズだよ！」

震えるほどにこの老人が彼に対して悪感情を持っていることはよくわかった。ただ、その理由までもは知ることはできなかったが……。

「すみません……」

旅の人にお聞かせすることではありませんでしたね、とジムは小さい声で謝った。マークも決まり悪そうな顔で目を逸らした。

「彼にはジェインさんと同じ年の娘さんがいらっしゃったんですよ」

だから、余計にジェインに対して他人ごとに思えないのだろうとジ

ムは言った。

「ジム！　勘定はここに置いておくからな」

老人は頭を冷やしてくるとでも言いたげに腰を上げると、そのまま席を立った。

「お客さん、ゆっくりしていきな。わしはちょっと用事を思い出したんで、退散させてもらうけどね」

彼は少し寂しげな笑顔をエリックに見せると、重い足取りで店を出て行った。

―12―

「なんだかへんなことになってしまいましたね……」

澱んだ空気をほぐすようにジムが言った。

エリックはシェパード氏がさっきまで座っていた場所をなんとはなしに見つめ、

「僕がよけいなことを言ったんでしょうか」

と申し訳なさげに呟いた。

「いや、そうじゃないですよ」

マークがやり切れなさそうな声でとりなし、ジムも同時に頷いた。

「実はあなたがいらっしゃる前から、少しおかしかったんです」

浮かないというか、どこか気まずげな様子が気にかかる。

エリックはそれで思い出したと言うように大きく息を吸い込むと真剣な、まるで何かに挑むような目で尋ねた。

「あの、実はさっきこの店を出て行った人についてお伺いしたいことがあるんです！」

それに対する二人の反応は特別だった。お互い顔を見合わせた後、とてつもなく苦い顔に変わったのだ。

そして意外なことを口にした。

「あなたも刑事さんだったんですか」

その返答には自然に眉が寄った。

「あなたもって、あなた方は彼女が何者かご存知だったんですか？」

それこそ、エリックにとっては驚きだった。エレンはめったなことで自分の身分を見ず知らずの他人に打ち明けはしない。

エリックは苛立ちの表情を濃くしながら、言葉を探した。

「僕は刑事ではありません。でも、エレン、彼女は大切な友人なんです」

どうか、彼女がどこに行ったか、知っていることがあれば教えてもらえませんか！

どんなことでもいいと言い募る彼の眼差しに相当の悲壮感が漂っているのを感じ取ったジムは、気の毒そうな顔色を浮かべながらも、何かをまだ迷っている様子だった。

ジムの複雑な胸中に何があるのか想像できないだけに、エリックの心臓はますます鼓動を早めた。

数分の躊躇の末、ジムは深いため息をついた。

まるで、エリックの真剣さに白旗をあげるような気持ちだったのだろう。

「実は僕達も彼女の行き先についてはわからないんです」

眉を下げたまま語りだしたジムの言葉にエリックは息をするのも忘れ、聞き入っていた。

彼の話は最初にエレンがこの店を訪れたことから始まった。
ふらりと旅行者を装いながら立ち寄ったこと。あとで刑事と聞いて驚いたということ。しかし、それとはなしに核心に迫っていくたくみな話術は見事としかいいようがなかったこと。
けれど、それはすべて昨日のことだった。
エリックが知りたいのはその後のことだった。

エリックの焦りがジムにも伝わってきていたが、彼は真実を告げることを恐れていた。
エリックの言葉を疑っているわけではない。彼がエレンの大切な友人と言うのも本当のことだろう。
何より、彼がどれだけ彼女を心配しているかはその悲痛な表情を見ただけで十分にわかる。

それでも、すべてを語ることが本当に正しいことなのか、ジムには判断が付きかねた。
むしろ、この先は警察にゆだねることの方が先決ではないのか……。

そんな迷いが顔に出て、エリックの憂いが本物になりそうになったとき、友人の逡巡に救いの手を差し伸べたのがマークだった。

―13―

「あなたはあの人の行方を知ってどうするつもりなんです？」

「どうするって、決まっています。追いかけるんです！」

エリックはゆるぎない瞳で即答に近い答えを返した。

「相手が太刀打ちできない人間だとしても？」

マークの言葉の意味はリアル、かつ重くて、エリックの勢いを削ぐには十分すぎるものだった。

「どういう意味ですか……」

まるでお互い腹の探りあいのような時が続いた。

エリックは思った。彼らが口を閉ざす理由はおそらく自分が一般の人間だからなのだろう、と。

しかし、刑事であろうとなかろうと彼女を案じる気持ちが劣るとは思えず、後を追う理由もそれ以外になかった。

「たとえ敵わない相手であっても、僕は追いかけます。彼女を失うわけにはいかないから」

「あの人が自分からその人物に付いて行ったとは思わないんですか」

「そんなこと、ありえません。もし、そうだったとしても何かの理由があるに決まっています」

対決姿勢のまま、エリックは言い切った。
マークとのやり取りを腕組みをしながら見守っていたジムが、ようやく言葉を挟んだ。

「僕らは見聞きしたことしかわからないんです。それでもいいんですね」

エリックは強く頷いた。
ジムはまるで観念したかのように目を瞑ると、再びエレンのことについて話し始めた。

「実はエレンさんが今日店に現れたとき、僕らは少しほっとしていたんです」

「ほっとした？」

「ええ。と言うのも、彼女は昨日訪れた時、少し確かめたいことがあるから待っていて欲しいと言い置いて、どこかへ行ったきり、そのまま帰ってこなかったんです」

エリックはいぶかしげな様子で尋ね返した。

「エレンはまたここに戻ってくるつもりだったんでしょうか？」

「我々はそう思っていました。でも、いつまでたっても彼女は現れなくて……。シェパードさんなんかはエレンさんの身に何かあったんじゃないかって言い出すほどで」

「あの人もここにいらしたんですか？」

ジムはこくりと頷き返した。

―14―

そして、再びエレンの話に戻った。

「あの人は僕達の心配もよそに昨日と同じようにふらりと現れました。でも、どこか様子が違っていて……」

「様子が違うとは？」

ジムはエリックのまっすぐな視線から逃れるように一旦、窓の外を見ると、いかにも困惑の混じった難しそうな顔で顎に手をやった。

「何かを悩んでいるようなという意味ですか？」

エリックはすがるような目でジムを見続けた。

「いや、そういった感じではなく……」

ジムはやはり説明し辛そうに言葉を濁した。
彼のはっきりしない態度にじれったい思いを抱きながらも、エリックはただ、ただ忠犬のように彼の言葉を待っていた。

「恐れ多い感じがしたんですよ」

それはエリックの想像をはるかに超える感想だった。

「正直に言うと、昨日の彼女とは別人のようなオーラが出ていましたね」

エレンが旅行者を装っていた時、自分達はその変装を少しも疑わなかったとジムは言った。女性の一人旅は珍しいことでないし、彼女もそれを見事に演じていたと。

けれど、自分の身分を明かしてからの彼女はまさに刑事としてしか見えず、威厳のようなものさえ感じたのだと。

だが、今日現れた彼女はさらに厳しさを増していて……。

「話しかけようとしたシェパードさんが思わず口を噤んでしまうほど、冷たい目でした」

冷たい目……。それが一体、何を意味するのかエリックにはわからなかった。

「静かな怒りをたたえた、と言った方がいいかもしれません」

ジムはその目を思い出したように言い直した。

湖よりも深く、暗く沈んだ瞳。エレンのそんな目をエリックは想像したくもなかった。

「それで、彼女はどうしたんです」

エリックの声は急に覇気を無くしたように小さくなった。

「電話を掛けていました」

携帯から？　と尋ねたエリックに対して、ジムは首を横に振った。

「いえ、店の電話からです」

どうやら、彼女はそのために店に寄った風だったとも彼は言った。
エレンは店に入ってきてから、ほとんど話さなかったのだそうだ。
かといって、昨日のことで気まずい思いをしている様子でもなく…
…。

「どうも僕達が見えていないというか、視界に入っていないような
様子でした」

それはエリックの知っているエレンにはありえないことに思えた。
我が侭や、気難しいところはあっても礼節だけは重んじるのが彼女
のよさだと信じているから。

「彼女が言葉を掛けにくい様子だったと言うのはわかりました。で
も、任務について彼女が何かを考え込んでいたと言うことも考えら
れますよね」

彼女は刑事なのだから。

それに対して、ジムも否定はしなかった。
エレンを信じたいエリックの気持ちはよくわかる。自分たちでさえ、
そうだった。
しかし、彼女が電話で呼び寄せた人物を見た時、彼らの期待は潰え
たも同じだった。

「エレンさんが呼び出したんです、あの男を」

ジムは苦々しそうに唇を噛みしめた。

―15―

『あの男』とはライアン・マクレガーに違いなかった。
そしてジムの怒りを含んだ口ぶりはいかにも彼を知っている人間のものだった。

「待って下さい。もしや、あなた方はライアンをご存知だったんですか」

しかし、ジムはエリックこそがライアンのことを知っていたことのほうが驚きだったようで、ふいに言葉を失くした。そして、一瞬後悔の色を見せた。

「あいつにかかわって地獄を見た人間を、もう何人も知ってるんですよ」

苦渋の末に絞り出したような声はそれまでの穏やかな声とは明らかに違っていた。

「すみません、タバコを吸ってもいいですか……」

落ち着かなくなった感情を鎮めるために、彼はエリックに許しを求めた。
マークも眉間の皺を深くして、黙っているところを見ると、口にするのも嫌な相手というところなのだろう。
ジムの吐き出す苦い煙がまっすぐ天井に向かって立ち上ってゆく。
それはまるで混沌とした次章の予兆のようにエリックには見えた。

「エレンさんが、なぜあいつを呼び出したのか疑問でした。彼女は

ライアンに対して、とても丁寧な言葉遣いをしていました」

犯罪者に対する態度ではなかったとジムは言った。

「何を話していたか覚えていませんか」

ライアンが用心をしてわざと聞き取りにくい低い声で話していたと、マークが言った。

「あなた方のことを彼も知っているんですか？」

シェパードはともかく、ここにいる二人（少なくともジム）にとってはライアンが招かれざる客だったことは間違いない事実のようだった。

ジムはそれに対して、「あまり答えたくない質問ですね」と若干、神経質そうに眉を寄せるとせわしなくタバコの煙を吐いた。

それでも、言わなければ話が進まないと彼も承知しているらしく、

「あいつが覚えているか、いないかわかりませんが……。やつは以前、ここに住んでいたことがあるんですよ」

と吐き捨てるように言った。

それは遠慮をかなぐり捨てたみたいな乱暴な物言いだった。

穏やかな人柄の彼がこれほどまでに怒りを隠しきれない対象。その人間とともに姿を消したエレンの心がエリックにはやはりわからなかった。

―16―

エリックは息を大きく吸って、気持ちを変えた。
ライアンがここに住んでいたとするならば、この島の土地勘にも十分長けていることになる。
エリックは逸る気持ちを抑えながら言葉にした。

「じゃ、彼の行きそうな場所は思い当たりませんか」

ジムとマークは相当、ライアンに対して根に持つ部分が大きいのか、速攻で首を横に振った。
けれど、ここで諦めては八方塞がりになるのは目に見えている。

（まだだ。まだ、あきらめはしない！）

エリックは唇を噛みしめると強い口調で続けた。

「ライアンが以前暮らしていた家というのがどこにあるのか、教えてもらえませんか」

ジムはエリックの意を決した問いかけにつれない返事を返した。

「もう、とっくにありませんよ。第一、彼がこの島にいたのはもう十何年も前のことです」

「それって、彼がティーンエイジャーだった頃と言う意味ですか」

ジムは面倒くさそうに、髪をかき上げると答えた。

「やつはどこかで何かを仕出かしてこの島に追いやられたんですよ。ま、ほとぼりが冷めるまでの間だけでしたがね……」

いかにも、忌々しそうな口調だった。

「ここに来る前はどこにいたんでしょう？」

「さあ、知りませんね。結局、この島からも同じように追い払われたわけですが……」

にべもなく否定的な返答を繰り返すジムに対して、エリックも負けているわけにはいかなかった。

「それはどういうことですか」

今まで素っ気無い口調に徹していたジムの顔が急に真剣みを帯びた。

「あなたはそれを知ってどうするんです？　エレンさんのことと何か関係があるとでも？
第一、あの人は優秀な刑事なのでしょう？　だったら、自分でなんとか出来るはずじゃないですか」

刑事でないあなたが心配などしなくても……。

まるでエリックの心配は無用だと言わんばかりの言葉にエリックの怒りに火が付いた。

「それなら言わせてもらいますが、あなた方はライアンが危険な人物だと知っていながら、ただ何もせずに黙って見ていたとおっしゃるんですか？　確かにエレンは優秀な刑事です。でも、女性である

ことに変わりはないんです。そんなやつについていったらどうなるかぐらい、あなた方にはとうにわかっていたんじゃないんですか」

なのに、警察にも電話をしていない。

そのうちにするつもりだったかもしれないが、それでは遅いのだ。

事態は一刻を争う。

「ライアンは今、殺人の容疑者として指名手配されています。そして、エレンは彼を追って単独捜査をしているんです」

仲間にも誰にも知らせずに……。

「どうか、ライアンに関することであなた方が知りうることをどんなことでもいいので、教えてくださいませんか。エレンを救う手立ては今はそれしかないんです！」

―17―

彼らはもともと善人に位置する人たちなのだろう。
ジムは自責の念に囚われたかのようにたちまち言葉少なになると、さっきまで吐いていた煙のもとを断ち切った。

「あなたの言うとおりですよ。僕らはまさに何もしようとしなかった。しかし、実のところできなかったんです」

逃げ口上だとわかっていながら、それしか告げることが出来ないジムの気持ちもわからないではない。
だが、だからと言って、納得すると言うのとは違う。

エリックは眼差しを厳しくすると、マークの方を向いた。

「あなたも、なんですか」

マークは不意打ちをくらったかのように息を一瞬詰めると、そのあと静かに吐き出した。

誰でも自分の身がかわいいのは当たり前だ。
ライアンが地元の人間にさえ恐れられている存在だとしたら、出来るだけ災いを避け、関わりたくないと思うのが真情だろう。
ましてや、エレンは刑事だ。見守る意外になかったと言われても仕方がないのかもしれない。

それでも……。

(何か出来たはずなんだ。同じ人間ならば……)

マークはようやく語りだした。

「ライアンの父親のことはご存知ですか。彼の父親は自分の地位を利用して、彼の罪を全てなかったことにしてきました。おそらく、いつか更生することを信じていたんでしょう。だが、彼はそうならなかった」

ライアンは嘘をつくことに何の抵抗もなくなったばかりか、大きな庇護の下、罪を重ね、犯罪という犯罪に手を染めていった。それこそ、彼がしてこなかった犯罪はなかったというくらいに……。

（誰も咎める人がいなかったのか？）

それは一人の人間の人生を左右する、大きな誤算ともいうべき過失だった。

だとすると、彼は自分の意思だけで勝手に犯罪者になったわけではないことになる。

しかし、問題はそう簡単ではなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0506m/

遠ざかるイエスタデイ

2011年10月12日12時55分発行